



Title	伝統的市街地における生活空間構造の重層性とその生活変容に関する研究 -インドネシア(ジャワ島)都市を中心として-
Author(s)	田原, 直樹
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1834
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伝統的市街地における生活空間構造の
重層性とその生活変容に関する研究

— インドネシア（ジャワ島）都市を中心として —

平成 2 年 1 月

田原直樹

目次

緒言

- 1 研究の背景と目的
- 2 本研究の対象と範囲
- 3 既存の研究
- 4 本研究の構成

第Ⅰ部 ジャワ島都市における市街地の構成とその実態に関する考察

第1章 ジャワ島都市の歴史的形成にもとづく市街地類型とその履歴

- 1-0 緒言
- 1-1 <自然の市街地類型>の把握
- 1-2 各類型の歴史的形成もとづく履歴
- 1-3 要約

第2章 類型別市街地の空間構成と居住環境の実態とその特性

- 2-0 緒言
- 2-1 ジョクジャカルタにおける市街地構成の概略
- 2-2 類型別市街地のケース・スタディ
- 2-3 要約

第Ⅱ部 伝統的都市における空間構成とその変容に関する考察

第3章 ジャワ島都市における空間構成とその構成原理

- 3-0 緒言
- 3-1 ジャワにおける空間構成の系譜
- 3-2 伝統的都市における市街地構成
- 3-3 伝統的住居
- 3-4 要約

第4章 伝統的都市における空間構成の変容

- 4-0 緒言
- 4-1 伝統的住居の変容
- 4-2 近隣空間の変容
- 4-3 要約

第Ⅲ部 ジャワ島都市における生活空間の継承に関する考察

第5章 生活空間のあり方に対する志向

- 5-0 目的と構成
- 5-1 住宅デザイン志向
- 5-2 居住環境のあり方に対する志向
- 5-3 新興計画住宅団地の成熟過程における生活空間の形成
- 5-4 要約

第6章 伝統的市街地に対する都市住民の認識構造

- 6-1 目的と構成
- 6-1 市街地景観に対する認識構造
- 6-2 都市の歴史的イメージ
- 6-3 歴史的環境に対する意識
- 6-4 要約

総括および結言

補論

付録

緒言

1 研究の背景と目的

(1) 開発途上国都市研究の意義

1) 見えない世界の都市

本研究の出発点には、通常、開発途上国（途上国と記す）（注1）といわれる地域における都市問題の存在がある。

途上国における諸問題の大部分が、究極的に地表面における社会経済開発の不均衡に起因するという認識は、素朴だがある面では当をえたものといえるだろう。しかしながら、途上国というフレームを用いて地域を把握しようとするとき、その地域のもつ歴史や文化は、しばしば考慮の対象から抜け落ちるか、さらに悪いことには、開発を阻害する要因としてネガティブな評価しか与えられないことになりやすい。

世界の存在様式の一面を表現したに過ぎない開発途上という概念が、世界認識の枠組みとしてひとり歩きた結果、開発途上国という呼称はどれほど糊塗しようとも、遅れた地域を意味するものでしかなくなってしまった。

こうした過度に単純化された世界認識の枠組みが現実に適用されることの弊害は指摘するまでもあるまい。それは、本来世界のもつ多様性を見えなくしている元凶といってよいだろう。途上国をめぐる諸問題の硬直化は、こうしたステレオタイプ化した世界認識と鋭くかかわっていると考えられる（注2）。

同時に、それはまた、本来多様な世界が見えないための結果ということもできるだろう。欧米諸国に比べた質量にわたる情報格差は蔽うべくもない。そこには認識の「巨大な空白」が存在する。途上国はこうした空白のまま、単に途上国という存在様式によって現実世界の構造の中に組み込まれた地域だといってよい。都市計画もまたそれから無縁ではおれない。

途上国都市をめぐる研究ではもっぱら都市問題ばかりが扱われてきた。もちろん、これらの都市が多く of 深刻な問題を抱えている以上、それが研究の主対象となることは自然であり必要であることはいうまでもない。しかしながら、一方で、問題だけを切り離して都市が論じられ、その歴史や文化の理解がともなわないならば、途上国都市イコールスラムという図式ができあがってしまう。それでは、かつて欧米人がわが国の都市をスラムとみたのと変わるところがない。

低開発性にかわり地域性の文脈からこれらの地域の都市をみる視座を構築することが必要なのである。それは、はるかな道程と思われるが、本研究の究極の目標はその実現にある。

2) 都市計画のパラダイムシフト

途上国の大都市は、途上国のもつ後進性のショーウインドウとでもいうべき存在である。そこで日常的に見られるさまざまな光景は、現在最も鋭い問題性をはらんでいるといつてよい。それは、人類を破局に導くとさえ警告されている(注3)。

途上国都市研究の意義が、第一義的には、この問題を解消するための有効な策を見出すことにあることはいうまでもない(注4)が、同時に都市計画のあり方について根源的な問いを投げかけている。

この発端は、途上国における都市問題に対して近代都市計画が有効な解決策を提示できなかったことにある。それは、主として、社会的基盤などの相違を無視して近代都市計画が押しつけられたことに起因すると考えられるが、近代都市計画に対する信頼を著しく損なったことは否めない。ときを同じくして進行中であった欧米先進諸国における大都市衰退問題の深刻化は、欧米都市を普遍的モデルとしてそれからの距離を遅れとする認識方法、すなわち「近代化モデル」の再検討をせまることになった。

都市計画だけではない。近代都市計画を支えてきた近代主義的都市論も、近代合理主義思想批判のかたちを借りた既成の知の枠組み再編の潮流の中で、徹底した批判にさらされている。その結果、現在は「都市論の揺らぎ」(注5)とたとえられる状況にあり、都市計画をとりまく環境はよりいっそう複雑さを増している。

こうした一連の動向は、近代都市計画およびその基盤である都市論そのものの相対化を胚胎するものであった。都市計画をその社会に固有のシステムとしてとらえる視点に立てば、近代都市計画は前世紀の欧米都市を背景として成立した特殊解に過ぎないことになる(注6)。

社会の存在様式に立脚した都市計画のあり方の模索は、現在の都市計画をめぐる主要な問題意識の1つといつてよいだろう。この点において、途上国をはじめとする海外都市研究の意義は小さくない。

しかし、それを素直に新しいパラダイムの構築作業と位置づけることができないところに現在の状況の難しさがある(注7)。こうしたモダニズム的問題指定への不信などその要因は多いが、なによりも途上国の都市問題にこうした冷静な確信を抱かせうるだけの展望が欠けていることは大きい。

つまるところ、現在のようなグランドストーリー不在の時代には、パッチワークのような対症療法的な営為が必要とされていると理解すべきなのかもしれない(注8)。それはともすれば、地域主義への過度の傾斜、結果として文化的要因の過大視につながりやすい。その結果、海外都市とのかかわりが文化相対主義的な「理解」にとどま

ってしまうおそれもある。

しかし、都市計画が認識科学ではなく社会的技術である以上、技術としての普遍性を問う立場をすて去るわけにはいかない。ここでは、都市計画分野における途上国都市研究の究極の意義を、単なる相対化を越えて、わが国の都市計画を世界の中に定位することと位置づけたいと思う。

それは、都市および都市計画の立場からの新たな世界認識の提案であり、開発途上と呼ばれる地域の都市を、開発途上国都市としてひとまとめにくる世界観から脱却して、世界を視野にいたれた共通の視座によって、全体を構成する自律性をもつ部分としてとらえようという意図をもつものである（注9）。

それは、本研究のささやかな一歩から論じるにはあまりに距離のあるテーマであることは事実だが、未だかつて実現したことのない世界中の都市の存在様式にもとづく都市論および都市計画の可能性はこの延長上にしかみることができないように思う。

（2）本研究の目的

1）生活空間の伝統

本研究の直接の目的は、ジャワ島都市を対象として、そこにおける生活空間の伝統をあきらかにし、それにもとづく生活空間整備のあり方について考察することである。それは、各国の生活空間の伝統にもとづく生活空間整備手法を確立するための基礎的作業と位置づけられる。

「伝統」の意味するところは、字義的には「つたえうけつぐこと」（注10）ということになるが、現実に用いられるときの意味あいはいより多彩である。これまで伝統をめぐって行なわれてきた多くの議論がそれを如実に物語っているが、本研究で扱うのは生活空間の伝統であり、伝統そのものではない。

ここでは生活空間の伝統を「生活空間の存在様式をうけ伝えること、また、うけ伝えた生活空間の存在様式」と定義する。その基本的考え方は次の4点である。

まず、1点目は、伝統がうけ伝えた「系統」であるということである。つまり、伝統は基本的には個よりも集団に属する。したがって、生活空間の伝統というとき、それは多く民族や宗教などに準拠する社会集団の伝統を意味する。

2点目は、うけ伝える「主体」の存在である。いうまでもなく、うけ伝える主体とうけ伝えた伝統の間には相補的關係が存在する。したがって、その過程がどの程度意識的でありうるかの判断は難しいが、伝統のうけ伝えには意識的な選択が介在する余地があるという点である。そして、しばしば遠い過去や外来のものがレファレンスされ、伝統として定着する。

それゆえ、生活空間の伝統とは、必ずしも時系列的に連続するものだけではなく、不連続な過去の生活空間の存在様式、ときには、外来の要素によって説明されることもある。

3点目は、伝統がそれに対峙する存在と不可分の関係をもつということである。つまり、伝統は自らの危機に際して自己を組織化する運動の結果として誕生する。そして不可避的に現出する緊張関係が内的統合力として持続されることになる。したがって、複数の社会集団が共存することによって、それぞれの伝統は持続されることになる。近代化についても同様のことがいえる。

最後に、伝統とはうけ伝えた「もの」や「こと」だけではなく、それを伝統としてうけ伝えるに至った主体内に存在する内的構造であるという点である。

以上からわかるように、本研究では、民族や宗教に準拠する社会集団を伝統の維持継承主体として想定し、その伝統を意識的な選択の結果形成された社会集団の内的構造と規定する。

ことさらに伝統を問題視する理由は、途上国の社会は依然として国民国家としての統合過程のさなかにあり、被植民地支配に起因する宗教や民族などの要因により分断されていることが多く、生活空間の伝統をどう考えるべきかが混乱していると考えられることである。急速な「西歐化」と、それにとまなうナショナリズムの高揚がそれを助長している。

ナショナリズムと連動した旧宗主国の伝統の否定と民族的伝統の誇張、少数民族など非主流社会集団の伝統の抑圧といった傾向は、程度の差こそあれ多かれ少なかれほとんどの国で見ることができるといえる。それはしばしば民族固有の歴史という「神話」の創造をとまなっている。

この状況は、通常、歴史的環境の保全政策に端的にあらわれる。この問題の最大のネックが資金不足にあることはいままでもないが、途上国であるか先進国であるかを問わず、歴史的環境の基準は政治的判断の対象となり、国家の認定する歴史を正当とする伝統のあり方に左右されることになりやすい。

意図的な歴史の創造とそれにとまなう新しい伝統形成は、途上国が急速な国民国家建設のプロセスにあるという事実起因するものであり、この点についてのこれ以上の論評は本研究の範囲を大きく超えている。しかし、都市計画はこうした事実とは無縁でおれないこともまた事実である。

たとえば、先の歴史的環境の保全問題1つとっても、それは生活空間の伝統にもとづく生活空間整備において中核的役割を果たすことが期待されている重要な課題であ

ることは事実である。

したがって、政治的意図とは無関係に、既存の生活空間の存在様式とそれに対する人びとの志向の現実を、そこに政治的意図が作用しているかどうかも含めて、生活空間の伝統としてありのままに理解することが必要になる。

この地球上に外からの影響をまったく受けず純粋な単系的進化を遂げてきた文明なり文化を想定するのは困難である。現在のジャワ文化はたび重なる外部からの影響を受けることによって形成されたといわれる（注11）。事実、ジャワ島都市には本来外部世界に起源をもつ空間構成要素が多く見出される。

したがって、ジャワ島都市の系図をものすとすれば、かなり複雑なものとなることが予想され、未裔である現在のジャワ島都市は、外来種を含む複数の空間構成の伝統が混交することによって形成されたハイブリッドという表現がふさわしいことになる。

それは、直接植民地支配を受けた国のみならず、程度の差はあるが、わが国のように西欧化を経験せざるをえなかった非西欧諸国全般に共通する構図といえないこともない。現在のわが国において、若い世代には和風デザインがエスニックに感じられる（注12）、あるいは、アーリーアメリカン風の住宅デザインにノスタルジーをおぼえるという現象は、こうした事情を如実に示すものといえよう。

マレーシアの著名な建築家、ヤンは自国の建築の伝統を、外来の多様な空間構成要素の集合体として描写している（注13）。生活空間の伝統にもとづく生活空間整備の1つの意義は、こうした都市がもつ多様性、多義性を継承することにあると考えられる。

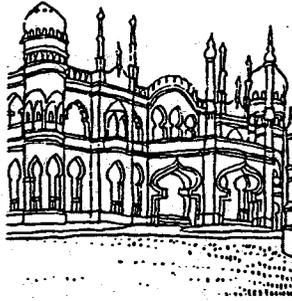
したがって、生活空間の伝統を論じる意図は、固有の伝統という神話にかわり、伝統を要素に分解しそれぞれの系譜を相対化することによって、その背後にある構造を問題にする視点を提起することにある。伝統という言葉を用いた意図もまさにこの点にあり、伝統を固有性といった固定的静的なものではなく、さまざまな歴史と文化の意思的な選択的継承の結果形成された流動的動的概念として描写することである。

2) 生活空間整備からの都市計画

生活空間の伝統を問題にする理由は他にもある。1つは、機能主義にかわる生活空間整備の論理を構築する上で現在最も大きな可能性をもつと考えられるからである。より具体的にいえば、生活空間整備にあたり、機能主義的アプローチをとらずにビジョンとなる生活空間像をどのように描くかという設問に対して、現在のところ最も現実的な回答は、これまで継承されてきた生活空間の存在様式、つまりここでいう生活空間の伝統の中に求めることであると考えられるからである。



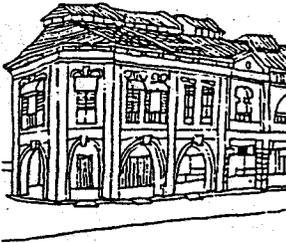
The Malay Rural Vernacular
A typical Malay vernacular house of atap roof, timber panelling, raised above the ground level, provides an atmosphere of tranquility in the rural setting.



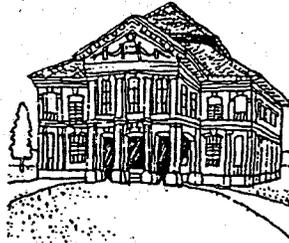
The Moorish-Influenced Institutional Building
The Istanas of the Malay Sultanate are grander in scale and are often of masonry construction occasionally with European and Middle Eastern influences.



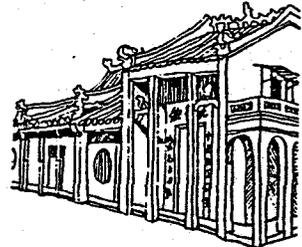
Dutch Influences
The most notable examples of Dutch influences can be seen in the Christ-Church and Stadthuys building in Malacca.



The Straits Eclectic
The Straits Eclectic style can be seen in the traditional Chinese shophouses. This hybrid comprador style often shows the opulence of ornamentation in their facade treatment.

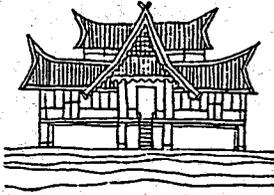


The Anglo-Indian Influences
The local Anglo Indian style has an eclectic blend of Palladian motifs, with Sino-Malay influences in terms of unglazed half-around tiles and the serambi, which is sometimes eliminated in its use.

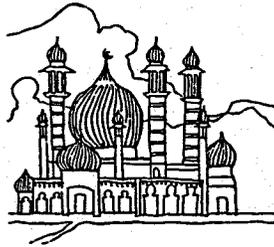


Chinese Clan and Association Building
A clan temple built and used by many Chinese associations for ceremonial and social functions, with varied designs in terms of ornamentation and built form.

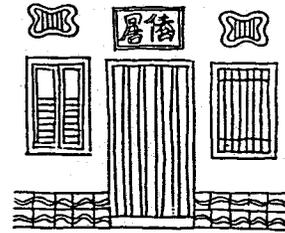
図0-1-1 マレーシアにおける建築の遺産
出典：KEN YEANG:TROPICAL URBAN REGIONALISM
;BUILDING IN A SOUTH-EAST ASIAN CITY,
Singapore,1987



The Malay Palace (Istana)
A Malay house with steeply pitched roof, deep overhangs, raised on stilts and entered by a ladder and sometimes masonry steps. Materials, like atap, bamboo, rattan, and timber are readily available from the luxuriant tropical jungle.



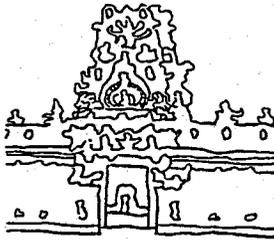
The Mosque
An example of a mosque with onion-shaped domes and minarets, inspired by mosques in India and the Middle-East. They are orientated to face Mecca, as required by the Islamic religion.



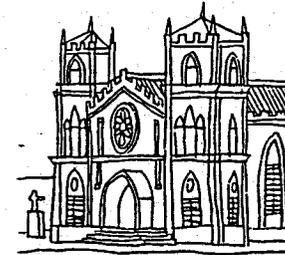
The Chinese Shophouse
Street-level porch area of a terrace house with timber bars locked into the door head, windows with metal bars and louvred panels, ventilation openings and glazed wall tiles.



The Chinese Temple
A typical Chinese temple with curved overhanging eaves and adorned ridge, lantern, etc, apart from other symbolic ornamentals.



The Indian Temple
The entrance to an Indian temple where the various statues of deities and goddesses are arranged in a rich sculptural form of multiple colours.



The European Church
A typical example of a cathedral church with religious emblems, stained glass and louvred windows, arches, etc; all designed around a cross-plan.

この点について最もまとまった考察を行ない、それにもとづく方法論を提示しているのはアレグザンダーであろう（注14）。彼が強調するのは、人間と空間との往復運動に支えられた生活空間が、時間、空間にわたって連続性をもつ有機的構造であり、それに立脚する部分計画の集合から全体計画が形成されていく計画体系を提示する。

アレグザンダーの理論の中で重要な役割を果たしているのは「パターン」という概念である（注15）。それは、彼の言葉を借りれば、「その環境に繰り返し出現する可能性のある課題を表わし、この課題の出現する背後の状況を記し、さらにこの課題を解決するのに必要なすべての建設や計画の一般的特質を提供するもの」と定義されている。これは「あるコミュニティにおいて健全で個別的かつ社会的な生活を営むのに必要な前提条件を表わす、経験に根ざした要求」として扱われ、「一般的計画原理」としての地位を与えられている。

ここには、コミュニティの生活空間の伝統を現実の生活空間整備の計画に生かすという明確な意図が見出せる。と同時に、それは、マスタープランを基準に上から下へとツリー型においていく現在の計画体系への強烈なアンチテーゼとなっている。

これが現在の計画体系にとってかわり、現実の都市レベルで実現するには、まだまだ少なからぬ試行錯誤が必要にはちがいない。だが、生活空間が過去からうけ伝えてきたものとして存在することの意味を、単なる歴史的価値の論理からとき放したことの意義は大きい。本研究のねらいも基本的にはこの延長線上にある。

3) 保存修復型都市計画への関心

既存の生活空間およびその存在様式を可能な限り生かすという発想自体は目新しいものではない。それは、歴史的建築物の文化財的保存から出発し、今や歴史的に形成された構造を基盤として都市構造の再編を企図するまでになっている（注16）。都市を機能主義とは異なる視点からとらえる試みの中で、最も注目されているキーワードといってよいだろう。

資金不足に悩む途上国では、早くから、これとはまた別の視点で、都市の生活空間整備における修復型整備手法が注目されてきた。たとえば、インドネシアにおけるオンサイト型の修復型整備であるKIPは、応急処置の対応策の色合いが強く、まだまだ多くの課題が残されているという指摘もあるが（注17）、この種の事業の中では成功例としてつとに名高い。

途上国サイドでは、資金不足という経済的理由による二次的選択と解されているふしもないではないが、当面こうした保存修復型整備を都市政策の中心にすえてやっていかざるをえない。とすれば、実効性の面から、また、他の施策との整合性をとる必

要からも、単なるストックとしてみるだけではなく、その存在様式に対するいっそうの理解が必要となる。生活空間の存在様式をあきらかにすることを通じて、こうした課題に貢献することも本研究の実際的な目的である。

2 本研究の対象と範囲

以上をねらいとして、本研究ではジャワ島都市における生活空間の伝統の分析を試みるが、基本的には都市計画研究であることから、必然的に、主として生活空間整備に関連する視点、手法、および範囲に一定の制限をとらなう。

通常、生活空間は「人間が外界を認識する構造」（注18）と説明され、人間の生活圏の広がりに対応すべきものだが、本研究では住居を中心として日常生活が営まれる居住地に限定し、主として住居および近隣空間程度の市街地の範囲を考察の対象とする。

また、本研究はジャワ島都市の歴史的形成に関する記述を行なうが、その際に必要となる時代区分は以下にしたがう（注19）。

①プレヒンドゥ期	～4世紀
②ヒンドゥ期	5世紀～15世紀
③イスラム期	16世紀～17世紀中期
④オランダ植民地期	17世紀後期～1942
⑤日本占領期	1943～1945
⑥独立期	1946～

3 既存の研究

本研究は、第一義的には、インドネシア共和国ジャワ島都市を対象とする都市計画分野における事例研究である。したがって、必ずしも既存の研究分野の枠組みとは一致しないが、関連研究については概ね次のような分類にしたがって述べる。

- (1) 都市計画研究
- (2) 地域研究
- (3) 比較文化研究

(1) 都市計画研究

都市計画のあり方に関する分野であり、都市計画に関係の深い諸学、すなわち、建築、土木、造園などの工学分野からなる。本研究の研究関心、枠組み、および方法は

都市計画および建築分野から与えられている。

まず、研究関心についていえば、既に述べた通り、伝統あるいは歴史がキーワードとなっている。リンチによって伝統や歴史といった非物理的時間が明確に都市計画の1つのファクターとして論じられて以来（注20）、それを生活空間の計画に生かす試みのうち最も重要なものは前述のアレグザンダーのパターンランゲージであったと思われる（注21）。それは、既に述べたように、生活空間のあり方そのものを計画論にとり込もうとする試みであった。この点では、わが国における一連の研究態度とも通底する面がある。

鳴海邦碩は、過去の、あるいは、既存の構造に起因する都市のさまざまな動態を「履歴」「慣性力」「先在するもの」という言葉によって説明し、濃やかな分析によって現象から都市を語っている（注22）。これもまた、生活空間と歴史性の諸相を論じた一連の研究の範疇に入れることができるだろう。同時に、ディテールの集合から都市計画を構想する点においても共通性がある。本研究はこうした研究との連続性を強くもつものである。

また、世界を視野にいれて都市の伝統について語ったものに西川幸治の研究がある（注23）。都市を文明史のなかで動的にとらえ、それを背景に保存修景計画を構想した点に特徴がある。

同じく、この分野での欧米以外の海外都市を対象とする研究としては、インドの都市を対象に「植民都市」というキーワードでとらえた飯塚キヨのアプローチがある（注24）。

本研究では比較の視点を導入していないが、都市計画分野における研究の位置づけを明確にする上で、渡辺俊一の「比較都市計画」の考え方は大変示唆的であった（注25）。

研究方法については、「建築類型」という概念によって都市の歴史的なりたちを分析する陣内秀信の一連の研究が参考になった（注26）。

（2）地域研究

大別すると、社会学、人類学、政治学、地理学、歴史学、経済学などの社会科学分野、および都市計画、建築、土木などの工学分野からなる。もちろん、現段階では、地域研究は学際的存在であり、それぞれ異なるディシプリンに属するが、本研究とのかかわりについて便宜的に地域研究の範疇にいれて言及する。

本研究はインドネシア、ジャワ島都市の研究であり、その限りでは地域研究としての性格をもつ。したがって、インドネシア、あるいは、その延長としての東南アジア

を対象とする地域研究として位置づけられる。

1) インドネシアおよび東南アジア都市研究の概況

インドネシアをはじめとする東南アジア研究全般において、都市を主対象とする分野は、主として社会学、地理学、人類学、歴史学、経済学などの社会諸科学が先行してきたかたちだが、その中では比較的研究蓄積が少ない部門であるという指摘がある(注27)。

その中であって、インドネシア研究においては、分野を問わずC・ギアツが提起した論点をめぐって研究が展開し、それが研究蓄積につながっている傾向がみられる。こうした意味も含めたギアツの貢献は否定しえないところである。こうした社会科学分野における研究成果が本研究の背景を形成していることはいうまでもない。

わが国の研究者による都市および都市化研究としては、京都大学東南アジア研究センターを1つの核として東南アジアを対象とする地域研究の流れが形成されつつあることが注目される。社会学、人類学などの研究が中心である。

また、アジア経済研究所を中心とする都市社会学および経済学分野での研究も活発である。主として、開発途上国都市研究をフレームとする。統計データを用いた人口都市化の研究(注28)、フィールド調査にもとづくものが多い(注29)。

本研究のもう1つの立場である都市計画研究の分野においては、欧米以外の海外都市を対象とする研究の歴史は短く、端緒についたばかりといってよいほどだが、近年研究関心においても水準においても優れた研究の萌芽がみられるようになってきた。この分野の研究は、密集市街地における居住環境整備あるいは住宅問題に重心がおかれている。

インドネシアに関するものとしては、東洋大学を中心とするグループによる一連の多彩な研究(注30)、また、建設省建築研究所を中心とする住宅都市開発の研究および実践(注31)が特筆すべき近年の成果といえる。それ以外では、国際協力事業団など各種機関の調査報告が参考になる。

建築分野では、主として民俗建築および集落を対象とする研究(注32)、また、チャンディを対象とする研究(注33)がある。前者は、住居や集落に関する広範な理解を深める上で貴重な資料となっている。また、後者は、かつての都市の存在様式の理解を進める上で本質的な資料となる。ジャワのチャンディおよびクラトンの存在様式をもとに、ヒンドゥ法典を参考にしながら、その構成原理を述べた野口英雄の研究がある(注34)。

2) 本研究の参考とした既存の研究

研究の背景として不可欠のインドネシアおよび東南アジアについての知識をうる上で多くの文献を参照した。ここでは、これらについては参考文献にあげるにとどめ、都市に関するものについてだけ言及する。

東南アジア全域を視野に入れた都市および都市化の概況については、今や古典ともいえるマッギー（注35）とユン他（注36）の著作がある。また、矢野暢の一連の著作は、歴史上の都市の存在様式を理解する上で不可欠の権力の存在様式についてなど、東南アジアの都市をめぐる既存研究を簡単に整理し見取図化したうえで、主要な論点をうまくまとめている（注37）。

インドネシア、ジャワ島都市の歴史的な存在様式を通覧するものとしては、レグ（注38）など歴史学の成果が参考になる。また、各分野の研究成果を活用しつつ、ジャワ人自身によって書かれた著作としてグナワン＝チャヨノの論考がある（注39）。ジャワ固有の文脈に着目した空間構成の伝統に関する研究として重要であり、その知見が本研究の第Ⅱ部のバックボーンとなっている。

植民地期の都市およびその形成過程について、コバンは「植民都市」形成の観点から記述を行なっている（注40）。それ以前の都市の存在様式を論じたものとしては、上述のグナワン、コバンによるもの以外に、ナスのバンテンに関する記述（注41）、インドネシアに関するものではないがマッギーのアンコールに関する記述が参考になる（注42）。

都市の存在様式とならび都市化についての論考では、上述のナスはインドネシア都市を対象として「フォーカル・アーバニズム」という概念を提出している（注43）。また、主として大陸諸地域の都市の歴史研究に基礎をおくものではあるが、ホイートリーは「中心点（セントロイド）」をこの地域の都市性とする見解を述べている（注44）。

市街地形成およびその構成に関する貴重な資料となる、特定の都市を対象とする形成史の数は多くないが、ミローンのジャカルタ研究はまとまった都市史としては数少ないものであり、オランダ植民地期の市街地形成についての貴重な知見を提供している（注45）。前述のコバンの著作とならび、膨大なオランダ語の文献資料を英語によるアクセス可能なレファランス化したことの意義は大きい。わが国の研究者では別技篤彦が同様の貢献を行なっている（注46）。

その他の都市では、ジョハネス＝ウイドドによるスマランの研究は、チャイナタウンに焦点を当てた数少ない都市史の1つである（注47）。伝統的都市の構成については、スロスマルジャンによるジョクジャカルタに関する論述がある（注48）。また、

ギアツはパレについての研究において、植民地期に形成された地方小都市を「第2次第3次支線都市」という類型を用いて把握することを試みている（注49）。

現代都市の市街地の状況については、社会学分野のさまざまな研究が参考になる。特に古屋野正伍らによるジョクジャカルタ研究は、わが国の研究者によるジャカルタ以外の都市に関する数少ない成果の1つである（注50）。ジャカルタについては、加藤剛（注51）、新津晃一ら（注52）によるものなどがある。

歴史的都市コタグデについては、ファン＝ムウクによる古典的な著述（注53）のほか、スリヤントラ（注54）、ラクマト＝ウォンドアミセノラ（注55）など、ジャワ人研究者による研究がある。本研究の第Ⅱ部の参考になった。

住宅および住宅地開発に関するものとしては、まず、戦後の住宅開発の状況についてのシラスの論考（注56）、主として集合住宅開発についての横堀（注57）などわが国の国際協力事業団による派遣専門家の実践および研究の報告、また、リアルエステイトなど住宅地開発についてのハッサンプルボの研究（注58）などがある。

エルリン＝ジョハンのコロニアル建築についての研究は、戦前のオランダによる住宅および住宅地開発についてまとめている（注59）。そのほか、ショップハウスについては前述のジョアネス＝ウィドドによるスマランのプチナン形成についての記述が参考になる。

こうした各分野における既存研究の蓄積はかなりあるが、本研究のように、都市計画の立場から、生活空間の伝統的存在様式にもとづき、その整備方向を論じた試みはあまりない。

（3）比較文化研究

異文化の研究を主対象とする学問分野には人類学があるが、必ずしも比較文化研究という既存のディシプリンが存在するわけではない。しかし、さまざまな分野で、主として文化比較に対する関心ないし要請が生まれつつある。それを、とりあえず、比較文化研究と総称しておこう。

本研究はインドネシア、ジャワ島都市の研究であり、直接的な比較研究ではないが、異文化を理解する視点は本質的なものである。建築分野を出発点としながら、マン・エンバイロメント・スタディの流れへと展開していったラボポートの一連の著作が参考になる（注60）。

4 本研究の構成

本研究は、本論3部6章、総括および結言からなっている。

第Ⅰ部は、生活空間の伝統の系譜という視点から、ジャワ島都市における市街地の構成とその実態を把握している。

第1章では、都市の市街地の構成を、歴史的形成にもとづく〈自然の市街地類型〉という概念枠によって把握し、それぞれの類型別市街地の履歴を考察している。

第2章では、第1章の類型にもとづき、類型別市街地の空間および居住環境の実態とその特性をあきらかにしている。

第Ⅱ部は、植民地期以前の都市の存在様式にもとづくと考えられる伝統的都市の空間構成とその変容について考察している。

第3章では、伝統的都市における空間構成とその構成原理をあきらかにしている。

第4章は、第3章を受けて、伝統的都市の空間構成の変容について論じている。

第Ⅲ部は、生活空間の伝統の継承に関する考察である。

第5章では、生活空間のあり方に対する人びとの志向をあきらかにしている。

第6章では、生活空間の伝統に対する人びとの認識をあきらかにしている。

総括および結語では、以上をまとめ、結言としてまとめている。

補注

- (1) ここでいう「開発途上国」とは、英語の DEVELOPING COUNTRY に相当する。DEVELOPING に「発展」をあてた「発展途上国」という訳語も一般的だが、発展という言葉には不可避免的に進歩の観念がつきまとう。ほかにも「後進国」「低開発国」「第3世界」などの呼称もあるが、開発途上国という言葉は、人間生活に必要な環境は基本的には自然発生的に形成されるのではなく人間の意思により開発される、との問題意識に照らして最も適切なひびきをもつ。
- (2) もちろん他にも経済を基準とした一元的な進歩観など多くの要因が存在しているはずだが、これについての言及は本論の目的ではない。
- (3) たとえば、P・ウィルシャー他著『爆発する大都市』都市問題研究会、鹿島出版会、1980
- (4) 途上国都市研究の意義については、わが国を取り巻く国際的環境の変化を背景に多くの発言がなされている。特に、ODAの増加傾向をうけて国際協力のあり方や留学生対策などの議論が多い。
- (5) 布野修司「ポストモダン都市・東京」早稲田文学、№160(1989)、p.28
- (6) 渡辺俊一はこの点に現状からの突破口をみて、海外都市計画を「望ましいモデ

ル」としてではなく「各々に個性的なモデル」として学ぶ「比較都市計画研究」という新しい研究上の視座を提案している。(渡辺俊一「比較都市計画研究の視点と方法」都市計画、No.123(1982)、pp.7-13)

- (7) 西山康雄は、途上国都市問題に対して「現実からの<パラダイム>の構築」を試みるべきという長峯晴夫の指摘に対し違和感を表明し、ただの人の日常生活の必要性和実感にねざした「路地裏の都市計画論」でもって途上国の人びとと語ることが大切と述べている。(西山康雄「区画整理技術移転の成果と課題」都市計画、No.155(1988)、p.42)
- (8) 駒井洋は、開発途上国の都市研究の現状と可能性に関する論考の中で、これまでの都市研究を問題中心的アプローチと実体論的アプローチに分類し既往研究を整理した上で、問題中心的アプローチが必要であると結論づけ、当面のところアジア都市化研究に当たり体系的把握をあきらめ、諸論を是々非々に採用していくよりほかないと述べている。(駒井洋「開発途上社会の都市理論」『発展途上国の都市化』林武編、アジア経済研究所、1976、pp.87-109)
- (9) 原広司は、世界各地の集落の研究に当たり、文化の共有関係を前提に、地域や場所を生体的秩序としてとらえる全体観を捨て、意味ある部分の自律性を認めることによって成立する「混成系」の美学を説き、部分から全体に向かう「世界風景」という世界認識方法を提起する。(原広司『集落への旅』岩波書店、1987)
- (10) 新村出編『広辞苑』岩波書店、1983
- (11) ジャワがどのような影響をこうむったかについては、第II部の冒頭の部分で簡単に言及している。
- (12) 陣内秀信「不思議な都市への内なる都市」PROCESS:ARCHITECTURE、NO.72(1987)、P.7
- (13) YEANG,K.:TROPICAL URBAN REGIONALISM;BUILDING IN A SOUTH-EAST ASIAN CITY, Singapore, 1987, pp.12-33
- (14) クリストファー=アレグザンダーは、われわれが生氣ある空間と感ずる場合、その実体はわれわれに内在する資質にあるとして、生活空間と人間の間の有機的関係を説明している。それは、もちろん経験的に形成されたものと考えべきだろう。そういう意味では、パターンランゲージは環境の歴史性ときわめて密接な関係をもつ概念である。(C・アレグザンダー他『オレゴン大学の実験』宮本雅明訳、鹿島出版会、1986)

- (15) C・アレグザンダー、前掲書、pp.101-102
- (16) 佐藤滋「保存修復型再開発の流れと都市構造の再編を目指す都市計画」都市計画、No.156（1989）、pp.60-64
- (17) 内田雄造他「インドネシアのスラムの居住政策と日本の経験との比較研究－第三世界の居住環境とその整備手法に関する研究（その1）－」日本都市計画学会学術研究論文集、NO.157（1984）
- (18) 梶秀樹他『現代都市計画用語集』彰国社、1986、P.8
- (19) 矢野暢は、東南アジア史の時代区分について、次のハリー＝ベンダの区分を引用し、一般的な見方であるとしている。
- ①古典的時代
 - ②古典期以後の時代
 - ③欧州到来の時期
 - ④近代植民地支配の時代
 - ⑤日本軍政による空白期間
 - ⑥主権独立の時代
- （矢野暢『東南アジア世界の構図－政治的生態史観の立場から』日本放送出版協会、1984、p.146）
- 本研究ではこれを参考に6つの区分を設定した。各時代はオーバーラップし明確には決められないが、①と②の間はジャワ最初のヒンドゥ王国と考えられているタルマヌガラ王国の成立、②と③の間は最初の本格的イスラム王国であるデマク、チレボン、スダクラバなどの成立、③と④ではバタフィアの成立をもって区切りとする。
- (20) ケヴィン＝リンチ『時間の中の都市』東京大学大谷研究室訳、鹿島出版会、1976
- (21) クリストファー＝アレグザンダー他『パターン・ランゲージ－環境設計の手引』平田翰那訳、鹿島出版会、1984
- (22) 鳴海邦碩『アーバン・クライマクス－現象としての生活空間学』筑摩書房、1987
- (23) 西川幸治『都市の思想－保存修景への指標』日本放送出版協会、1973
- (24) 飯塚キヨ『植民都市の空間形成』大明堂、1985
- (25) 渡辺俊一「比較都市計画研究の視点と方法」都市計画、NO.123（1982）、p.7-

- (26) 陣内秀信『都市のルネサンス—イタリア建築の現在』中央公論社、1978、および、同『東京の空間人類学』筑摩書房、1985
- (27) 矢野暢、前掲書、p.227
- (28) たとえば、柴田徳衛他編『第三世界の人口移動と都市化』アジア経済研究所、1983
- (29) たとえば、加納啓良『パグララン—東部ジャワ農村の富と貧困』アジア経済研究所、1979
- (30) 太田勇編『東南アジアの地域社会』東洋大学、1987
- (31) たとえば、小林英之「インドネシアにおけるコーポラティブによる住宅都市開発—バンドンのコペラシ・プムキマン・ピナカリヤとコヒプチー—」都市計画論文集、NO.23 (1988)、pp.325-330
- (32) 八木幸二の一連の海外・住居の研究、太田邦夫のエスノ・アーキテクチャ研究などがある。
- (33) たとえば、千原大五郎『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会、1975
- (34) 野口英雄「建築と空間象徴」東南アジア研究、22巻1号(1984)
- (35) McGEE, M.A.:THE SOUTHEAST ASIAN CITY;A SOCIAL GEOGRAPHY OF THE PRIMATE CITIES OF SOUTHEAST ASIA, London, 1969
- (36) YEUNG, Y.M.:CHANGING SOUTH-EAST ASIAN CITIES;READINGS ON URBANIZATION, SINGAPORE, 1976
- (37) 矢野暢、前掲書など。
- (38) たとえば、ジョン・D・レッジ『インドネシア歴史と現在』中村光男訳、サイマル出版会、1984
- (39) GUNAWAN TJAHOJONO:Centre as an Idea in Javanese Landscape,in "JURNAL IAI,1987"
- (40) COBBAN,J.L.:THE CITY ON JAVA;AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY,Ann Arbor,1970
- (41) NAS,P.J.M.,The Early Indonesian Town;Rise and Decline of the City-State and its Capital,in "THE INDONESIAN CITY", NAS,P.J.M. et al.ed.,Dordrecht-Holland,1986,pp.18-36
- (42) McGEE,T.G.,op.cit.,pp.36-39
- (43) NAS,P.J.M.,op.cit.
- (44) WHEATLY,P.:NAGARA AND COMMANDERY;ORIGINS OF THE SOUTHEAST ASIAN URBAN

- TRADITIONS, ILLINOIS, 1983
- (45) MILONE, P. D.: QUEEN CITY OF THE EAST; THE METAMORPHOSIS OF A COLONIAL CAPITAL, Unpublished Paper, 1967
- (46) 別技篤彦『東南アジア諸島の居住と開発史』古今書院、1960
- (47) JOHANNES WIDODO: CHINESE SETTLEMENT IN A CHANGING CITY; AN ARCHITECTURAL STUDY OF THE URBAN CHINESE SETTLEMENT IN SEMARANG, INDONESIA, Unpublished Paper, 1988
- (48) スロスマルジャン「中間都市ジョクジャカルタの構造と変動—空間的、歴史的
形成の特質」古屋野正伍編著『東南アジア都市化の研究』アカデミア出版会、
1987、pp. 408-416
- (49) GEERTZ, C.: THE SOCIAL HISTORY OF AN INDONESIAN TOWN, Cambridge, 1975
- (50) 古屋野正伍編著『東南アジア都市化の研究』アカデミア出版会、1987
- (51) 加藤剛「都市と移住民—ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」板垣與一編『ア
ジア研究の課題と方法』東洋経済、1986、pp. 257-271
- (52) 新津晃一編『現代アジアのスラム—発展途上社会の研究』明石書店、1989
- (53) MOOK, H. J. van: KUTA GEDE, in "WERTHEIM, W. F.: THE INDONESIAN TOWN; STUDIES
IN URBAN SOCIOLOGY, Hague, 1958, pp. 275-331"
- (54) SURYANTO et. al.: KOTAGEDE; A TRADITIONAL SETTLEMENT, Unpublished Paper,
1987
- (55) RACHMAT WONDOAMISENO: KOTAGEDE BETWEEN TWO GATES, Unpublished Paper, 1986
- (56) JOHAN SILAS: SURABAYA'S KAMPUNG: IT'S PEOPLE AND DEVELOPMENT, Surabaya,
1987
- (57) たとえば、横堀肇「住宅・都市整備事業—ジャカルタの例をもとに—」柴田徳
衛他編『第三世界の都市問題』アジア経済研究所、1985、pp. 151-186
- (58) HASAN POERBO et. al.: Bandung Urban Fringe Study; Case Study: Sukaluyu and
Neglasari Housing Areas, in "SURVEY ON THE LOCAL HOUSING SYSTEM OF NON-
PLANNED HUMAN SETTLEMENT IN THE RAPID GROWTH URBAN SPRAWL AREA, Sympos-
ium Proceedings, 1987"
- (59) エルリン=ジョハン『インドネシアにおけるコロニアル住居の形成過程に関す
る研究』横浜国立大学工学部修士論文、1983
- (60) たとえば、A・ラポポート『住まいと文化』大明堂、1987

第I部 ジャワ島都市における市街地の構成とその実態に関する考察

ジャワ島都市における生活空間の伝統を考察するための第一歩として、まず、生活空間の構造を把握することが必要になる。ここでは、市街地の構成とその実態を解明することを目的としている。

ジャワ島都市に関して、情報不足に起因する認識の空白があることは否定しえない事実である。したがって、当面の課題として、ジャワ島都市における市街地の実態を把握し、生活空間構造に関する理解の枠組みをつくることから始める必要がある。まず、ジャワ島都市の市街地のあり方についての論点をあきらかにしておこう。

ジャワをはじめとする東南アジアの大都市には、かつての植民地期の状態をほぼそのまま保持している都心部と、その後郊外に開発された新市街地、その間を埋めつくすように広がったスプロールという大雑把な理解の図式が成立している（注1）。

マギーはこうした市街地構成は植民地支配を経たことに起因すると指摘している（注2）。事実、これらの都市のほとんどはかつて植民地支配期の拠点であり、それが直接の契機となって支配の装置としての都市形成がなされた経歴をもっている。マギーのいう植民都市である（注3）。

その市街地構成をジャカルタの例で見ると、ヨーロッパ人居住地区を核としてカンブが広がり、そこには民族ごとの住みわけがなされていたことがわかる（注4）。それは、植民地政策にもとづく多分に意図的なものであったわけだが、植民地期以前の都市もヘテロジニアスな性格をもつものであったとされる（注5）。

ジャワにおける主要植民都市であるバタフィア、スマラン、スラバヤなどは、オランダ人による都市建設の初期には、その性格において他の沿海部の諸都市と大きくかわるものではなかった（注6）。現在これらの都市は、矢野暢のいう「メトロポール型発展」という新しい都市化段階にあるが（注7）、市街地の性格は現在の都市にもうけ継がれているという報告がある（注8）。こうした一連の事実から判断すると、内陸部と臨海部の都市ではその程度に差があるといわれているが（注9）、市街地におけるヘテロジニアスな性格はジャワ島都市の特徴の1つと考えてよいだろう。

一般に都市における住みわけ構造は、民族、社会階層、宗教などに準拠する社会集団の存在に起因する。その意味では、市街地のモザイク状構成は社会構成における異質性の高さ、あるいは、複雑さの程度を示す指標ともいえる。少なくとも、セグリゲイションを生む社会的要因の存在を示し、インドネシア社会が多様性というキーワードによって語られる事実とよく符合する（注10）。

都市における社会構成のあり方はその歴史的形成の様式に起因する。矢野暢は、東南アジアにおける都市形成は、外部からのインパクトを受けることによって都市が形成されるパターンであるとしている（注11）。都市形成には「自生的都市形成」と「他成的都市形成」との2つがあり、東南アジアにおける都市形成パターンは後者であるという見解である。そして、「外力」という概念を導入する。外力とは「何らかの人口凝集点に都市本質を賦与する外来の物理的、文化的な力」であり、具体的には次の4つの場合が想定されている。

- ①ヒンドゥ文明
- ②中国文明
- ③イスラム
- ④植民都市

ギアツは、植民地期に植民地権力によってつくられた行政中心都市、彼のいう「第2次・第3次支線都市」の形成を、3つの社会層に対応する市街地構成要素からなる集合として描写した（注12）。

それぞれの社会層は、矢野のあげた外力によって形成された都市タイプと密接な関係をもつものであり、たび重なる外来文明の影響によって社会構造が複雑化し、それが市街地のヘテロジニアスな性格を生むに至った過程を模式的に示したものと受けとることができるだろう。

こうした市街地のあり方が、生活空間の伝統を維持、継承する仕組みとなり、それによってその多様性が保証されることになっているとも考えられる。市街地構成の分析を通じて、この仮説を検証することが第I部のねらいである。

補注

- (1) 例えば、富岡正樹「大都市の転機－東南アジアの諸都市における都市再開発」早稲田大学社会科学研究所東南アジア部会編『転換期のアジアの開発』早稲田大学出版部、1985、pp.187-188
- (2) McGEE, T.G.: THE SOUTHEAST ASIAN CITY; A SOCIAL GEOGRAPHY OF THE PRIMATE CITIES OF SOUTHEAST ASIA, LONDON, 1969, pp.52-75
- (3) COLONIAL CITY の訳。
- (4) 別枝篤彦『東南アジア諸島の居住と開発史』古今書院、1960、pp.252-255
- (5) たとえば、コバンはブバットやバンタムの市街地にこうした性格がみられたこ

とを指摘している。(COBBAN, J.L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY, Unpublished Paper, 1970, pp.36-37, 49-50)

- (6) COBBAN, J.L.: *ibid.*, p.220
- (7) 矢野暢『東南アジア世界の構図－政治的生態史観の立場から』日本放送出版協会、1984、p.80-82
- (8) 加藤剛「都市と移住民－ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」板垣與一編『アジア研究の課題と方法』東洋経済、1986、pp257-271
- (9) 山下晋二「風土と地理」 綾部恒雄他編『もっと知りたいインドネシア』弘文堂、1982、p.67
- (10) 国是であるピネカ・トゥンガル・イカは、多様性のなかの統一という意味で、マジャパイト王国のハヤム・ウルク王の治世下(1350~89年)で書かれた叙事詩『スタソーマ』からとられている。(イマム・ウォルヨ他編著『これからのインドネシア－発展を模索するパンチャシラ社会』山本春樹訳、サイマル出版会、p.306)
- (11) 矢野暢、前掲書、p.74-80
- (12) C・ギアツはジャワ社会を、実質的に一般庶民を意味するアバンガン、本来土着権力の貴族階級を意味するブリヤイ、敬虔なイスラム教徒であるサントウリの3つの社会層によって理解するモデルを提出した。これに批判がないわけではないが、ギアツが3つの社会層に対応するものとしてあげているカンブン、土着権力の宮廷クラトンのレプリカとしての官僚機関、サントウリの居住地であるカウマンの3つは、ほとんどの都市に広範に見出される存在である。
(GEERTZ, C.: THE SOCIAL HISTORY OF AN INDONESIAN TOWN, Cambridge, 1975)

第1章 ジャワ島都市の歴史的形成にもとづく市街地類型とその履歴

1-0 はじめに

1-1 自然の市街地類型

都市の市街地には、「一定の特徴によって周辺および他から区別され、一定のまとまりと広がりをもつ部分」が存在することが先験的に知られている。たとえば、民族ごとの地域的な住みわけ構造は、複数の民族が共住する都市ではごく一般的な現象である。また、山の手と下町といった経済的階層に応じた住宅地のグレード化も多くの都市でみることができる。こうした市街地の空間的分節化を一切欠く、どの部分をとっても均質な市街地からなる金太郎飴のような都市の存在を考えることは難しい。

一般に市街地は、社会の動向を背景に、地区の状況、都市全体に占める位置づけなど多くの要因に応じて変容する。したがって、理念的に、市街地の時系列的挙動を、全体を構成する各部分が相互作用を及ぼしながら変容を繰り返し、全体として調和的変容を遂げていくものととらえたとすれば、現在の姿は不断の変化過程にある平衡状態にとえることができる。

こうした観点からみると、市街地の空間的分節化は都市の歴史的形成の過程で自然に生じた市街地の「型」ともいうべき存在であり、それを構成要素として都市の市街地構成を把握することができる。それには、特定の都市にだけみられるものと、複数の都市に共通してみられるものの2つが考えられる。

後者は共通の要因によって生じた、その地域における普遍的な市街地類型の存在を暗示する。したがって、一定範囲での普遍性をもつと判断される場合、これを<自然の市街地類型>と呼ぶことにする。

<自然の市街地類型>はジャワ島都市の市街地構成を把握し、その構成原理を考察する概念枠と位置づけられる。それは、抽象化された市街地モデルであり、現実の市街地を指すものではない。

1-2 目的と構成

第1章では、以上の作業仮説にもとづき<自然の市街地類型>を把握し、その歴史的形成にもとづく履歴を考察することを目的とする。

その構成は、まず、第1節では、中部ジャワを主体とする諸都市における市街地の空間的分節化の状況を把握したうえで、ジャワ島都市の<自然の市街地類型>を抽出する。

次に、第2節では、類型別市街地ごとにその歴史的形成にもとづく履歴をあきらか

にする。

－ 3 研究方法

(1) 調査の考え方

1) 分節化の判定についての基本的考え方

市街地の空間的分節化を把握するうえでの基本的考え方は、「都市に住む人々の自然な認識のレベルで、一定の特徴によって周辺および他の部分から区別され、一定のまとまりと広がりをもつ地区と認識されていること」である。

「一定のまとまりと広がり」とは、市街地の中で一定の領域として認識されている部分を指す。その広がりを明確に定義することは難しいが、おおむね少なくとも数十戸程度の近接した住戸の集合からなる程度の範囲とする。

2) 判定基準

空間的分節化の判定が人々の認識レベルでの地区の存在に依拠することから、個人の認識の普遍性を確認する手続きが必要になる。

空間的分節化の判定基準を特定することは難しいが、下記の条件のうち少なくとも1つを満たす場合は空間的分節化と判断してさし支えないと思われる。

- ① 普遍性をもつ特定の呼称をもつ地区
- ② 普遍性をもつ特定の社会集団と密接な関係をもつ地区
- ③ 普遍性をもつ特定の<開発パターン>をもつ地区

ただし、<開発パターン>とは、たとえば、旧オランダ人居住地区のように、ジャワにおける都市形成において一定範囲で地域的普遍性をもつと考えられる市街地開発パターンを指す。ジャワ島都市における市街地開発の歴史的な性格を理解するための概念枠である。より具体的には、普遍性を獲得する特定の開発主体が存在し、開発された市街地が普遍性をもつ特定の性格をもつ場合がこれに該当する。

上記以外の場合は、そのケースに応じて判断するものとする。

通常、空間的分節化の結果生じた地区は、市街地を構成する建物などの空間的要素の集合が作りだす記号的表現を伴う。特に、そこを主要な生活の場とする社会集団が存在する場合、その社会集団がもつサブカルチャーの一部として何らかの空間的標識が存在することが普通であり、それがその社会集団を差異化する象徴として認識されることになりやすい。

しかし、一般には分節化の認識と空間的標識の関係について明快に定義することはできない。たとえば、特定の社会集団が集住するにもかかわらず、特別の空間的標識

が存在しないケースを想定することは可能である。逆に、空間的標識が存在すると思われる場合でも、認識レベルでは地区と意識されていないケースがあることも考えられる。

これには、単にその存在がよく知られていない場合と、知られてはいるが地区とは意識されていない場合の2つの可能性がある。後者は、たとえば、1つの団地の中に立地する住棟デザインが異なる地区のように、一定の空間的特徴はあるが、両者に共通する団地という枠組みの方が上位にあり、外部からは異なる2地区として意識されないようなケースである。

このように、空間的標識の解釈には多分に曖昧な点が存在し、その有無だけを分節の存在自体の判定に用いることには問題がある。しかし、空間的標識は市街地の空間的分節化を認識する有効な材料であり、また、本研究の主旨が空間に重点をおく研究であることから、空間的標識を一切欠くケースは一連の考察の対象外とすることにした。

(2) 調査の手順と方法

<自然の市街地類型>を把握する手順および方法は次の通りである。

第1ステップ 都市における市街地の空間的分節化の把握

いくつかの都市を対象として、その市街地の中に存在する、人々の自然な認識のレベルで、「一定の特徴によって周辺および他と区別され、一定のまとまりと広がりをもつ地区」をすべて抽出し、そのうち一定の普遍性をもつと判断されるものを分節化の結果生じたユニット（分節ユニットと呼ぶ）として選びだす。

その方法は、ジャワ在住のインドネシア人研究者へのインタビューおよび資料調査による。

第2ステップ 分節ユニットの普遍的属性の把握

第1ステップにおいて得られた分節ユニットを対象に、ジャワ島都市について一定の普遍性をもつと考えられる属性を把握する。この作業は、複数の都市における同種のユニットに、共通する現象が見出せるかどうかの確認である。こうした共通属性をもつユニットが<自然の市街地類型>ということになる。

その方法は観察およびインタビュー調査による。

類型別地区の歴史的形成にもとづく履歴の考察については、各種文献資料などからえられた知見にもとづいている。

(3) 調査の概要

具体的な作業は必ずしも上の手順で行なったわけではないが、おおむね次の通りである。

まず、複数のジャワ在住のインドネシア人研究者(注1)に対してインタビューを行ない、市街地の空間的分節と考えられる地区をリストアップしてもらおうと同時に、それぞれの特徴に関する簡単な説明を受けた。

その後、中部ジャワを中心に、いくつかの都市を視察し、それぞれの地区の状態を観察することにより地域的普遍性をもつかどうかの検証を行なった。

調査は、1985年7月から8月にかけてのおよそ50日、1987年7月から9月にかけてのおよそ50日、1988年5月のおよそ3週間、同年8月から9月にかけてのおよそ50日、計4回ジャワに滞在した間に適宜行なった。

訪問した都市は表1-1-1の通りであるが、1つの都市における視察の程度は一樣ではない。原則としてジャワ在住のインドネシア人研究者もしくは学生をガイドとしてともなっている。

また、自分自身で視察できなかった都市のうち、主要なものについてはジャワ在住のインドネシア人学生による調査チームを組織し、類型別地区を中心とする視察調査を行なった。1988年10月から1989年1月にかけて数回にわけて行なわれた。

— 4 調査対象都市の概要

(1) 調査対象都市の選定

調査対象都市は中部ジャワ州を中心に選択することとした。その主要な理由は、中部ジャワ州には異なった性格の都市が多く存在するからである。特に、植民地期以前にその起源をもつ伝統的都市、ジョクジャカルタおよびスラカルタのような都市は中部ジャワ州にしか存在しない。具体的な調査都市は、カルトスラ、クドゥス、ジェバラ、ジョクジャカルタ、スラカルタ、スマラン、デマク、トゥガル、マグランの9都市である。

このうち、ジョクジャカルタについてはかなり詳細な調査を行なったが、あとの8都市については主として歴史的市街地を対象とする視察程度とした。

また、上記以外の表1-1-1の都市については、別の視察の機会にえられた知見で判断しうる範囲に限っている。

したがって、調査はそれほど体系的に行なわれたわけではないが、インドネシア人研究者の協力および文献調査によって、目的とする〈自然の市街地類型〉を確定する

ために最小限必要な情報をうることができたと判断した。

(2) 調査対象都市の概要

調査対象都市の位置は図1-1-1、関連データを表1-1-1に示す。個々の都市についてのそれ以上の説明は割愛する。

1-1 <自然の市街地類型>の把握

-1 分節ユニット

<自然の市街地類型>の検討対象としてとりあげる市街地分節ユニットは次の通りである。

ユニット1 旧オランダ人居住地区

植民地期にオランダ人を主体とするヨーロッパ人が居住していた地区。

ユニット2 プチナンあるいはカンブン・チナ（以下、プチナンに統一する）

主として華人系の人々が居住する地区。

ユニット3 ジュロン・ベテン

土着の伝統的権力の王宮コンプレックスを構成する地区。

ユニット4 カウマン

サントゥリと呼ばれる敬虔なイスラム商人が居住する地区。

ユニット5 伝統的都市集落（注2）

ジャワの伝統的な都市集落。

ユニット6 カンブン・アラブ

主としてアラブ系の人々が居住する地区。

ユニット7 公共開発住宅地

戦後、公共によって開発された住宅地。

ユニット8 リアル・エステイト

戦後、民間のディベロッパーによって開発された住宅地。本来リアル・エステイトとランド・エステイトを区別すべきであるが、ここでは同じものとして扱う。

ユニット9 社宅地区

官民の企業の所有する従業員のための住宅地。

ユニット10 カンブン

一般的市街地。

表 1 - 1 - 1 調査都市における文節ユニットの状況

州	都市	ユニ	地域	植民地期 シヤステイタス 1905-1942	人口 (1961)								
		ット 1	ット 2	ット 3	ット 4	ット 5	ット 6	ット 7	ット 8	ット 9			
中央ジャワ	加トス	○	×	△	×	×	-	-	-	-	クジヤウエン	-	-
	グトウス	-	○	×	○	△	-	-	-	-	ハシール	Kota	74,911
	ジヨボラ	-	○	×	○	△	△	-	-	-	ハシール	Kota	18,921
	ジヨクジャカルタ	◎	○	○	○	○	△	○	○	○	クジヤウエン	Vorstenlanden	312,698
	スラカルタ	◎	○	○	○	○	○	○	○	-	クジヤウエン	Vorstenlanden	367,626
	スマン	◎	○	×	○	×	△	○	○	-	ハシール	Stadsgemeente	503,153
	チラチャブ	-	○	×	○	×	-	-	-	-	ハシール	Kota	55,333
	デマク	-	○	×	○	△	△	-	-	-	ハシール	Kota	13,019
	トゥガル	○	○	×	-	×	○	-	-	-	ハシール	Stadsgemeente	89,016
	マグラ	○	-	-	○	×	○	-	-	-	クジヤウエン	Stadsgemeente	96,454
ラセム	-	○	×	-	△	△	-	-	-	ハシール	Kota	-	
レンバン	-	○	×	-	×	-	-	-	-	ハシール	Kota	22,985	
西ジャワ	ジャカルタ	◎	○	×	×	×	-	○	○	○	ハシール	Stadsgemeente	2,973,052
	フレボン	-	○	△	○	×	△	-	-	-	ハシール	Stadsgemeente	158,299
	バンドン	◎	○	×	-	×	-	○	○	○	スダ	Stadsgemeente	972,566
	ボゴール	◎	○	×	○	×	-	-	-	○	スダ	Stadsgemeente	154,092
東ジャワ	グレスク	-	○	×	○	×	○	-	-	-	ハシール	Kota	38,998
	スラバヤ	◎	○	-	-	×	-	○	○	-	ハシール	Stadsgemeente	1,007,945
	トゥバ	-	○	×	-	×	△	-	-	-	ハシール	Kota	38,575
	パスマン	◎	○	×	-	×	-	-	-	-	ハシール	Stadsgemeente	63,408
	マラン	◎	○	×	-	×	-	-	-	-	ハシール	Stadsgemeente	341,452

凡例 ◎あり（大規模）

○あり

△痕跡がある

×なし

-不明

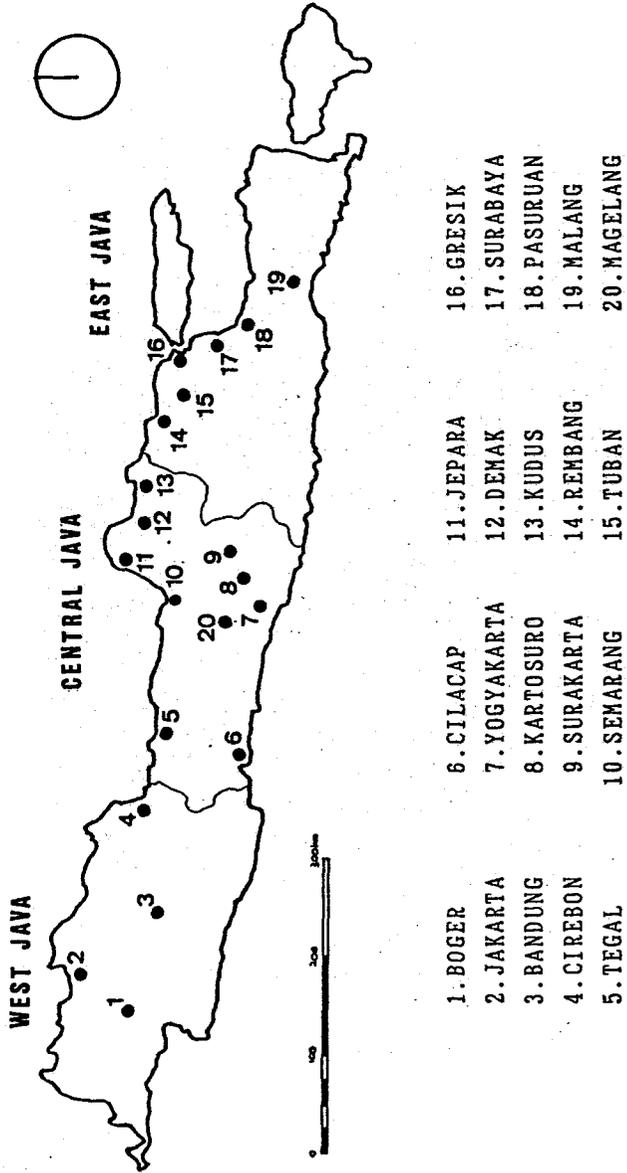


図 1 - 1 - 1 調査都市の位置

ユニット11 スクウォッター・スラム

不法占拠による居住環境が相対的に劣悪な地区。

後述するように、ユニット5はごく少数だが、いずれもその起源は古く純粋なジャワ人だけによって形成された小都市であること、また、イスラムの商人町であることなどの特徴をもっている。カウマンとの類似点が多いが、カウマンという呼称が使われないこと、また、都市における立地が異なることなど、カウマンとは異なる点があり別個のものとして扱うことが適当と判断された。

ユニット7、8、9の区別にはかなり曖昧な点が存在する。たとえば、公共開発にもかかわらず、その居住者が特定されるようなケースであり、軍人の居住地区はその1例である。したがって、各ユニットの区別を下記のように定める。

ユニット7 公共によって開発され、原則的に住民の入居資格に制限が存在しない場合。なお、ここでいう資格は職業など社会的性格をもつものであり、所得など経済上の制約を意味しない。かつては一定の資格制限が存在したが撤廃され、現在は資格が問われなくなったケースを含む。

ユニット8 民間によって開発され、原則的に住民の入居資格に制限が存在しない場合。なお、ここでいう資格はユニット7と同じである。

ユニット9 開発主体についての公民の別を問わないが、特定の組織に保有されており、原則的に住民の入居資格に制限が存在する場合。なお、ここでいう資格はユニット7と同様である。

なお、ユニット9にはユニット1と同様の起源をもつケースが存在する。それは元来旧オランダ人居住地区に一般の住宅地と社宅とが併存したことに起因する。独立後、かつての植民地期の会社社宅がそのまま受け継がれたケースが多い。この場合はユニット1として扱う。

また、村井吉敬は西ジャワのスメダンのまちを例として取りあげ、レゴルと呼ばれる地区の存在について述べている（注3）。レゴルとはプバティ（注4）の館の裏なしいし側面の地区のことで、門を意味するレゴルという言葉からきている。この言葉が地区の名称にかなり頻繁に見出せるのは事実だが、地区名として普遍性をもつかなど

について確認しえておらず、今回の検討からは除外する。

－2 諸都市における分節ユニットの普遍性

(1) 分節ユニットの分布と概況

ユニット1 旧オランダ人居住地区

主要都市の多くにみられる。現在比較的良好な状況で存続しているものは今世紀初頭、郊外に計画的開発されたものが多く、ジャカルタ、スラバヤ、バンドン、スマラン、マランなどの大都市では規模が大きい。これらは、みな植民地期<自治都市 *stadsgemeenten*>のステイタスをもちヨーロッパ系人口が比較的大きかった都市である。ジャカルタのメンテンやゴンダンディア、スラバヤのダルモ、スマランのチャンディなどは高級住宅地として有名である。

ユニット2 プチナン

ほとんどの都市に存在する。スマラン、ジャカルタ、スラバヤなど植民地期商業拠点として栄えた都市では大規模である。

商業の中心地として、都市の中核部に位置し、住民である華人が経済力をもつため、建物更新の速度が早く地区形態の変容は著しい。特に首都のジャカルタをはじめ、北部海岸沿いの諸都市においてはこの傾向が著しい。変容の代表的形態はビル化および高層化であり、道路の拡幅によりショップハウスが後退しているケースもかなりみられる。

しかし、中小都市では道路に沿って低層の中国式のファサードをもつショップハウスが建ちならび、かつての状態を保っている。

また、ラセムでは当初からショップハウスではなく、邸宅風住宅から構成される住宅地的色彩の濃い市街地が存在する。

ユニット3 ジュロン・ベテン

数は少ないが、土着権力の王宮であるクラトンが存在する都市にはその周辺に特有の性格をもつ市街地がみられる。植民地期に土侯領 *vorstenlanden* のステイタスをもっていたスラカルタおよびジョクジャカルタはその典型例である。両都市とも観光地として名高く、開発による変容が著しい。

また、チレボンには、ジャワで最も古いイスラム王国の1つであるといわれる4つのクラトンが存在するが、周辺にはスラカルタおよびジョクジャカルタのような特有の空間構成を欠いている。なお、スンダ地域にもクラトン

が存在したといわれる。その現況は明らかにしえていないが、小規模なものであったらしい(注5)。

ユニット4 カウマン

ほとんどの都市に広範に見出される普遍的存在であり、ジャカルタなど一部の都市を除きほとんどの都市にみられる。かつてサントウリの拠点であった北部海岸沿岸諸都市には歴史的地区として知られた地区がある。クドゥスはその例である。

ユニット5 伝統的都市集落

ジョクジャカルタ縁辺のコタグデ、スラカルタ縁辺のラウエヤンの2つだけをこの範疇に入れておく。

ユニット6 カンプン・アラブ

数はさほど多くないが、いくつかの都市にみることができる。トゥガルは特に名高い。地名にかつての存在の痕跡を留めているものの、地区としての実体が見当たらないケースもある。ジョクジャカルタはその例である。

ユニット7 公共開発住宅地

主要都市の多くに存在する。特にジャカルタなどの大都市には大規模なものが見出される。ジャカルタのクバヨランバルはその代表的な例である。

ユニット8 リアル・エステイト

主要都市の多くに存在する。特にジャカルタなどの大都市には大規模なものが見出される。ジャカルタのポンドクインダはその代表的な例である。

ユニット9 社宅地区

主要都市の多くに存在すると思われるが、その正確な分布についてはあきらかではない。

ユニット10 カンプン

カンプンは事実上市街地と同義に使用される普遍的存在である。カンプンの存在しない都市を想定することはできない。

ユニット11 スクウォッター・スラム

一般のカンプンとどこで一線を画すかの基準はきわめて曖昧であるが、一定の人口規模を越える都市にはほとんど存在する。ジャカルタの鉄道線路沿いの地区などはその代表的事例である。

(2) 呼称

ユニット1 旧オランダ人居住地区

表現としては一般性がないわけではないが、地区呼称として一般にもちいられてはおらず、呼称としての普遍性をもたない。社会を構成する集団としてオランダ人をはじめとするヨーロッパ人が存在しなくなったことに対応しているものと考えられる。

ユニット2 プチナン

プチナンとは華人地区という意味であり、一定の普遍性をもつ特定の呼称として用いられている。しかし、地区名称となっているケースはない。

ユニット3 ジュロン・ベテン

ジュロン・ベテンとは城壁の内側を意味する。ジョクジャカルタ、スラカルタの場合この呼称が用いられるが（注6）、他の都市においてどうか確認していない。しかし、上記2都市においても地区名称として用いられてはいない。

ユニット4 カウマン

カウマンのカウムとは、本来宗教上の指導者ブングルアガマたちの住まうところを意味するといわれる（注7）。したがって、カウマンとは特定の社会集団を示す呼称である。地区の呼称として一般的に使用されているばかりでなく、地区名称としても一般的である。

ユニット5 伝統的都市集落

一般的な呼称は存在しない。

ユニット6 カンプン・アラブ

カンプン・アラブとはアラブ人地区という意味であり、それ自体が一定の普遍性をもつ呼称である。しかし、地区名称として用いられているケースは確認していない。

ユニット7 公共開発住宅地

国家建設公団によって建設されたものは、その略称であるブルムナスという呼称によって総称されることが多い。これはまた地区名称としても用いられている。が、ブルムナス以外の公共開発住宅地にはそのような呼称、名称は存在しない。

ユニット8 リアル・エステイト

リアル・エステイトという呼称は使われるが、地区名称としては普遍性を欠くと考えられる。

ユニット9 社宅地区

会社の名称を冠する名称が用いられることもあるが、それがどの程度一般的かは確認していない。

ユニット10 カンプン

事実上、一般的市街地を意味する用語であり、その限りでは普遍的な呼称といえるが、その意味する範囲は極端に広大であり、他のユニットの場合とは性質が異なる。したがって、地区名称として用いられることはない。

地区11 スクウォッター・カンプン

特定の呼称は存在しない。

－ 3 各分節ユニットの空間的特徴

(1) 都市における立地傾向

ユニット1 旧オランダ人居住地区

大都市における大規模地区は、かつての都心から少し離れたところに位置することが多い。また、小都市ではアルナルンと呼ばれる広場付近に小規模な住宅群の立地がしばしば見られる。まちが斜面に位置する場合、高地側にある。

ユニット2 プチナン

ほとんどの場合、都心近くの商業地に立地する。通常、パサール（市場）に隣接あるいは近接して立地するケースがほとんどである。

ユニット3 ジュロン・ベテン

伝統的な土着権力のかつての王都、ジョクジャカルタ、スラカルタの中心に位置する。

ユニット4 カウマン

通常アルナルンの西のモスク周辺に立地する。地区とモスクの関係は不可分である。

ユニット5 伝統的都市集落

伝統的な土着権力の拠点都市であるジョクジャカルタ、スラカルタの縁辺に位置する。この事実から、伝統的権力とのなんらかの関係をもっていたことが推察される。

ユニット6 カンプン・アラブ

カウマンと同様、モスクに隣接あるいは近接しているが、アルナルンとの関係は特定できない。

ユニット7 公共開発住宅地

大規模なタイプは郊外立地が主体だが、ジャカルタをはじめとする大都市では都心部再開発のケースがある。

ユニット8 リアル・エステイト

郊外に立地するものが大半である。

ユニット9 社宅地区

立地傾向は特定できない。

ユニット10 カンプン

立地傾向は特定できない。

ユニット11 スクウォッター・スラム

居住地としての適性の低い場所に立地する傾向がみられる。

(2) 空間的特徴

1) 建物およびデザイン要素

ユニット1 旧オランダ人居住地区

建物の過半はコロニアルスタイルの住宅である。ギリシャローマ風の古典建築やアーチ型の意匠など欧米風デザインがみられる場合もある。

ユニット2 プチナン

建物の過半はショップハウスである。建てかえの進んでいる地区では近代的意匠が多く、そうでない地区ではかつての様式が残っており切妻の破風などの中国風デザインが特徴的である。

ユニット3 ジュロン・ベテン

中部ジャワの伝統的な貴族住宅の様式であるジョグロといわれる中折れ状の屋根をかけた住宅がかなりみられるが、カンブン型と呼ばれる切妻住宅も多い。ジョグロ型住宅にはジョグロ屋根以外にも、細かい装飾などジャワ特有の伝統デザインが見られる。

ユニット4 カウマン

様式性の強い伝統的住宅がかなりの割合存在するが、過半はカンブン型住宅である。アラブやヨーロッパなどのデザインモチーフが混交した特有の装飾がみられる。

ユニット5 伝統的都市集落

貴族住宅のミニアチュア版のジョグロといわれる中折れ状の屋根を冠した住宅（ジョグロ型住宅と呼ぶ）がかなりみられることが特徴だが、切妻屋根

であるカンブンといわれるタイプの屋根を冠した住宅（カンブン型住宅と呼ぶ）も多い。ジョグロ型住宅にはジョグロ屋根だけでなく、ジャワ特有の伝統デザインが見られる点はユニット3と同様だが、住宅の形式はかなり異なる。

ユニット6 カンブン・アラブ

アラブ風のデザインモチーフが見られる。住宅サーベイをはじめ、詳細については調査しえていない。

ユニット7 公共開発住宅地

住宅の形態はさまざまだが、建設時期により2つのタイプに大別される。

古いタイプは戸建てで、プランおよびデザインにはコロニアル住宅との連続性が高く、ユニット1を小型にした形式のものが多い。

新しいタイプは、戸建てと集合住宅の2タイプがある。プランおよびデザインは近代的コンセプトによるものであり、実験的な工法などを採用したのものもある。ローコストハウスが多く、住戸は一般に小さく、プラン、デザインともシンプルである。

ユニット8 リアル・エステイト

住宅には、高所得者向けと中所得者向けが存在する。前者においては、コロニアルデザインと近代的デザインモチーフが混合したやや装飾過剰ともいえる特有のバナキュラーデザインが支配的である。後者は比較的簡素なデザインで、ユニット7と類似点を多くもっている。

ユニット9 社宅地区

ユニット7および8と類似点を多くもつ。

ユニット10 カンブン

カンブンには、住民の経済状態によって、立体集合住宅以外のあらゆる種類の住宅が建てられており、それがまたカンブンの特徴ともなっている。大部分の住宅はカンブン型に分類されるが、そのバリエーションはきわめて大きい。一般に、規模が小さく内装も粗末である。その構造は、木軸構造に竹壁のテンポラリー型、木構造と煉瓦造との混構造であるセミパーマネント型、煉瓦造あるいはコンクリート造のパーマネント型の3種類が混在しているが、一般に前2者の比率が高いほど居住環境は悪い。

ユニット11 スクウォッター・スラム

ユニット10とほぼ同様だが、住宅の規模は小さくなり、構造もより粗末に

なる。テンポラリー型、セミパーマネント型の比率が相対的に高いケースが多い。

2) 近隣空間の構成

ユニット1 旧オランダ人居住地区

地区内道路は広く、各戸にはかなり広い前庭が設けられており道路と建物との間にはじゅうぶんな距離があり、また、その敷地境界には植栽が施されているため、広々とした雰囲気である。

ユニット2 プチナン

道路を挟んで両側には店舗が隙間なく並んでいるケースが多く、全般に家屋密度が高く、オープンスペースおよび緑が少ない。

ユニット3 ジュロン・ベテン

通常、主要道路は10メートル程度の幅員があり、両側を白く塗られた5メートル近い高い壁に挟まれている。その壁に圍繞された区画が集合して地区を形成している。それぞれの地区の形態は、貴人の伝統的住居であるダレムを核とするもの、比較的住居配置が規則的なもの、カンブンと大差ないものの3種類がある。

ユニット4 カウマン

住居配置に規則性がなく、狭い不規則な路地が走る。この点は、カンブンと大差のない環境であるが、規模の大きい住宅からなる一画は特有の装飾などにより独特のたたずまいをもつ。通常家屋密度はかなり高い。

ユニット5 伝統的都市集落

地区内は白壁で挟まれた狭い路地が不規則なパターンで走る閉鎖的雰囲気であるが、対照的に壁の内側は緑が多い開放的性格となっている。この点、ユニット3と共通するが、壁がなくカンブンと変わりのない部分も多い。

ユニット6 カンブン・アラブ

高い壁で囲まれた住居がならび閉鎖的雰囲気であるが、観察事例が少なく断定できない。

ユニット7 公共開発住宅地

地区がどの程度のステイタスをもつ住宅地として設計されたかによって異なっているが、おおむね中高所得者向けではユニット1と似た雰囲気であり、低所得者向けになるほど家屋密度が上がる。しかし、ローコスト集合住宅タイプを除き、一般に植栽が施され整然とした雰囲気をもつ。

ユニット8 リアル・エステイト

ユニット7 とほぼ同じと考えられるが、一般にファサードの統一性を欠くため、雰囲気はかなり異なる。特に低所得者向けでは、一般に住宅の改造の頻度が高いため、やや雑然とした雰囲気になりやすい。

ユニット9 社宅地区

建設時期の古いものはユニット1 と、新しいものはユニット7 と似た雰囲気のものが多い。

ユニット10 カンプン

ケースによってかなり環境が異なる。不規則な路地が連続し雑然としており、また、庭などの植栽が農村的雰囲気を醸しだしている点では共通している。K I Pによる整備がなされた地区を除き、道路などの状況は良好ではない。

ユニット11 スクウォッター・スラム

基本的にはユニット10と変わるところはないが、居住環境のレベルは低く雑然としたイメージはさらに強い。

3) 宅地割り

ユニット1 旧オランダ人居住地区

計画的で整然とした宅地割りがなされ、戸当たりの敷地サイズは大きい。

ユニット2 プチナン

通りに面して間口を開く短冊型の宅地割りが一般的である。

ユニット3 ジュロン・ベテン

かなり規則的な宅地割りがなされているが、地区の性格によりそのパターン、規模はかなり異なっている。

ユニット4 カウマン

宅地割りは不明である。

ユニット5 伝統的都市集落

複数の住宅が横に連続して形成されるクラスター部分の宅地割りには規則性があるが、それ以外の部分については不明である。

ユニット6 カンプン・アラブ

不明である。

ユニット7 公共開発住宅地

計画的で整然とした宅地割りがなされている。古いタイプはユニット1 と同

様だが、新しいタイプはきわめて直線的で幾何学的なパターンである。

ユニット8 リアル・エステイト

ユニット7とほど同じと考えてよい。

ユニット9 社宅地区

ユニット7あるいは8と同じである。

ユニット10 カンプン

明快なパターンを欠くが、詳細は不明である。

ユニット11 スクウォッター・カンプン

ユニット10と同様である。

4) 地区レイアウト

ユニット1 旧オランダ人居住地区

今世紀初頭に開発された大規模な住宅地は、並木のある幹線道路、地形を生かした曲線的パターンの住宅地内道路による一体的地区を形成している。小規模なものでも、上記の特徴のいくつかについては共通している。

ユニット2 ブチナン

大規模なものは、平行に走る道路によって形成された短冊型の街区パターンをもつ。小規模なものは幹線道路沿いに発達したケースが多い。

ユニット3 ジュロン・ベテン

土着権力であるイスラムマタラムの伝統的な都市計画にしたがう。地区全体の形状は正方形に近く、概して直線的なパターンをもつ。詳細は第3章で述べる。

ユニット4 カウマン

モスクを核とする以外には、カンプンと特に変わることはない。

ユニット5 伝統的都市集落

閉鎖的な迷路状の路地ネットワークが特徴的であるが、そのパターンには規則性がなく、この点ではカンプンと特に変わることはない。しかし、住宅の連鎖によって形成されるクラスターに特徴がある。詳細は第3章で述べる。

ユニット6 カンプン・アラブ

あきらかにしえていない。

ユニット7 公共開発住宅地

近代的コンセプトにより計画、建設されており、規則的な道路パターンをもつ。

ユニット8 リアル・エステイト

ユニット7と同様だが、道路パターンなどはかなり計画的につくられているが、計画性は相対的に低くその分基盤および施設などの整備水準は低いことが多い。

ユニット9 社宅地区

ユニット7と同様であるが、中央広場へ向かって各戸が入口を開くなど、求心性を高めるレイアウトパターンなどの工夫がなされているケースがみられる。

ユニット10 カンプン

一般に明瞭なパターンを欠く。

ユニット11 スクウォッター・スラム

ユニット10とほぼ同様だが、道路などの状況はさらに劣る。

4) まとまりと広がり (求心性と領域性)

各ユニットは以上に見てきたような空間的特徴をもつが、その結果として醸しだされるまとまりと広がり、空間的分節化を把握するうえで重要な意味をもつ。

ジャワ島都市には、一般に地区の入口に門あるいは夜警小屋などの結界が設けられている。それは、かなり歴史的なものであったことがわかる(注8)が、ここでは、こうした居住地の結界性を示す物的要素ではなく、周辺地区との異質性に立脚した地区の求心性と領域性を主な検討の対象とする。

ユニット1 旧オランダ人居住地区

教会および並木路などが地区の求心性を高めるシンボリックな存在として存在する場合もあるが、一般に特に強い求心性が存在するわけではない。しかし、地区レイアウトが明快で、コロニアル住宅からなる地区の一体感は強く、全体のまとまりがつかみやすく境界も明瞭である。

ユニット2 プチナン

寺院がシンボリックな存在としてある場合もあるが、それが必ずしも特に求心的存在となっているとは断定できない。しかし、ショップハウスが集まることによって、地区のまとまりと広がり、の把握は容易である。

ユニット3 ジュロン・ベテン

クラトンがきわめて明瞭な求心性をつくりだしている。また、城壁がある範囲は明瞭な領域性を有する。ダレムの存在もまた求心性をもち、周囲に一定の領域性が形成されている。

ユニット4 カウマン

モスクが強い求心性を与えているが、境界は曖昧であり領域性は乏しい。

ユニット5 伝統的都市集落

特に求心性を感じさせるものは存在しないが、壁に囲まれた路地のネットワークによって形成される物的環境により領域性が生み出されている。しかし、周辺での境界は明瞭ではない。

ユニット6 カンプン・アラブ

あきらかにしえていない。

ユニット7 公共開発住宅地

一般に求心的な施設は存在しないが、地区のレイアウト、また、建物形状から周辺との区別が明瞭である。

ユニット8 リアル・エステイト

一体的に計画、建設されたものは、ユニット7とほぼ同じである。小規模で計画性が低い場合には、周辺のカンプンとの境界がやや曖昧になることもある。

ユニット9 社宅地区

塀および門が設けられている閉鎖型の場合もあり、その場合領域性は明快である。そうでない場合は、ユニット7あるいは8に準ずる。また、中央に広場が配され、モニュメントがおかれるなど求心性をもたせるための工夫がなされている場合もある。

ユニット10 カンプン

求心性、領域性はきわめて曖昧である。

ユニット11 スクウォッター・スラム

ユニット10とほぼ同様だが、物的環境の相対的低さによって一定の領域性が発生している場合もある。しかし、周囲がカンプンの場合、境界はきわめて曖昧である。

- 4 社会状況

主としてインタビューを通じてえた知見から、各分節ユニットの社会状況について

記す。

ユニット1 旧オランダ人居住地区

業務地区化が進行中の地区も存在するが、通常は住宅地として用いられている。主として、プリブミ系エリートあるいは華人系金持ちが居住する。大都市では、外国人ビジネスマンの居住地区となっている場合もみられる。特に、ジャカルタのメンテンでは、各国公館が集中しており業務地区化が著しい。また、同じジャカルタのクバヨランバルは外国人居住地として知られている。

ユニット2 プチナン

通常、住居商業業務混合地域であるが、現在ではオフィス化が進み、業務地区化しつつあるところもある。そのため昼間人口が減少する傾向をもつ場合も多い。華人系およびその従業員であるプリブミ系下層が居住する。

ユニット3 ジュロン・ベテン

クラトンに仕えた官僚貴族およびその従者の子孫が居住するが、現在では貴族階級の経済的疲弊のため経済階層としては中の下程度であるといわれる（注9）。そのことが、観光開発に拍車をかけているきらいもある。

ユニット4 カウマン

サントゥリと呼ばれる敬虔なイスラム指導者および商人が居住する。

ユニット5 伝統的都市集落

貴族階級や、伝統的な商人および工人階級が居住する。現在も引続き伝統的工芸が盛んなところであるが、その相対的地位低下のために、かつては富裕であった商人階層の中にも経済的疲弊がみられる。そのため、地区の物的環境は悪化する傾向にあり、なかでも特有の中部ジャワの貴族的伝統を引く住宅が失われつつある。

ユニット6 カンプン・アラブ

アラブ系が居住する。商業従事者が多いといわれる（注10）。

ユニット7 公共開発住宅地

公務員の比率がかなり高い。住民の教育レベルは比較的高いが、経済的には中位にとどまる。

ユニット8 リアル・エステイト

専用住宅地が普通である。高級なものについては、ユニット1と同様であ

る。プリブミ系エリートおよび華人系金持ちが居住する。大都市の場合、外国人ビジネスマンの比率も高いことがある。

中級以下のものについては、中の上から上の下程度の経済階層の人びとが居住する。

ユニット9 社宅地区

官民の企業の中でも比較的地位の高い層が居住する。

ユニット10 カンブン

実にさまざまなタイプがあり性格を特定できないが、経済階層および民族の点でかなり混合の度合いが高い。また、土地利用も混在しているのが普通である。

ユニット11 スクウォッター・スラム

ユニット10と同様である。

- 3 <自然の市街地類型>

以上から<自然の市街地類型>をおおむね次のように考えてよいだろう。

類型1 旧オランダ人居住地区

植民地支配期にヨーロッパ人により彼らの住宅地理論および手法にもとづき計画、開発され、オランダ人を主体とするヨーロッパ人が居住していた地区。2つに大別される。1つは一体的に開発された比較的規模の大きい地区で、もう1つは小規模な地区である。

前者は、現在は上流階級の居住地となっている。旧オランダ人居住地区という呼称は通用するが、一般に呼称としては用いられない。しかし、空間的要素によって地区としてのまとまりおよび広がりも明快である。

地区のレイアウトは計画的で整然とした道路パターンと街区割をもち、主要道路には十分な幅員がとられ街路樹が植えられている。宅地割も整形で一戸当たりの敷地面積は広く、通常、広い庭が設けられ植栽も豊富である。かつてのコロニアルスタイルの住宅がかなり良好な状態でそのまま使われている。

また、一体性のある居住地として計画されているため、教会、病院、学校などの各種施設が立地する。

後者の小規模なものは、せいぜい数戸から十数戸程度の住宅の集合で、市街地の中に島状に存在する。その意味では地区としての広がりには欠けるが、

上述した特徴のいくつかを保持しており、周辺との相違は明快である。住民は特定しえないが、一般にプリブミ系、華人系を問わず金持ちに所有されている。

類型2 プチナン

かつての華人の居住地区であり、パサールに近接する住居商業業務地区を形成している。現在は、主として華人系の人々およびその使用人であるジャワ人が居住している。華人系特有の空間的要素の存在によって、地区としてのまとまりと広がり容易に認識される。

住宅の変容によって2つのタイプに分けられる。1つはかつてのショップハウスがそのまま残っているショップハウスタイプで、もう1つは建てかえが進み、ビル化してしまったビルタイプである。

後者はさらに建物の用途によって2つに分けられる。併用住宅の状態をそのまま保持している併用住宅タイプと、専用店舗およびオフィス化した商業業務専用タイプである。

いずれのタイプも、通りを挟んだかたちで建物が建て詰まり、一般に家屋密度が高くオープンスペースおよび緑が少ない。街区パターンは直線的で、大規模なものは、平行に走る道路によって形成された矩形パターンをもつ。小規模なものは幹線道路沿いに位置する線形パターンである。

類型3 ジュロン・ベテン

土着権力の王宮コンプレックスを構成する地区であり、クラトンに仕えた官僚貴族およびその従者の子孫が居住するが、現在では貴族階級の経済的疲弊のため経済階層としては中の下程度である。観光開発による変容が進む傾向にある。

城壁の存在によって、その地区としてのまとまりおよび広がり明快である。クラトンがきわめて明瞭な求心性をつくりだし、城壁はそれに結界性をつくりだしている。ダレムの存在も求心的であり、その効果を強めている。

地区は伝統的な都市計画にしたがい、その形状はほぼ正方形に近い矩形であり、規則的な道路パターンが存在する。区画毎に白く塗られた壁に囲繞されており、その内部は、貴人の伝統的住居がある特有の地区、比較的住居配置が規則的な地区、カンブんと大差ない地区の3つの場合がある。

類型4 カウマン

カウマンのカウムとは、本来宗教上の指導者ブングルアガマたちの住まう

ところを意味し、通常アルナルンの西にあるモスクを中心としてその周辺に立地する。サントゥリと呼ばれる敬虔なイスラム商人が居住する。

一部の規模の大きな住宅からなる区画には、中部ジャワの伝統的様式とアラブやヨーロッパなどのデザインモチーフが混交した特有の装飾がみられ、独特の雰囲気醸成している。しかし、それ以外の部分は全般に住居配置に規則性がなく、狭い不規則な路地が走るカンブンと大差のない環境であり、周辺との境界はやや曖昧であり領域性は乏しいが、モスクが強い求心性を与えている。

類型5 伝統的都市集落

ジャワの伝統的な都市的集落であり、伝統的な商人および工人階級が居住する。現在も引き続き伝統的工芸が行なわれているが、かつては富裕であった商人および職人階層が経済的に疲弊する傾向にある。そのため、地区の物的環境は悪化する傾向にあり、なかでも特有の中部ジャワの貴族的伝統をひく住宅が失われつつある。

地区内は白壁で挟まれた狭い路地が不規則なパターンで走る閉鎖的雰囲気であるが、対照的に壁の内部は緑が多い開放的な性格の空間であり、中部ジャワ特有の様式にもとづく住宅が建てられている。

特に求心性を感じさせるものは存在しないが、路地のネットワークが一定の領域性を生みだしている。しかし、周辺での境界は明瞭ではない。

類型6 カンブン・アラブ

カンブン・アラブとはアラブ系の人々が居住する地区である。彼らは敬虔なイスラム教徒であり、商業に従事する者が多い。

高い白壁に囲繞された地区の空間構成などは類型3および5などと共通点をもつ。

類型7 公共開発住宅地

戦後、公共によって開発された地区。建設時期により2つのタイプに分けられる。国家住宅公団の発足以前と以後のものである。

ともに、計画コンセプトが欧米の理論に準拠しているが、時期的に前者の方が類型1との類似性が高い。

地区の性格はケースによって差があり特定しえないが、大まかには以前のタイプは上級官僚用、以後のタイプはローコストハウスプロジェクトと位置づけられる。その結果住民層は、以前のタイプは上の下から中の上、以後の

タイプは中の上から下という傾向がみられる。両者とも公務員が多い。

以前のタイプは戸建て中心で、プランおよびデザインには類型1のコロニアルスタイルの住宅を小型にした形式のものが多い。

以後のタイプは、戸建てと集合住宅の2タイプがある。プランおよびデザインは近代的コンセプトによるものであり、実験的な工法などを採用したのもも多い。一般に国家建設公団の略称であるブルムナスという呼称によって総称される。

類型8 リアル・エステイト

戦後、民間ディベロッパーによって開発された地区であり、その様態はさまざまだが、開発規模、開発方法、住民の階層、物的形態などによっていくつかのタイプに分けられる。ほとんどが郊外に位置する戸建て住宅地の性格をもっており、住民階層は上および中の2つに大別される。

かなりの大規模開発であっても、個々のディベロッパーが部分的、段階的に開発をすすめるタイプでは、類型7と比較すると地区のレイアウトなどに計画性が低く、道路など基盤整備状態が劣る。

大規模開発を一体的に進めたケースでは、比較的計画性が高く整然としたレイアウトが見られるものが多い。

類型9 社宅地区

公共および民間企業の社宅地区。空間的には類型1、7、8に似た3つのタイプが存在するが、その規模は相対的に小さい。

また、以下の2つは、空間的分節化の観点からは一定の普遍性をもつと判断されるが、そのうちユニット10は、その規模が他と比較にならないほど大きく、類型として扱うことは妥当性を欠くと判断される。また、ユニット11はユニット10と比較するとコンパクトであるが、他の地域とは性格がやや異なっており、むしろユニット10の延長線上にとらえられるべき存在であるため、類型として扱わない。

ユニット10 カンブン

ユニット11 スクウォッター・カンブン

1-2 各類型の歴史的形成にもとづく履歴

- 1 各類型の履歴

(1) 類型1 (旧オランダ人居住地区)

類型1は言うまでもなくオランダ勢力のジャワへの進出に起源をもつものであり、オランダ人による都市建設の歴史が背景にある。

オランダ人による都市建設の歴史は、17世紀前半のジャヤカルタにおける倉庫および要塞の設置に遡る。当時の居住地は、土着イスラム権力であったジャヤカルタのコントロール下におかれた居留地の性格をもつものであり、城壁内という限られたものであり、市街地というほどの広がりをもつてはいなかった。建物は当時のオランダ本国の都市住宅の形式と同じであった（注11）。

やがて都市の支配権を確立し、ジャヤカルタからバタヴィアへとその呼び名が変わる頃には、居住地は要塞の外部へ広がり、運河沿いの商館建築や、マンシヨンスタイルの住宅など、本国都市を模したまちづくりが行なわれた（注12）。

17世紀末になると郊外化の傾向は本格的になり、邸宅風の戸建て住宅からなる居住地が形成された。18世紀の高級住宅地として知られるモンレフリットはその代表である。類型1の起源をこの時点に求める考え方もあるだろう。

しかし、詳しいことはわかっていないが、この期の住宅はオランダ本国の貴族のカントリーハウスをモデルとしたと考えられ、敷地面積は広大で独立性が高く、今日の通念としての住宅地のイメージとはかなり異なる田園的な雰囲気のものであったと推察される。その意味では、類型1の祖型とみなすには無理があるかもしれない。

類型1の直接の原型を、19世紀はじめのバタヴィアにおけるウェルトフレーデンに求める見解もあり得るだろう。この期の都市計画はシティ・ビューティフル運動の影響を受け、バロック的で壮大なスケールをもつものであった。したがって、ランドヘイゼンあるいはヴィラと称されたこの期の住宅もまた、今日の感覚からいえば、いささか広壮に過ぎるものであった。しかし、地区全体の構成は類型1の市街地にかなり近くなっており、類型1の祖型と考えることもできる。

しかしながら、ウェルトフレーデンと、その後建設されたスラバヤのダルモ、スマランのチャンディなど現在の類型1を代表する地区との間には依然としてかなりの隔りがある。それは、そのままオランダにおける住宅地理論の変遷を示している。

今世紀初頭に建設されたバタヴィアのゴンダンディアおよびメンテンにみられる直線的な街路パターンは、前世紀のコーニングスブレイン周辺の計画との連続性を感じさせる。事実、19世紀の都市のレイアウトがグリッドパターンを基本とするものであったことが指摘されている（注13）。

しかし、前述のダルモやチャンディ、あるいはジョクジャカルタのコタバルなどでは対照的に曲線的な街路パターンが特徴的であり、当時流行していた田園都市の影響

を受けたものと考えてよいだろう（注14）。ジャカルタのクバヨランバルの計画もこの延長線上にある。

1903年以降、自治都市のステイタスをもつ都市において一定範囲の自治権が認められてからは、自治体による住宅地開発が行なわれるようになった。ジャワでは、本国以上に都市計画の制度化が進んでおり、また、カーステンをはじめとする新進の都市計画家の活躍する条件が整っていた。特にカーステンの貢献は大きい。

一方、中小都市においては、大規模な開発ではなく、比較的小規模単位でヨーロッパ人地区が形成されたと考えられる。こうした地区の起源を一般化するのは困難であるが、おおむねギアツがモジョクトについて描写したような過程をとったとみてよいだろう（注15）。中小都市を訪問すると、アルナルンの近くや政府機関に近接して小規模なコロニアル住宅群がみられることがこうした推察を裏づける。

同様に、デ＝ヨン他は、中部ジャワの地方都市バンジャルヌガラについて、1人のブパティが植民地政庁に歎願し、カブパテン庁舎とオランダ人高級官吏の建物を建てることによって新しいまちの礎がつけられた発端を簡単に述べている（注16）。

（2）類型2（プチナン）

ジャワにおける華人のプレゼンスはオランダ人以上に長い歴史をもつ。既にシュリーヴィジャヤが中国に朝貢していたことが知られているように、ジャワは早くから中国を中心とする世界的な交易圏に編入されていた。

コバンはジャワに関する中国文献を調べ、明朝の鄭和の遠征に同行した馬歡の『瀛涯勝覽』の記述を引用しトゥバンおよびグレシクには華人がかなりの程度居住していたと述べている（注17）。

また、伝説によると、ジャワ最大の華人居住地であるスマランのプチナンは、鄭和の遠征の際に残留した華人によって基が開かれたといわれる（注18）。以来、どのような変遷を経て現在の姿に至ったかについては、ジョハネス・ウイドドが考察を試みている（注19）。

本来、華人は血縁、および、出身地によって集住する傾向をもつが、オランダ統治下、ジャカルタにおける華人大虐殺事件以降、華人は一定の地区に住むことを余儀なくされ、そのことがプチナンの形成、維持に一定の役割を果たしたと考えられる。また、伝統的なジャワ社会で商業が軽視され、華人が特殊視されたことも、地区の孤立性を高め、いっそうの内部的求心力を維持することに力を貸したであろう。

植民地権力の間接統治政策下、華人はヨーロッパ人とプリブミ系の中間に位置し商業を通じて両者を媒介する役割を担った。それが、プチナンがほとんどの都市にみら

れる理由の1と考えられる。その時期は、基本的にはオランダの植民地支配の確立と平行するものであろう。マタラムの王都がカルトスラから遷された契機は、ジャカルタに端を発した華人の暴動であったことを考えると、その期には主要な都市には華人の居住地区が形成され、かなりの数の華人が居住していたことをうかがわせる。戦後は、華人の経済力を制限するために居住地制限が行なわれたが、ほとんどの地区がそのまま維持されるに至っている。

現在のような道路を挟みショップハウスが建ち並ぶ市街地形態は比較的初期の頃から存在すると考えられる。17世紀バタヴィアのモンレフリットに建てられた総督邸入口付近にショップハウス型の敷地があるのが観察される(注20)。ショップハウス型市街地はシンガポールなど近隣諸国にも見られ(注21)、少なくともジャワを起源とするものではないことはあきらかである。外部からもちこまれた伝統と考えてよい。

(3) 類型3 (ジュロン・ベテン)

この類型に該当するスラカルタ、ジョクジャカルタはいずれもイスラムマタラムの都であり、前者は1746年、後者は1755年にその核となるクラトンの建設が始まった。イスラム以前のヒンドゥ権力の伝統、あるいは、それ以前のジャワ土着の空間構成原理の系譜をひくと考えられる。その詳細については第3章で述べる。

(4) 類型4 (カウマン)

カウマンが形成された過程については明らかではない。しかし、それがイスラムの受容に由来することは間違いないであろう。ギアツによれば、当初イスラムはジャワ北岸の商業都市国家の商人に受容されたといわれる(注22)。その結果、サントウリの原型が形成された。

サントウリの本格的形成期は11世紀以降であり、この期にサントウリ集団の非サントウリ集団からの分離が進んだとみられる。それはまず、イスラム教徒の商業伝統の存続地である西部ジャワのチレボンからインドラマユにかけての地域、中部ジャワのスマランからデマクを経てクドゥスに至る地域、東部ジャワのボンジョヌゴロからグレシクにかけての地域において起こったとされる。

したがって、まず、カウマンはこれらの地域に形成され、それから内陸各地に広がっていったと考えるのが妥当であろう。その際、以前にイスラム教徒の商人によって巡回商業活動を通してジャワ各地に形成されていた「イスラムの飛び地」が一定の役割を果たしたと考えられる(注23)。

こうした「飛び地」はイスラム学校などを核とするものであったといわれる。したがって、カウマンがこうした「イスラムの飛び地」から発展的に形成されたという仮

定も捨て切れない。それは、カウマンの語源がブングル・アガマたちの居住する地区という意味から来ていることとも合致する。

こうしたカウマンのあり方は、アラブ人居住地区のあり方に少なからぬ影響を受けたことは想像に難くない。ギアツもまた、サントウリの形成においてアラブ人移民社会が都市の小商業で重要な役割を演じており、ジャワ商人に宗教的、イデオロギー的影響を与えていたことを指摘している（注24）。

確かに、カウマンにはアラブ風の装飾がみられ、それがカウマンの1つの特徴となっているが、第2章で示すように少なからぬ数のジャワの貴族的伝統様式住居があるのも事実である。

ジョクジャカルタのカウマンは、クラトン・コンプレックスの一画に位置し、地区内の主要なイスラム指導者が王家のイスラム教師の流れを汲むアブディダラム・サントウリであるという通常とは異なる特徴をもっている（注25）。それはヒンドゥの世界観を体現する神王とイスラムのスルタンが合体した権力者に導かれるジャワのクラトンにだけみられる特殊性ともいえないことはない。しかし、上述したようにサントウリ発祥の地の1つとも考えられているクドゥスのカウマンでもジャワ貴族的伝統様式の住宅の存在が、地区を性格づける特徴となっている。

そういう意味では、カウマンはジャワ島都市の市街地における「イスラム受容のかたち」と呼ぶにふさわしい形態をもっているといえよう。それが、ひとつの定型として確立されてからは、ジャワのほとんどすべての都市にみられるようになったと考えられる。植民地期の都市形成においてカウマンが成立するプロセスがギアツによって描写されている（注26）。地区名称としてカウマンが用いられていることも、カウマンの空間的分節としての枠の強固さを示すものといえよう。

カウマンの形成時期を明確に論じることはできないが、イスラムマタラムの成立時には既に多くのイスラムコミュニティがあったと考えるのが妥当であろう。

（5）類型5（伝統的都市集落）

伝統的都市集落の1つであるコタグデの起源はイスラムマタラムの成立を密接な関係をもっている。伝説では16世紀にその礎が築かれたことになっているが、少なくとも17世紀初頭にはまちの基礎が形成されたと考えられる。その詳細については第3章で述べる。

（6）類型6（カンブン・アラブ）

前述したように、ジャワは国際的交易ネットワークの中に位置づけられていた。したがって、ジャワの沿岸商業都市には早くから外国人の居住地が存在していたことが

知られている。

たとえば、ナガラクルタガマには、マジヤパイトの外港であったブバットに各種の外国人が居住していたという記述がある（注27）。当時のバンタムにも同様の地区が存在していたことがわかっている（注28）。

こうした外国人の中で、アラブ人は早くからジャワの交易に参加していたことが知られる（注29）。通常、外国人は民族ごとに独立した地区に住んでおり、市街地はモザイク状になっていたといわれることは既に指摘した。したがって、アラブ人のかなり恒久的な居住地区形成によってカンブン・アラブの祖型が生みだされたと考えてよいだろう。しかし、それがいつなのか、そしてどのようなものだったのかについてははっきりしない。

グレシクでは11世紀頃のイスラム墓地がみつかっており、少なくともこの頃にはアラブ・コミュニティがあったことが知られる（注30）。ほかにも、グレシク、トゥバン、ジュアナ、ラセム、デマク、ジェパラ、スマラン、チレボンなどにあったといわれる。

カウマンについて述べたように、ジャワにイスラムが浸透し、アラブ人は外国人の中で特別の地位を与えられるようになった。それが、現在のカンブン・アラブの礎を築く理由の1つになったことは疑いない。

アラブ人は、中国人とは異なり、ジャワ社会の中にそのイスラム信仰とともに受け容れられてきた（注31）。サントゥリにはアラブの血が入っているケースがあるといわれる（注32）。したがって、カンブン・アラブとカウマンには一定の関係があると考えられるが、推測の域を出るものではない。

（7）類型7（公共開発住宅地）

インドネシアにおいて公的機関による直接的な住宅供給が開始されたのは、ブルムナスが1974年に設立されて以降といわれる（注33）。それ以前には公共事業省の住宅局によって、わずかな戸数の住宅が建設されたに過ぎなかった（注34）。

そうした状況下で実施されたジャカルタにおけるクバヨランバル建設は、基本的にはオランダの計画を引継ぐものであり（注35）、その設計コンセプトには類型1の市街地と同様のものが感じられる。この点は、第2章で言及するジョクジャカルタのパチェロにも共通するものである。この期の住宅地開発は、新生インドネシアの公務員住宅を確保するという意味合いが強かった。

1969年から第1期5ヵ年計画がスタートし、ブルムナスが中心となって住宅地開発が行なわれるようになった。実際の開発開始は1979年の3期目からだが、予算不足と

居住政策の中心がK I Pにあることもあって、81年までにインドネシア全土で26の都市、42の地区、計2400ヘクタール、約9万2000戸の住宅を建設しえたに過ぎない（注36）。そのうちおよそ4割がジャカルタ首都圏に集中しており、民間開発も含め、ジャカルタではさまざまなタイプの住宅地開発が行なわれてきた。

ブルムナスによる住宅地開発は完成した住宅の供給を伴わないコア・ハウスやサイト・アンド・サービスなど実験的な手法による土地開発を含んでいるが、住宅開発の初期には2戸連の平屋建てを中心としていた。

やがて試験的な中層住宅プロジェクトを実施し、第1号は、1979年、イギリスの援助によるバンドンのサリジャディで行なわれたものである。以来、ジャカルタのクブンカチャン、クレンダーなどで、続けて中層住宅団地が開発されてきた。わが国でいう「団地」であり、今後ジャカルタなどの大都市ではより一般化する可能性がある。

住宅政策の中でのブルムナスの基本的位置づけは低中所得層（所得階層分布の20%～80%）に対する住宅供給であるが、布野修司によると、実際には全体の75%が公務員に優先的に割り当てられ、残り15%が民間企業の労働者、10%はリセトゥルメントなど他のプロジェクト用に割り当てられることになっている（注37）。

また、地方自治体レベルでの住宅供給もこのタイプに入る。ジャカルタ市の住宅供給公社サラナジャヤがこれに相当する。

（8）類型8（リアル・エステイト）

民間ディベロッパーによる実質的な活動が可能になったのは、ブルムナスの設立と前後して、関係法制の整備が行なわれて以降であった。住宅政策の中でのリアル・エステイトの位置づけには、2つのタイプがある。

1つは、ブルムナスと同様、低中所得層向けのタイプで、その財政的基盤となるのがBTN（国民貯蓄銀行）による融資であり、BTNタイプと呼ぶことにする。もう1つは中高所得層を主対象とするタイプであり、REIタイプと呼ぶ。

1981～84年の住宅統計をみると、ブルムナスとBTNタイプを合わせたものよりもREIタイプ単独の方が多く、高所得層向けの住宅地開発が活発であることがわかる（注38）。大都市、特にジャカルタではポンドクインダをはじめとする高級住宅地開発プロジェクトが盛んで、近年は外国人ビジネスマンを主対象とする高層コンドミニアムの建設も行なわれている。

また、上記以外のもので、近年、インフォーマルセクターによるローコストハウスの供給がなされるようになってきている。こうした活動によって形成される市街地は現在のところわずかに過ぎないが、一応この範疇に入るものとして扱っておく。

(9) 類型9 (社宅地区)

この範疇には国営、民間を問わずさまざまな会社の社員住宅地区を含む。したがって、この中には、たとえば、国有鉄道会社のように、独立以前から存続するものもあり、その社宅には類型1と同時期に建てられたものが存在しそれがこの類型の祖型であると考えられる。戦後すぐに建設されたジョクジャカルタのガジャマダ大学職員住宅地区では、基本的には類型1と同様の形式が採用されておりこの推測を裏づけている。

－2 類型別市街地と都市の性格

類型別市街地は、類型2 (プチナン) および類型4 (カウマン) のように多かれ少なかれどの都市にもみられるものもあるが、特定の類型の存在はその都市の履歴とむすびついている。

たとえば、植民地支配期に自治都市 (注39) のステイタスをもっていた都市では、ヨーロッパ人人口が大きかったために旧ヨーロッパ人居住地区である類型1の市街地面積が総体的に大きい。

その結果、地域区分と関係をもつことになる。たとえば、類型3の市街地の存在はクラトンの存在する都市に限られており、内陸部の都市であることを示す。これは、都市の履歴が上記の地域区分と密接な関係にあることによる。

ここでは、都市の履歴と類型別市街地の関係について記述する。(図1-2-1)

植民地支配以前のインドネシア都市については、ジャワ島中部および東部内陸に発生した土着権力の王宮を中心とする「土候都市」と、北部のジャワ海沿岸に発達した港市を基盤とする都市国家型の「港市都市」という2つの類型によって説明するのが一般的である (注40)。

植民地支配は新たに多くの行政中心都市、ギアツのいう「第2次第3次支線都市」をつくり出し、同時にそれ以前から存在していた諸都市、特に北部沿岸都市に変容をもたらした (注41)。いわゆる植民都市の形成過程である。独立後、新たな発展の段階ととらえられる (注42)。

(1) 土候都市

土候都市は、クジャウェンと呼ばれる内陸部に開発された、クラトンを核とする土着権力の都市である。類型3の直接の起源であり、逆に類型3に該当する2つの都市は土候都市を起源とすることを示す。

(2) 港市都市

港市都市はパシールと呼ばれる北部沿岸に開発された、商業権力を母体とする都市である。早くから交易を通じて、中国やイスラムとの接触があった。そのため早くから華人やアラブ人の居住地が形成された。したがって、類型2、6の市街地の起源はこの地域に求めるべきであろう。類型4についても同様である。

(3) 植民都市

植民地期の都市は、多くの都市においてヨーロッパ人居住区と、外国籍アジア人の大半を占める華人の居住区であるプチナン、インドネシア人大衆の居住地であるカンブンという民族住みわけの構図が一般的であった。

旧ヨーロッパ人居住地区、プチナンはこうした植民都市の存在様式をそのまま残すものといってよい。

また、ジャカルタ、スラバヤ、スマランといった大規模な植民都市は、植民地期以前の港市都市に起源をもつものが多い。したがって、パシール地域の大都市には、大規模な類型1、2の地区が存在する。

(4) 第2次第3次支線都市

ギアツはジャワ社会を3つの社会層によって理解するモデルを提出した(注43)。これに批判がないわけではないが(注44)、現実の都市における空間構成要素に着目すると、3つの社会層に対応するカンブン、クラトンのレプリカである官僚機関、カウマンの3つはほとんどの都市に広範に見出される普遍的存在である。

そして、まちの発展とともに、パサールの近くに華人が定住することによってプチナンがつくられる。類型1、2、4に属する地区がほとんどの都市にみられるのはこうした都市の履歴にもとづくものである。

このように、都市の類型もこの延長線上に定義することが可能である。

－3 市街地の分節化要因

各類型別市街地の主たる開発主体および現居住者を整理すると次のようになる。

類型	主たる開発主体	主たる居住者
類型1	オランダ人	ブリブミ系エリートおよび 華人系金持ち
類型2	華人系	華人系およびブリブミ系庶民
類型3	貴族	貴族および使用人の子孫

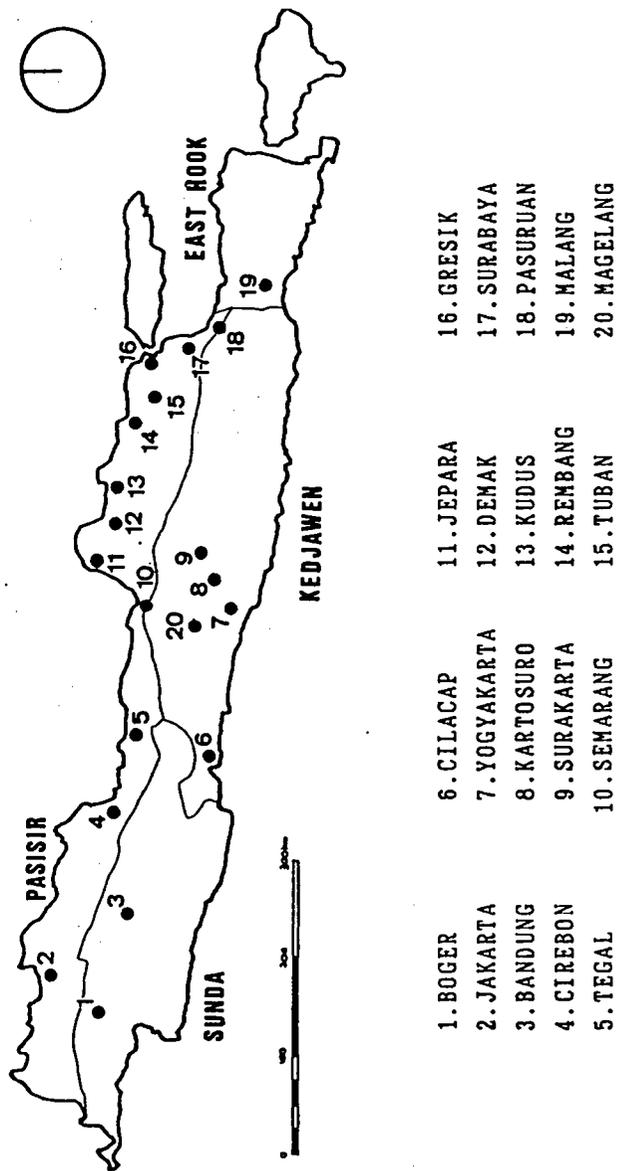


図 1 - 2 - 1 都市の位置と地域区分

類型4	サントゥリ	サントゥリ
類型5	貴族、プリブミ系イスラム商人	貴族、プリブミ系商人
類型6	アラブ系	アラブ系
類型7	公共セクター	中流階層、公務員
類型8	民間セクター	上流および中流階層
類型9	社宅	会社員

各類型をみると社会集団が空間的分節化の形成およびその維持主体となる傾向が認められる。それは、プリブミ系インドネシア人社会内部の「社会層」と、華人系のように本来のプリブミ系インドネシア人以外の「民族」という2つのファクターを軸にして理解される。空間的特徴の存在は、それぞれの社会集団が特有のサブカルチュアを維持していることを暗示している。

社会層については、伝統的社会集団に対応する伝統的社会層と経済階層に対応する近代的社会層があると考えられる。類型3、4、5は前者、類型1、7、8、9は後者を表わしている。

伝統的社会層については、ギアツのいう3つの社会層のうちプリヤイとサントゥリとが都市的伝統の継承主体として存在することを示している。類型5の存在はそれ以外の社会集団の存在を暗示するようだが、この類型は基本的には貴族階層、サントゥリを頂点とする複数の社会集団からなる地区であり、他とは少し性格が異なる。これについては、第3章および第4章で言及する。

戦後開発された市街地の存在はこうした社会層自体の近代化を示すものと考えられる。社会構成要素としてオランダ人をはじめとするヨーロッパ人がいなくなり、新しい階層化がはじまったことを如実に示すものであるといえる。それは、経済を尺度とする新しい階層への移行を感じさせる面をもっており、かつての階層の再編という性格をもつものと考えられる。たとえば、類型3の居住地としての地位低下はあきらかな傾向である。

こうした新しい傾向と同時に、類型1、2、6の存在は、国外に起源をもつ民族的伝統の継承を示している。したがって、ジャワ島都市の生活空間の伝統は、伝統的な社会集団を維持、継承主体として、生き続けていることが推察される。とはいえ、新しい経済階層が対応した社会層によって構成された近代的生活の「受け皿」が形成され、定着しつつあるとみてよいだろう。それが今後どのような展開を見せるかは、伝統的社会集団のエンクレーブである諸類型の動向とともに、将来の生活空間の伝統

のあり方を考えるうえで無視しえないファクターである。

1-3 要約

本章の冒頭で述べたように、第I部は、ジャワ島都市における生活空間構造を考察するための第一歩として、市街地構成の実態を解明することをねらいとしている。

ジャワ島都市はモザイク状の市街地構成をもつといわれてきた。これは、ジャワ社会が民族や宗教などに準拠する複数の社会集団によって、水平、垂直に分断された社会であり、多様性というキーワードによって語られることが多いという事実を空間的に反映したものと考えられ、その限りではきわめて肯首されやすい見解であるといえる。しかしながら、実際の都市がどのような空間構成をもち、それが社会的文脈においてどのように構造化されているかについては必ずしもあきらかではなかった。

こうした問題意識を背景に、モザイク状市街地構成が社会集団の伝統を維持、継承する上でなんらかの役割を果たしており、それによって社会のあり方と密接な関係をもっているということを検証すべき仮説として設定し、主として観察を中心とするフィールドワークおよび研究者へのインタビューにもとづき、市街地構成の実態の解明を試みた。その一連の手続きにおける本章の役割は市街地構成を理解するモデルを構築することにあつた。

具体的には、都市の歴史的形成の過程で自然に生じた、物的現象および人びとの意識両面での市街地の分節化に着目し、それを<自然の市街地類型>という類型概念を用いて把握した。その結果は次のように要約される。

ジャワ島都市は複数の類型別市街地によって構成されている。それぞれの類型は、そこを生活空間としている宗教や民族に準拠する社会集団の存在に関係すると考えられる空間構成あるいはその要素を空間的特徴としてもっている。各類型別市街地の概要は次の通りである。

①類型1（旧オランダ人居住地区）

植民地支配期にヨーロッパ人により彼らの住宅地理論および手法にもとづき計画、開発され、オランダ人を主体とするヨーロッパ人が居住していた地区であり、現在ではプリブミ系、華人系を問わず金持ちに所有されている。

地区は計画的で整然としており、かつてのコロニアルスタイルの住宅がかなり良好な状態でそのまま使われている。

②類型2（プチナン）

かつての華人の居住地区であり、パサールに近接する住居商業業務地区を

形成している。現在は、主として華人系の人々およびその使用人であるジャワ人が居住している。

通りを挟んだかたちでショップハウスが建ち、一般に家屋密度が高くオープンスペースおよび緑が少ない。

③類型3（ジュロン・ベテン）

土着権力の王宮コンプレックスを構成する地区であり、クラトンに仕えた官僚貴族およびその従者の子孫が居住するが、現在では貴族階級の経済的疲弊のため経済階層としては中の下程度である。

伝統的な都市計画にしたがい、その形状はほぼ正方形に近い矩形であり、規則的な道路パターンが存在する。

④類型4（カウマン）

カウマンのカウムとは、本来宗教上の指導者ブングルアガマたちの住まうところを意味し、通常アルナルンの西にあるモスクを中心としてその周辺に立地する。サントゥリと呼ばれる敬虔なイスラム商人が居住する。

一部の規模の大きな住宅からなる区画には、中部ジャワの伝統的様式とアラブやヨーロッパなどのデザインモチーフが混交した特有の装飾がみられ、独特の雰囲気醸成している。

⑤類型5（伝統的都市集落）

ジャワの伝統的な都市的集落であり、伝統的な商人および工人階級が居住する。現在も引き続き伝統的工芸が行なわれているが、かつては富裕であった商人および職人階級が経済的に疲弊する傾向にある。地区内は白壁で挟まれた狭い路地が不規則なパターンで走る閉鎖的雰囲気であるが、対照的に壁の内部は緑が多い開放的な性格の空間であり、中部ジャワ特有の様式にもとづく住宅が建てられている。

⑥類型6（カンブン・アラブ）

カンブン・アラブとはアラブ系の人々が居住する地区である。彼らは敬虔なイスラム教徒であり、商業に従事する者が多い。

高い白壁に囲繞された地区の空間構成などは類型3および5などと共通点をもつ。

⑦類型7（公共開発住宅地）

戦後、公共によって開発された地区。建設時期により2つのタイプに分けられる。国家住宅公団の発足以前と以後のものである。

上級官僚用、ローコストハウスプロジェクトの2種類がある。住民層は、前者が上の下から中の上、後者が中の上から下であり、両者とも公務員が多い。

地区および住戸は近代的な住宅地のコンセプトによって形成されている。

⑧類型8（リアル・エステイト）

戦後、民間ディベロッパーによって開発された地区であり、その様態はさまざまだが、開発規模、開発方法、住民の階層、物的形態などによっていくつかのタイプにわけられる。ほとんどの場合、郊外に位置する戸建て住宅地である。住民階層は上および中の2つに大別される。

地区の物的状態は類型7と同様だが、一般に基盤整備状態は劣る。

⑨類型9（社宅地区）

公共および民間企業の社宅地区。空間的には類型1、7、8に似た3タイプが存在するが、その規模は相対的に小さい。

次に、主として文献資料にもとづき各類型の歴史的背景を考察した。具体的には、各類型別市街地を生活空間の伝統の系譜という観点から検討し、それが現在のかたち収束するに至った経緯を推察した。その意図は、ジャワ都市が結果としての現在の姿だけではなく歴史的にも多面的構造をもつこと、つまり、伝統の系譜を模式的に示すことにあったといつてよい。その結果は次のように要約される。

ジャワ島都市の市街地構成は、ヒンドゥー、イスラムなどの宗教、および、中国、アラブ、オランダなどの民族、また、それらの背後にあるさまざまな文化、文明にもとづく生活空間の伝統が混交することによって形成されたと考えられる。それぞれの類型別市街地の起源についての概要は次の通りである。

- ①類型1はオランダ人による都市建設を起源とする。直接の形成時期は前世紀から今世紀にかけてと考えられる。
- ②類型2は華人による商業地形成によって形成された。その起源は植民地期以前に遡るが、現在のように多くのまちに分布したのは18世紀以降のオランダの植民地支配の確立と平行して進行したと考えられる。
- ③類型3はイスラム以前のジャワ土着権力の都市国家のかたちである。ヒンドゥー権力の伝統、あるいは、それ以前のジャワ土着の空間構成原理の系譜をひくと考えられる。18世紀中ごろ形成された。
- ④類型4はイスラム勢力の定着と関係が深い。その起源は、おそらく各地のイスラム塾形成に遡ると考えられる。明確な形成時期は不明だが、おそら

くイスラムマタラム形成以前と考えられる。

⑤類型5はジャワの伝統的商人および職人の存在と結びついている。まちとしての発展はイスラムマタラムの形成と平行して進んだものであろう。

⑥類型6はアラブ人による居住地形成である。明確な起源はあきらかではないが、イスラムマタラム形成以前に遡ることはまちがないであろう。

⑦類型7は独立以降の政府による住宅地開発である。

⑧類型8は独立以降の民間による住宅地開発である。

⑨類型9は植民地期に会社組織により開発された地区を起源とすると思われる。

1つの都市における類型別市街地の種類、規模などは、植民地期のステイタス、あるいは、地域区分などと密接な関係をもっており、同時にそれは都市の性格を規定することになる。したがって、こうした観点からジャワ島都市の類型化が可能だが、市街地には今回の調査の対象からはずした部分も存在しており、今後の課題である。

類型別市街地を生活空間とする社会集団の準拠原理は宗教や民族などの社会的要因と経済的要因が組みあわされたものと考えられるが、各類型の生活空間としての伝統の系譜は、過去と現在で社会集団が異なっている旧オランダ人居住地区が端的に示すように単一的なものではない。その意味でも、都市全体としてはきわめて多面性をもつとあってよいだろう。

本章では、以上にみるように、ジャワ島都市の市街地が、その空間構成においてモザイクにたとえられるだけでなく、生活空間の伝統という点においても多面性をもつ存在であることを指摘した。

補注

(1) アルディ・P・パリミン氏をはじめとするガジャマダ大学工学部建築学科スタッフにたずねた。

(2) TRADITIONAL SETTLEMENT の訳。

(3) 村井吉敬「バンドンー西ジャワ・ブリアンガンの町の生成と発展」東南アジア研究、21巻1号(1983)、p.37

(4) BUPATHI の訳。本来は土着権力の高級官僚の職名であったが、植民地期にもこの呼称が使われた。植民地期の官職は郡の長官でオランダ人長官であるレヘントを補佐する役目を担った。

- (5) スンダ地域には、ジャワ中東部ほど大規模な版図を拡大した帝国は生まれなかった。
- (6) スロスマルジャン「中間都市ジョクジャカルタの構造と変動－空間的、歴史的
形成の特質」古屋野正伍編著『東南アジア都市化の研究』アカデミア出版会、
1987、p.411
- (7) 村井吉敬、前掲書、p.37
- (8) COBBAN, J.L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY, Michigan,
1970, pp.49-50
- (9) スロスマルジャン、前掲書、p.412
- (10) KROEF, J.M. van der : INDONESIA IN THE MODERN WORLD PART1, BANDUNG, 1954, 2
50-274
- (11) 泉田英雄『16世紀以降海洋アジアにおける都市居住形成史序説』筑波大学修士
論文、1987、p.94
- (12) KIM, H.K.: A STUDY OF THE BACKGROUND OF DJAKARTA UP TO 1945, Masalah Bang
unan, Volume14 NO1-2, 1969, P.4
- (13) GILL, R., "The Morphology of Indonesian Cities: An Introduction to the M
orphology of Colonial Settlements and Towns on Java", paper presented
at the seminar "Change and Heritage in Indonesia Cities", 1989, p9
- (14) ヒマサリ=ハナンは、バンドンの同時期のバンドンの都市建設を欧米での都市
美運動と田園都市に影響されたものと述べている。(HIMASARI HANAN: ANALOGI
CAL APPROACH TO THE INTERPRETATION OF INDO-EUROPEAN ARCHITECTURE; CASE
STUDY: GUDUNG SATE - BANDUNG, Unpublished Paper, 1986)
- (15) ギアツは、植民地行政拠点がつくられることによって、そこに人びとが集まる
ようになり、第I部の冒頭で述べた3つの空間要素の残り、カマン、カンブン
が形成され、まちができていく過程を描写した。(GEERTZ, C.: THE SOCIAL HIS
TORY OF AN INDONESIAN TOWN, Cambridge, 1975)
- (16) JONG, W.de: TOWN AND HINTERLAND IN CENTRAL JAVA, Yogyakarta, 1987
- (17) COBBAN, J.L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY, Michigan,
1970, pp.23-25
- (18) JOHANNES WIDODO: CHINESE SETTLEMENT IN A CHANGING CITY; AN ARCHITECTURAL
STUDY OF THE URBAN CHINESE SETTLEMENT IN SEMARANG, INDONESIA, Unpublish
ed Paper, 1988, p.2

- (19) JOHANNES WIDODO: *ibid.*
- (20) アブドゥラチマン＝スリヨミハルジョ『ジャカルタの都市形成』今野卓訳、私家版、1987、p.35 (ABDURRACHMAN SURJOMIHARDJO: THE GROWTH OF JAKARTA, Jakarta, 1977)
- (21) 泉田は、前面にアーケードをもつ現在東南アジアによくみられるショップハウスの形態が、ラッフルズによる統治期にシンガポールでつくられたとする見解を披瀝している。(泉田英雄、前掲書、pp.179-188)
- (22) 間苧谷栄『現代インドネシア研究』勁草書房、1986、p108
- (23) 間苧谷栄、前掲書、pp113-114
- (24) 間苧谷栄、前掲書、p115
- (25) もともと、カウマンに住むイスラム教師はエリート・グループには俗さない下級僧であったが、王宮のプンフル(宗教者グループの長)に出世すれば、エリートグループと同じ身分とみなされた。(インドネシア共和国教育文化省編『インドネシア－世界の教科書＝歴史』森弘之他編訳、1982、p.128)
- (26) GEERTZ, C.: *op. cit.*, pp.87-106
- (27) COBBAN, J.L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY, Unpublished Paper, 1970, pp.36-37
- (28) COBBAN, J.L.: *ibid.*, pp.49-50
- (29) ジョン・D・レッグ、『インドネシア歴史と現在』中村光男訳、サイマル出版会、1984、p85
- (30) インドネシア共和国教育文化省編、前掲書、p.113
- (31) KROEF, J.M. van der: INDONESIA IN THE MODERN WORLD PART1, Bandung, 1954, p.254
- (32) アラブ人商人は早くからインドネシア婦人と混血化を進めた。イスラムの伝播は結婚を通じたものであったとさえいわれる。たとえば、インドネシア共和国教育文化省編、前掲書、pp.117-118
- (33) 布野修司『インドネシアにおける居住環境の変容とその整備手法に関する研究』東京大学工学部博士論文、1987、p341
- (34) JOHAN SILAS: SURABAYA'S KAMPUNG-IT'S PEOPLE AND DEVELOPMENT, Surabaya, 1987, p.7
- (35) クバヨランバルの計画は、ジャカルタの人口急増に対処するため、1949年の完全独立以前にオランダの植民地政府内で進行中であった。共和国は、それを受

- け継いだかたちで実際の建設を行なった。(GIEBELS,L.J.:Jabotabek;An Indonesian-Dutch Concept on Metropolitan Planning,in;"NAS,P.J.M.ed.:THE INDOONESIAN CITY,Dordrecht,1986,pp.101-115")
- (36) 横堀肇「住宅・都市整備事業—ジャカルタの例をもとに」柴田徳衛他編『第3世界の都市問題』アジア経済研究所、1985、p.164
- (37) 布野修司、前掲書、p343
- (38) HASAN POERBO et.al.:Bandung Urban Fringe Study;Case Study:Sukaluyu and Neglasari Housing Areas,in"SURVEY ON THE LOCAL HOUSING SYSTEM OF NON-PLANNED HUMAN SETTLEMENT IN THE RAPID GROWTH URBAN SPRAWL AREA,Symposium Proceedings,1987,p.17"
- (39) Stadsgemeente の訳。
- (40) たとえば、NAS,P.J.M.:Introduction;A General View on the Indonesian Town,in"NAS,P.J.M.ed.:op.cit.,p.5"。植民地期以前の東南アジア一般の都市起源についてもこの2類型が用いられる。たとえば、McGEE,T.G.:THE SOUTHEAST ASIAN CITY;A SOCIAL GEOGRAPY OF THE PRIMATE CITIES OF SOUTHEAST ASIA, London,1969
- (41) コバンは、17世紀以降の港市都市が異系発生的変容を遂げはじめたと述べている。(COBBAN,J.L.:op.cit.,p.224)
- (42) 1949年の完全独立以降を新たな都市発展段階として記述することが一般的である。たとえば、NAS,P.J.L.:op.cit.,p.5
- (43) 3つの社会層については既に簡単にふれているが、もう少し詳しく述べると、植民地支配期以前のジャワ社会のモデルとして「農村」、「土候都市」および「港市都市」の3つを抽出し、それぞれに対応する社会成要素を「デサ」、「ヌガラ」、「パサール」、人間類型を「アバンガン」、「プリアイ」、「サントゥリ」とした上で、これらを用いてジャワ社会の説明を行なった。間学谷栄『現代インドネシア研究』(勁草書房、1986)に手際よくまとめてある。
- (44) ギアツにはさまざまな批判がある。(中村光男「地域研究と文化人類学」中嶋嶺雄他編著『地域研究の現在』大修館書店、1989、p.156) 3つの人間類型に関しては、3類型のカテゴリー原理に統一性が欠けているとのクンチャラニングラットによる指摘がある。(KOENTJARANINGRAT,R.M.:A PRELIMINARY DESCRIPTION OF THE JAVANESE KINSHIP SYSTEM,Yale University,1957)

第2章 類型別市街地の空間構成と居住環境の実態とその特性

2-0 はじめに

1 視点

第1章では、都市における市街地の型を〈自然の市街地類型〉という概念によって把握し、モデル化することを試みた。それぞれの類型別市街地はあくまで概念化された市街地モデルであって市街地の実像ではない。したがって、その静的な集合としてとらえる都市像によっては、現実の都市のもつダイナミズムを捕捉することができない。

1つの都市における類型別市街地は、全体を構成する部分であり、相互に作用を及ぼしながら、不均等な変容を遂げていく。したがって、1つの都市における類型別市街地の位置づけをあきらかにすることは、都市における市街地構成の動的理解を可能にすると考えられる。本章のねらいの1つはこの点にある。

既にもたように、それぞれの類型別市街地では特有の空間構成を観察することができる。したがって、各地区には、それに応じたライフスタイルと環境上の特質が存在すると考えられる。それを把握することは、各類型ごとに生活空間整備課題をあきらかにするうえでの基礎的作業といえよう。ここでは第1章でとりあげたすべての類型をカバーするわけではないが、本章の2つ目のねらいである。

2 目的と構成

本章の目的は、第1章で抽出した市街地類型にもとづき、1つの都市における市街地の構成を把握し、さらに、いくつかの類型別市街地について、その空間構成と居住環境の実態とその特性をあきらかにすることである。

本章の構成は、第1節では、ジョクジャカルタ市を対象として、その市街地の構成をあきらかにする。より具体的には、まず、ジョクジャカルタ市の都市形成過程を簡単に把握し、次に、市街地類型にもとづく都市の全体構造の概略を把握する。

第2節では、その中の類型1から類型5までの5類型に対応する5地区を選び、その居住者属性および空間構成と居住環境の特性を把握する。

5類型に限ったのは、全類型の調査は事実上不可能であったため、主として植民地期までに形成された市街地に焦点をあて、そのうちジョクジャカルタに存在しない類型6を除いた結果である。したがって、その範囲はおおむね1942年以前にその骨格が形成されたものとした。

－ 3 研究方法

(1) 調査の考え方

第1節における市街地構成の把握は、地区の実態および歴史的形成にもとづく履歴から類型を判断し、その相互的な位置関係および立地特性を調査する。

第2節における類型別市街地の調査の内容は、①地区の社会状況、②空間構成、③居住環境の3点である。

その意図は、類型別市街地の特性の検証という観点から、①については社会集団の存在、②については市街地の空間的特徴から類型としての枠組みの現状をあきらかにすること、また、各類型の居住地としての特性とその整備課題を把握するため、③地区の環境特性をあきらかにすることである。

以上の調査内容については、本来空間を主対象とするという本研究の目的、手法などの調査の技術的問題、および、期間や予算など調査遂行上の制約を考慮した。特に調査手法については、調査結果を左右することになりかねないため、手法としての信頼性が一定水準に達しており遂行にあたり考えられる諸問題をクリアーしうると判断されるものとした。事実上、言語の障壁を支障のない程度に回避することが可能かどうか調査を規定することになったのは否めないところである。

(2) 調査方法

第1節のジョクジャカルタの市街地構成の把握には、インタビュー、文献調査、視察にもとづいている。

第2節の5つの類型別市街地に関する調査は、物的環境の実態の記録と、居住環境に対する住民の意識調査に大別される。

調査内容はおおむね次の通りである。

- 1) 回答者の属性
- 2) 住宅の空間構成と利用状態
- 3) 近隣空間の空間構成と利用状態
- 4) 居住環境評価

1) については、①年齢、②性別、③職業、④収入、⑤宗教、⑥出身地を調べた。このうち①②⑤はRKの統計データ、残りはアンケート調査による。

2) については、住宅のうち地区の特徴をあらわしていると考えられるものをそれぞれの地区から1軒選び、①平面、断面、立面を採取するとともに、②内部の使用状況を写真により記録した。同時に、アンケート調査によって回答者の住居について、その③構造、④形式、⑤建設年を調べた。

3)については、観察にもとづき地図上に地区の物的状態を記入し、同時にアンケート調査を行なった。調査項目は、まず、観察調査では、①街路、家屋、空地、緑などの状態、②建物の用途、③増改築の状態、また、アンケート調査では、④土地および建物の所有形態からなる。

4)については、アンケート調査による。その方法は、あらかじめ居住環境のさまざまな側面をあらわす項目を用意しておき、それに対する満足度を5段階の評価尺度を用いた選択肢でたずねる形式である。結果を得点化し、数量的に分析することを前提とする計量分析の方法である。

(3) 調査の概要

調査は、ガジャマダ大学建築学科3、4年生による調査チームにより、1988年8月から9月にかけて行なわれた。フィールド調査に当たり3、4回程度打ちあわせを行ない調査方法などの徹底を期した。

アンケート調査についてはインドネシア語の質問票を用意し、回答者に直接インタビューする方式をとった。質問票の設計にあたっては、事前に検討用の英語の調査票を作成し、ガジャマダ大学建築学科スタッフおよび学生を交えたチーム・ディスカッションを経て修正を加えた後、同大学スタッフの1人によりインドネシア語への翻訳が行なわれた。

調査対象は地区内の成人であれば特に限定していない。その選定に当たっては、調査対象地区から無作為抽出することが望ましいが、時間的制約など調査遂行上の理由から事前のサンプル抽出は行なわず、調査員の現場での裁量に委ねた。

- 4 調査対象

(1) 調査対象都市の概要

1) 調査対象都市の選定

調査対象都市の選定は、調査地区に類型3を含める設計意図から、事実上、ジョクジャカルタおよびスラカルタの2都市に限定されるが、そのうち、調査のしやすさの点で有利と判断されたジョクジャカルタを選んだ。カウンターパートであったガジャマダ大学があり、調査上の利便性がえやすかったことが大きな要因である。

2) 調査対象都市の概要

ジョクジャカルタ市は、君主領 sultanate、ジョクジャカルタ特別州の首都に当たり人口約40万人(1980)の地方中心都市であり、クラトン・コンプレックスを核として発展してきた。

その社会構成は、それ以外の民族も含んでいるが、大部分ジャワ人であり、宮廷文化への志向の強い特有の文化を保持しているといわれる（注1）。そのために、ジョクジャカルタはジャワ人の心のふるさとであり、今なおジャワ人の中では世界の中心であり続けている。

特別州としての特殊なステータスに加え、古くから高等教育機関が集中しインドネシア全土で有数の教育学園都市として知られている。また、歴史的環境が比較的良好に保全されていることから、インドネシア屈指の観光都市としても名高い。産業では布染色などの手工芸をはじめとする伝統産業が有名だが、観光産業の占める比重も大きい。

ジョクジャカルタは今世紀初頭にはジャワ有数の大都市であったが、その後の人口増加率はパシール地域の諸都市ほど高くはなく、特に70年代以降、人口の伸びがやや停滞する傾向にある。現在、新規の観光関連投資にともない、開発の機運が高まっている。

（2）調査地区

各類型の空間的特徴を比較的良好に維持していることを判断基準に、5類型に該当する5地区を調査対象として設定した。

調査地区の大きさは、おおむねRT（注2）あるいはそれに相当する程度の道路など物理的境界によって区画された範囲としたが、類型2のプチナンでは道路を挟む両側のショップハウスの立地する部分を主たる調査対象とした。

また、インタビューについては観察調査の対象とした範囲内では十分なサンプル数がえられないため、RK（注3）を越えない程度で適宜調査地域を拡大している。また、各種統計についてはRK単位で入手できるものを収集している。

調査地区の概要については後述する。

1-1 ジョクジャカルタにおける市街地構成の概略

-1 ジョクジャカルタにおける市街地形成過程

18世紀中葉、バタヴィアを根拠地とするオランダ東インド会社は、次第に内陸部へとその勢力を拡大しつつあった。その頃、中部ジャワを支配していたマタラム王国は2分され、東部は国王の統治下に新しくスラカルタ王領の名で呼ばれるようになり、西部はジョクジャカルタの名を付されてマンクブミに統治されるようになった。マンクブミは以後、スルタン・ハマクブウォノI世と称されるようになる。

新スルタンは、1775年、プリンハルジョ村にクラトンを建設した。これが現在のジ

ヨクジャカルタの起源と考えてよい。以後、現在に至るジョクジャカルタの形成過程を簡単に述べておこう（図2-1-1）。

1971年にガジャマダ大学と公共事業省の関係部局で作成されたジョクジャカルタ総合計画案（注4）によると、ジョクジャカルタの歴史的形成は4段階に分けられる。

（1）第1段階 18世紀後半から19世紀前半

まず、クラトンの形成およびそれに続く都市拡大期である。

当初は、スルタン一族や宮廷に仕える役人がクラトン周辺に居住しているだけであったが、次第に支配圏の外延を拡大するにつれて、クラトン周辺の市街化も進んだ。

18世紀後半、オランダ勢力の介入が強まるにつれ、監視のため、クラトンに隣接して城砦が築かれ、監督官がおかれた。それとともに、各種施設が建設され、オランダ人居住地の開発が始まった。

（2）第2段階 19世紀後半から20世紀前半

第2段階は、工業発展期である。

植民地時代、強制栽培制度のもと、ジョクジャカルタ周辺はジャワ有数の砂糖黍プランテーション地帯であった。こうした周辺の産業開発を背景として、ジョクジャカルタではその拠点としての開発が行なわれた。

1872年の貿易会社の設立、1887年の鉄道の開設、1890年のガス会社、続いて1921年の発電所など、産業基盤の整備が行なわれた。そして、精糖工場をはじめとする各種工場が設立された。

オランダ人をはじめとするヨーロッパ人の人口が増加するにつれて、住宅地をはじめ、クラブ、学校などの生活施設整備が進んだ。中でも、今世紀初頭のクタバル開発は大規模な市街地開発であった。

結果として、ジョクジャカルタは線路を挟み、南北に区分された形態を示すようになった。これはジョクジャカルタだけではなく、被植民地支配地域の都市にかなり頻繁に見られる特徴である（注5）。

（3）第3段階 20世紀後半

第3段階は、ガジャマダ大学の整備に代表される。

1945年の独立後もインドネシアには混乱が続いたが、1949年に完全独立を果たすまで、ジョクジャカルタには共和国の首都がおかれた。そうした状況下で、まず、ガジャマダ大学のキャンパス開発が進められた。

ガジャマダ大学は、共和国と同時に誕生し、国立大学の中でも古い伝統を誇っている。文教都市ジョクジャカルタの顔として、現在でも全国から学生を集めるインドネ

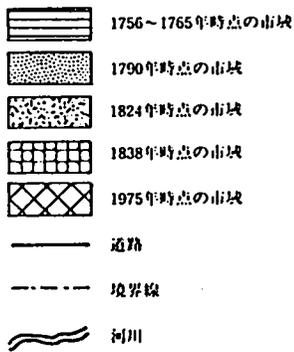
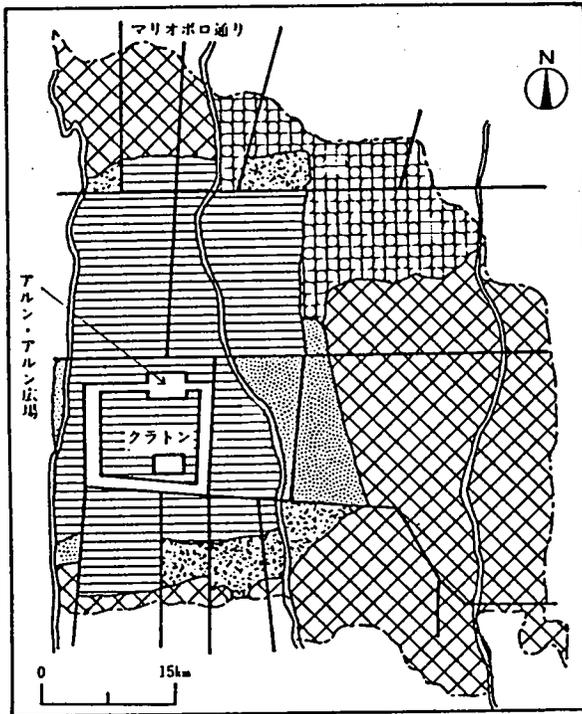


図 2 - 1 - 1 ジョクジャカルタ行政区域の変化

出典：「中間都市ジョクジャカルタの構造と変動－空間的、歴史的形成の特質」

古屋野正伍編著『東南アジア都市化の研究』アカデミア出版会、1987、

p.469

シア有数の総合大学である。数箇所に分散しているキャンパスの土地はスルタンの好意によって無償供与されたものである。その中の1つ、まちの北方のブラクスムールおよびスキップ・キャンパスは、研究施設だけでなく、講師用住宅にあてられた地域の面積は広大で、この期を代表する大規模な市街地開発として位置づけられる。

これとほぼ並行して、パチェロが開発され、次いで、コロンボが開発された。両者は、公務員を収容することを主眼に開発された住宅地であり、当時ジョクジャカルタには革命政府がおかれていたため、公務員住宅が必要とされたことが開発に至る経緯である。コロンボという地区名称はコロンボ計画の一環としての世銀の援助に因んでいる。

この期は市街地開発が北へと向かったことを特徴とする。

(4) 第4段階 将来

現在、将来の都市の動脈としてリングロードを建設中であり、これと平行してブルムナスによる公共住宅地開発、民間業者によるリアル・エステイトの開発が進行している。この一連の開発が完成された時点でジョクジャカルタは新しい市街化の段階にはいることになる。

以上を類型に関連させて把握してみると、ジョクジャカルタは類型3を核として都市建設が始まった。類型4もほぼ同様の起源をもつものだろう。

ジョクジャカルタの成立はマタラムとオランダの妥協の産物ともいえるものであったため、当初から類型1、2の存在がつきまとっていた。したがって、類型1から4までは植民地期に形成されたことになる。ある時期までは類型6もあったことが推察される。

また、類型9は植民地期の都市の産業発展に起因すると考えられる。

類型5は類型3よりも古い存在である。しかし、現在のまちとしての基盤が完成したのは、ジョクジャカルタのクラトンが成立してからと考えられる。クラトンとの特殊な結びつきがこのことを推察させる。詳しくは第4章を参照されたい。

類型7以降は、独立以降に開発された。特に、この都市が新生共和国の仮の首都となったため、類型7の開発は早かった。類型8の登場は最も遅く、近年になってからである。同時に、ブルムナスによる類型7が開発されつつある。

- 2 類型別市街地の概要

それぞれの類型の概要は以下の通りである。

類型1 旧オランダ人居住地区

まず、市街地におけるこの類型の概要を説明すると、大規模なものとしてはコタバルが代表だが、小規模なヨーロッパ人居住地の痕跡が市街地に島状に残されている。必ずしも地区というほどの広がりをもたないもの多いが、かつての状態が比較的良好に維持されており、コロニアルスタイルの住宅などその空間的特徴から容易にそれと知られる。そのうちある程度の家屋の集積をもつ場合は類型1と考えてよいだろう。

その1つの例がマリオボロ通りの一画にある。ジョクジャカルタへの最初のオランダ勢力の進出は、既に述べたように、18世紀後期のクラトンの北面に近接する城砦の建設であった。アルナルン・ロールのすぐ北側の交差点に監督官の官邸が建てられ、このあたりがまちの中心となった。付近のコロニアルスタイルの住宅はその名残りである。

また、クラトン・コンプレックスの東、パクアラム宮殿の南にあたる付近にも十数軒程度のコロニアル住宅のコンプレックスが存在するが、その由来については確認していない。

逆に、最も大規模な地区は第1章で述べたコタバルであり、その計画にはカーステンも参画したといわれる(注6)。ジョクジャカルタにおける類型1を代表するといえる。

類型2 プチナン

市街地における分布は、マンクブミ通りの北側に位置するモニュメント、トゥグ北西部一帯、マンクブミ通り沿いおよびマリオボロ通り周辺が主なものである。必ずしもプチナンといわれているわけではなさそうだが、ソロ通り周辺にもショップハウス地区がある。

このうちトゥグ北西部に位置する地区は、ジョクジャカルタにおける最初のプチナンであった。地区内には、ほぼ中央にパサールおよび孔子廟があり、直線的な規則正しい街路パターンなど、典型的なプチナンの特徴を備えている。

その後、華人は次第にマンクブミ通りからマリオボロ通りに沿って南下し、ジョクジャカルタ最大のパサール、プリンハルジョに隣接してプチナンが形成されるに至った。

この比較的近くにかつてカンブン・アラブがあったといわれる地区が存在するが、そこに市内で最大の仏教寺院が存在している。しかし、周辺にはプチナン特有の空間構成をもつ地区は存在せず、その来歴は不明である。

また、ソロ通り沿いのショップハウス地域に華人系が進出してきたのは比較的新し

いとされる。

トゥグ北西部の最初のプチナンを除いて、ショップハウスの並びは街区の皮一枚、街路に面した部分だけにとどまっており、地区への進出が主要道路に沿うものであったことを示している。

類型3 ジュロン・ベテン

ジュロン・ベテン地区は、本来ジュロン・ベテンという言葉がクラトンをとり巻く壁とその外側にある城壁の間を意味するものであるように、城壁内が狭義のジュロン・ベテンに相当すると考えるべきだが、外部であってもダレムが存在する地区はこの類型の範疇に入れてもよいだろう。詳細は第3章に述べる。

類型4 カウマン

アルナルン・ロールの西、グランドモスクの周辺に立地する1カ所だけである。ジュロン・ベテン地区内にある。詳細は後述する。

類型5 伝統的都市集落

コタグデがこれに該当する唯一の地区である。本来ジョクジャカルタから独立したまちを形成していたが、ジョクジャカルタ市街の外延拡大にともない連坦市街地となりつつある。

類型6 公共開発住宅地

戦後すぐに開発されたものとして前述したバチェロがある。次に、コロンボ開発がそれに続いた。その後、ブルムナスによる郊外開発が行なわれた。通常、ブルムナスという呼称で呼ばれ、第1号はチョンドンチャトゥルにあるが、その後第2号の開発が行なわれている。チョンドンチャトゥルについての詳細は、第5章で述べる。

類型7 リアル・エステイト

北部高地が開発の重点地区となっている。高級住宅地としての位置づけられているものが多い。中でも、ガジャマダ大学の北部に隣接する地域は最高級住宅地として知られている。北部への市街化は活発で市街地の外延はどんどん北上している。また、西部でもかなり大規模な開発が行なわれている。

本来、経済的には中の層を対象に開発された地区が多いと考えられるが、かなり裕福な層が入居し、実質的にかなり高級化する傾向が多くみられる。

類型8 社宅

古いものでは、駅の周辺および鉄道会社のオフィス周辺に植民地期から続いている国営鉄道会社の社宅地区が存在する。建設時期はコタバルと同程度と考えられる。

最大のものは前述したガジャマダ大学スタッフの居住地である。それ以外では、ガ

ジャマダ大学の南に国営銀行の社宅がある。その規模は比較的小さいが、中庭に面した閉鎖性の強い環境を形成している。

また、郊外西部の砂糖精製工場を中心とする社宅地区、東部の電機メーカーの社宅地区などがある。

ユニット9 カンプン

省略する。

ユニット10 スクウォッター・カンプン

チョデ川に沿った谷部に、比較的早くからスクウォッター・カンプンが成立していたことが図2-1-1のジョクジャカルタの市街化過程から読みとれる。特に、コタバルが開発されてからは、チョデ川を挟んで向かい側にスクウォッター・カンプンが成立し、洗濯などコタバルの人びとに対するサービスによって生計をたてていたといわれる(注7)。この地域は数年に1回訪れる洪水によって冠水する居住地としての適性を欠くため、物的環境の改善が遅れる傾向にある。

現在最もスラム的環境にある地区はこの地区だが、それ以外ではコタバルの東部地域がかつてスクウォッターであったといわれるところで(注8)、現在でも地区の物的環境の質は相対的に低い傾向にある。かつての地図をみるとここには競馬場があったことがわかる。

- 3 市街地の空間構成

(1) 市街地における各類型の位置関係

以上述べてきた各類型の主なものを地図上に落としたものが図2-1-2である。第1章で述べたように、各類型はその履歴に応じて、都市における位置の点で一定の傾向をもつものであった。ジョクジャカルタのケースも例外ではない。各類型の地理的位置関係を整理すると次のようになる。

- ①類型3(ジュロン・ベテン)、類型4(カウマン)はアルナルンに隣接することから両者の位置関係は近い。
- ②類型2(プチナン)はパサールに近接する。その結果、類型3および4とかなり近くに位置することになる。
- ③類型1(旧オランダ人居住地区)は多くの場所に位置するが、大規模なものでは都心から少しはずれた場所に位置する。
- ④類型5(伝統的都市集落)は類型1の存在する都市の縁辺に位置する。
- ⑤類型6(カンプン・アラブ)は、現在は実体が残っていないが、一般にア

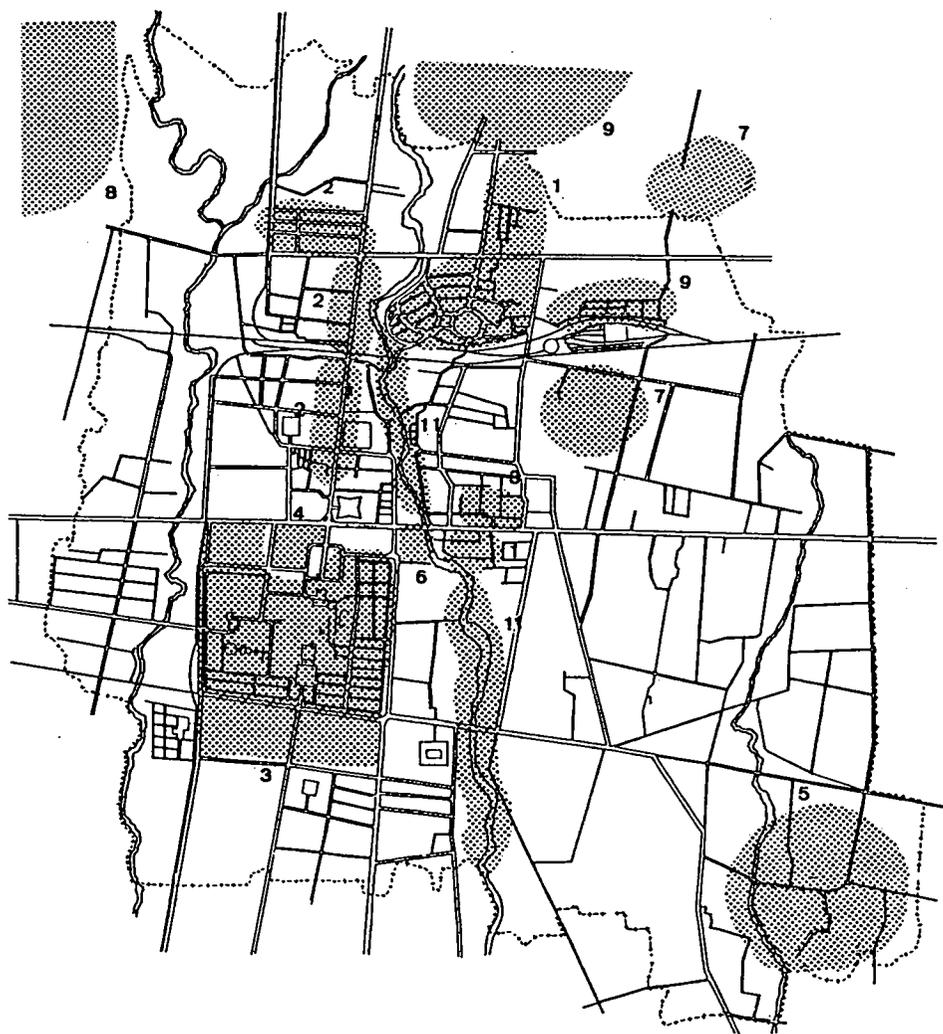


図 2 - 1 - 2 各類型の位置

- 1 旧オランダ人居住地区
- 2 プチナン
- 3 ジュロン・ベテン
- 4 カウマン
- 5 伝統的都市集落
- 6 カンプン・アラブ
- 7 公共開発住宅地
- 8 リアル・エステイト
- 9 社宅地区
- 11 スクウォッター・スラム

ルナルンの近い部分に存在すると考えられる。

⑥類型7（公共開発住宅地）、類型8（リアル・エステイト）は郊外型立地であり、都市の発展段階に応じて、市街地のなかに織り込まれている。

⑦類型9（住宅地区）には特に傾向が見出せないが、郊外工場の周辺に島状に位置する。

⑧ユニット11（スクウォーターキャンブ）は河川沿いなどに発達する。

⑨ユニット10（キャンブ）は上記以外の市街地である。

（2）市街地構成モデル

類型2、3、4、6はアルナルンを核とする都市パターンに起因することは疑いない。それは、ジョクジャカルタをはじめとする土着権力のみやこ、いいかえれば、クラトンをもつ都市（クラトン都市と記す）のレイアウトをみるとはっきりする。

クラトンを中心として発展したかつての都市市街地、つまり、現在の都市核に相当する部分にこれらの類型別市街地が立地している。その中心は、スルタンの宮殿を中心とするクラトン・コンプレックスであり、クラトンを囲む壁とコンプレックス全体を囲む壁の間に、クラトンをとりまくように広がっている市街地が類型3のジュロン・ベテンである。また、クラトンの北にはアルナルンがあり、その西側にはモスクが位置する。その周辺に形成された市街地が類型4のカウマンである。

当時の土着権力にとってその権力基盤を維持する上で、商業交易はきわめて重要な役割をもっていた。したがって、土着都市には遠からぬところにパサールが開かれ、交易を主目的とする商業民が居住した。

たとえば、カウマンに居住するサントゥリは基本的には商業に従事していたことは第1章で指摘した通りである。多くの外国人も含まれていた。主要なものは、華人とアラブ人であり、通常パサールに近いところに居留した。彼らは交易の利益を介して土着権力と結びつく傾向が強く、特にアラブ人は宗教的な理由からか重用された。これが、類型2のチャイナタウンと類型6のキャンブアラブが類型3、4の市街地と比較的近い理由と考えられる。

同様に、類型5の伝統的市街地は通常伝統工芸で名高いまちであり、クラトンおよび高位の貴族階級を重要な顧客としており、クラトン都市にそう遠くないところに位置している。

また、類型1の旧オランダ人居住地区は、クラトン都市の場合、クラトンおよびパサールのある都市中心部におかれた各種施設の周辺に各種の社宅などがつくられた。大規模な住宅地を新規開発する場合は、既成市街地を避けその外側の高台が選ばれる



図 2 - 2 - 1 調査地区

※網のかけられた領域は調査地区の属する単数ないし複数のクルラハンを示す。
 また、その外側の太線に囲まれた領域は、これらクルラハンの属するクチャ
 マタンを示す。

ことが多かった。そういう意味では、類型7、8の先駆であったわけだが、現在では市街地にのみこまれてしまい都心の一部となっていることもあるのは既に述べた通りである。

こうして、都市として繁栄する過程で、多くの人びとをひきつけた。その多くはユニット9のカンプンに住んだ。また、居住環境のあまり良好でないところ、あるいは用途が変更され空地が生じた部分などにはユニット10のスクウォッター・カンプンが形成された。それは、各類型のはざまを埋めるものであったといつてよい。

こうして形成された既成市街地の外側に類型6および7がつくられた。さらにユニット9および10が拡大していった。

これまで述べてきた類型別市街地全体の構成において核的役割を果たしている土着権力のクラトンを中心とする都心部の構成は、第3章で論じるように、古くはヒンドゥ以前の空間構成原理を継承するものと考えられるが、植民地期における新都市建設の際にタウン・レイアウトのパターンとしてもちいられ頻繁に用いられた。したがって、多くの都市に類似のパターンをみることができる。それは、モザイクということばのもつ語感とは異なる一定の構造をもつものである。ジャワ島都市における市街地構成の1つの型と考えられる。

2-2 類型別市街地のケース・スタディ

1 調査地区の概要

ケーススタディ地域として次の5地区を選んだ(図2-2-1)。

地区1(類型1)コタバル

コタバルは今世紀初頭にオランダ人により開発された地区であり、当時の市街地から川を隔てた東北部の縁辺に位置する。1983年の統計によると人口密度は75~135人/haの範囲である。

地区2(類型2)クタンダン

クタンダンはジョクジャカルタの代表的なパサールであるブリンハルジョに隣接する典型的なブチナンである。メインストリートから外れたところに位置する。人口密度は185~245人/haであるが、家屋密度は高い。

地区3(類型3)カディパテン・キドゥル

カディパテン・キドゥルは、ジュロン・ベテン地区内、クラトンの北西部に位置し、かつての王位継承者である王子のオフィス兼邸宅であるダレムを核とする地区である。人口密度は315~415人/haと高い。

表 2 - 2 - 1 調査地区人口データ

		コタバル	クタンダン	カディリテン	カウマン	コタグデ	計
サンプル数		49	61	55	55	58	278
RK 人 口	男	2832	805	823	1941	1789	—
	女	2162	781	848	1790	1834	—
	計	4994	1586	1671	3731	3623	—
RK世帯数		682	312	369	—	751	—

表 2 - 2 - 2 回答者属性

		コタバル	クタンダン	カディリテン	カウマン	コタグデ	計
性別	男	48.9 (23)	63.9 (39)	45.5 (25)	61.1 (33)	70.2 (40)	58.4 (160)
	女	51.1 (24)	36.1 (22)	54.5 (30)	38.9 (21)	29.8 (17)	41.6 (114)
	計	100.0 (47)	100.0 (61)	100.0 (55)	100.0 (54)	100.0 (57)	100.0 (274)
年齢	10代	10.4 (5)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.9 (1)	1.7 (1)	2.6 (7)
	20代	35.4 (17)	26.7 (16)	29.1 (16)	32.1 (17)	24.1 (14)	29.2 (80)
	30代	12.5 (6)	23.3 (14)	21.8 (12)	17.0 (9)	17.2 (10)	18.6 (51)
	40代	12.5 (6)	23.3 (14)	20.0 (11)	17.0 (9)	15.5 (9)	17.9 (49)
	50代	6.3 (3)	8.3 (5)	16.4 (9)	15.1 (8)	27.6 (16)	15.0 (41)
	60代	12.5 (6)	16.7 (10)	7.3 (4)	9.4 (5)	10.3 (6)	11.3 (31)
	70以上	10.4 (5)	1.7 (1)	5.4 (3)	7.6 (4)	3.4 (2)	5.5 (15)
	計	100.0 (48)	100.0 (60)	100.0 (55)	100.0 (53)	100.0 (58)	100.0 (274)
世帯 帯柄 主 との	世帯主	40.0 (18)	35.1 (20)	40.0 (20)	45.3 (24)	42.6 (23)	40.5 (105)
	配偶者	13.3 (6)	17.5 (10)	36.0 (18)	18.9 (10)	22.2 (12)	21.6 (56)
	子供	20.0 (9)	21.1 (12)	16.0 (8)	9.4 (5)	29.6 (16)	19.3 (50)
	その他	15.6 (7)	14.0 (8)	0.0 (0)	9.4 (5)	1.9 (1)	8.1 (21)
	不明	11.1 (5)	12.3 (7)	8.0 (4)	17.0 (9)	3.7 (2)	10.4 (27)
	計	100.0 (45)	100.0 (57)	100.0 (50)	100.0 (53)	100.0 (54)	100.0 (259)
学歴	無回答	12.5 (6)	0.0 (0)	12.7 (7)	5.7 (3)	13.8 (8)	8.8 (24)
	小卒	2.1 (1)	8.3 (5)	18.2 (10)	5.7 (3)	24.1 (14)	12.0 (33)
	中卒	2.1 (1)	18.3 (11)	9.1 (5)	17.0 (9)	15.5 (9)	12.8 (35)
	高卒	20.8 (10)	30.0 (18)	16.4 (9)	24.5 (13)	6.9 (4)	19.7 (54)
	大卒	35.4 (17)	8.3 (5)	14.5 (8)	9.4 (5)	6.9 (4)	14.3 (39)
	その他	27.1 (13)	35.0 (21)	38.2 (21)	37.8 (20)	32.8 (19)	33.6 (92)
	計	100.0 (48)	100.0 (60)	100.0 (55)	100.0 (53)	100.0 (58)	100.0 (274)
職業	専門職	13.6 (6)	0.0 (0)	18.0 (9)	9.4 (5)	5.8 (3)	11.2 (23)
	自営業	0.0 (0)	14.3 (1)	6.0 (3)	1.9 (1)	9.6 (5)	4.9 (10)
	公務員	11.4 (5)	0.0 (0)	10.0 (5)	5.7 (3)	9.6 (5)	8.7 (18)
	会社員	15.9 (7)	57.1 (4)	22.0 (11)	39.6 (21)	15.4 (8)	24.8 (51)
	労働者	0.0 (0)	0.0 (0)	2.0 (1)	1.9 (1)	17.3 (9)	5.3 (11)
	学生	31.8 (14)	14.3 (1)	12.0 (6)	17.0 (9)	9.6 (5)	17.0 (35)
	主婦	4.5 (2)	0.0 (0)	4.0 (2)	5.7 (3)	5.8 (3)	4.9 (10)
	パソコ	11.4 (5)	0.0 (0)	8.0 (4)	7.5 (4)	9.6 (5)	8.7 (18)
	その他	11.4 (5)	14.3 (1)	18.0 (9)	11.3 (6)	17.3 (9)	14.6 (30)
	計	100.0 (44)	100.0 (7)	100.0 (50)	100.0 (53)	100.0 (52)	100.0 (206)
	宗教	イスラム教	69.8	47.4	84.9	99.7	90.6
キリスト教		29.5	38.7	15.1	0.3	9.4	21.5
その他		0.7	13.9	0.0	0.0	0.0	2.4
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

※表中の数字は%、()内は実数

地区4（類型4）カウマン

カウマンはカディパテン・キドゥルと同様ジュロン・ベテン地区に位置し、通常のカウマンとはいくぶん異なる点もあるが、カウマンの一般的特徴を備えている。人口密度はカディパテン・キドゥルと同じく高い。

地区5（類型5）コタグデ

マタラム王朝の開基の地、創始者の墓所でもあって、町の成立以来 400年が経過している。代々墓所を守る貴族やジャワ全域を活動圏としていた商人、および手工芸職人が居住しており、現在も銀細工の町として名高い。純粋なジャワ人だけからなるまちである（注9）。人口密度は135～185人/haとコタバルと同程度である。

－2 社会状況

統計データ、および、アンケート調査の結果により地区の社会状況を分析する。

（1）各地区の人口構成

統計データによると人口構成は表2-2-1の通りである。

（2）回答者の属性

まず、回答者の属性について簡単に記述する。

各地区の回答者の属性は表2-2-2の通りである。いずれの地区においても回答者の中にながりの学生が含まれている。これは、ジョクジャカルタが学生の町といわれ、学生数が相対的に多いことによるものであり、特にコタバルはガジャマダ大学に近接し、なおかつ住宅が大きいために下宿を営んでいるケースが多いことに起因すると考えられる。

また、クタンダンの職業別データはサンプル数が小さくほとんど参考にならない。

ここでは、これを主な材料として社会集団の検討を行なう。まず、比較の視点として各類型のもつ特徴を確認しておこう。

各類型はそれぞれ特有の社会集団の存在と密接な関係をもち、社会的には次の特徴をもつことが通念となっている。

①コタバル

コタバルは教育レベルが高く、経済的に裕福なエリート階層の居住区である。

②クタンダン

経済的に裕福な華人系住民の居住区である。主人一家はコタバルなど高級住宅に居住し、使用人であるプリブミ系が住み込んでいるケースが多い。

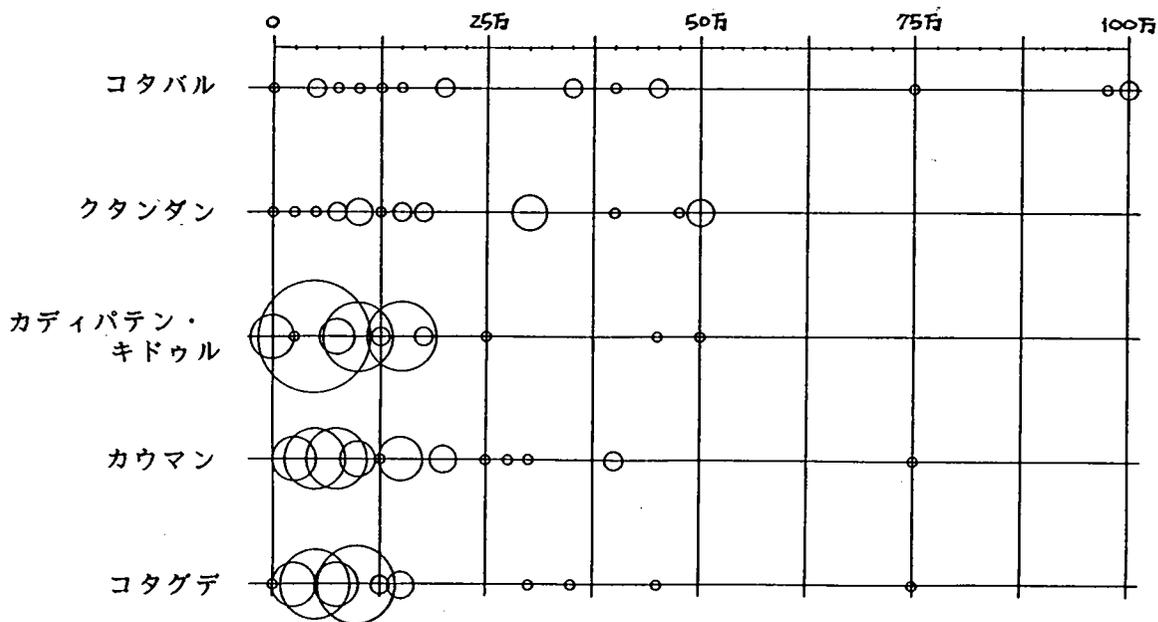


図 2 - 2 - 2 収入 ※単位はルピア

表 2 - 2 - 3 収入

地区	平均	標準偏差	最小値	最大値	有効回答数
コタバル	328544	359650	1000	100万以上	11
クタンダン	187500	201184	30000	475000	4
カディパテン	102337	85418	2650	450000	34
カウマン	140517	149704	20000	750000	29
コタグデ	116267	148652	1000	750000	30
全体	142652	177955	1000	100万以上	108

※単位はルピア、ただし100万ルピアを超える場合は999990として平均を算出している。
主婦・学生・ペンション・その他を省いてある

表 2 - 2 - 4 国籍

	1980年			1981年			1982年		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
プリブミ系	641 74.8	752 82.1	1393 78.6	657 79.3	713 77.5	1370 78.4	654 75.8	756 80.4	1407 78.0
非プリブミ系	165 19.3	103 11.2	268 15.1	121 14.6	124 13.5	245 14.0	155 18.0	142 15.1	297 16.5
外国人	51 6.0	61 6.7	112 6.3	50 6.0	83 9.0	133 7.6	54 6.3	45 4.8	99 5.5
計	857 100.0	916 100.0	1773 100.0	828 100.0	920 100.0	1748 100.0	863 100.0	940 100.0	1803 100.0

各項の上段：実数（人） 下段：割合（％）

③カディパテン・キドゥル

かつての貴族階級とその従者の子孫の居住区である。経済的には中の下程度である。

④カウマン

敬虔なイスラム教徒、サントウリの居住区である。

⑤コタグデ

富裕なイスラム商人および職人階層が居住する。

ここでは、これを検証しつつ、各地区の実態をあきらかにしよう。

1) 経済階層

収入データに関するコタバルおよびクタンダンのサンプル数は小さく、この結果だけから速断することは妥当ではない。他のデータを補足的に使用しながら経済階層の推定を試みる。

収入データから判断する限り、クタンダンを除く経済階層は上から、コタバル、カウマン、コタグデ、カディパテン・キドゥルの順になっている（表2-2-3および図2-2-2）。

コタバルについては教育レベルが高く、カディパテン・キドゥルとならび専門職の比率も高いことから、この結果の妥当性が感じられる。しかし、カウマンについては伝統的な商人階層と考えられる自営業がほとんど含まれておらず結果の信頼性は必ずしも高くない。

したがって、経済階層について明確な結論は導けないが、コタバルがエリート層の住む地区であるということは事実と判断しうる。

2) 宗教

カウマンについてはイスラム教徒の人口比率が高く地区の特徴が確認できたかたちである。しかし、ここではむしろイスラム教徒以外がわずかではあるが存在することに注目すべきかもしれない。とはいえ、その比率はごくわずかでこれがカウマンの類型としての求心性の弱化の兆しとは考えにくい。

コタグデでは、ほぼ全国比率と同程度だが、ジョクジャカルタ周辺はクリスチャン人口比率が高いことを考慮するとイスラム教徒の比率がかなり高いといつてよいであろう。コタグデは、後述するようにイスラム改革運動であるムハマディヤ・ムーブメントの発祥の地といわれ、イスラム信仰の篤い地であるといわれていることと合致する（注10）。

クタンダンではクリスチャンおよび「その他」の人口比率が高い。「その他」の内

訳はほとんどが仏教と考えられる。いずれも、華人系の特徴を示している。ここで「仏教」というのは、統計上のグルーピングに過ぎず、実際は儒教、道教、また、3つの混交した三宝教などを含むと考えられる。

3) 人種

特別な調査を行なったわけではないが、統計データによるとクタンダンでは外国人系の人口比率が高い(表2-2-4)。

4) 貴族

各地区にどの程度かつての貴族階層が存在するか、その正確な数は不明である。特にカディパテン・キドゥル、カウマン、コタグデには、どの程度の比率であったかはわからないが、本来貴族が居住していたことが知られている。

しかし、本来身分の高い貴族の住居であるダレムだけでなく、ジョグロ型の様式住居の所有者は貴族階層に属する可能性が高い。したがって、その数から貴族の数を推定しようと考えられる。

これから判断すると、カウマン、コタグデには少なくとも相当数の貴族の末裔が住んでいることが推察される。しかし、貴族は現在経済的に没落しつつある人びとも多い反面、共和国成立にともないかつてのプライヤイ上層部がそのまま政治官僚化したといわれる。したがって、その数は明確ではないが、コタバルには相当数の貴族の末裔が住むと考えられる。

5) 出身地

出身地をみると、コタバルとコタグデでは、市外からの出身が多く、残りの3地区では市内が過半を占めていることがわかる(表2-2-6)。しかし、いずれの地区でもかなり市外からの出身が多く、移住者を吸収する構造をもつことを示している。それが、それぞれの社会集団が準拠する宗教や民族によるものであるかを断定するにはより詳細な調査が必要であろう。

コタグデの場合、第4章に述べているように、一体性をもつ1つのまちでありながら行政上2つに分断されているために、こうした結果となったことが考えられ、実際には地元出身者が過半を占めている。

したがって、コタバルだけが他とやや異なるパターンを示すことになるわけだが、これはジョクジャカルタが地方の中心都市であり政府機関が多く存在することと関係すると思われる。もちろん他の要因もあるには違いないが、こうした機関で働く比較的地位の高いテクノクラートなどがコタバルを居住地としていることが考えられるからである。公務員比率の高いインドネシアでは、こうした層がコタバルの人口のかな

表 2 - 2 - 5 出身地

地区	ジ'ヨクジ'ヤカタ	ジ'ヨクジ'ヤカタ 以外	計
コタバル	14 34.1 9.4	27 65.9 25.0	41 16.0
クタンダン	38 67.9 25.5	18 32.1 16.7	56 21.8
カティパテン	37 68.5 24.8	17 31.5 15.7	54 21.0
カウマン	35 71.4 23.5	14 28.6 13.0	49 19.1
コタグデ	25 43.9 16.8	32 56.1 29.6	57 22.2 ..
計	149 58.0	108 42.0	257 100.0

※上段は実数、中段は行%、下段は列%

表 2 - 2 - 6 土地および住宅

	コタバル	クタンダン	カティパテン	カウマン	コタグデ	計	
土地 形態 所有	自己所有	62.2 (23)	76.8 (43)	16.8 (8)	74.1 (40)	77.8 (42)	62.4 (156)
	賃貸	8.1 (3)	16.1 (9)	4.1 (2)	16.7 (9)	1.9 (1)	9.6 (24)
	マカブル等	0.0 (0)	1.8 (1)	67.3 (33)	5.6 (3)	11.1 (6)	17.2 (43)
	その他	29.7 (11)	5.4 (3)	12.2 (6)	3.7 (2)	9.3 (5)	10.8 (27)
	計	100.0 (37)	100.0 (56)	100.0 (49)	100.0 (54)	100.0 (54)	100.0 (250)
建形 物態 所有	自己所有	70.0 (28)	89.5 (51)	49.0 (25)	79.2 (42)	75.4 (43)	73.3 (189)
	賃貸	10.0 (4)	10.5 (6)	13.7 (7)	17.0 (9)	3.5 (2)	10.9 (28)
	その他	20.0 (8)	0.0 (0)	37.3 (19)	3.8 (2)	21.1 (12)	15.9 (41)
	計	100.0 (40)	100.0 (57)	100.0 (51)	100.0 (53)	100.0 (57)	100.0 (258)
住宅 構造	アパート	100.0 (41)	100.0 (58)	90.6 (48)	88.0 (44)	63.6 (35)	87.9 (226)
	セミ・アパート	0.0 (0)	0.0 (0)	9.4 (5)	12.0 (6)	36.4 (20)	12.1 (31)
	テナント	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
	計	100.0 (41)	100.0 (58)	100.0 (53)	100.0 (50)	100.0 (55)	100.0 (257)
住宅 様式	ジャワ/貴族	7.3 (3)	1.8 (1)	18.8 (9)	32.6 (15)	14.5 (8)	14.6 (36)
	ジャワ/カブ	7.3 (3)	0.0 (0)	81.3 (39)	58.7 (27)	81.8 (45)	46.2 (114)
	ヨーロッパ	85.4 (35)	5.3 (3)	0.0 (0)	2.2 (1)	1.8 (1)	16.2 (40)
	チャイニーズ	0.0 (0)	91.2 (52)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	21.1 (52)
	その他	0.0 (0)	1.8 (1)	0.0 (0)	6.5 (3)	1.8 (1)	2.0 (5)
計	100.0 (41)	100.0 (57)	100.0 (48)	100.0 (46)	100.0 (55)	100.0 (247)	
住宅 建設 年	1950-	11.9 (5)	35.7 (5)	52.4 (22)	33.3 (16)	34.3 (12)	33.1 (60)
	1900-49	78.6 (33)	42.9 (6)	47.6 (20)	60.4 (29)	40.0 (14)	56.4 (102)
	-1899	9.5 (4)	21.4 (3)	0.0 (0)	6.3 (3)	25.7 (9)	10.5 (19)
	計	100.0 (42)	100.0 (14)	100.0 (42)	100.0 (48)	100.0 (35)	100.0 (181)

※表中の数字は%、()内は実数

りの割合を占めている可能性がある。

以上から、各地区が現在どのように変動を遂げつつあるかについてはあきらかにしえなかった。特に、収入データが完全ではないため、各地区がどのような経済階層に統合されつつあるかについての分析が不十分となっている。しかし、各類型の枠組みを構成する社会集団の存在はほぼ確認することができ、解体の兆しは感じられない。

－ 3 空間構成の実態

各類型の空間構成の概要については、既に第1章でふれた通りである。ここでは、各地区の実態からそれを検証すると同時に、それぞれの特徴をより詳細に把握することを試みる（表2-2-6）。

（1）住宅および宅地

1）土地および建物の所有

まず、土地所有をみると、カディパテン・キドゥルを除き自己所有比率が高い。コタバルで「その他」が多くなっているのは、親戚の家などに住んでいるケースと考えられる。金持ちは住宅を複数所有することが多く、賃貸したり、親戚などに提供したりすることは少なくない。

また、カディパテン・キドゥルでは「マガルサリ」が7割程度みられる。マガルサリとは、主人筋の住宅の敷地内に従者の家族が住むこの地方の伝統的居住形態で、現在でも普通にみられる慣行である。ジュロン・ベテンなど古い市街地に多く、地区の歴史的格をよく表わすものといえる。マガルサリについては、第3章にさらに詳しく述べている。

建物の所有についても、カディパテン・キドゥルを除き自己所有が主体となっている。カディパテン・キドゥルの傾向については、土地と同様の理由によるものであろう。

2）建物の物的性状

①住宅の構造

アンケート結果をみると、テンポラリーはまったく存在しない。特にコタバル、クタンダンではすべてがパーマネントである。現実には、コタグデ、カウマンなどにはテンポラリーが幾らか存在しているが、その比率は小さい。ジャワでは住宅は主要な財産とみなすことができ、これから判断すると、これらの地区における住民の全般的な経済状態が逼迫しているとは考えにくい。

②住宅の様式

クタバルではほとんどがコロニアルスタイルだが、それ以外の様式の住宅がわずかにまじっている。

クタンダンではほとんどが中国風のショップハウスだが、一部コロニアルスタイルが混じっている。

カディパテン・キドゥル、カウマン、コタグデではジャワの伝統的な様式がほとんどを占めている。特に、カディパテン・キドゥル、コタグデは比較的良好似た傾向を示し、庶民住宅であるカンブン型が主体である。カウマンでは貴族住宅の系譜をひくジョグロあるいはリマサン型が半数近く存在しており、貴族の血統をひく人びとの存在を示している。これは、ジョクジャカルタのカウマンが本来貴族階級が住むところであるジュロン・ベテン地区内にあることによると考えられる。

③敷地形状

クタバルでは宅地割り自体が明確であり、また、クタンダンではショップハウスが敷地いっぱいに建っているため、実際の敷地形状を知ることが可能である（図2-2-3）。

クタバルの計画はヨーロッパ流の住宅地計画にもとづき、宅地割パターンは規則正しい。全体に敷地面積は大きく、その形状は正方形に近いものが主体である。

また、クタンダンでは道路沿いに短冊型敷地形状がみられるが、街区内部はカンブンの様相を呈している。

カディパテン・キドゥルについては、大部分の住宅がマガルサリであるため、基本的には宅地割り自体が存在しない。

カウマンの場合、明快なパターンを欠くため、宅地割りを把握することはかなり難しい。特に、ジャワ全般に土地所有が慣習法にもとづき、敷地境界が個人の認識に依拠するものであることから、いっそう困難となっている。もちろん、フェンスなど宅地境界を示すものが存在し、ある程度推察が可能なケースもあるが、敷地形状および配列に一定のパターンが存在しないために全体像をつかむことができない。

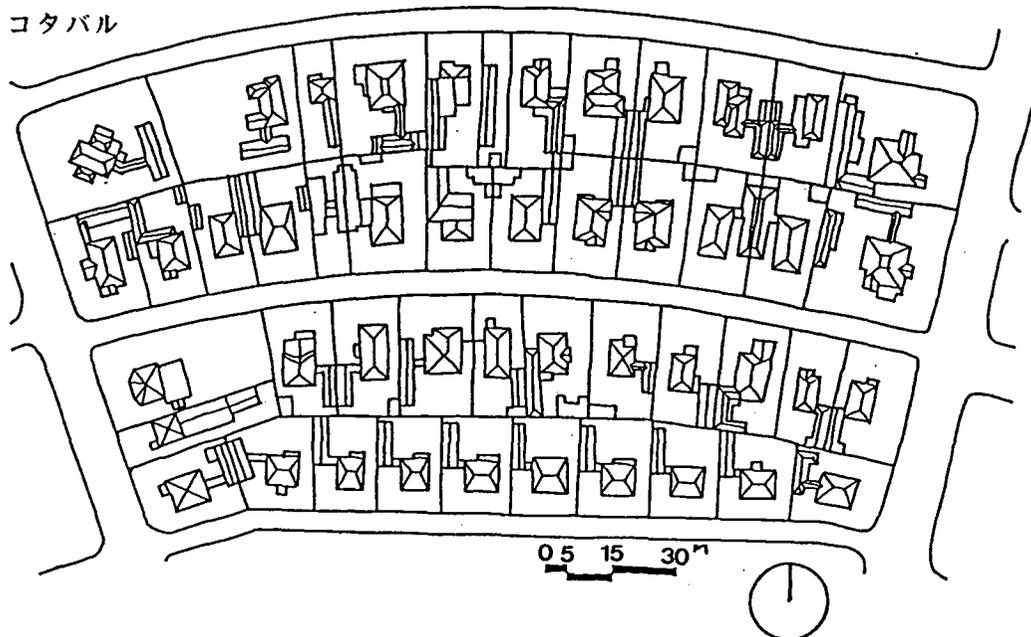
コタグデも同様であるが、第1章でふれたように、住宅のクラスターが存在し、その部分に関していえば1つのパターンが見出せるが、全体に統一的なレイアウトの原理は存在しない。なお、クラスターの詳細については第3章に述べている。

3) 住宅の事例

地区1 クタバルーコロニアル住宅

図2-2-4はクタバルにおけるごく平均的な住宅の1つである。

コタバル



クタンダン

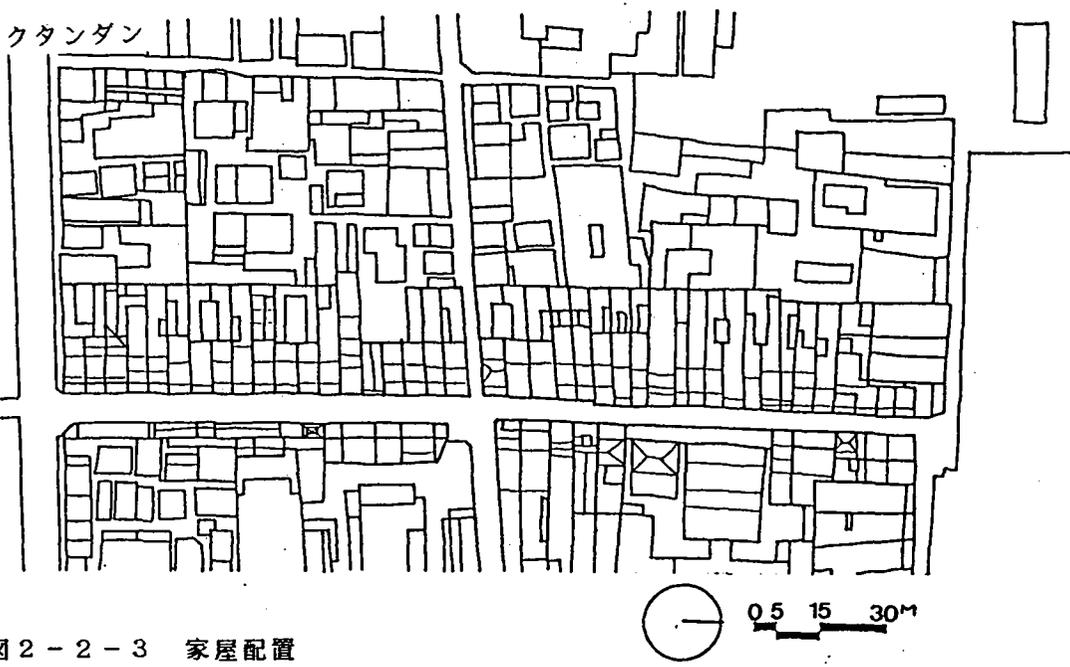
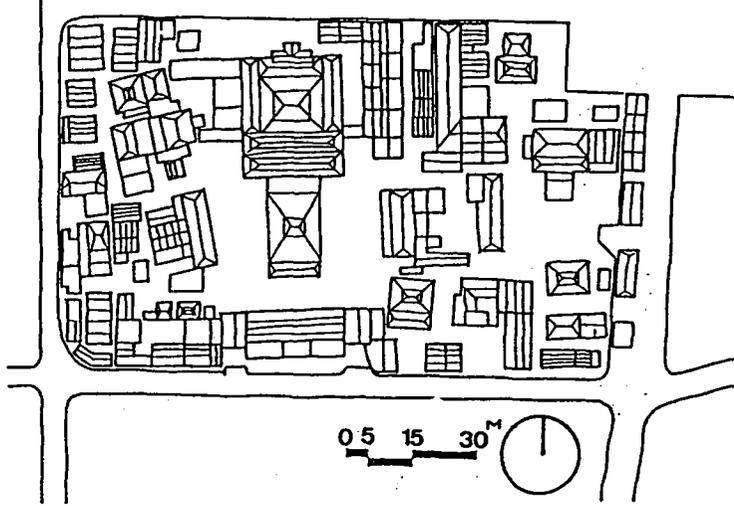


図 2 - 2 - 3 家屋配置

カディパテン・キドウル



カウマン

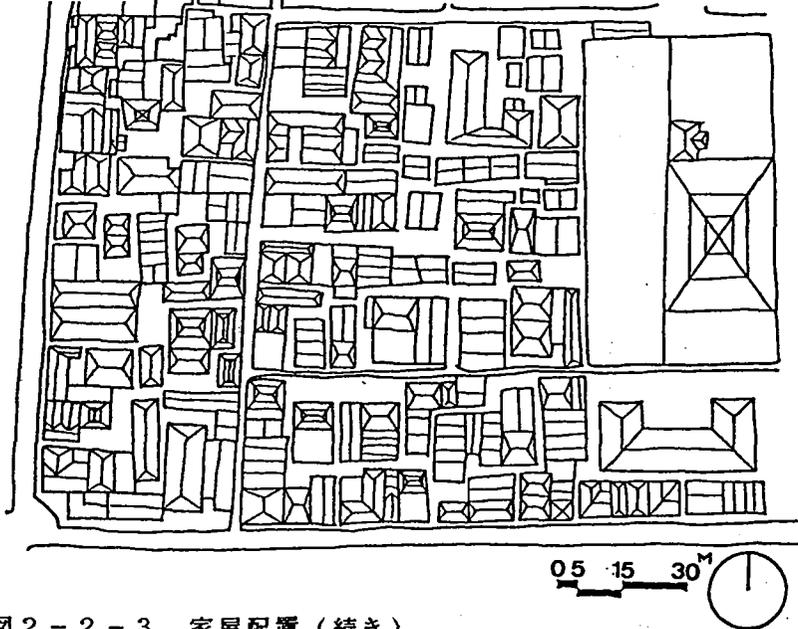


図 2 - 2 - 3 家屋配置 (続き)

戸建て住宅が基本である。メインハウスの後方にあるサービス棟が2戸で一体化したかたちとなっているが、メインハウスの独立性は高く戸建てと考えるとよい。住宅の規模は相対的に大きい、18世紀モンフリットのヴィラなどと比べればはるかに小さく、ファサードにも装飾が比較的少なくむしろ簡素なデザインであり、同様のことが内装についてもいえる。住戸の大部分はこの住居とほぼ同等だが、中には巨大な邸宅も存在している。

プランは、先に述べたように、後部にサービス棟がついたタイプで、コロニアル住居の1つの典型である。メインハウスは敷地のほぼ中央に位置しており、それによって前庭と後庭が形成されている。前者はパブリックな性格、後者プライベートな性格をもつ。

敷地境界には植栽が施されているが、コタバルではジャカルタのメンテンのように高いフェンスをもつ家は少ない。

地区2 プチナンーショップハウス

図2-2-5はショップハウスのプランである。

有数の観光都市として知られるジョクジャカルタの目抜き通りであるマリオボロ通り沿いには、既に建てかえがかなりの程度進行しており、本事例のような中国風ファサードを残すショップハウスはほとんど残っていない。この事例はこの地域の建て替え前のショップハウスの典型であると考えられ、当時のこの地域の景観を推察することができる。

住宅は、木造2階建て、間口に対して奥行の長い典型的なショップハウスである。ただし、木造といっても、通常隣戸との境界は共有煉瓦壁であり、住戸内に木製間仕切りを用いているものを指している。

プランは、通常前面道路に面して店舗が設けられ、その後方に先祖の位牌を祀る部屋がおかれる。さらに後方には中庭があるが、庭というよりサービスヤードという性格が強い。最後方にはサービス諸室および個室などがある。また、前面道路に面した部分は通常2階建てのことが多く、中庭から階段で上ようになっているのが普通である。

近年、建てかえが進んでいることは既に述べたが、敷地条件に拘束されて基本的には同様のプランを踏襲するケースが多い。そのため、上方へと向かい、それによって高層化が生じつつある。

地区3 カディパテン・キドゥル

図2-2-6は、ダレムを取り巻く住居の1つを示している。

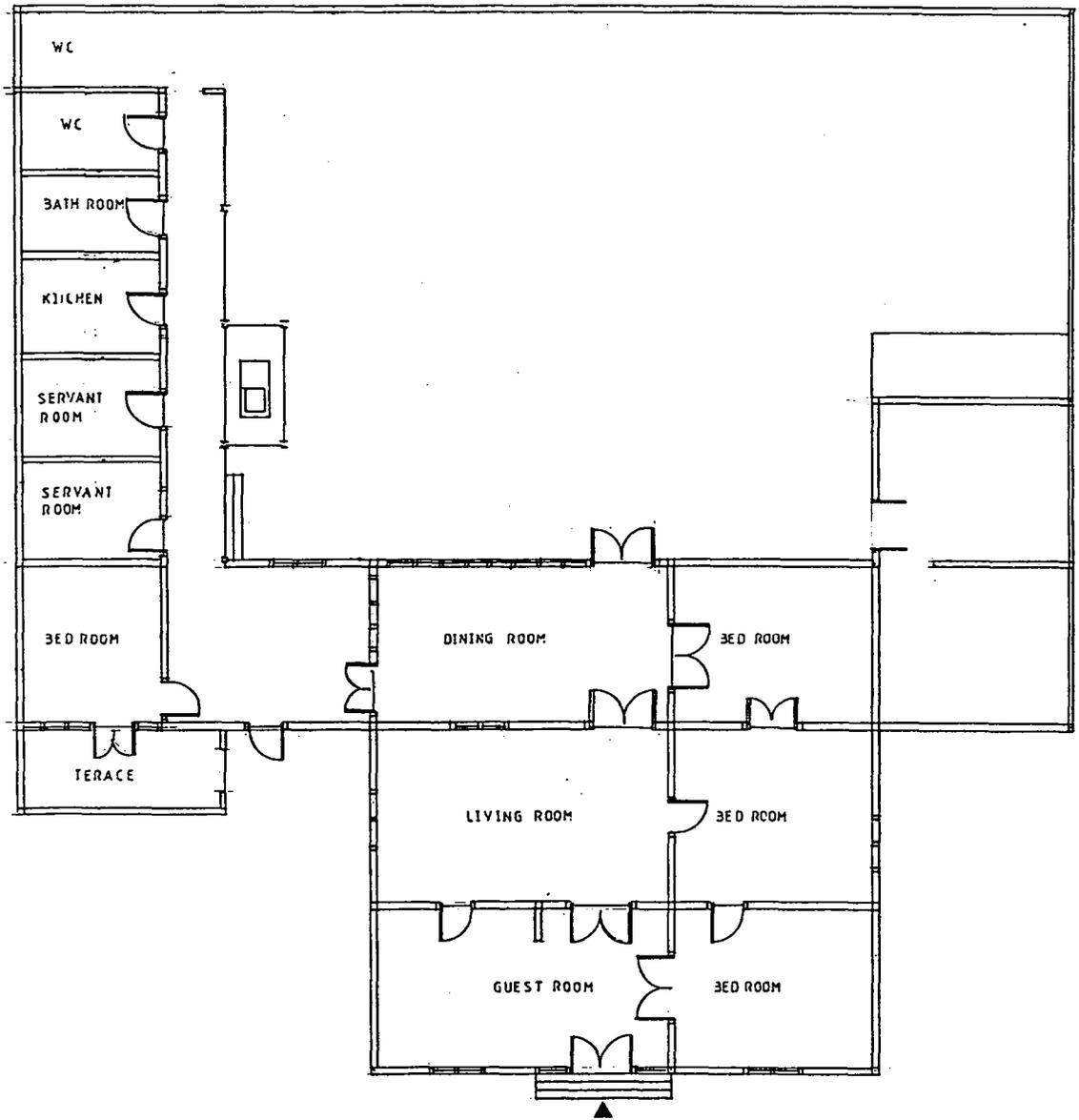


図 2 - 2 - 4 住宅 (コタバル)

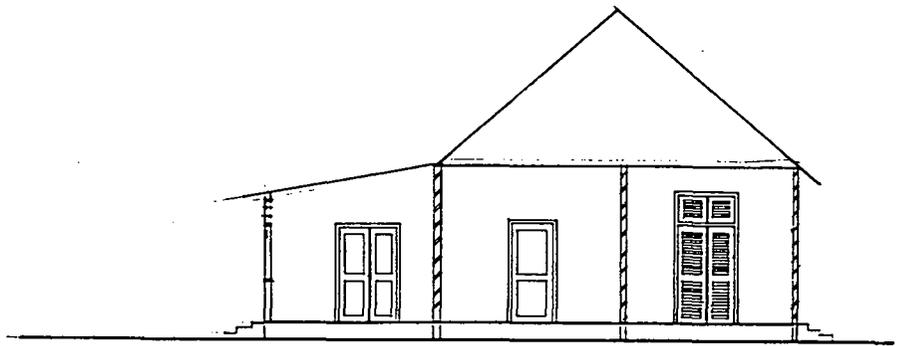
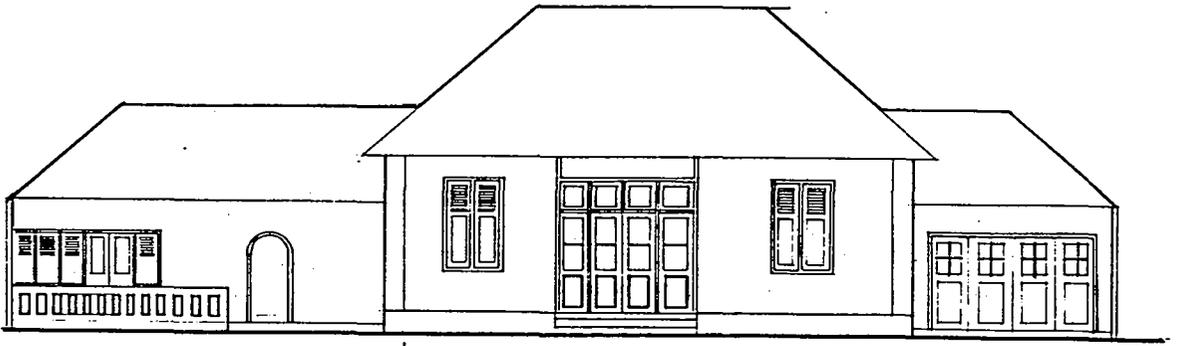
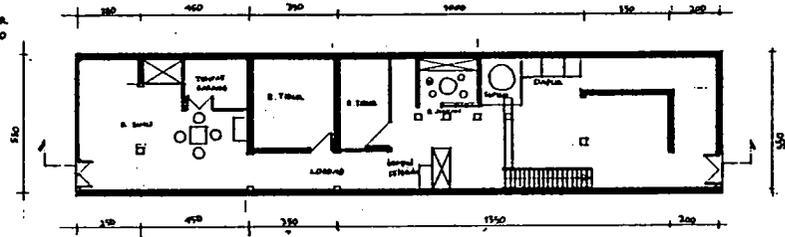


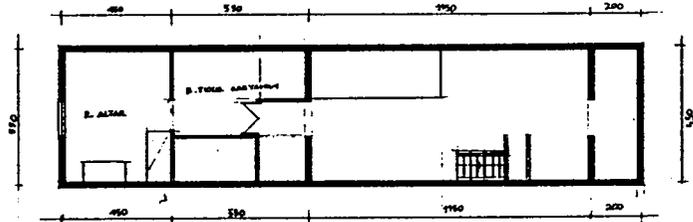
図 2 - 2 - 4 住宅コタバル (続き)

PLAN

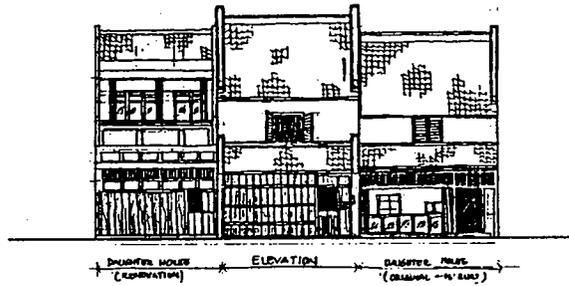
□ GROUND FLOOR
SCALE: 1:100



□ UP FLOOR
SCALE: 1:100



ELEVATION
SCALE: 1:100



SECTION
SCALE: 1:100

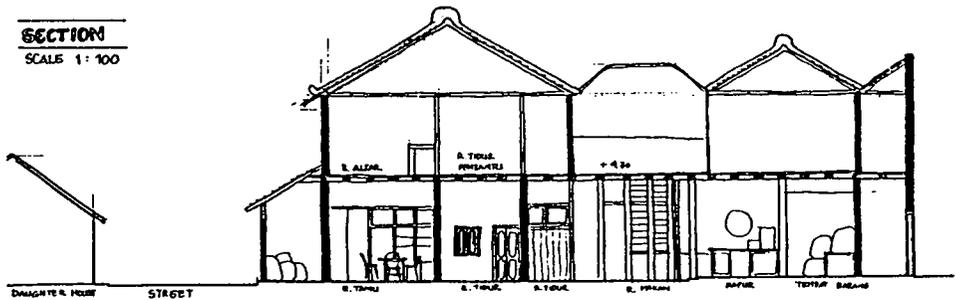


図 2-2-5 住宅 (クタンダン)

第3章で述べるように、戦前には厩として使用されていた建物を改造したもので、本来の用途ではないため、住居としての質はきわめて低い。

プランは、事実上寝室だけで、それ以外の設備などの機能は外部に共用で設けられている。炊事は屋外で仮設的な装置を用いて行なわれる。生活用水は共同井戸から供給される。便所もまた共用である。

地区4 カウマン

図2-2-7は伝統的住居を示している。

カウマンの中では比較的大きい方だが、例外的規模ではない。プランは、後述するコタグデとは異なっており、同じ中部ジャワの貴族的伝統様式とはいっても様々なバリエーションがあることを示している。しかし、その構成原理には類似性が高く、空間構成および室名もほぼ同じである。伝統的住居についての詳細は第3章で述べる。

地区5 コタグデ

コタグデの住居については第3章および第4章で述べる。

(2) 地区レベルの空間の状況

いずれの地区も第1章で述べた類型別市街地の特徴をもつ。

1) 土地利用(図2-2-8)

クタンダンでは道路沿いのほとんどの建物はショップハウスや倉庫などで、住宅外用途が最も顕著にみられる。調査区域を道路沿いに限定し、街区内部の調査は行っていないが、内部はむしろ通常のカンブンと似た雰囲気をもっている。

カディパテン・キドゥルの外周道路沿いにも店舗が並んでいる。これは地区が観光ルートにあたっているためだが、カディパテン・キドゥルそのものが観光対象となっているわけではなく、現時点では施設建設など観光化にともなう直接の影響はない。だが、観光開発はジュロン・ベテン地区全般にみられる傾向であり、住宅以外の土地利用が増加することが予想される。

クタバルには比較的住宅外用途が多くみられる。これは、第1章で指摘した通り、旧ヨーロッパ人居住地区の1つの特徴である。植民地支配期の都市にあつてヨーロッパ人居住地区が自己充足性の高い居住地として計画され、内部に各種の施設を備えていたことによる面が大きいものと考えられる。こうした各種施設は独立後もそのまま使用されていることが多く、旧ヨーロッパ人居住地区に業務地区的性格を付加している。

また、住居の規模が大きいため、部屋数に余裕があるときは間貸しするケースがしばしば見られる。クタバルの場合、大学生向けの下宿がく、特有の現象と考えてよい

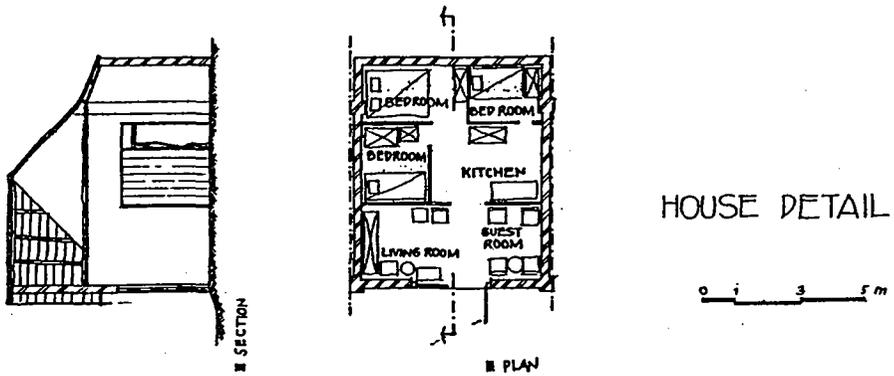
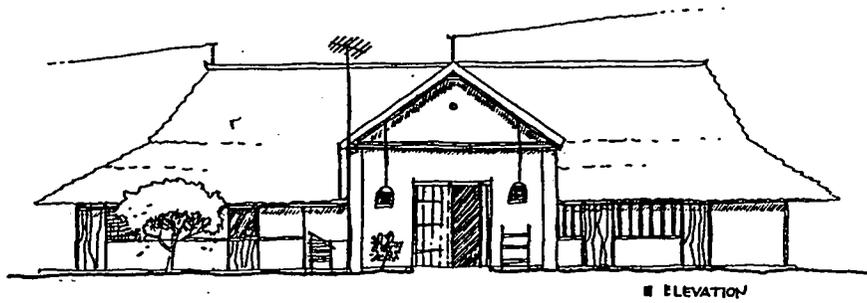


図 2 - 2 - 6 住宅 (カディパテン・キドゥル)

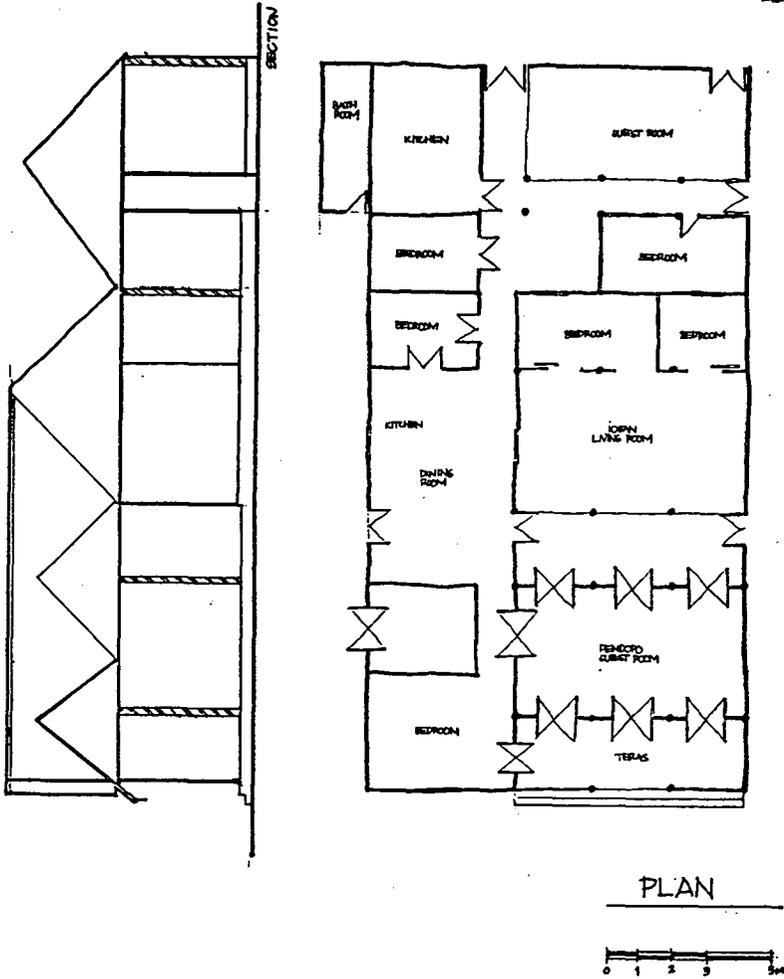


図 2 - 2 - 7 住宅 (カウマン)

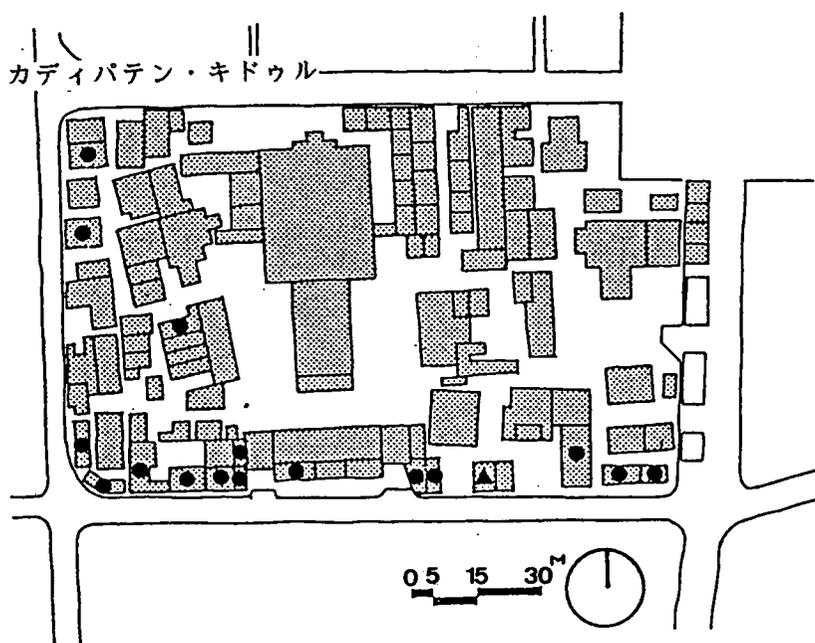
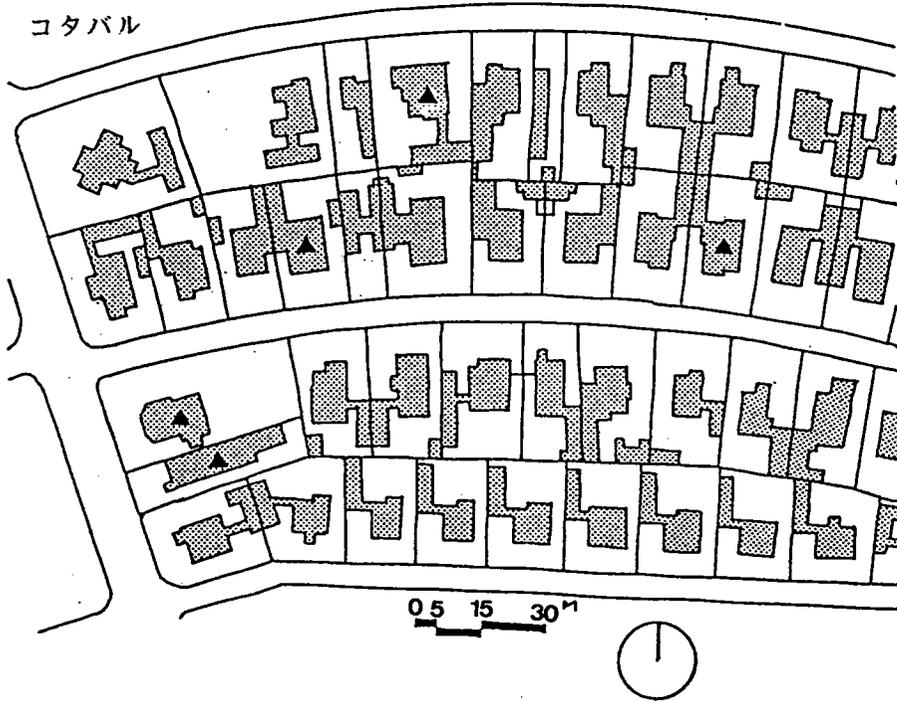
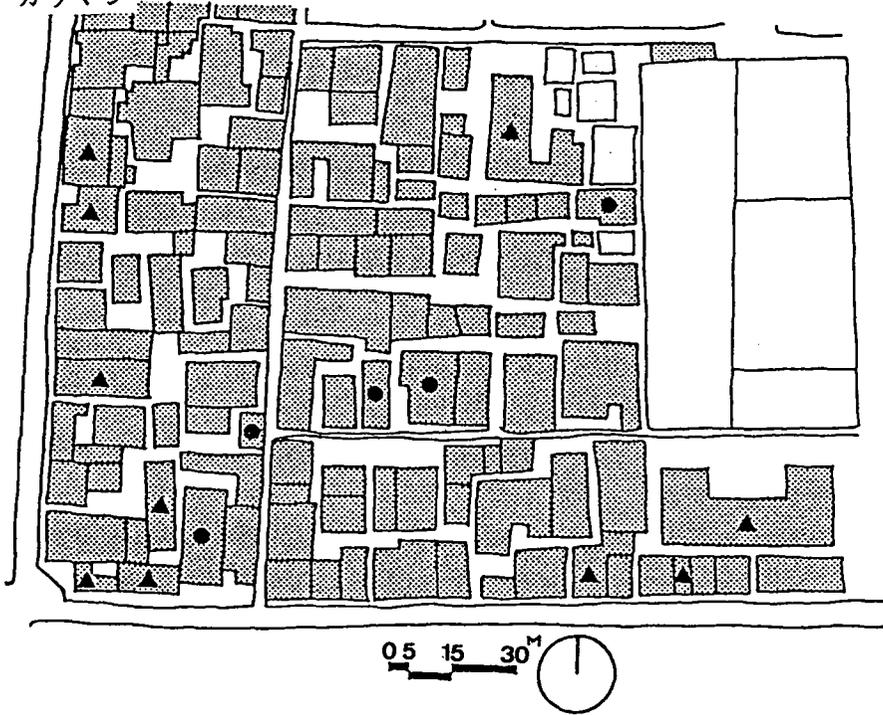


図 2 - 2 - 8 土地利用 ※ ●は店舗併用住宅、▲は店舗以外の住宅外用途

カウマン



クタンダン

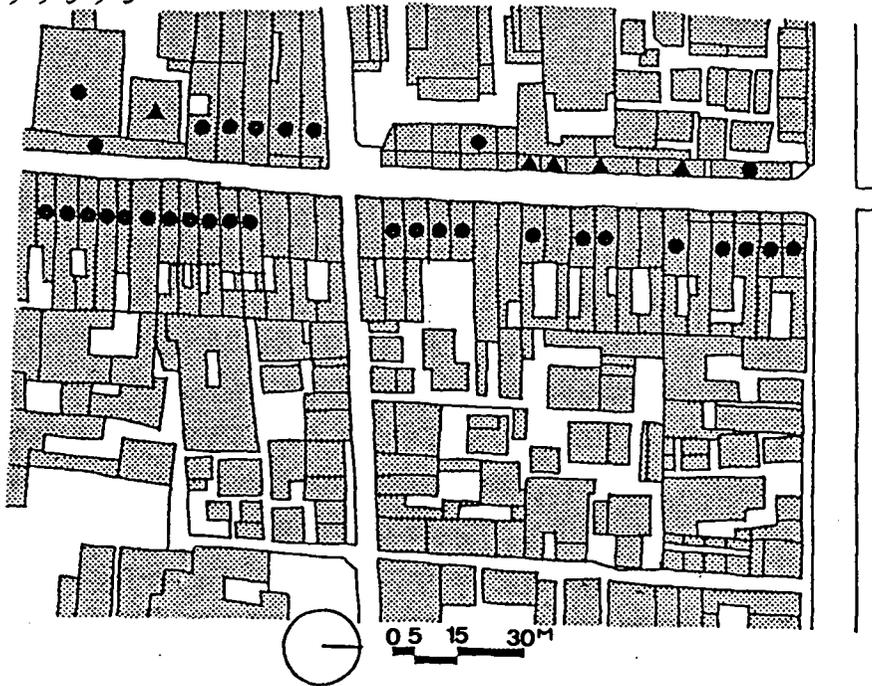


図 2 - 2 - 8 土地利用(続き) ※ ●は店舗併用住宅、▲は店舗以外の住宅外用途

だろう。

カウマンおよびコタグデは古くからイスラム商人の存在で名高いが、これらの商人による商業活動は原則として行商の形態をとっていたため、小売りの伝統はもっぱら華人を中心とする外国人によって担われてきた（注11）。したがって、この2つの類型に必ずしも小売り店舗が多いわけではない。

しかし、コタグデには中心部に位置する市場周辺には、大通りに面して小売り店舗が集中している。市場の機能が周辺に固定化常設化を遂げることによって形成されてきたことが推察され、ジャワ人の商業活動がまったく小売りのかたちをとらなかったわけではなさそうである。

また、コタグデはもともと金銀細工などの手工芸で名高い町であり、地区内には多くのワークショップが存在しているが、街区内部のワルンと呼ばれる小売り店舗の密度は普通のカンプンと比べてもそれほど高くない。

別に実施した小商業施設に関する聞きとり調査の結果、以前はほとんどワルンが存在しなかったことが知られる。貧困化とワルン経営の間にある種の相関があると考えられることから、コタグデに相対的にワルンが少ないのは住民の経済状態が一般のカンプンより良好である反面、近年経済状態が下向きつつあることを意味するものであろう。

2) 地区の形成と変容（図2-2-9）

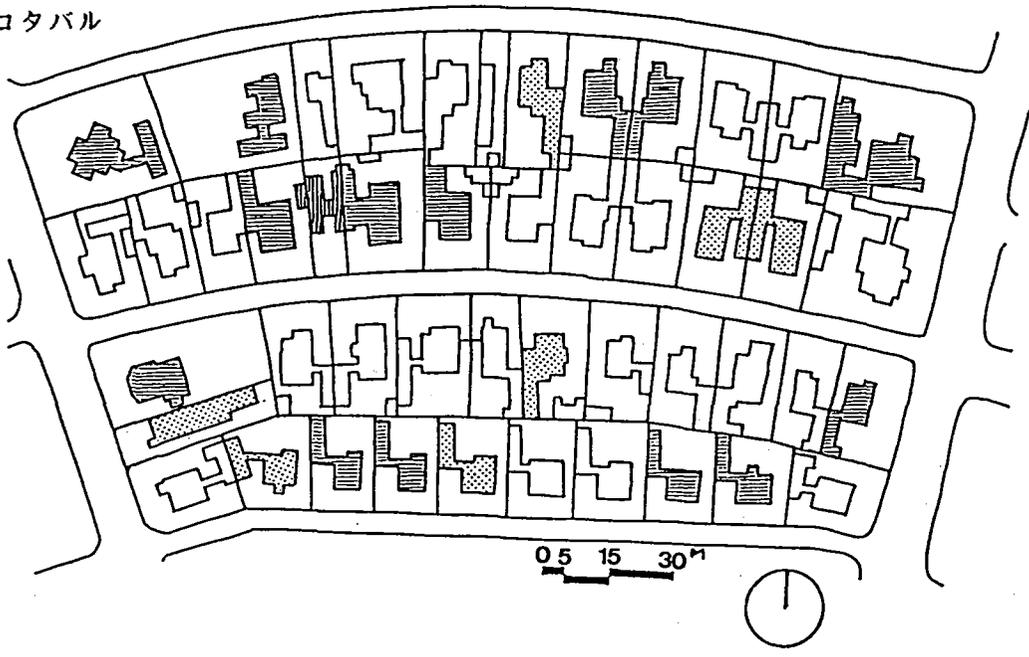
アンケート調査の住宅建設年から地区のおおよその形成時期を推定しうる（表2-2-6）。これによると、コタグデ、クタンダンも前世紀に地区の形成が始まったことが推察される。この1つを含めていずれの地区もおおむね今世紀初頭にその大半が形成されたものと考えてよいだろう。

住宅の増改築の状況から判断すると、コタバルはほとんどの住宅がマイナーな増改築を行なっているが、本来の形態を逸脱したものはほとんどない。これは、コタバルの住宅が十分な広さをもち増築の必要性が低いこと、また、土地の所有および敷地境界がきわめて明快なことなどいくつかの理由が考えられるが、結果としてコタバルが変容しにくい性格をもつものであることは確かのように思える。

クタンダンでは華人系が経済力をもつため、ファサードをはじめとする建物の増改築によって地区の雰囲気が大きく変動してきたことが推察される。

カディパテン・キドゥルは、アンケート結果では前世紀に建設された住宅が存在しないことになっているが、実際にはこの地区はコタグデとならび5地区の中で最も古い地区である可能性が高い。にもかかわらずこうした結果がでたのは、貴族の邸宅の

コタバル



クタンダン



図 2 - 2 - 9 増改築

※ 縞の部分は改築、点の部分は増築

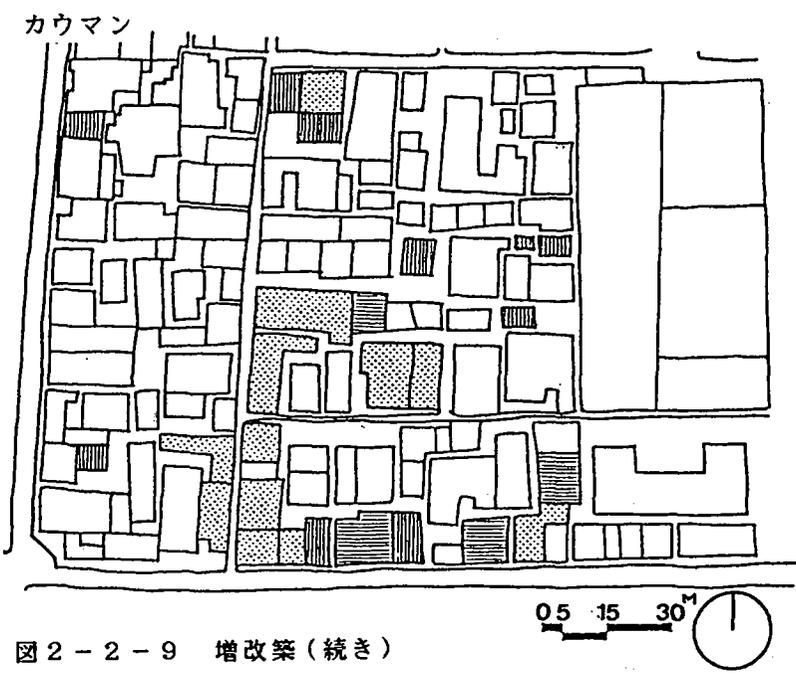
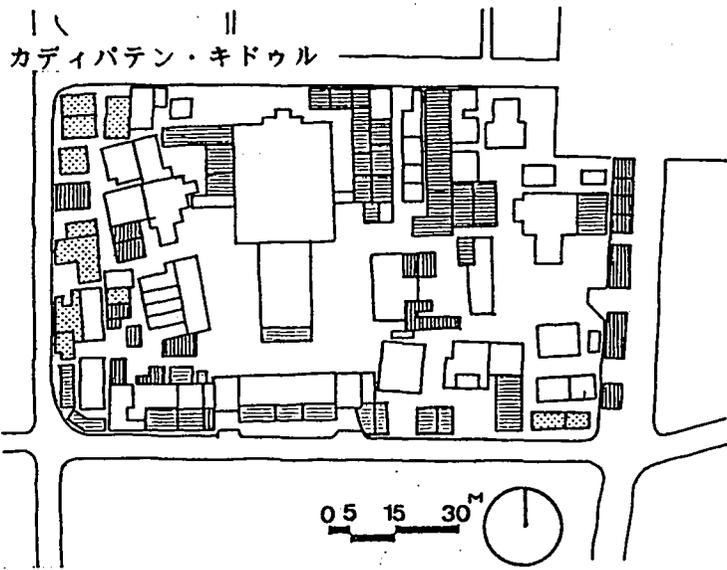


図 2 - 2 - 9 増改築 (続き)
 ※ 縞の部分は改築、点の部分は増築

敷地の一部が今世紀になって宅地に転用されたという履歴によるものである。そのため、周辺の住宅に増改築が行なわれたことを示しているが、全体のレイアウトにはそれほど大きな変化はない。

カウマンでは、戦後の人口増にともなう密度の上昇はかなりはげしかったことがうかがわれる。家屋密度が高く、既に飽和状態に近いと思われることから、地区の人口吸収能力は限界に達していると判断してよいだろう。

(3) まとめ

以上を類型別にまとめると次のようになる。

地区1 コタバル(図2-2-10)

西歐的コンセプトでつくられた住宅地であり、規則的な広い街路、十分なオープンスペースがとられ、宅地割は整形で広い。

土地建物は過半が自己所有だが、カディパテン・キドゥルを除き、他地区と比べてややその比率は低い。

住宅の8割強は今世紀初頭建てられたコロニアルスタイルの一戸建てで、構造については全部が煉瓦造瓦葺き屋根のパーマネント構造である。建設年および増改築の状況から判断すると、居住地の変容の程度は低い。住宅のほとんどは簡単な改造を施しただけでそのまま使われている。

地区2 クタンダン(図2-2-11)

街路に沿ってショップハウスが連続する典型的なブチナンのパターンを示しているが、街区の内部は家屋が不規則に並びカンブンのみである。全体に稠密であり、オープンスペースや緑が少ない。

土地建物の自己所有比率は、土地は7割程度だが建物については9割程度と高い。住宅は建てかえが進み中国的なファサードを失っているものが多いが、平面構成に大きな変化はない。全体の約9割がこうした構成である。住戸内には木製間仕切りが使われているが、基本的には煉瓦造瓦葺きのパーマネント構造である。

住宅建設年に関する回答数は低かったが、半数以上は1950年以前に建設されたと考えられる。通りに面した部分の家屋密度の変動は比較的少ないと考えられる。地区3

地区3 カディパテン・キドゥル(図2-2-12)

ダレムを中心に周囲に住宅が並ぶ特有のかたちが見られる。マガルサリと呼ばれ、周辺の住宅は本来ダレムに住む貴族の使用人が住むものであるが、土地および住宅の使用権は世襲され、現在では必ずしも使用人だけが住んでいるわけではない。全体の6割強がこれに相当する。建物の所有において「その他」が多いのもこのためと考え

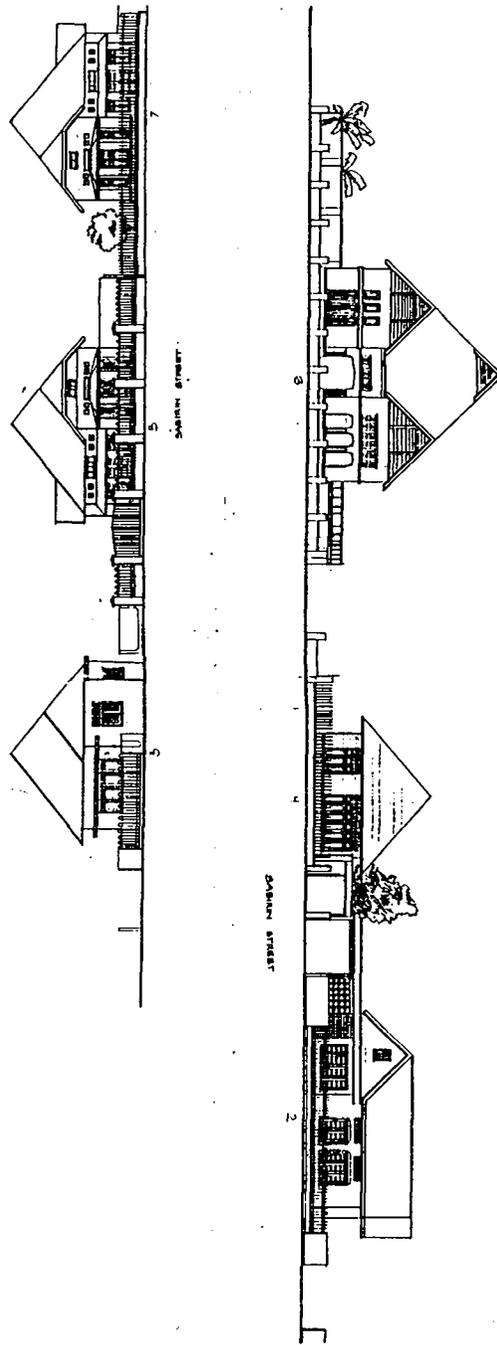


図 2 - 2 - 10 連続立面 (コタバル)

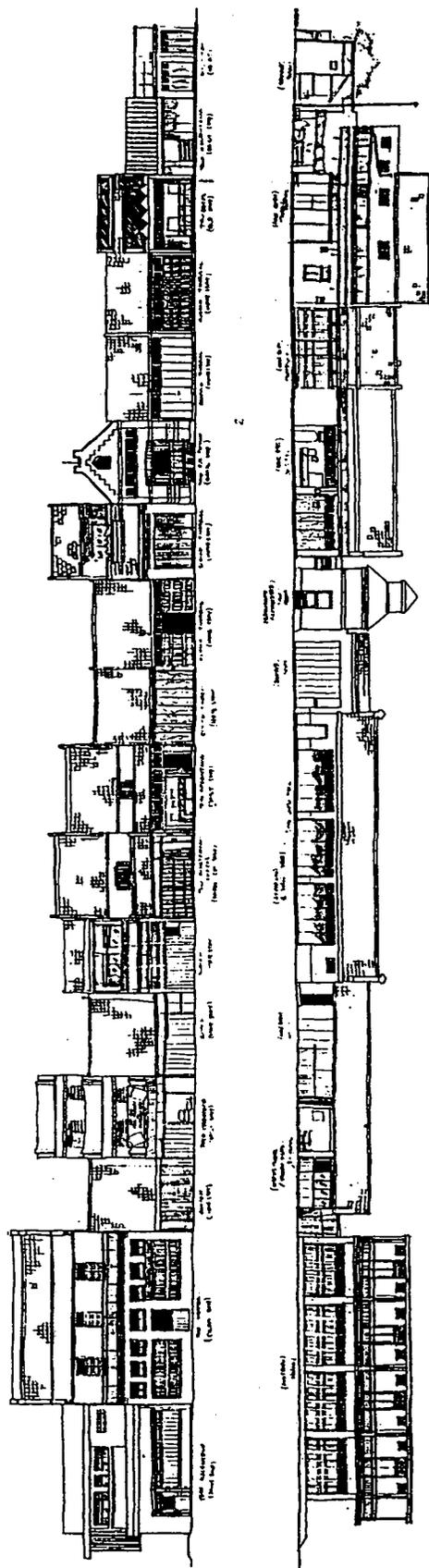


図 2 - 2 - 11 連続立面 (クタンダン)

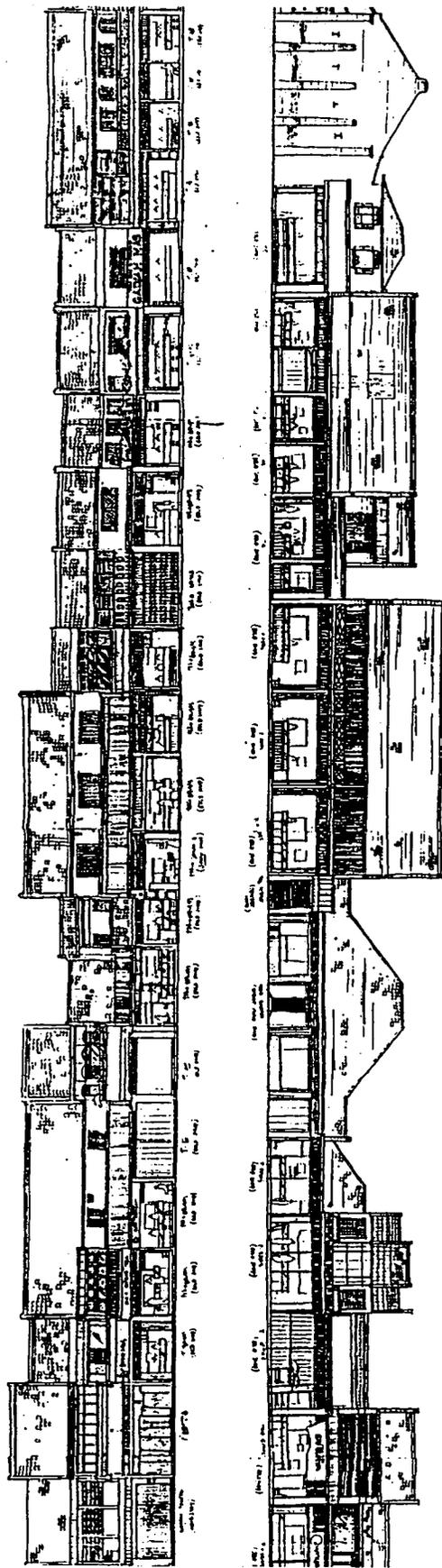
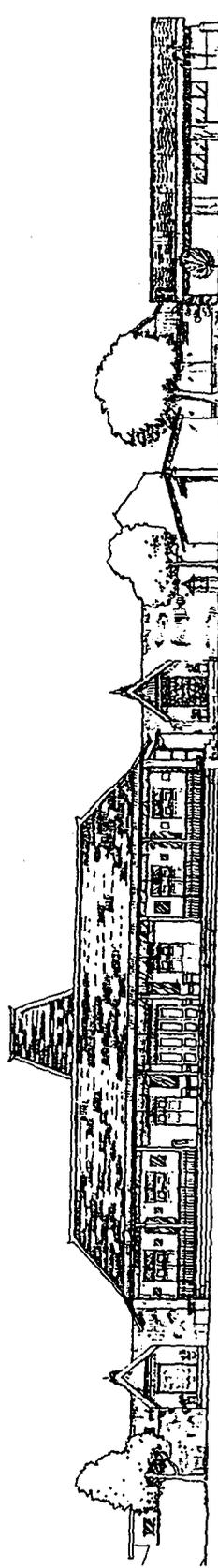


図 2 - 2 - 11 連続立面 (クタンダン) (続き)



2-2-12 連続立面(カディパテン・キドウル)

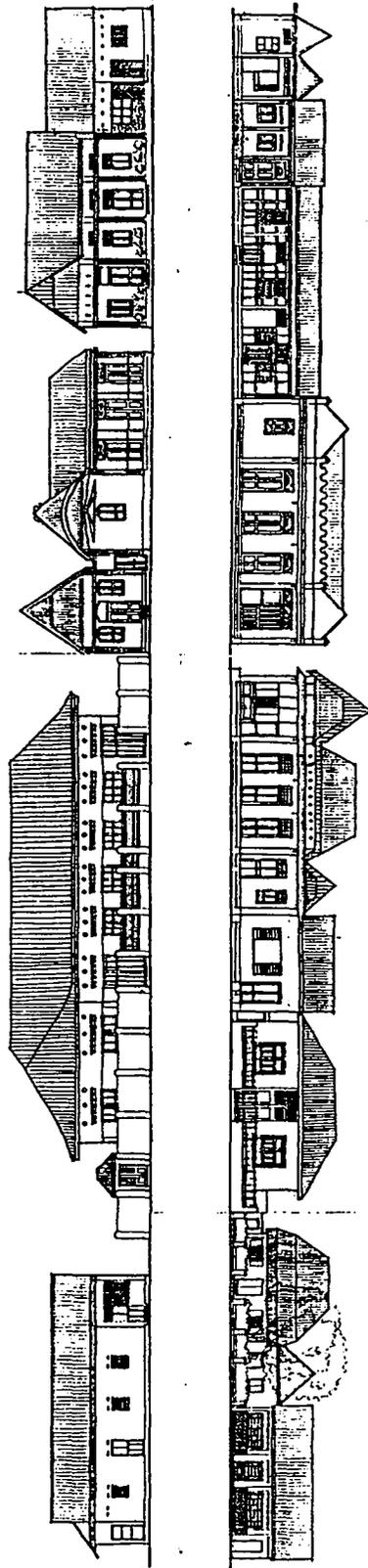


図 2 - 2 - 13 連続立面 (カウマン)

られる。

住宅の建設年およびインタビュー結果によると、人口増加に伴い住宅以外の建物が住宅に転用されているケースが多く、住宅環境はあまり良好ではないが、無秩序な住宅建設は行なわれていない。

地区4 カウマン(図2-2-13)

市街地のパターンには特に規則性はなく、一般のカンプンと同様の空間構成がみられるが、特有の装飾をもつファサードをもつ建物が多い。

土地建物の所有形態では、賃貸がかなり多いのが特徴である。住宅はジャワの貴族様式をひく住宅が3割程度存在する。ほとんどがパーマネント構造であるが、1割程度木造との混構造であるセミパーマネント構造が混じっている。住宅の3分の1は1950年以降に建てられたもので、これはカウマンに限るわけではないが、戦後の家屋密度の上昇はかなり著しい。

地区5 コタグデ

壁に囲まれたコート状の住宅の連鎖がつくりだす住居群の間を路地がつなぐ特有のパターンがみられる。

土地建物とも自己所有比率はかなり高い。ジャワの貴族住居をミニチュア化した伝統的住宅がかなりみられるが、比率的にはむしろカンプン型の住宅が多い。

住宅建設年から判断するとカウマン以上の比率で過密化が進行していることが推察されるが、敷地規模がかなり大きいために実際の印象はかなり異なる。

4 居住環境の実態とその特性

(1) 居住環境に対する満足度調査結果の概要

表2-2-7に示す居住環境に関する26項目に対して、5段階(5.非常に満足、4.やや満足、3.どちらでもない、2.やや不満、1.非常に不満)の満足度調査を行なった。それを得点化し集計して地区ごとに平均をとった。

1) 住宅環境(図2-2-14)

i) 全体

いずれの項目についてもコタバルが最も高く、また、カディパテン・キドゥルが最も低い。他の3地区との相対的な差はかなり明白であり、住宅の質の差を反映しているものと考えられる。

その他の3地区については、「住宅の規模」「住宅の住み心地」では差があまりないが、それ以外の4項目では差がみられ、それぞれの地区の住宅環境の違いを示すも

表 2 - 2 - 7 居住環境評価平均

居住環境評価項目		ヨコハマ	ウツクシ	カサガハ	カワサキ	ヨコハマ*	全体	
住宅環境	住宅の規模	4.19 0.88 47	3.64 0.84 61	3.20 1.07 54	3.62 1.05 55	3.74 0.87 58	3.67 0.98 275	
	住宅の間取り	3.47 1.12 47	3.30 0.94 61	2.70 0.94 54	3.05 1.06 55	3.14 1.08 58	3.13 1.05 275	
	深しさ	3.63 0.80 46	3.18 0.81 61	2.78 1.18 54	3.30 0.99 53	3.16 0.82 57	3.24 0.98 271	
	住宅の古さ・新しさ	3.76 0.77 46	3.59 0.74 61	2.89 0.87 53	3.35 0.86 52	3.29 0.85 56	3.37 0.86 268	
	住宅のスタイル	3.70 0.81 47	3.48 0.81 61	2.96 0.96 53	3.25 1.09 55	3.61 0.73 57	3.48 0.92 273	
	住宅環境 総合評価	4.08 0.72 47	3.67 0.70 61	3.35 0.82 55	3.69 0.84 54	3.65 0.69 57	3.66 0.76 274	
利便性	市場への便利さ	4.06 0.57 47	4.52 0.65 60	4.25 0.65 52	4.24 0.70 54	4.28 0.59 58	4.28 0.65 271	
	職場への便利さ	4.06 0.53 36	4.41 0.80 56	3.76 0.83 45	4.24 0.62 42	4.21 0.66 47	4.15 0.74 226	
	学校への便利さ	4.05 0.66 38	3.90 0.70 41	4.14 0.77 35	4.22 0.61 41	3.82 0.87 44	4.02 0.74 199	
	交通の便	3.74 0.77 46	3.70 0.73 57	3.27 1.04 55	3.35 0.93 55	3.42 0.86 57	3.49 0.89 270	
	近隣環境	3.43 0.98 46	2.73 0.82 60	3.13 0.98 53	3.19 1.09 53	3.37 0.77 57	3.10 0.96 269	
近隣環境	騒音	4.07 0.62 45	3.63 0.90 60	3.13 1.10 48	3.27 1.16 52	3.62 0.85 58	3.54 0.99 263	
	災害からの安全性	3.72 0.78 46	3.34 0.91 61	3.15 0.97 55	3.13 0.91 52	3.57 0.68 58	3.38 0.88 272	
	交通事故の安全性	3.09 0.91 46	2.65 0.94 52	2.78 0.97 51	3.35 1.21 55	3.12 0.92 58	3.04 1.01 262	
	緑のゆたかさ	3.19 0.88 47	2.36 0.93 55	2.95 1.04 55	2.15 0.97 55	2.83 0.88 56	2.68 1.00 270	
	地区の南半状態	3.32 0.73 47	2.74 1.01 61	3.27 1.03 55	3.16 1.06 55	3.09 0.78 58	3.10 0.96 276	
	地区の景観	3.23 0.81 47	2.31 0.79 61	2.62 0.84 55	2.52 0.72 54	2.81 0.61 57	2.72 0.81 274	
	地区の雰囲気	3.70 0.91 47	3.51 0.81 61	3.30 0.90 54	3.69 0.74 55	3.76 0.60 58	3.59 0.81 275	
	地区の古さ	3.80 0.69 45	3.47 0.70 59	3.27 0.97 52	3.67 0.82 51	3.60 0.59 57	3.55 0.78 264	
	社会環境	家族との近さ	3.37 0.85 46	3.51 0.60 61	3.48 0.79 54	3.49 0.92 51	3.33 0.69 58	3.44 0.77 270
		家族との距離	2.91 1.10 47	3.20 0.94 60	3.04 1.20 54	3.41 1.34 54	3.43 0.94 58	3.21 1.12 273
住民のつきあい		3.28 0.95 47	3.67 0.70 61	4.00 0.82 54	4.00 0.94 55	4.14 0.63 58	3.83 0.86 275	
セキュリティ		3.24 0.97 46	4.00 0.64 60	4.36 0.52 55	4.51 0.60 55	4.10 0.55 58	4.07 0.70 274	
住民の気風		3.17 0.79 47	3.30 0.76 61	3.36 0.91 55	3.49 0.98 55	3.40 0.75 58	3.35 0.85 276	
プライバシー		3.49 0.86 47	3.49 0.77 61	3.60 0.95 55	3.51 0.89 53	3.74 0.61 58	3.57 0.82 274	
コミュニティ活動		3.17 0.94 47	3.43 0.76 61	3.62 0.97 55	3.89 0.83 55	3.72 0.67 58	3.58 0.86 276	
総合評価		3.66 0.94 47	3.80 0.63 61	3.69 0.98 55	3.93 0.77 55	3.86 0.69 58	3.79 0.80 276	

※上段は平均、中段は標準偏差、下段は実数

のと考えられる。

ii) 地区別

地区別に特徴を述べると次のようになる。

地区1 コタバル

評点で比較すると「規模」に対する評価が最も高く、「涼しさ」「古さ・新しさ」「スタイル」についてはほぼ同水準であるが、「間取り」についての評価がやや低くなっている。住宅のもつ機能的側面の総合評価といえる「住み心地」はくやや満足>を表わす4のレベルに達している。

地区2 クタンダン

「規模」「古さ・新しさ」がほぼ同水準で最も高く、逆に最も低いのは「涼しさ」である。「スタイル」「間取り」はその間に位置する。「住み心地」はどの項目よりも高水準である。

地区3 カディパテン・キドゥル

「規模」が最も高く、他の項目との差がやや開いている。続いて「スタイル」「古さ・新しさ」「涼しさ」「間取り」の順となっているが、いずれもくどちらでもない>をやや下回る水準であり、不満がかなり強いことが推察される。しかし、その割には「住み心地」の水準が低いとはいえないわけではない。

地区4 カウマン

絶対値では低いが、コタバルと類似の得点パターンをもつ。すなわち、「規模」の評価が最も高く、「涼しさ」「古さ・新しさ」「スタイル」がほぼ同レベル、「間取り」が最も低い評価となっている。

地区5 コタグデ

「規模」「スタイル」がほぼ同水準で最も高く、「涼しさ」「間取り」が同水準で最も低い。「古さ・新しさ」はその間に位置するが、その水準は低い方の2項目に近い。「住み心地」は「規模」と「スタイル」の中間にあり高い方にある。

2) 利便性 (図2-2-15)

i) 全体

いずれの地区も、他の項目に比して「交通の便」の水準が最も低く、比較的よく似た得点パターンを示しているが、カディパテン・キドゥルだけは少し異なったパターンを示している。項目毎に地区の順位が入れ替わっており、すべての項目で他を凌ぐ地区は存在しない。

「学校への便利さ」を除いてクタンダンの水準が高いこと、また、「職場への便利

さ」でカディパテン・キドゥルの水準が低いことが特徴的である。

ii) 地区別

地区1 コタバル

「交通」を除く4項目の水準がほぼ同じであり、「交通」との間にかかなりの差がある。

地区2 クタンダン

「市場」「職場」がほぼ同水準で最も高く、「交通」が最も低い。「学校」はその中間に位置する。

地区3 カディパテン・キドゥル

「市場」「学校」がほぼ同水準で最も高く、「交通」が最も低い。「職場」はその中間に位置する。

地区4 カウマン

「交通」を除く4項目の水準がほぼ同じであり、「交通」との間にかかなりの差がある。

地区5 コタグデ

クタンダンと同様、「市場」「職場」がほぼ同水準で最も高く、「交通」が最も低い。「学校」はその中間に位置する。

(3) 近隣環境(図2-2-16)

i) 全体

得点パターンは地区毎にかなり異なっており、「スポーツ施設」を除きコタバルの得点水準が高いほかは、項目別に地区の順位が入れ替わっている。

項目別に地区の得点差の大きいものを上げると以下ようになる。

- ①「騒音」はクタンダンが特に低い。
- ②「災害」はコタバルが特に高い。
- ③「緑」はクタンダンとカウマンが特に低い。
- ④「衛生」はクタンダンが特に低い。
- ⑤「景観」はカウマンとクタンダンが特に低い。

ii) 地区別

地区1 コタバル

得点パターンからみると3つのグループに分かれている。「災害」が最も高く、「古さ」「交通事故」「霧困気」の3つはほぼ同程度でそれに続き、残りの項目はそれよりかなり下回り1つのグループを形成している。

その内訳は、高い方から順に「騒音」「衛生」「景観」「緑」「スポーツ施設」となっている。しかし、全体の水準は最も低い項目でもくどちらでもない>以上の水準であり、決して低くはない。

地区2 クタンダン

項目間の得点の差が大きく、3グループに分かれている。高い方から、第1グループは「災害」「雰囲気」「古さ」「交通」、第2グループは「スポーツ」「衛生」「騒音」、第3グループは「緑」「景観」である。第2、第3グループの水準はいずれもくどちらでもない>を下回っており評価水準は低い。

地区3 カディバテン・キドゥル

項目間の得点差が比較的小さく、2グループに分かれている。高い方のグループは「雰囲気」「古さ」「衛生」「災害」「交通」「騒音」からなり、いずれもくどちらでもない>を上回っている。低い方のグループは「緑」「景観」「スポーツ」からなりくどちらでもない>を下回っている。

地区4 カウマン

項目間の得点差が最大であり、3グループに分かれている。高い方のグループは「雰囲気」「古さ」からなる。次の中位のグループは「スポーツ」「差外」「騒音」「衛生」「交通」からなる。ともにくどちらでもない>を上回っている。3番目のグループは「景観」と「緑」からなるが、両者の他の項目との差は大きく、特に「緑」はくやや不満>に近い水準である。

地区5 コタグデ

「雰囲気」が最高であり、「緑」「景観」がほとんど同水準で最低である。他の項目はその間に分布する。高い方から「災害」「古さ」「交通」の3つがほとんど同水準で位置し、次にすこし間隔をあけて「騒音」が続き、さらに「スポーツ」「衛生」の2つがくる。

4) 社会環境 (図2-2-17)

i) 全体

カディバテン・キドゥル、カウマン、コタグデの3地区は比較的似たパターンを示し、項目毎の得点水準にもそれほど大きい開きはないが、クタンダンの得点水準はそれをやや下回り、コタバルは特に低くなっている。

中でも、「住民のつきあい」「セキュリティ」「コミュニティ活動」ではその差が大きい。

しかし、最も低いコタバルの場合でもその水準はいずれの項目についてもくどちら

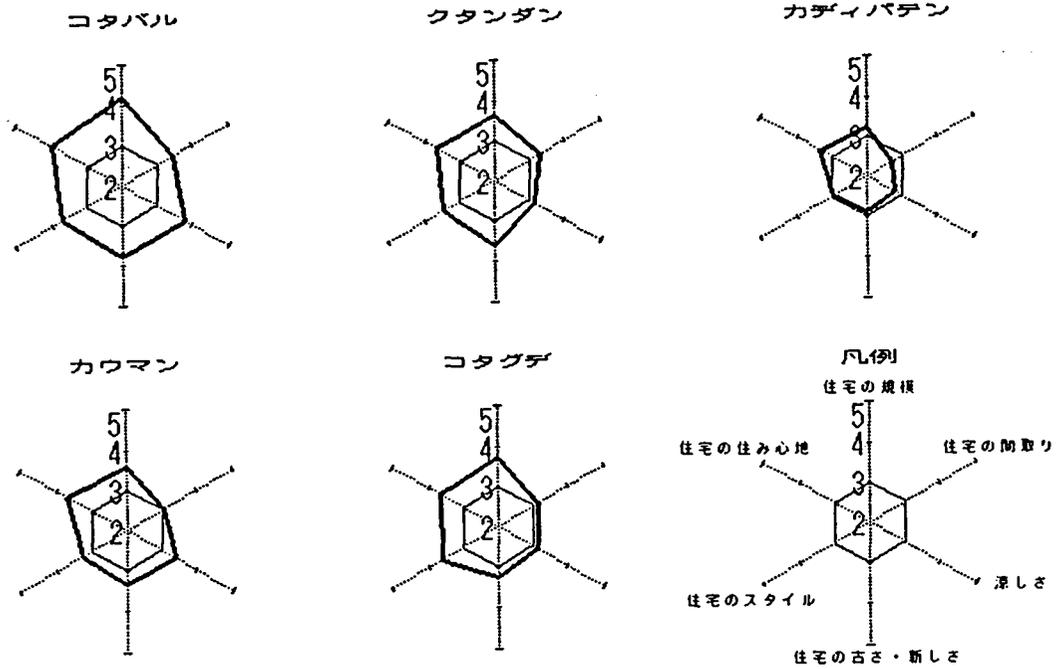


図 2 - 2 - 14 住宅環境

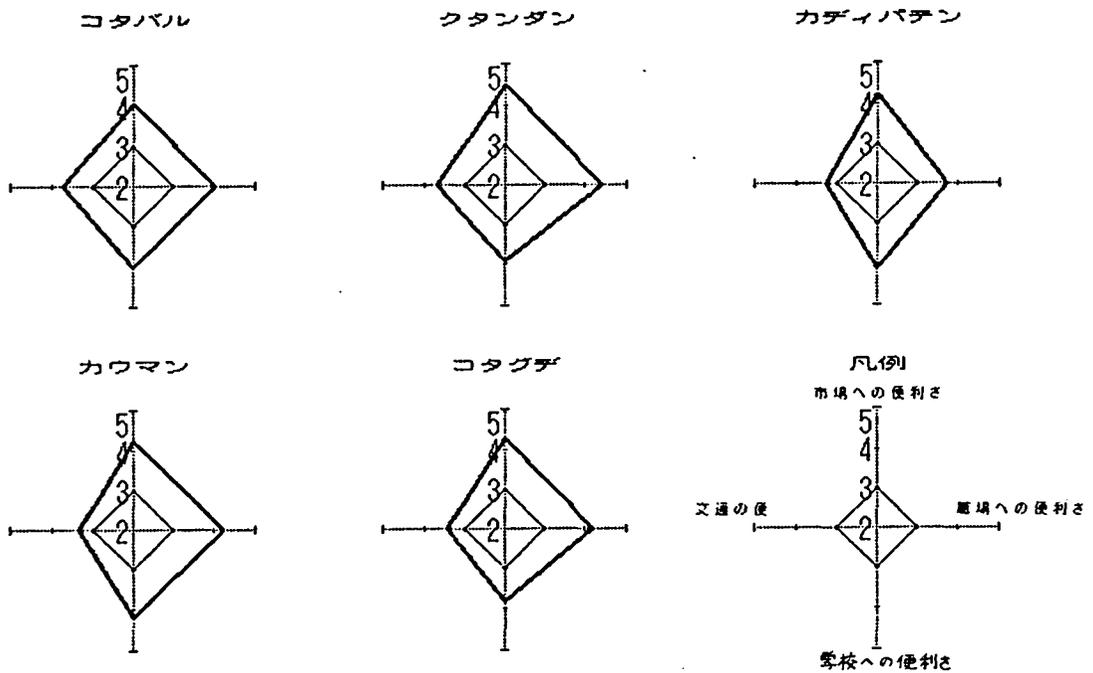


図 2 - 2 - 15 利便性

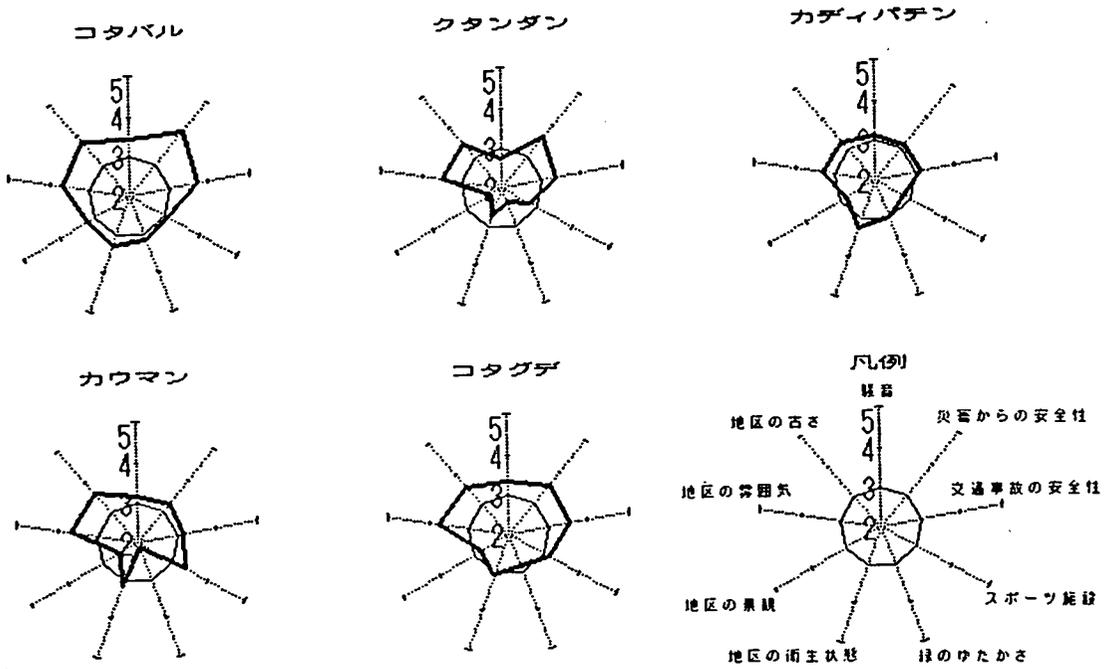


図 2 - 2 - 16 近隣環境

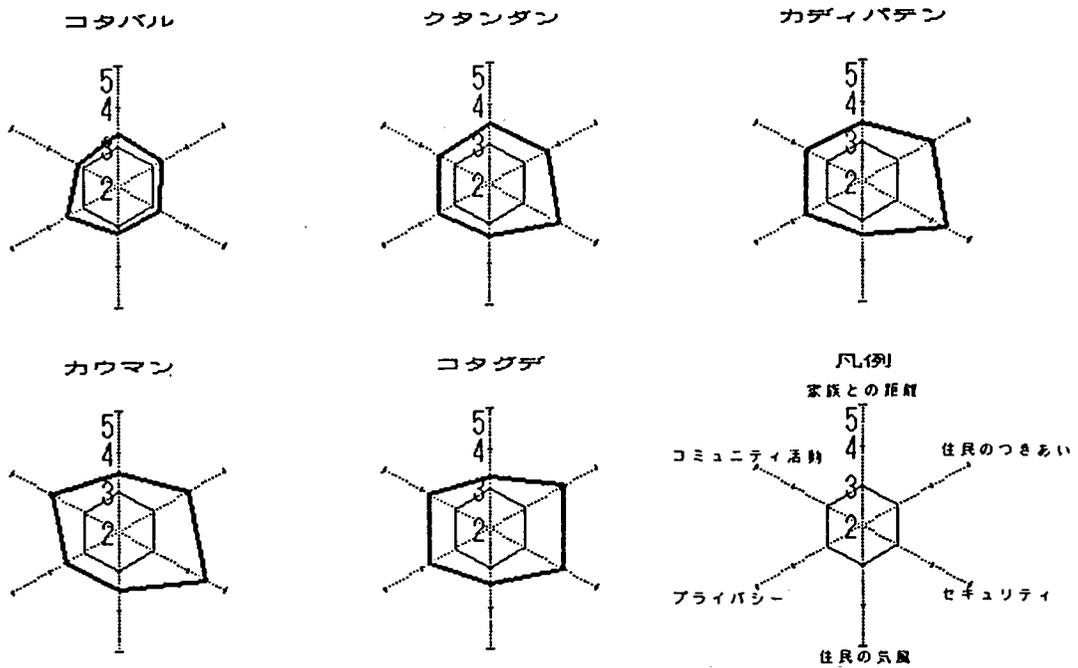


図 2 - 2 - 17 社会環境

でもない>を上回っており、特に劣悪な環境にあることを示すものではない。したがって、この結果は、他の地区、特にクタンダンを除く3地区の水準が高いと解釈すべきと考えられる。

ii) 地区別

地区1 コタバル

全項目の得点水準は低いが、項目間の差は小さい。高い方から「プライバシー」「家族」「つきあい」「セキュリティ」「コミュニティ」「気風」の順である。

地区2 クタンダン

「セキュリティ」が最も高く、少し間隔をおいて「つきあい」が位置し、さらに少し間隔をあけて「家族」「プライバシー」「コミュニティ」が続き、最後に「気風」という順になっている。

地区3 カディパテン・キドゥル

「セキュリティ」が最も高く、少し間隔をおいて「つきあい」が位置し、さらに少し間隔をあけて「家族」「プライバシー」「コミュニティ」「気風」という順になっている。

地区4 カウマン

「セキュリティ」が最も高く、少し間隔をおいて「つきあい」「家族」が位置し、さらに少し間隔をあけて「プライバシー」「コミュニティ」「気風」がほぼ同水準で位置している。

地区5 コタグデ

項目毎の得点は3つのグループに分かれている。高い方から、第1グループは「つきあい」「セキュリティ」からなり、少しおいて第2グループ「プライバシー」「コミュニティ」が続き、最後に第3グループ「気風」「家族」という順になっている。

5) まとめ

以上をとりまとめると次のようになる。

地区1 コタバル

住宅、安全性、近隣環境に対する満足度が高く物的な環境が良好であることを示しているが、対照的に社会環境に対する評価は低い。なかでもセキュリティに対する評価は5地区で最低である。

地区2 クタンダン

近隣環境、特に騒音、衛生に対する評価が低いが、利便性に対しては評価が高く、商業地型の特徴を示すものと考えてよいだろう。また、社会環境に対する評価はかな

り低い。

地区3 カディパテン・キドウル

住宅に対する不満が強いが、近所づきあいをはじめ社会環境に対してはかなり評価が高い。全体のパターンはカウマンと似ている。

地区4 カウマン

緑のゆたかさに対する不満が大きく、過密を物語っている。反面、社会環境、とくにコミュニティ活動への評価が高く、宗教に基盤を置く安定したコミュニティの存在を示すものであろう。

地区5 コタグデ

社会環境に対する満足度が高いなど、カディパテン・キドウルやカウマンと共通する点もあるが、全体のパターンはむしろクタンダンに近い。

(2) 居住地に対する満足度調査にもとづく因子分析の結果

地区別の相違をより明確にするため、満足度調査に因子分析を適用し、居住環境構造の考察を行なうと同時に、各地区の相違の把握を試みた。

1) 満足度評価因子の抽出

居住環境に対する満足度を構成している因子を抽出するために、各項目に対する回答を得点化し、これに因子分析を行なった。この分析では、全サンプルをボンド・ケースとする分析と各地区ごとの分析の両方を行なうことによって今回の調査データをもとにえらえるすべての因子を把握することを試みた。

居住環境評価のうち分析に用いた項目は表2-2-8の通りである。利便性に関する3項目を省いた理由は、ともに欠損値が比較的多かったためである。

i) 全地区を対象とする因子分析

分析の結果、6つの因子が抽出された(表2-2-8)。

第1因子は、「住民の気風」「コミュニティ活動」「セキュリティ」「近所づきあい」「地区の雰囲気」の5項目から構成されている。主として地区の環境の社会的側面に関連していると判断されることから「社会性因子」と命名する。

第2因子は、「古い地区へ住むこと」「家族との近さ」の2項目から構成されている。「親近性因子」と命名する。

第3因子は「災害からの安全性」「地区の景観」「交通の安全性」「交通の便」から構成される。「安心性因子」と命名する。

第4因子は、「緑のゆたかさ」「スポーツ施設」「地区の衛生状態」から構成される。地区環境を構成するアメニティ要素に関連するものであり「快適性因子」と命名

する。

第5因子は、「騒音」「住宅の住み心地」「プライバシー」の3項目から構成される。「居住性因子」と命名する。

第6因子は、「市場への利便性」から構成される。「利便性因子」と命名する。

ii) 因子得点からみた地区特徴

各地区ごとに因子得点の平均をとり、地区の特徴を把握する（表2-2-9および図2-2-18）。

地区1 コタバル

第1因子および第6因子が低く、残りの4因子が高いパターンを示している。中でも第3因子の水準は高い。

都市における立地のよさ、また、その他の物的環境のレベルも高い反面、社会的環境の水準が低いことを示している。

地区2 ブチナン

第6因子が高く、第1、第2、第3因子が中位、第4、第5因子が低いパターンを示している。

つまり、生活の快適性のレベルは高くはないが、利便性が高いのがブチナンの特徴であるといえる。

地区3 カディパテン・キドゥル

第2、第3因子が低く、それ以外は中位程度のパターンを示す。居住地としての適性にやや欠ける点があることが推察される。

地区4 カウマン

第1因子が高く、第3因子が低いパターンを示す。社会環境は良好だが、安全性の面でやや欠点があると推察される。

地区5 コタグデ

ほぼ平均的だが、第1因子、第5因子の得点が心もち高めである。

iii) 総合評価との関係からみた地区特徴

因子分析によって抽出された6つの因子が、居住環境全体の評価に対してどのような関係をもつかについての各地区ごとの特徴をみるために、各地区ごとの因子得点の平均を求め、総合評価である「住宅地全体の住み心地」との相関係数を算出した。表2-2-10はその結果である（図2-2-19）。

地区1 コタバル

第1因子および第3因子との相関が高い。多くの項目について満足度が高い割に、

表 2 - 2 - 8 因子負荷量および寄与率

環境評価項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	共通性
住民の気風	0.62669	0.15455	0.33268	0.03660	0.05973	-0.13878	0.55146
コミュニティ活動	0.62586	0.30869	-0.02282	0.29152	-0.17102	-0.13158	0.61906
セキュリティ	0.54990	-0.09194	-0.17499	-0.06553	0.02355	0.16299	0.37288
近所づきあい	0.53171	0.11352	-0.08863	0.01367	0.12087	0.04707	0.32047
地区の雰囲気	0.46155	0.37872	0.31590	0.11346	0.23497	-0.06389	0.52841
古い地区へ住むこと	0.12298	0.75365	0.27798	-0.06360	0.24261	-0.12176	0.73811
家族との近さ	0.14109	0.49697	-0.03647	0.22554	-0.06676	0.03250	0.32460
災害からの安全性	-0.01983	0.05566	0.55156	-0.04078	0.06341	0.12173	0.32822
地区の景観	-0.01547	0.06638	0.35782	0.30126	0.21213	-0.17867	0.30036
交通の安全性	0.03868	0.07288	0.34657	0.11542	0.04356	-0.03619	0.14345
交通の便	-0.03650	-0.00217	0.28099	0.04286	-0.00720	0.02792	0.08296
緑のゆたかさ	-0.19801	-0.02600	0.26778	0.56165	0.04009	-0.11826	0.44263
スポーツ施設	0.13343	0.18185	-0.07837	0.52135	0.13187	0.08229	0.35298
地区の衛生状態	0.22391	0.03245	0.29866	0.46573	0.02538	-0.01372	0.35812
騒音	0.05030	-0.05155	-0.00478	0.18889	0.53105	-0.16609	0.35049
住宅の住み心地	0.02869	0.21520	0.19027	-0.06326	0.41000	0.16264	0.28189
プライバシー	0.28568	0.07963	0.05565	0.09654	0.32978	-0.26690	0.28036
市場への利便さ	0.03957	-0.02583	0.09369	-0.00122	-0.06993	0.65469	0.44452
固有値	2.88499	1.31823	0.84803	0.72233	0.58602	0.46138	
寄与率 (%)	16.0	7.3	4.7	4.0	3.3	2.6	
累積寄与率 (%)	16.0	23.4	28.1	32.1	35.3	37.9	

表 2 - 2 - 9 因子得点平均表

地区	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
コタバル 有効票数 41	-0.739 0.942	0.218 0.793	0.672 0.527	0.248 0.619	0.314 0.817	-0.327 0.682
ブチナン 有効票数 45	-0.139 0.690	-0.028 0.807	-0.065 0.629	-0.416 0.753	-0.268 0.568	0.318 0.696
カディパテン 有効票数 37	0.149 0.824	-0.324 0.965	-0.380 0.920	0.164 0.792	-0.233 0.873	-0.066 0.898
カウマン 有効票数 40	0.560 0.751	0.096 0.879	-0.312 0.684	-0.022 0.978	0.029 0.649	0.081 0.642
コタグデ 有効票数 53	0.163 0.604	0.009 0.689	0.036 0.659	0.063 0.662	0.126 0.559	-0.032 0.612

※上段は平均、下段は標準偏差

表 2 - 2 - 10 因子得点と総合評価項目との相関係数

地区	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
コタバル 有効票数 41	0.5637 0.000	0.2968 0.030	0.5405 0.000	0.2487 0.058	0.3455 0.013	-0.3165 0.022
クタンダン 有効票数 45	0.4462 0.001	0.3673 0.007	0.2264 0.067	0.0084 0.478	0.2499 0.049	0.1151 0.226
カディパテン 有効票数 37	0.2501 0.068	0.2629 0.058	0.2869 0.043	0.1044 0.269	0.3918 0.008	-0.3116 0.030
カウマン 有効票数 40	0.4271 0.003	0.5510 0.000	0.1768 0.138	0.1464 0.184	0.3051 0.028	0.3038 0.028
コタグデ 有効票数 53	0.5138 0.000	0.4967 0.000	0.3282 0.008	0.3706 0.003	0.1623 0.123	0.1406 0.158
全地区 有効票数 216	0.4288 0.000	0.3798 0.000	0.2459 0.000	0.1526 0.012	0.3002 0.000	-0.0445 0.258

※上段は相関係数、下段は有意水準

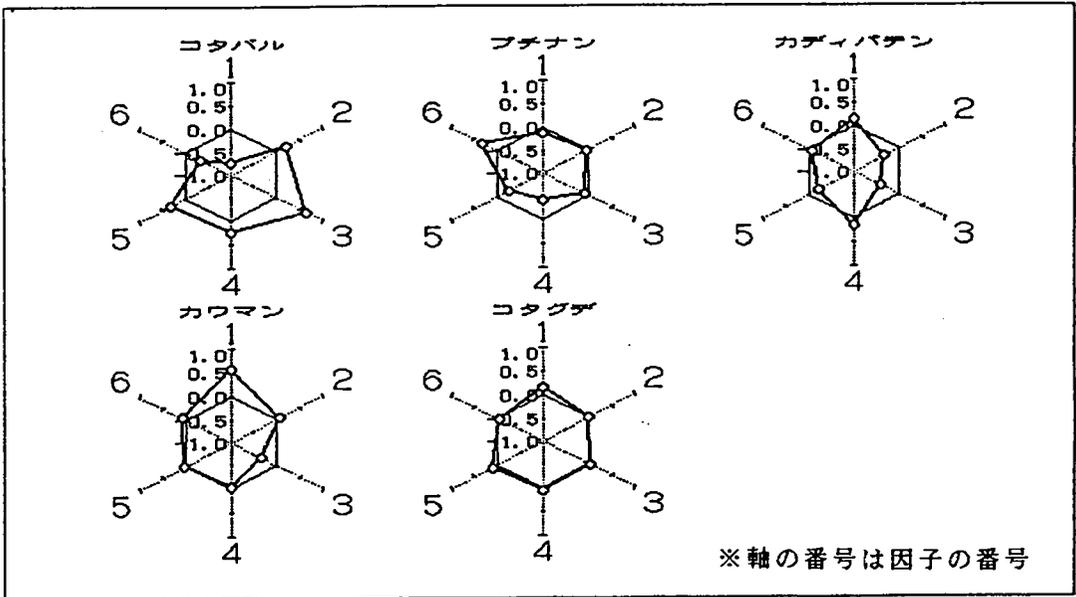


図 2 - 2 - 18 因子得点平均

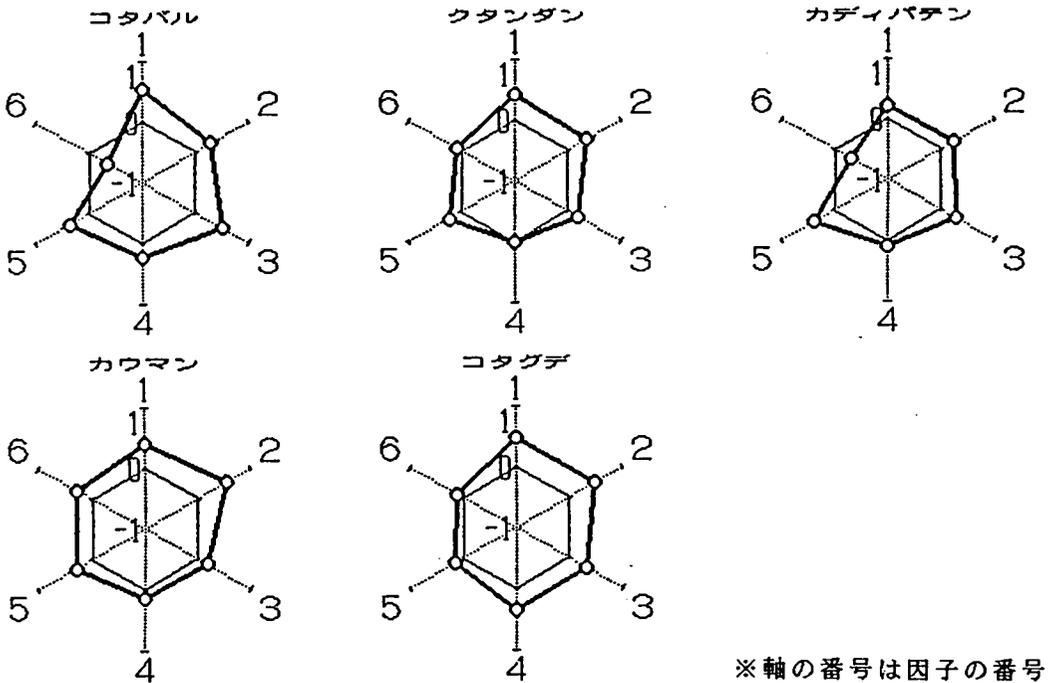


図 2 - 2 - 19 因子得点と総合評価項目との相関係数

居住環境全体に対する評価が低い理由が第1因子である社会性因子の評価が低いことに起因することを示すものと考えられる。

地区2 クタンダン

第1因子との相関が比較的高く、この点ではコタバルと同様である。また、第6因子が高得点の割に、地区全体の満足度へとつながっていないことを示している。

地区3 カディパテン・キドゥル

第5、第6因子との相関が高目である。住宅に対する不満が、居住地全体の評価に影響していることを示すものと考えられる。

地区4 カウマン

第1、第2因子との相関が高い。特に社会環境の評価がそのまま居住地全体への評価の高さとなっていることを示すと考えられる。

地区5 コタグデ

第1、第2因子との相関が高く、カウマンと比較的似た傾向を示している。

2-3 要約

前章では、ジャワ島都市が複数の異なった伝統の系譜に属する類型別市街地によって構成されており、そのために、その空間構成においても、生活空間の伝統という点でも多面性をもつことを指摘した。しかし、第I部のねらいとして提示した、都市がどのような空間構成をもち、それが社会的文脈においてどのように構造化されているかという設問にこたえを出すためには、それぞれの類型別市街地およびその相互関係についてももう少し詳しく知り、それを1つの都市空間および社会のなかに位置づけることが必要になる。

そこで、本章では、前章であきらかにした市街地類型をもちいて空間構成および社会的位置づけを明快にすることを目的として設定した。具体的には、植民地期以前から土着権力のみやこであったジョクジャカルタを対象として、インタビューおよび文献資料調査によって類型別市街地の立地とその形成過程を把握し、その上で5つの類型に対応する5地区を選び、フィールド調査によって居住者属性と空間構成および居住環境の特性をあきらかにした。前者は空間構成、後者は社会的性格の解明をねらいとしたものである。その結果は次の通りである。

ジャワ島都市には一定の市街地構成をもつケースが観察される。それは、土着権力のクラトンを核に発展してきた都市に典型的にみることができるもので、空間的にはモザイクということばのもつ語感とは異なり一定の構造をもつものといってよい。

その社会的位置づけについては、前章で述べたように、類型別市街地が特定の社会集団の存在と結びつき、それぞれ特徴的な空間構成および居住環境を維持していることを確認した。しかしながら、居住者の社会的位置づけについては、上述した特定の社会集団との関連の事実を指摘するにとどまっており、それがどの程度の深度をもつか、あるいは、経済階層など別の尺度の上ではどのように位置づけられるかなどについては必ずしもあきらかにしえなかった。その解明は今後の課題である。

空間構成および居住環境については、それぞれの社会集団が生活空間に対してもつ志向がかなり解明できたと考えられる。各類型で異なった点も多く、それが、社会集団を差別化しその伝統ともなっていると考えられるが、一方、共通する点もいくつかみうけられた。

居住環境を構成する要素のうちで社会環境がもっとも重要な意味をもつことなどはその1つである。今回の調査対象地区のなかで物的環境がもっとも良好と考えられるコタバルにおいて居住環境全体に対する総合評価が低く、逆にカウマンやカディパテン・キドゥルでは、物的環境については相対的に低い評価にもかかわらず総合評価はそれほど低い値を示さなかった。過密など物的環境への不満を社会環境のよさが補うことになっていると考えられる。

これは、イスラム・コミュニティとして知られるカウマンおよびコタグデで社会環境の評価がきわめて高いことが示すように、宗教などの社会的ファクターの重要性を意味するものと考えらるべきであろうが、それにとどまらず、家屋密度の高さなど空間的ファクターと関連において生活空間のジャワ的あり方を示唆するものと思われる。その詳細の解明は今後の課題である。

各地区の空間構成の概要は次の通りである。

①地区1（コタバル）

西欧的コンセプトでつくられた住宅地であり、規則的な広い街路、十分なオープンスペースがとられ、宅地割は整形で広い。

土地建物は過半が自己所有だが、カディパテン・キドゥルを除き、他地区と比べてややその比率は低い。

住宅の8割強は今世紀初頭建てられたコロニアルスタイルの一戸建てで、構造については全部が煉瓦造瓦葺き屋根のパーマネント構造である。

居住地の変容の程度は低い。住宅のほとんどは簡単な改造を施しただけでそのまま使われている。

②地区2（クタンダン）

街路に沿ってショップハウスが連続する典型的なブチナンのパターンを示しているが、街区の内部は家屋が不規則に並びカンブンのみである。全体に稠密であり、オープンスペースや緑が少ない。

土地建物の自己所有比率は、土地は7割程度だが建物については9割程度と高い。住宅は建てかえが進み中国的なファサードを失っているものが多いが、平面構成に大きな変化はない。全体の約9割がこうした構成である。住戸内には木製間仕切りが使われているが、基本的には煉瓦造瓦葺きのパーマネント構造である。

建物の建てかえが活発であり、地区のみえがかりの変容は早い。

③地区3（カディパテン・キドゥル）

ダレムを中心に周囲に住宅が並ぶ特有のマガルサリというかたちがみられる。全体の6割強がこれに相当する。

人口増加に伴い住宅以外の建物が住宅に転用されているケースが多く、住宅環境はあまり良好ではないが、無秩序な住宅建設は行なわれていない。

④地区4（カウマン）

市街地のパターンには特に規則性はなく、一般のカンブンの同様の空間構成がみられるが、特有の装飾をもつファサードをもつ建物が多い。

土地建物の所有形態では、賃貸がかなり多いのが特徴である。住宅はジャワの貴族様式をひく住宅が3割程度存在する。ほとんどがパーマネント構造であるが、1割程度木造との混構造であるセミパーマネント構造が混じっている。

戦後の家屋密度の上昇はかなり著しい。

⑤地区5（コタグデ）

壁に囲まれたコート状の住宅の連鎖がつくりだす住居群の間を路地がつなぐ特有のパターンがみられる。

土地建物とも自己所有比率はかなり高い。ジャワの貴族住居をミニチュア化した伝統的住宅がかなりみられるが、比率的にはむしろカンブンの住宅が多い。

住宅建設年から判断すると、カウマン以上の速度で過密化が進行しているが、敷地規模がかなり大きいために実際の印象はそれほどではない。

また、各地区の居住環境の概要は次の通りである。

①地区1（コタバル）

住宅、安全性、近隣環境に対する満足度が高く物的な環境が良好であることを示しているが、対照的に社会環境に対する評価は低い。なかでもセキュリティに対する評価は5地区で最低である。

②地区2（クタンダン）

近隣環境、特に騒音、衛生に対する評価が低いが、利便性に対しては評価が高く、商業地型の特徴を示すものと考えてよいだろう。また、社会環境に対する評価はかなり低い。

③地区3（カディパテン・キドウル）

住宅に対する不満が強いが、近所づきあいをはじめ社会環境に対してはかなり評価が高い。全体のパターンはカウマンと似ている。

④地区4（カウマン）

緑のゆたかさに対する不満が大きく、過密を物語っている。反面、社会環境、とくにコミュニティ活動への評価が高く、宗教に基盤を置く安定したコミュニティの存在を示すものであろう。

⑤地区5（コタグデ）

社会環境に対する満足度が高いなど、カディパテン・キドウルやカウマンと共通する点もあるが、全体パターンそのものはむしろクタンダンに近い。

本章では、以上にみるように、ジャワ島都市には空間構成に一定の構造をもつケースが存在すること、それは1つの都市社会において特定の社会集団の住みわけによって形成、維持されており、その意味では社会的にも構造化されたものであることを指摘した。

補注

- (1) スロスマルジャン「中間都市ジョクジャカルタの構造と変動－空間的、歴史的
形成の特質」古屋野正伍編著『東南アジア都市化の研究』アカデミア出版会、
1987、pp.414
- (2) RTは Rukun Tetangga の略であり、隣組に相当する。
- (3) RKは Rukun Kampung の略であり、連合町内会に相当する。
- (4) UNIVERSITAS GADJAH MADA JOGJAKARTA BAGIAN ARSITEKTUR FAKULTAS TEKNIK
DALAM KURDJA SAMA DENGAN DEPARTEMEN PEKERDJAAN UMUM & TENAGA LISTRIK
DIREKTORAT DJENDRAL TJIPTA KARYA DIREKTORAT TATA KOTA & DAERAH:JOGJAK-

ARTA;PENELITIAN AWAL TATA KOTA,Yogyakarta,1971

- (5) バンドンでは都市構造が、鉄道線路を挟んで、北部高地のオランダ人地区と南部低地のインドネシア人地区の区分けが特に明快であった。
- (6) 他に、カーステンは、スマラン、バンドン、バタフィア、マグラン、マラン、ブイテンゾルフ、マディウン、チレボン、ミースターコーネリウス、スラカルタ、プルウォクトなどの計画に関与した。(BOGAERS,E.et.al.:Ir.Thomas Karsten and Indonesia Town Planning,1915-1940,in "NAS,P.J.M.ed.:THE INDONESIAN CITY,Dordrecht,1986,p.75)
- (7) GUINNESS,P.:RUKUN KAMPUNG;SOCIAL RELATION IN URBAN YOGYAKARTA,Unpublished Paper,1981,p.23-24
- (8) ガジャマダ大学講師アルディ・P・バリミン氏による。
- (9) コタグデに詳しい千葉大学教授中村光男氏による。
- (10) コタグデのイスラム・コミュニティについては NAKAMURA,H.:THE CRESCENT ARISES OVER THE BANYAN TREE,Yogyakarta,1983 に詳しい。
- (11) 間学谷栄『現代インドネシア研究-ナショナリズムと文化』勁草書房、1986、pp.99-101

第II部 伝統的都市における空間構成とその変容に関する考察

第I部では、ジャワ都市における市街地の構成と実態に関する考察を試みた。それは、いふなれば、ジャワ都市における生活空間の伝統の系譜を、市街地構成を通して見取り図化する作業であったと位置づけられる。

ここでは、そのうち植民地期以前の都市における生活空間の存在様式を伝統として継承していると考えられる市街地について、その伝統の系譜を遡行するとともに、その空間構成をあきらかにし、現在の変容の要因とその方向について考察することを試みる。それは、ジャワ都市における生活空間の伝統の1つの系譜についてより詳細に把握する作業であり、第I部を総論とすれば各論に当たるものといえることができるだろう。

東南アジアは都市的伝統の希薄な地域であるといわれる（注1）。植民地期以前には都市の数自体が少なかった上に、人口規模の点で当時の都市化先進地域であるヨーロッパなどの大都市に匹敵しうる都市は存在しなかった。したがって、現在の都市の多くは植民地期にその基盤が形成されたものである。

ジャワもまた例外ではない。現在のジャワ島は地球上で最も人口高密度な地域として知られているが、ジャワの人口が急増したのは19世紀オランダによる強制栽培制度が実施されて以降であり、それ以前は比較的低密度であった。したがって、歴史的に見れば、植民地期はジャワの人文景観に大きな変化が生じた時期と位置づけられる。それは、都市の姿をも一変するに至った。

植民地期以前のジャワ都市の存在様式は現在の都市とはかなり異なるものであり、現在の都市の通念自体から大きく隔たったものであった。矢野は、東南アジア地域に現在における都市の通念で理解可能な都市が登場したのは植民地期を契機とすると述べている（注2）。

こうした一連の事実は、前述の「自生的都市形成」と「他成的都市形成」、のみならず、「系統発生的都市」と「異種発生的都市」をめぐる議論にも格好の材料を提供することになっている（注3）。

その1つに、東南アジアにおける都市性の問題がある。現在のところ定説はないというが、その理由の1つは村落と都市の区別が曖昧という点にある。人口集積やそれに起因する形態的相違だけでは、必ずしも都市と農村の区別は明確にならないというのが一般的見解である（注4）。

したがって、ホイートリーは、東南アジアの都市性を「中心点（セントロイド）」

という概念によって説明しようとする(注5)。ナスは、同様のアイディアに立ち、われわれのまわりで普通に見ることのできる「ローカル・アーバニズム」に対する「フォーカル・アーバニズム」というタームを用いて、この地域の都市化の特徴を表現している(注6)。マッキーが現在の東南アジア諸国の首都の発展を「神聖都市の再来」と呼び(注7)、矢野が「メトロポール型発展」と名づけたのも同様の文脈にあると考えてよいだろう。

こうした見解は、歴史学や考古学の研究成果によってあきらかになった、かつての都市の姿にもとづいている。しかしながら、植民地期以前の都市については、そのロイヤル・コンプレックスのレイアウトに比べて、一般の人びとの住む市街地の状況はほとんどわかっていないのが実情である。

例えば、ナガラクルタガマに登場するマジヤパイトに関する記述には、一般庶民の住む市街地についての記述はない。そもそも都市の存在様式の中に、現在では自明の通念である市街地に相当する概念が存在したのかどうかさえ明確ではない。

現在、都市の市街地に最も近い文脈で用いられていると考えられるターミノロジーはカンブンであるが、その実態はデサと大差なく、カンブンを農村的なものの表出とみなす見方も根強い。

その根底には、都市は非都市であるデサと対をなすべきものであり、都市の市街地は本来デサとは異なるべきという前提が存在しているように思われる。しかし、前述したように植民地以前の都市は必ずしも大規模な人口集積を伴うものではなく、人口集積の度合いだけが都市とデサを区分したとは考えられない。

植民地期以前の都市における市街地はどのようなものであったのか。この疑問を解く上で、類型3および5の市街地は有効な鍵となる。それは、マジヤパイト期のジャワの状況を推察するために、現在のバリがレファレンスされているのと同様の意義をもつものと考えられる。この仮定の上に立ち、現在の都市において実際に生活空間として人びとの生活の舞台となっている類型3および5の市街地を対象に、その空間構成原理とその変容の方向をあきらかにすることが第II部の主要な論点である。

補注

(1) COBBAN, J. L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY, Ann Arbor, 1970

(2) 矢野暢『東南アジア世界の構図』日本放送出版協会、1984、p. 80

- (3) 古屋野正伍「アーバニズムと都市化－発展途上国社会への適用をめぐる－」
林武編『発展途上国の都市化』アジア経済研究所、1976、pp.44-45
- (4) 矢野暢、前掲書、pp.74-77
- (5) WHEATLY,P.:NAGARA AND COMMANDERY;OROGINS OF THE SOUTHEAST ASIAN URBAN
TRADITIONS,ILLIOIS,1983
- (6) NAS,P.J.M.,The Early Indonesian Town;Rise and Decline of the City-
State and its Capital,in "NAS,P.J.M.et.al.ed.:THE INDONESI-AN CITY,
Dordrecht,1986"
- (7) McGEE,T.G.:THE SOUTHEAST ASIAN CITY;A SOCIAL GEOGRAPHY OF THE PRIMATE
CITIES OF SOUTHEAST ASIA, London, 1969,p.19

第3章 ジャワ都市における空間構成とその構成原理

3-0 はじめに

1 視点

第1部でとり上げた類型3および5の市街地は、植民地期以前の都市における生活空間の存在様式を継承するものと考えられる。

植民地期以前のジャワ都市については、ジャワ島中部および東部内陸に発生した土着権力の王宮を中心とする「土候都市」と、北部のジャワ海沿岸に発達した港市を基盤とする都市国家型の「港市都市」という2つの類型によって説明するのが一般的であることは既に述べた。

これらの都市についての情報は断片的であり、その存在様式についてはまだ不明の点が多く存在している。しかも、その多くは都市レベルの空間構成に関するものであり、地区レベルの空間構成に言及している研究は今のところそれほどないのが現状である。既存の研究によってあきらかにされた都市像と現在の類型3および5の市街地の間には大きな隔たりが存在する。

したがって、ジャワ都市における空間構成の伝統についての既存研究の知見を整理し、この2つを共通する伝統の系譜に位置づけることが本章のねらいの1つである。同時に、それによって、類型3および5の市街地がどのような空間構成原理を基底構造として持っているかについて考察することがもう1つのねらいである。

2 目的と構成

本章では、主として、歴史上に存在した都市、および、現存する伝統的都市についての既存研究を参考にして、ジャワ都市における空間構成原理を考察することを目的としている。

ここでいう伝統的都市とは、植民地期以前の都市の空間構成の存在様式にもとづいて開発されたと考えられる都市を指す。このことは、必ずしもその都市が直接植民地期以前に起源をもつことを意味しない。植民地期に形成された都市であっても、主としてジャワ人の手によって、ジャワの伝統的な空間構成原理にしたがってつくられたものであれば伝統的都市と規定する。換言すれば、類型3および5の市街地をもつ都市といってもよい。

本章の構成は、まず、第1節では、主として既往研究の成果に依拠しながら、ジャワにおける空間構成の系譜を概観しその特徴について整理する。伝統的都市の市街地空間の構成原理を理解するための準備作業と位置づけられる。

次に、第2節では、伝統的都市であるジョクジャカルタを対象として、市街地の空間構成とその変容を通じて、市街地空間の構成原理を考察する。

さらに、第3節では、主として、伝統的都市であるコタグデの住宅を対象として、その空間構成を把握する。

－3 研究方法

(1) 調査内容と方法

本章の構成は、とり上げる対象から2つに大別される。第1節および第2節では主として市街地のレイアウトパターンを、第3節では住宅を対象として分析を行なう。

まず、第1節では、歴史上の都市における空間構成について、主として都市レベルのレイアウトパターンを把握する。文献資料に依拠している。

第2節では、まず、①ジョクジャカルタのクラトン・コンプレックスの空間構成、および、②ダレムの空間構成を把握し、次に、③コタグデの市街地構成について述べる。

①②は研究者などへのインタビューおよび文献資料からえられた知見を、市街地図から読みとることのできる地図情報によって検証していくかたちをとった。

また、③は既存の研究成果およびフィールド調査にもとづく。フィールド調査の内容は住民へのインタビューによる市街地の形成過程の解明である。

第3節では、まず、中部ジャワの伝統的住居の構成、次に、コタグデの住居の構成について述べる。前者は文献資料、後者は文献資料およびフィールド調査によってえられた知見にもとづいている。フィールド調査の中核をなすのは、住宅の実測調査である。

(2) フィールド調査の概要

フィールド調査は、コタグデを対象として、1985年7月から8月にかけて行なわれた一連のフィールド調査の一環である。詳細は第4章に記す。

インタビュー調査にあたっては、ジョクジャカルタに生まれ在住してきたジャワ系インドネシア人大学生1人をアシスタントとし、使用言語はジャワ語である。

また、住居実測調査については第4章で述べる。

－4 調査対象都市

調査対象都市として、ジョクジャカルタおよびコタグデをとり上げる。

ジョクジャカルタは、既に第1部で述べたように、類型3の市街地の存在によって

特徴づけられる、かつての「内陸土候都市」の代表的存在である。クラトン・コンプレックスは観光開発の影響を免れていないが、その基本的な空間構成は失われていない。

一方、コタグデは、類型5の市街地に属する数少ない存在であり、植民地期以前に起源をもつと考えられる小都市である。市街地には中部ジャワ地域の伝統的住居がみられ、特有の空間構成が維持されていることなどから、植民地期の変容は比較的少なかったと判断される。

したがって、植民地期以前の都市における空間構成の伝統を継承していると考えられ、その意味ではジャワ都市のミッシングリンクとでも位置づけられる存在である。

こうした点から、ジョクジャカルタおよびコタグデは、植民地期以前の都市における空間構成の存在様式を考察する上で格好の材料であると考えられる。

調査対象都市の概要は、ジョクジャカルタについては第1章、なかでも、市街地構成についての考察の対象とするカディパテン・キドゥルについては第2章、コタグデについては第1章に述べた通りである。

3-1 ジャワにおける空間構成の系譜

1 建築および都市の空間構成

(1) プレヒンドゥ期

プレヒンドゥ期、つまり、ヒンドゥを支配原理とする一連の国家群が成立する以前のジャワには、複数の村落を統合するかたちの国家の萌芽ともいべき土着権力が発生していた可能性が考えられている（注1）。

この期に都市と呼べるものが存在したかどうかは定かではないが、農業を経済的基盤とするアニミズム的世界観によって統合された自律的性格をもつ村落を基本的な居住地形態であったとする見解が一般的である（注2）。その具体的な空間構成について詳しいことはわかっていないが、少なくとも村落共同体を維持するために宗教にもとづく統合原理を発達させていたとみられる。

ジャワ特有のマンチャパットとして知られる空間構成原理は、プレヒンドゥ期に起源をもつものという見解がある。マンチャパットの中核的概念は4つの方位と中心性からなる空間構成原理である。グナワンは、これがそのまま当時の集落レイアウトに適用されたかどうかについては断定しえないが、以後のさまざまなコスモロジカルなコンセプトにもとづく空間構成原理の基底構造を提供することになったと述べている（注3）。

この見解の正当性について断を下す立場にはないが、一般に外来の文化、文明の受容は既存の文化の中に類似の構造がある場合には比較的容易であるということが定説となっている（注4）。人類学でいう文化的共鳴という現象だが、確かにこうした観点からみればまったく根拠がないとはいえない面がある。

プレヒンドゥ期の空間構成原理に付随する特徴は次の4点といわれる（注5）。

- ①コスモロジカルなコンセプトとしてのマンチャパットの存在。
- ②祖先崇拝と超自然力信仰、および、それから派生する海と山に象徴される2項対立図式を特徴とする世界観。
- ③ジャワの特徴として知られている調和と尊敬の概念。
- ④ワンの前身である舞台劇の存在。これもまた2重性の表現である。

このうち第2点目の海と山をめぐる2項対立図式は、空間に一定の軸性を設定する原理として機能することになる。

こうした特徴はそのまま現代でも確認されることから、次のヒンドゥ期に受け継がれることになったことがわかる。

（2）ヒンドゥ期

1）チャンディの空間構成

ヒンドゥ期になると多くの石造建造物、チャンディが建設され、これらのチャンディから当時の建築および都市の状況についてある程度の推測が可能になっている。

チャンディの形態は個々にバラエティに富み、容易に一般化しえない点も多いが、ここではこうした細かな相違点については言及を避け、代表的な事例について考察を進める。

中部ジャワにおけるヒンドゥ期の代表的なチャンディであるプランバナンでは、中央に大チャンディが聳え、その周辺を小さな数多くのチャンディが取り巻いたプランになっている（図3-1-1）。これは後述するジョクジャカルタのクラトン・コンプレックスにもみられる特徴であり、ヒンドゥ期に端を発するジャワにおける基本的な空間構成原理の1つと考えられる。

また、プランバナンより少し遅れて建設された上座部仏教のチャンディ、ポロブドゥールを例にとると、そのプランには明確な中心性はあるが主要な方向性、あるいは軸性を欠いている（図3-1-2）。これは、マンダラを象徴すると考えられるが、同時にマンチャパットの示す空間モデルと共通していることも注目される。

これは、中部ジャワにヒンドゥおよび上座部仏教の国家群が栄えた頃建設された多くのチャンディに共通した特徴と考えられるが、次の東部ジャワのマジャパイト期に

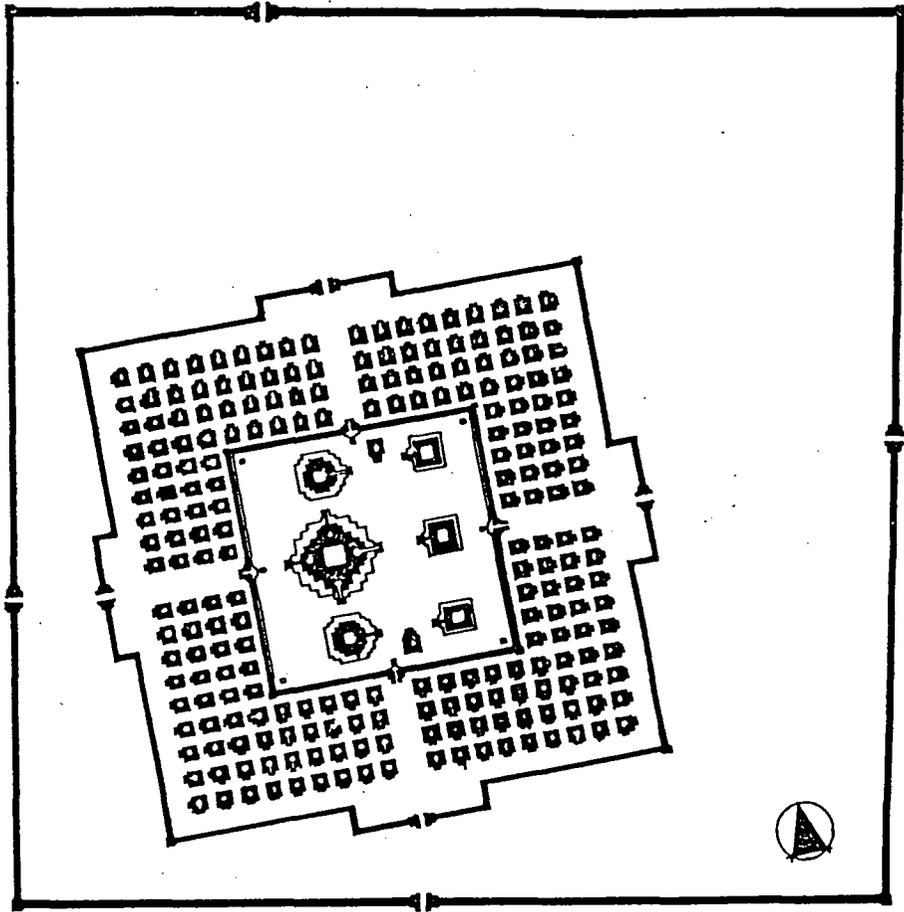


図3-1-1 チャンディ・プランバナン配置図

出典：PARMONO ATMADI: SOME ARCHITECTURAL DESIGN PRINCIPLES DESIGN
PRINCIPLES IN JAVA, Yogyakarta, 1988

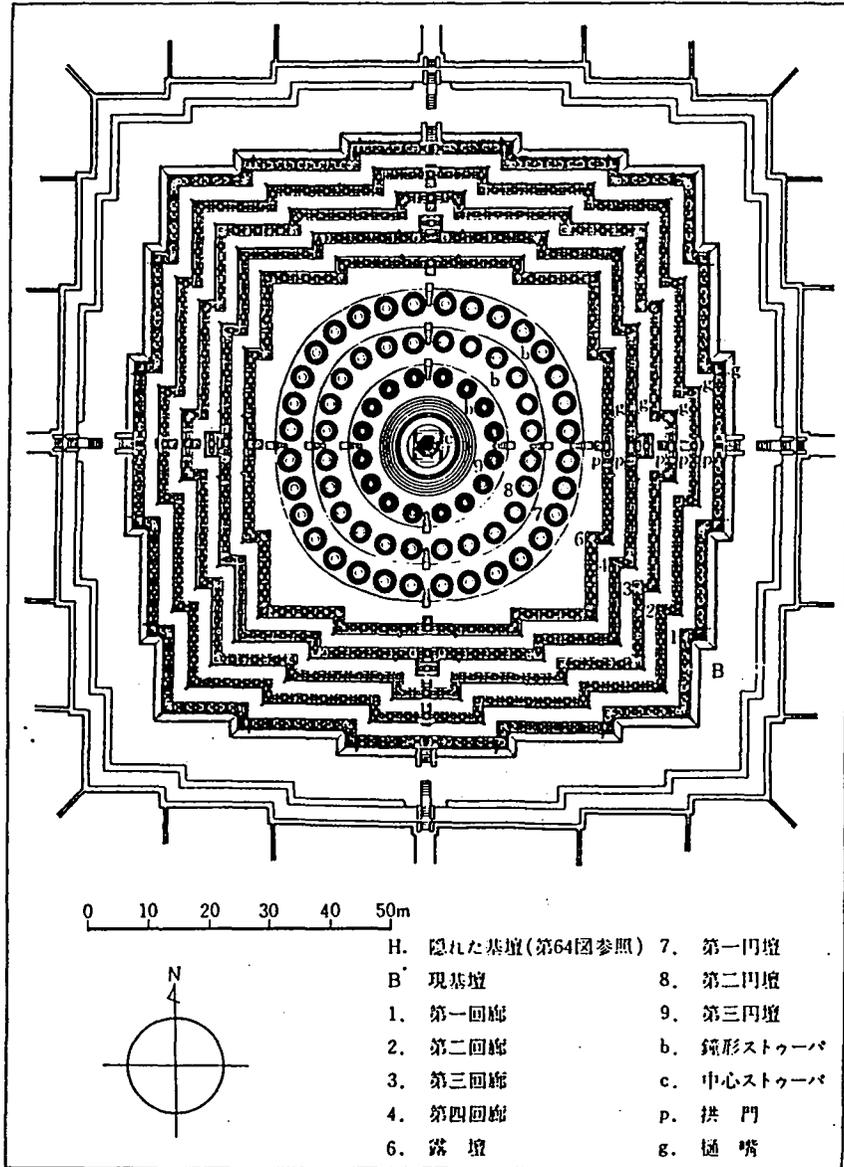


図3-1-2 チャンデイ・ボロブドゥール配置図

出典：千原大五郎『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会、1975

建てられたチャンディでは4つの方位が曖昧になり、軸性が優越してくる傾向がみられる。

マジャパイト期の代表的なチャンディであるパナタランでは、バリの寺院や集落など同様の空間構成が観察される(図3-1-3)。同様の構成はコタグデにあるイスラムマタラムの創始者の墓所にも確認することができる。

野口英雄は、東南アジアにおける空間構成原理を、ヒンドゥ建築書マーナサーラとのかかわりにおいて分析し、特にジャワについてプラオサンを事例として言及している(注6)。

その見解によれば、ヒンドゥの建築構成原理は古代インド文化を移入した東南アジアの各国にも適用されているが、はるかに単純で、流動的、土俗的である。それは、2方向、あるいは、4方位を強調する。

そして、ジャワについて北プラオサン寺院の空間構成を、基軸となる構成はヒンドゥの建築構成に倣うものであるが、西側の正面を王族に、4ないし8方向がそれぞれの方向にある村の首長にあてられていることを指摘している。つまり、これはマンチャパットにほかならない。また、マンチャパットについては「5村連合」という訳を与え、村落レベルの籍地を4人の筆頭吏員に与える王朝期の伝統であるとしている。

2) 都市の空間構成

中部ジャワに栄えたヒンドゥ国家群における都市について詳しいことはわかっていない。首都が、政治および宗教権力の中心であり、また、象徴的存在でもあるクラトンを核として構成されていたと考えられているが、その実態は村落に毛の生えた程度のものであったらしい(注7)。政治的ライバルの出現を嫌って、意図的に人口集中がおきないように図ったといわれる(注8)。したがって、その空間構成については、次のマジャパイト期の首都から推測することができるに過ぎない。

ヒンドゥ期にはジャワにおける歴史上の都市のプロトタイプともいえる「内陸都市」および「港市都市」が登場する。文献記録に登場する都市の中で、その状態がある程度知られるのは、内陸都市ではマジャパイト、港市都市ではバンタムが最初である。まず、前者の例としてマジャパイトの空間構成について述べる。

1) マジャパイトの空間構成

コバンは、ピジョーのナガラクルタガマについての研究にもとづき、マジャパイトの空間構成を描写している(図3-1-4)(注9)。

マジャパイトには、まち全体を囲む城壁は存在しなかった。この点、「港市都市」とは異なっているが、クラトンがまちの中心に位置し、厚く高い赤色の煉瓦壁で囲ま

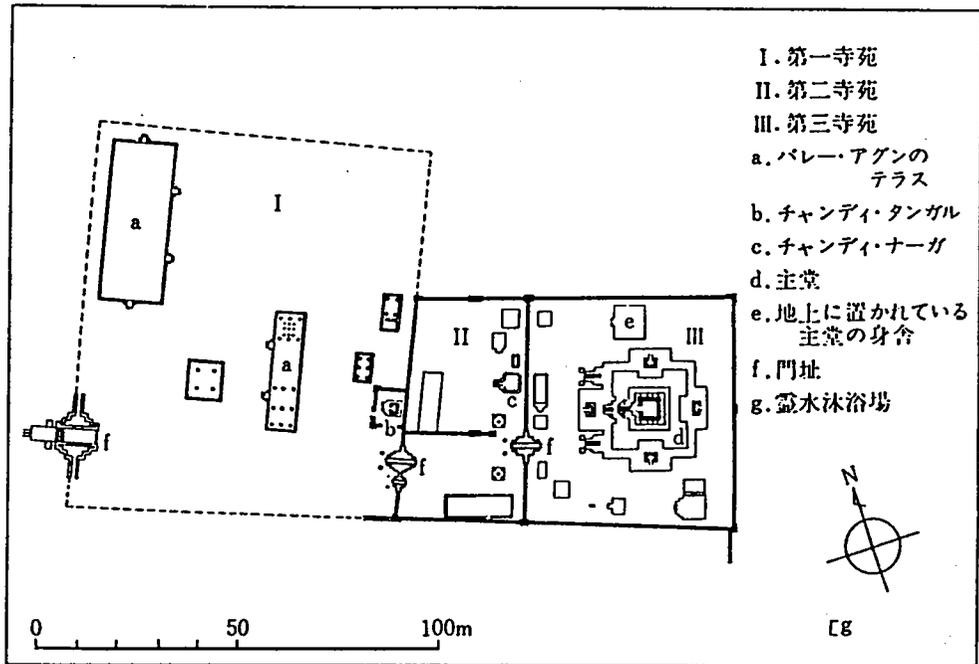


図 3 - 1 - 3 チャンディ・パナタラン配置図

出典：千原大五郎『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会、1975

れているなど共通する点がある。後のイスラム期におけるジョクジャカルタのクラトン・コンプレックスとも共通しているが、北面だけに門が設けられていた点は異なっている。

こうして構成されたロイヤルコンパウンドは長方形で、内部は多くの区画から構成され、王をはじめとする王族家臣が居住していた。コート状構成を基本とする住宅のあり方には、ジャワの住宅全般に共通する特徴が見られる。

ロイヤルコンパウンドの北には空地があったが、アルナルンは存在していない。門の西には、闘鶏場、会議場、少し離れて市場が位置し、東には小さな城砦が存在していた。闘鶏はジャワにおける宗教儀礼であり、現在のバリにも見られる。同様のものではあった可能性が高い。

この点について、ジャワのモスクのピラミダルーフは元来闘鶏場の屋根からきているというプリヨトモの興味深い考察がある（注10）。もっとも、同型の屋根形状はジャワに限らず、マレイ半島一帯に存在することが知られており（注11）、その来歴はあきらかではない。

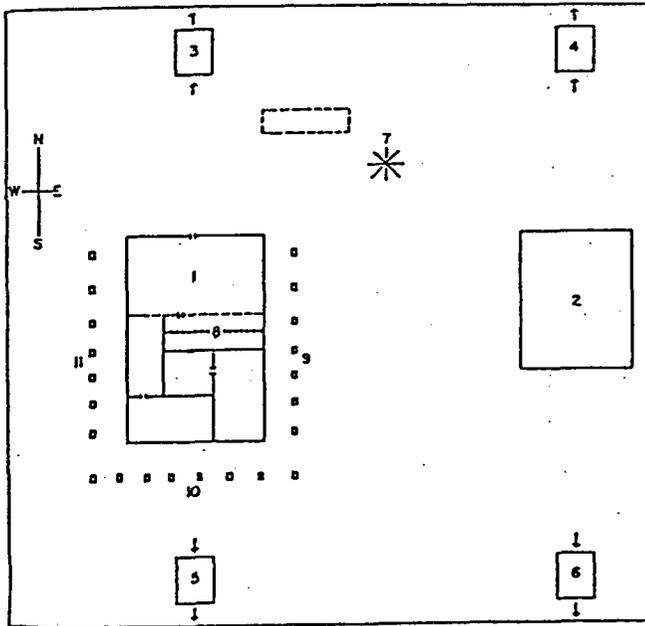
城壁の周辺には王宮に関係する司祭の住居があった。東側にはシバ神の、南側には仏教の司祭が住んだ。西側には壁に沿って王家の血族が居住していた。

ロイヤルコンパウンドから少し離れて、東にはマジャパイトと関係の深い主要な「内陸都市」、カディリの利害を代表する王の叔父のコンパウンドがあった。この2つの大コンパウンドの北には、それぞれ、ダハカディリの大い、およびマジャパイトの総理大臣であるガジャマダのコンパウンドがあった。これらの主要な4つのコンパウンド、ロイヤルコンパウンドの北東にある聖なる交差点を中心に配されていた。

このクラトンの周辺に家来が居住する形態は、指摘したようにマンチャパットを下敷きとしたものと考えられ、プランバナナにもみられるように、ジャワにおける空間構成の基本的伝統の1つと考えられる。これは、当時のジャワの王国が同型の都市国家の連合体であったことを証明するものである。

司祭と王と大臣のコンパウンドの位置関係は、王権が神王思想を基盤としていたことを如実に物語っている。マジャパイトの町全体が山裾の斜面に位置していたが、司祭のコンパウンドが最も高所にあり、次いで、王、大臣のコンパウンドの順になっていた。この点はバリのカジャークロッド軸からなる方位に関する原理との共通性を示している（注12）。

まちの他の部分は、貴族の住居のコンプレックスであるマナからなり、散在するマナの間には空地が広がって儀式用の空間を形成していた。マナはクラトンを小さくし



1. ロイヤル・コンバウンド
2. ウェンカーカディリのコンバウンド
3. カディリの大臣、ナラバティのコンバウンド
4. マジャパイトの大臣、ガジャマダのマナ
5. 仏教の高僧のマナ
6. シバ教の高僧のマナ
7. 聖なる交差点
8. 西方へ向かう道
9. シバ教の僧の住居群
10. 仏教の僧の住居群
11. 王家に属する人々の住居群

図3-1-4 マジャパイト・コンプレックス(14世紀)模式図

出典: COBBAN, J.L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY,
Ann Arbor, 1970

てその形式を模したもので、内部のコートの数は少ないが、コンバウンド自体が壁で囲まれており、主人と家族が内部に住み、召し使いや家臣は壁の外側の周囲に住んでいた。

また、コートには植栽が行なわれ、そのコンバウンドのみならず、町全体が公園のような外観であり、そのまま耕地へと連続していくたすまいをみせていた。現在の都市においてもカンブunが農村的であるといわれることとの類似性がある。

人口規模は2～3000家族であって、7、8人のチーフによって治められていた（注13）。こうした居住地がモザイク状構成であった可能性もあるが、その具体的な形状ははっきりしない。

以上のように、主要なコンバウンドおよび有力な家臣のマナからなるマジヤパイトの構成全体が、その規模が大きいこともあって、「港市都市」以上にヒンドゥの世界観を体现する構成になっていた。われわれが普通に持っている近代的、世俗的な都市のイメージとはかけ離れた「神聖都市」の性格を持つものであった。

マジヤパイトは以上のような空間構成をもつものであったが、この期の集落や住居の様子については記録がない。しかしながら、バリは当時のマジヤパイトの直接の後継者であり、現在の姿は当時の生きた事例であるということが通説になっており（注14）、この立場から当時の集落および住居の状態が推察されている。

ii) 港市都市の空間構成

ナガラクルタガマにはいくつかの「港市都市」についての記述が登場する。コバンはこれらの諸都市についてマジヤパイト以上に詳述している（注15）。

「港市都市」に共通する特性は、城壁によって囲まれ防衛的性格が強いこと、また、交易を主要な権力基盤としており、その装置である市場をもつことであった。16世紀ごろには、トゥバン、スラバヤ、ジャカトゥラ、バンタム、グレシクなどが知られており、そのほとんどが現在でも主要な都市として残っている。バンタムを例にとってその空間構成を記述する（図3-1-5）。

町の中心にはクラトンが位置し、南北を軸として入口が設けられ、北の入口は海に面していた。レイアウトには軸性が明快である。クラトンの北にはアルナルンがあり、西にモスク、東に武器庫が位置した。アルナルンを中心に、クラトン、モスク、市場をもつレイアウトパターンがここに見出される。これは、後のチャトルガトゥラといわれるパターンの原型であると考えられる。

チャトルガトゥラとは“four in one”の意味であり、4つの部分からなる1つの地域をいう。4つの部分とは宮殿、モスク、広場、市場を指す。これらの4つによって

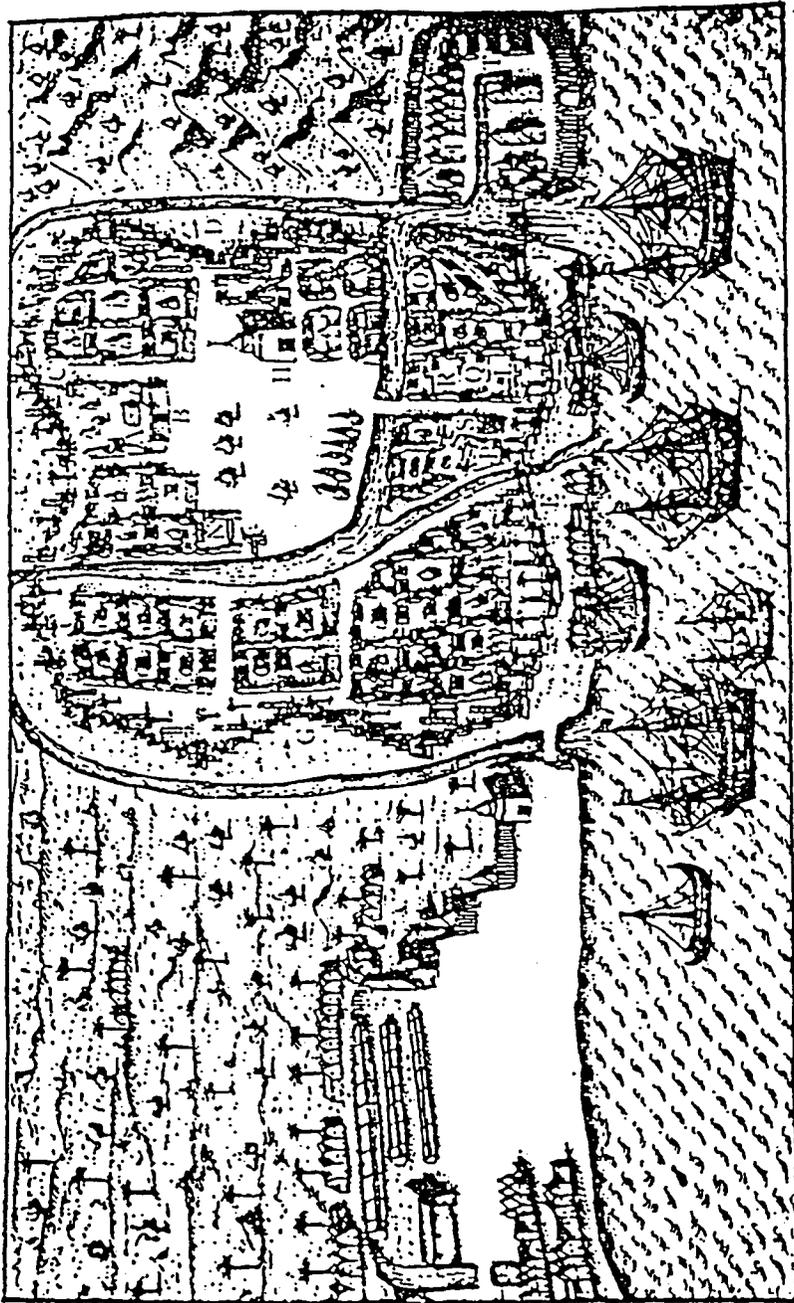


図3-1-5 17世紀初頭のパンタム（パンタン）

出典：COBBAN, J. L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY,
Ann Arbor, 1970

特有の空間パターンが形成される。この構造はマジャパイト時代に採用されるようになったといわれ、インドから来たものとされる（注16）。

アルナルンを中心に海と山の方向に道が延び、城壁とぶつかる部分には門が穿たれていた。これらの配置は、方位を含めて、ヒンドゥの王権思想にもとづく宇宙観ないし世界観を体現するものであった。

町は多くの部分に区画され、それぞれの区画にはチーフとして貴族が配され、火事、戦争など平和を脅かすことから自地区を守る責任を負っていた。その中には外国人居住地も含まれており、民族による住みわけがなされていた。また、陸の方へと続く道沿いには召し使いや奴隷の住む区画もあった。これらすべての区画では、夜間に木戸を閉ざし、不寝番がおかれた。町全体が防衛的性格をもっていたと考えられる。ここにも、現在の市街地において普通に見られるゲートや夜警小屋の存在がオーバーラップする。

また、トゥバンに関する記録によれば、有力者の住宅は煉瓦壁で囲まれ、クラトンの様式を模した小型の宮殿といった性格をもっていた。これは、先のマジャパイトにおけるマナのあり方と同様である。しかし、家来は中に居住しており、家産的構成であったことが推察される。

以上の記述は「港市都市」一般に共通するといわれるが、「内陸都市」との共通点もまた多い。人口規模は小さく、先のバンタムの場合、15世紀の時点では約1000家族程度の集積に過ぎなかった。

これらの都市の中には、外国人の居住に端を発した都市もあったと考えられている。中でも華人の来住は少なくなかったとみられる。第1章で述べたように、グレシクは中国人によって確立されたという記述がある。「港市都市」のインターエスニックな性格を物語るものとして興味深い。

また、初期イスラム王国として知られるチレボンのクラトンには中国の影響を強く感じさせるデザインモチーフが用いられており、スマランは中国人が創設したという伝説があるなど、都市建設への華人の関与を示唆する証拠には事欠かない。

（4）イスラム期

この期のタウンレイアウトの代表例はスラカルタおよびジョクジャカルタのクラトン・コンプレックスにみることができる（図3-3-6）。その基本的な空間構成はヒンドゥ期との共通性が感じられるが、逆にいくつかの相違点が指摘されている（注17）。

たとえば、マジャパイトには中心を象徴する広場があり、特定の軸を強調すること

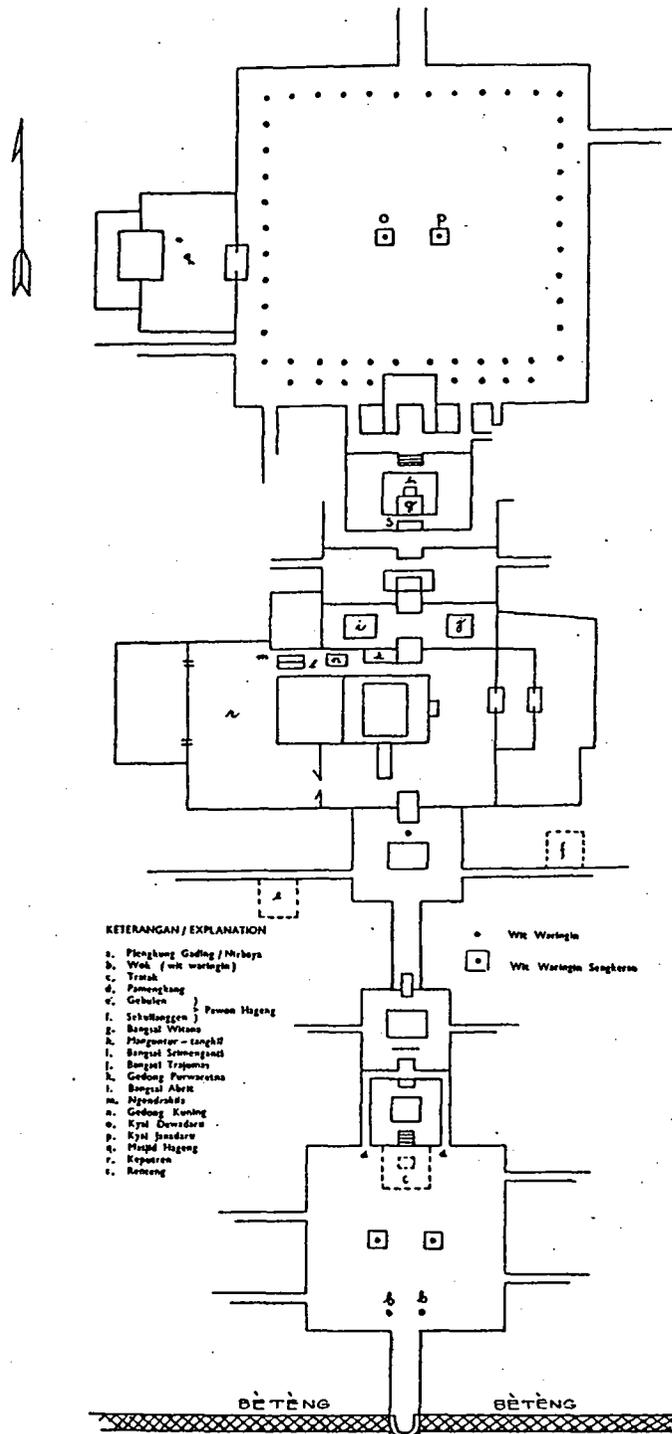


図 3 - 1 - 6 ジョクジャカルタクラトン模式図

出典 : K.P.H.BRONGTODININGRAT: THE ROYAL PALACE (KARATON) OF YOGYAKARTA;

ITS ARCHITECTURE AND ITS MEANING, Yogyakarta, 1975

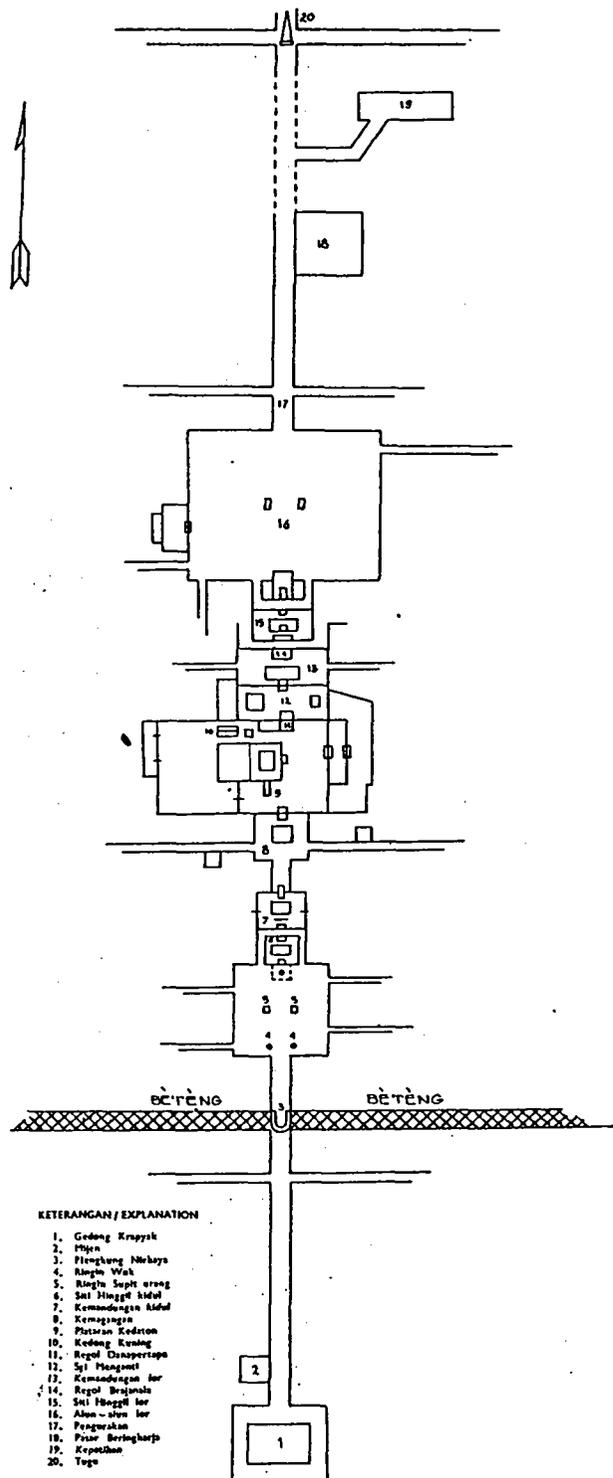


図3-1-6 ジョクジャカルタクラトン模式図(続き)

出典: K.P.H.BRONGTODININGRAT: THE ROYAL PALACE (KARATON) OF YOGYAKARTA;

ITS ARCHITECTURE AND ITS MEANING, Yogyakarta, 1975

は避けられていたのに対し、南北への軸性を強くもつ点はとりわけそうである。主要な相違点は以下の通りである。

- ①南北のアルナルン
- ②儀礼的な軸
- ③クラトン内のスルタンの宮殿
- ④カプトゥレンといわれるスルタンの子女居住区
- ⑤アディパティの居住区カディバテン
- ⑥特別にクラトンを取り囲む壁がない

また、アルナルンには防護と調和を象徴するバンヤンの木が植えられている点も、中心にホールをもつマジャパイトの広場とは異なっている。

グナワンは、こうした変化はイスラムの影響とオランダの介入によるものであるとする見解を披瀝している（注18）。

（5）植民地期

ジャワにおける都市の多くがこの期に新たに形成されたわけだが、その典型はギアツのいう「第2次第3次支線都市」であり、歴史上の都市のプロトタイプともいえるべき存在である。

その空間構成についてはギアツ以外にも多くの記述がある（注19）。中でもティレマは地方行政中心都市の典型を図式化しており（注20）、以下の記述はそれにもとづく。

1) 地方行政中心都市における中心部のレイアウト（図3-1-7）

まちの中央に位置するアルナルンの中央にはバンヤンの木が植えられる。アルナルンを囲んで、役所、イスラム寺院、学校などの公共建物、および地区の首長をはじめとするエリート層の住居が並ぶ。市場付近にはプチナンがあり、周辺部にはカンブンが広がり、一般の人々が居住している。

以上は典型的な中心部の空間構成であり、権力の座としての象徴的空間構成原理が卓越している様子がみてとれる。「内陸都市」とは同一ではないが、このパターンはチャトルトゥンガルと呼ばれ、チャトルガトゥラを基本としていると考えられる。これはまちの印章ともいえるべきものであって、権力の座の存在を意味している。これを、オランダの都市計画のインディシユ化とみる見解が存在する（注21）。

2) バタヴィアのタウンレイアウト

一方、ジャカルタをはじめとしてヨーロッパ人口が多かった大都市では、アルナルンが存在せず、上記とは異なるタウンレイアウトをもつ傾向にある。一例として、バ

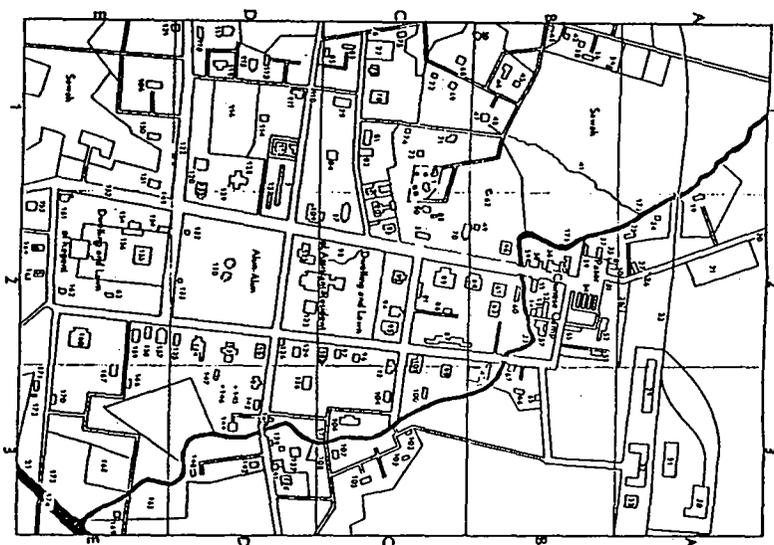


図3-1-7 地方行政中心都市のレイアウト

出典：TILLEMA, H.F.: Lay-out of an Average Regency Seat, in "WERTHEIM, W.F.
: THE INDONESIAN TOWN, Amsterdam, 1958, pp. 77-84"

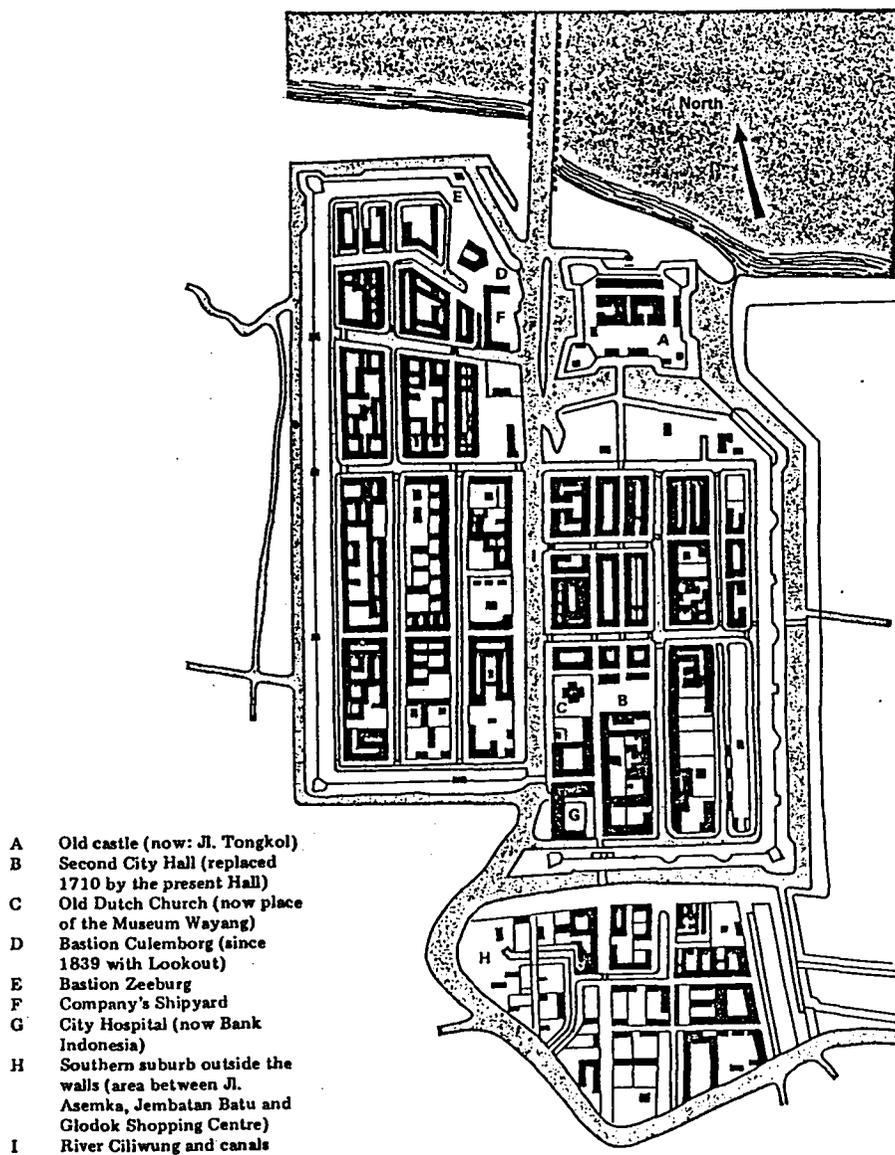


図 3 - 1 - 8 バタヴィアのタウンレイアウト (1650)

出典 : HEUKEN, A.: HISTORICAL SITES OF JAKARTA, Jakarta, 1982

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1. "Harmonie"クラブ前のサークル | 16. アヘン工場 (現インドネシア大学) |
| 2. 総督の宮殿 | 17. Cikini 病院 |
| 3. 電話局、Deca Park | 18. Batavia 水泳プール |
| 4. Fromberg Park | 19. 動植物園 (現 Taman Ismail Marzuki) |
| 5. KPM 事務所 | 20. 国民会議ビル |
| 6. Villewskerk | 21. "Concordia"軍人会 |
| 7. シティーホール | 22. "Big"又は"Witte Huis"
と呼ばれた大蔵省 |
| 8. 総督邸 | 23. Jan Pieterszoon Coen 像 |
| 9. 博物館 | 24. 最高裁判所 |
| 10. De Bouwploeg (現在の"Boplo") | 25. ロッジ「東の星」 |
| 11. オランダ、インド芸術サークル | 26. カソリック教会 |
| 12. Van Heutz Boulevar Park | 27. Michiels 陸軍少将記念 |
| 13. St.Carous | 28. Waterloo 戦記念 |
| 14. 医療学校 | 29. Vilhelmina Park 内の
Aceh モニュメント |
| 15. 中央病院
(現 Dr.Ciptomangunkusumo 病院) | 30. Frederik Hendrik Citadel |

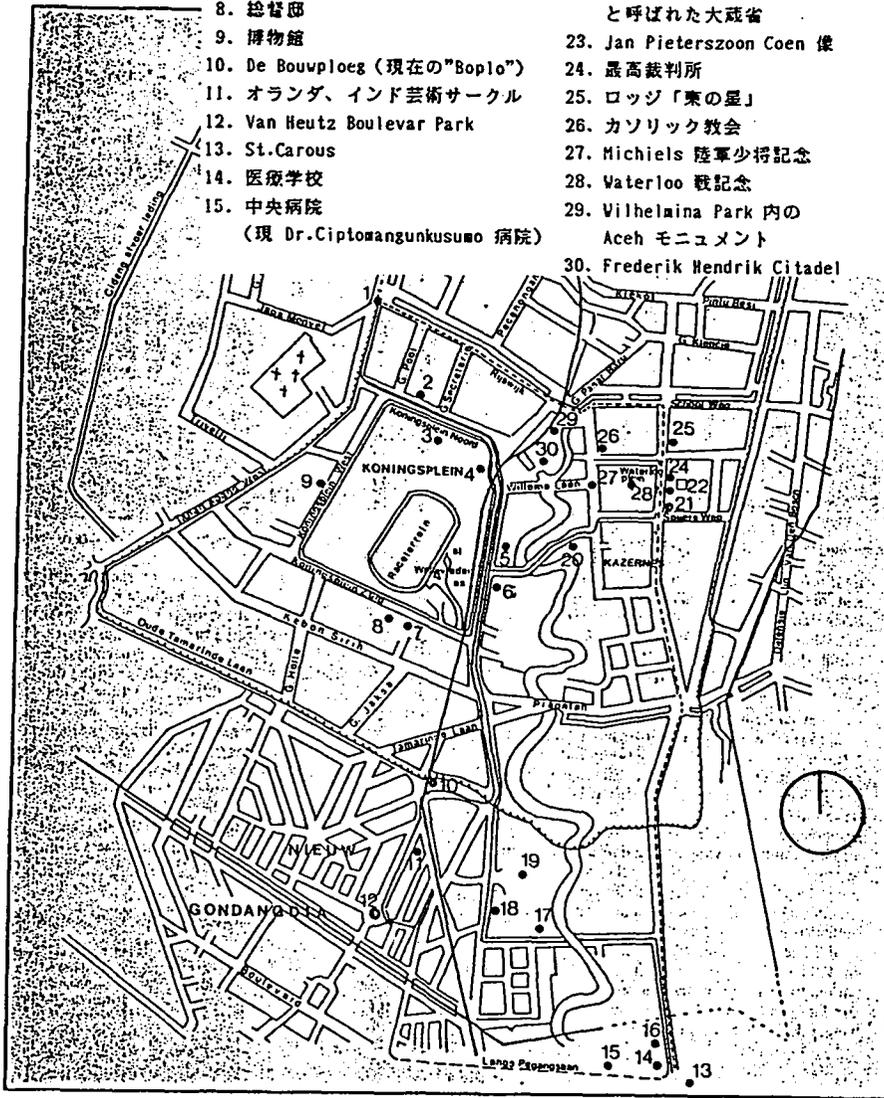


図 3 - 1 - 9 コーニングスプレインのレイアウト

出典：ABDURRACHMAN SURJOMIHARDJO『ジャカルタの都市形成』今野卓訳、私家版、1987

(ABDURRACHMAN SURJOMIHARDJO:THE GROWTH OF JAKARTA, JAKARTA,1977)

タヴィア中心部のタウンレイアウトをみてみよう。

17世紀中期、城砦の南に形成された市街地パターンをみると、ほぼ中央部に設けられた広場に教会とシティホールが建てられ、これを町の中心とする意図がうかがわれる（図3-1-8）。一説には初期バタヴィアはアムステルダムを模したというが、その真偽のほどはともかく、オランダの伝統にもとづくまちづくりがなされていたことは疑いない。

城砦にあった総督府がウェルトフレーデンに遷ってしばらくたつと、町の中心はウォータールブレインからコーニングスブレインへと移動した。前者は広場の周囲に総督の宮殿、会議場、裁判所などを配し、後者もやはり広場の周辺にクラブ、教会、総督の宮殿、シティホールなどを配したものであった（図3-1-9）。

シティホールのある広場を中心とするタウンレイアウトはオランダの伝統だが、ここにあげたバタヴィアの中心部のレイアウトは、シティホールというより総督の宮殿を中心としていること、また特に後者の広場の規模が大きいことなど、オランダ本国のタウンレイアウトとは異なる面がある。コーニングスブレインのレイアウトはジャワの影響を受けたものとする見解がある（注22）。

ー 2 空間構成原理の継承性

ジャワにおいては、ヒンドゥーやイスラムなどの外来の文明あるいは文化の影響は皮相的であり、ジャワ文化の中核的部分には大きな変化がないという見解が一般的である（注23）。

ジャワ、特に村落部においては、住宅敷地の選定、住宅そのもののデザインやプラン、あるいは材料の使用に関して一定のルールが存在し、また、建設に当たっても一定のしきたりに従い儀礼がとり行なわれるのが普通である（注24）。このことは、住宅が宗教的世界観と一体化した空間構成原理にもとづくものであることを物語っている。

こうした、様々な建築儀礼など、現代に生きる空間構成に関わる伝統は、ヒンドゥー期の空間構成原理の影響を強く受けていることは確かなように思われる。これは、上記の見解を支持するものである。

また、西ジャワの農村集落、カンブン・ナガは、ヒンドゥーの原理にしたがう集落レイアウトが守られていることで知られている（注25）。この事実はデサが自律的な存在であるとする見解（注26）を支持すると同時に、ジャワにおいてもヒンドゥー期の空間構成原理が現在にまで継承されていることの好例と考えられる。

前述したように、プリヨトモは、住宅を例にとりヒンドゥ期の建築構成原理が、そのままサブシステムのかたちでイスラム期に受け継がれたという見解を示している（注27）。

この見解は、ヒンドゥがイスラムのサブシステムになったように、古代の空間構成の原理が植民地支配期を通じて現代にも受け継がれているという仮説へとわれわれを導く。ジャワの伝統について、外来の影響が次々と表層をおきかえていくグナワンのモデルは（注28）、こうした意図を明快にあらわしたものである。

確かに、ヒンドゥ期の「内陸都市」および「港市都市」にみられるタウンレイアウトは、次のイスラム期にも受け継がれる。イスラム・マタラムの最初の都であったコタグデの初期レイアウト、チャトルガトゥラが「第2次第3次支線都市」のタウンレイアウト、チャトゥルトウンガルにつながったことは確かであるように思われる。

チャトゥルトウンガルはアルナルンを中心として、ダレムとモスクと市場が配されたレイアウトであり、先の地方行政中心都市にみたものの原型である。「内陸都市」にはほとんどそのままのかたちで受け継がれたが、「港市都市」では植民地期の急速な都市化によって近代的な都市形態に変容していった。

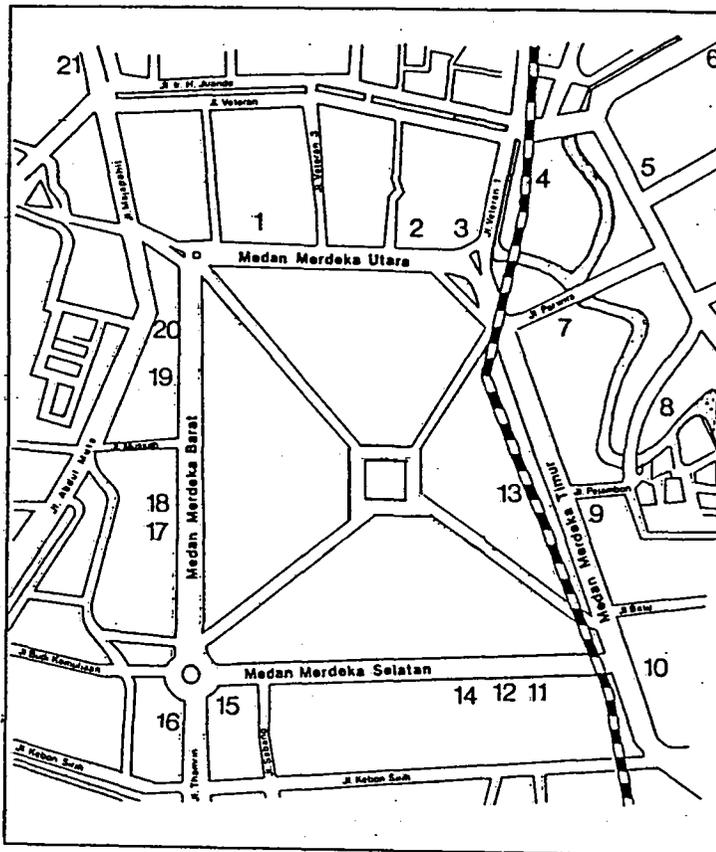
しかし、かつての形態は失われたが、その考え方は現代にも生き続けているという見方もある。独立後の首都のジャカルタに建設されたナショナル・モニュメント、モナス（図3-1-10）をヒンドゥのリングあるいはトゥグの象徴としてとらえる見解（注29）はその代表的なものであろう。第1章で述べた類型7の地区の1つであるクバヨラン・バルのレイアウト（図3-1-11）をチャトゥルトウンガルの変形であるという見解（注30）もその1つである。

これらの見解の正当性はともかく、タウンレイアウトの伝統性に関する興味深い事例は他にもある。たとえば、トランスミグラシの集落レイアウトが直線的なグリッドパターンであることは、オランダ近代都市計画では住宅地のレイアウトが等高線にあわせた曲線的なものであることと好対照をなしている。それを空間構成の伝統の文脈においてとらえるべきか否かは容易に判定しえないが、伝統の行方を占う上で興味深い現象であるといえるだろう。ここでは、こうした伝統生成の源泉としての役割をおさえておきたい。

3-2 伝統的都市における市街地構成

1 クラトンを中心とする市街地空間構成

都市は単にコスモロジーの象徴というだけでなく、国家のモデルであり、国家その



1. 国宮殿
2. 内務省
3. 海軍本部
4. Istiqlal モスク
5. 教会
6. 中央郵便局
7. 石油公社
8. 外務省
9. Immanuel 教会
10. PLN
11. アメリカ大使館
12. 副大統領宮殿
13. Gambir 駅
14. ジャカルタ州庁舎
15. 石油、ガスビル
16. インドネシア銀行
17. 国防治安省
18. 中央博物館
19. 情報省
20. 放送局
21. 郵便貯金銀行

図3-1-10 モナス広場のレイアウト

出典：ABDURRACHMAN SURJOMIHARDJO『ジャカルタの都市形成』今野卓訳、私家版、1987

(ABDURRACHMAN SURJOMIHARDJO: THE GROWTH OF JAKARTA, JAKARTA, 1977)

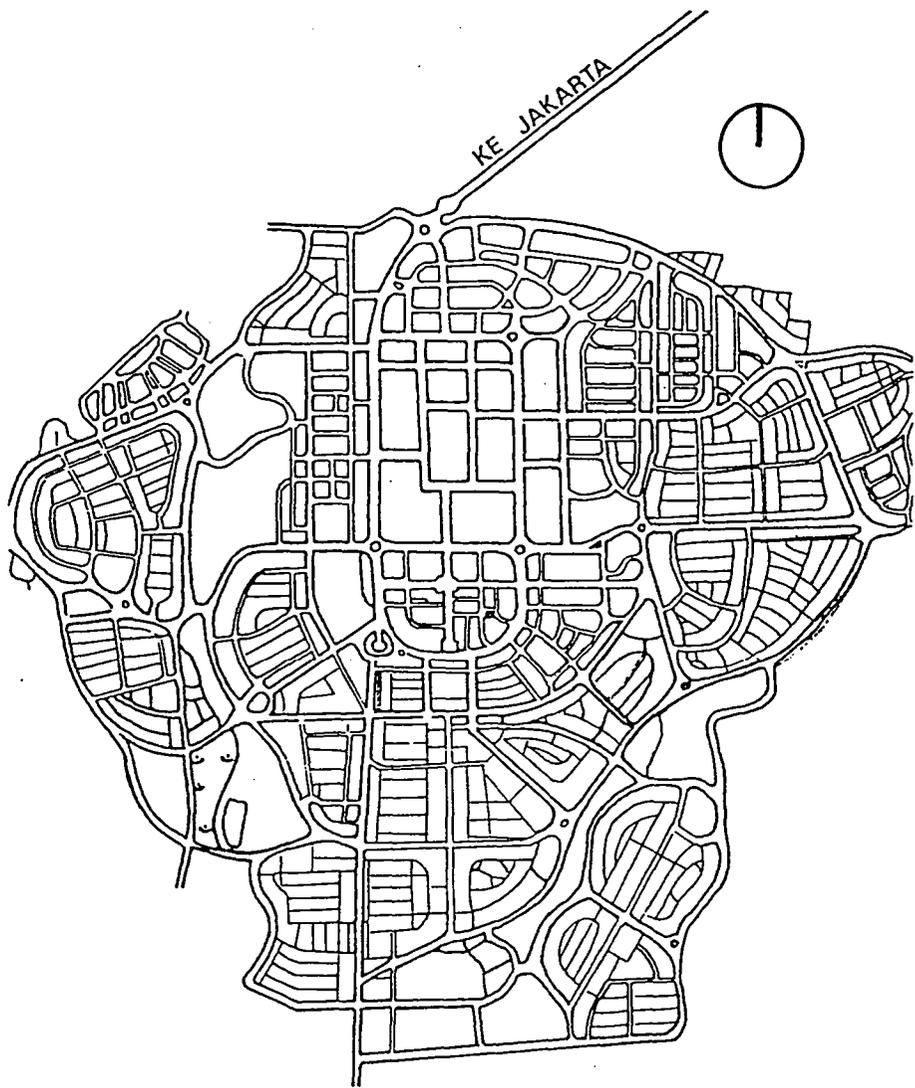


図 3 - 1 - 11 クバヨランバルのレイアウト

出典：ABDURRACHMAN SURJOMIHARDJO『ジャカルタの都市形成』今野卓訳、私家版、1987

(ABDURRACHMAN SURJOMIHARDJO: THE GROWTH OF JAKARTA, JAKARTA, 1977)

ものであった(注31)。スロスマルジャンによれば、ジョクジャカルタのクラトンを中心とする国家のモデルは、当時の社会階層の構成に合わせて、クラトンを中心とする同心円的4層構造をもつものであり、国家モデルと同じ原理にしたがうものであったことがわかる(図3-2-1)(注32)。

その社会構造は、スルタンを頂点として、次に貴族およびスルタンの子孫、さらに国家官吏や宮廷役人、そして最下層に農民、商人、職人などの庶民階層からなっていた。以下、各階層ごとにその概要について述べる。

(1) エリア1

クラトンのスルタンのための区画である。クラトンの一番奥まった部分に、国家の中心であるスルタンの居所が設けられており、国家および都市の中心と位置づけられている。

(2) エリア2

エリア1のすぐ周囲に位置するスルタンおよびその家族、未婚の子供たちの居住区画である。しかし、子供たちは結婚するとクラトンの外、可能な場合はエリア3に住まねばならなかった。

エリア1とエリア2、スルタンとその家族の住居であるクラトンは、高さおよそ5m、幅1m以上の固い石壁で囲まれている。

(3) エリア3

クラトンを取り囲む石壁の外側の土地は、元来は、王子とその家族、高級官吏、宮廷役人など宮廷に仕える人びとだけが住むことを許された特別の居住区域であった。

エリア3も、エリア2と同様、敵の攻撃を防ぐようにつくられた厚い壁で四方を守られている。エリアを囲む壁の外周の各辺の長さは2.5kmにも達する。壁の高さはおよそ5mである。壁の上部は歩行が可能な構造であり、壁というよりは城砦というのがふさわしい。

このエリアが、本来、保護壁の内側を意味する「ジュロン・ベテン」に該当している。外部に対しては北面に2つ、他の面に1つずつ、合計5つの門を開くだけで、いずれの門も夜には閉じられ監視されていたが、現在は常時開け放たれている。

かつて、スルタンが実質的な政治権力を握っていた頃は、ジュロン・ベテン地区は、社会的にジョクジャカルタの居住地として最高のステイタスをもつ地区の1つであった。当時の封建的な社会階層の下では、その序列の最高位に位置するスルタンに最も近い貴族と、高級官吏と宮廷役人からなる「ブライイ」階層の居住区であるジュロン・ベテン地区にそれだけの威信が与えられたのは当然のことであった。

また、エリア3の街区には規則的パターンが見られ、その名称から一定の職能集団が居住したことがわかる。

独立以降、権力構造が変化する中で、スルタンはクラトンではなくジャカルタに住むようになり、ジュロン・ベテン地区は伝統的な高いステイタスを失いつつある。

その理由は、かつての高位の貴族やブライヤイたちが、インフレーションのため疲弊したこと、また、この地区の人口が急増したことであり、その結果、現在の社会階層はせいぜい中の下程度といわれている。これについては第I部で述べた通りである。

(4) エリア4

ジュロン・ベテン地区の外側は、一般庶民の居住地域と位置づけられている。しかし、本来内側に住むべき階層に属するが、土地不足など何らかの理由によりこの地域に居住している一群の人びとが存在する。

エリア4には壁など範囲を限定するものは一切なく、その境界は無限に拡散する。周辺の曖昧性を示すものといえよう。

以上がスロスマルジャンによって描かれた「土候都市」としてのジョクジャカルタの空間構成であり、明快な同心円的な4層構造をとる。国土の構造もやはり同心円構造をとることから(注33)、クラトン自体が国家モデルであったことを示すものである。

クラトンを中心として周辺にダレムが配された構造はマンダラそのものであり、矢野が指摘するように、内陸都市が基本的に家産制国家であるということを如実に示すものと考えられる(注34)。

前述の野口は、ジャワの伝統的王国像として、同心円的モデルを示している(図3-2-2)(注35)。このモデルにおいては、中心から周辺に向かうほど王国の影響力は減少し、王国の構成はそれに応じた層状の領域として示される。

貴族の住宅を意味するダレムの存在は、こうした構造を如実に示している。その居住者は貴族あるいは官僚であるが、領土の拡張にともない官僚制度が複雑化することになったのだろう。ジュロン・ベテン地区を越えて、ダレムが存在しているのがみられる(図3-2-3)。

ダレムは、それ自身クラトンのミニアチュアであり、明白な中心性をもっている。それは、市街地においては一種のランドマークとして機能する。きわめて象徴的な存在である。その配置には一定の規則性があり、先に述べた野口のいうマンチャバットの原理にもとづくと考えることが妥当だが、あきらかにしえていない。

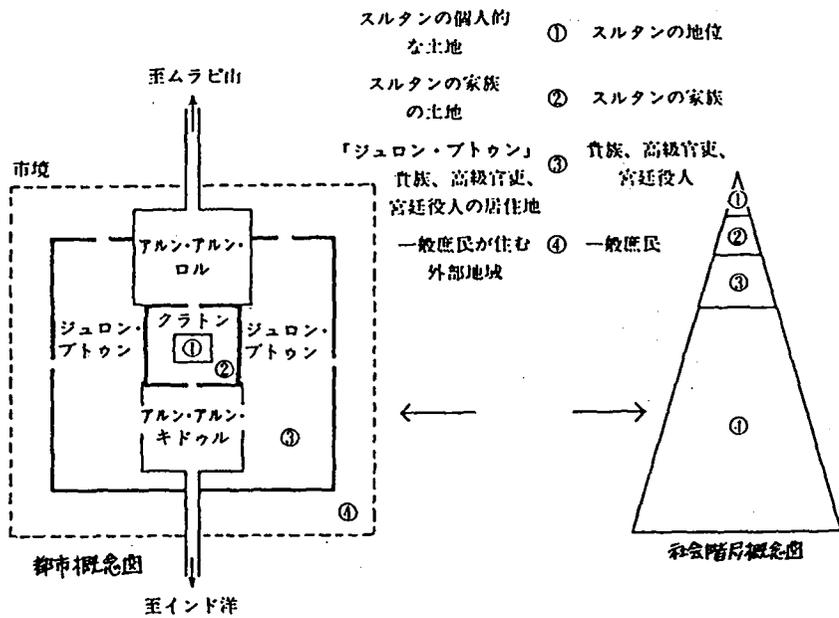


図 3 - 2 - 1 都市ジョクジャの構造

出典：スロスマルジャン「中間都市ジョクジャカルタの構造と変動-空間的、歴史的形成的特質」古屋野正伍編著『東南アジア都市化の研究』アカデミア出版会、1987、pp.408-416,468

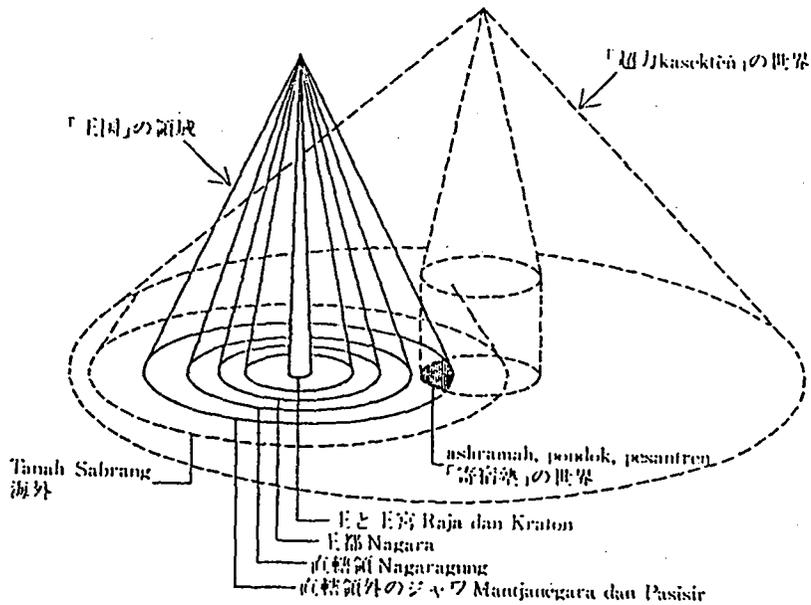


図 3 - 2 - 2 ジャワの伝統的王国と世界像

出典：野口英雄「建築と空間象徴」東南アジア研究、22巻1号（1984）

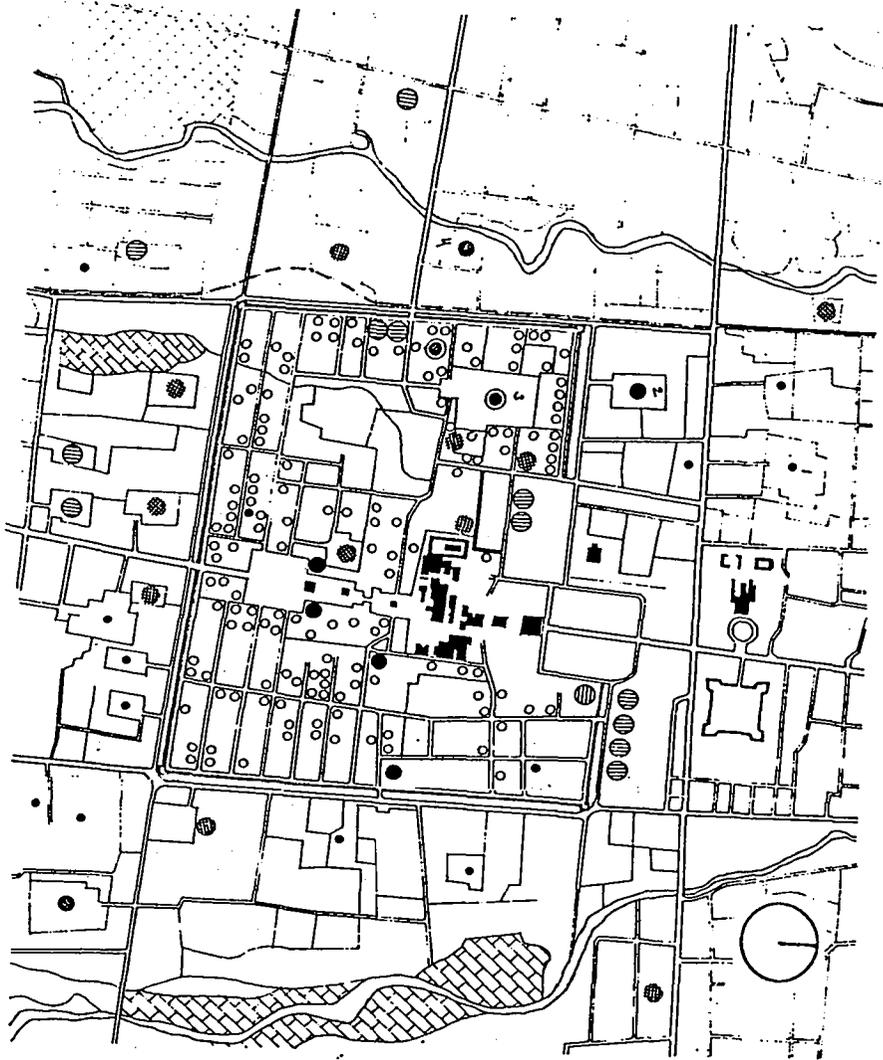


図 3 - 2 - 3 ダレム分布

出典 : LABORATORIUM BABIAN ARSITEKTUR FAKULTAS TEKNIK UNIV GAMA: SITUASI
DALAM BETENG, Unpublished report, 1971

※各種の丸印はダレムの存在を示す。
身分に応じてその様式、規模などが
異なっていた。

－ 2 ダレムの空間構成

第 I 部でとりあげたカディパテン・キドゥルは、ジュロン・ベテン地区内に位置し、王位継承位第 1 位の王子、アディパティの居住地区の一部を構成していたダレムを核としてつくられた代表的地区である。これを事例に、現在のような市街地が形成されたプロセスをみることにしよう（図 3-2-4）（注 36）。

1) 第 1 段階

地区の構成要素は以下の通りであった。

① オフィス

② プンドボ

これらの建築物は、公の職務を行なうため、ジョクジャカルタのクラトンの一部を形成していた。

2) 第 2 段階

地区の構成要素は以下の通りであった。

① オフィス

② プンドボ

③ 王子邸宅

④ プンドボ

⑤ 乗物置き場

⑥ 馬車置き場

⑦ 馬車

王位継承権第 1 位の王子プルウォディプロが、クラトンより土地を割りあてられ、そこに邸宅、プンドボ、諸施設（馬車置き場や厩）を建てた。

また、5 つの井戸と、水の需要を満たすために必要な貯水槽も設けられた。

オフィスは 2 つの部分からなっていた。王家内の問題のための部分と、王家外の問題のための部分である。

3) 第 3 段階

地区の構成要素は以下の通りであった。

① オフィス

② 王子邸宅

③ プンドボ

④ ガレージ

⑤住宅

⑥馬車置き場

⑦住宅

⑧家来

日本占領時代、馬車は自動車にとってかわられ博物館に入り、馬車置き場跡は王子一族の住宅にあてられた。それとともに、王子邸宅付きの召し使いたちは、従者とともにダレムとブンドボ付近の建物に配置された。

日本軍が引き揚げた後は、反日感情による反動から自動車は消え、ガレージは空となり、後に新しくやってきた従者（外まわりの召し使いとして）にあてられた。

4) 第4段階

地区の構成要素は以下の通りであった。

①住宅

②王子の邸宅

③ブンドボ

④学校

⑤隣組のオフィス

独立後、文部省の要請によりブンドボ前のウンパー（ガレージ）跡に小学校と幼稚園が建てられた。以後、住宅の必要性和使用していないスペースの有効利用のため、無秩序な増築が行なわれ現在の状態が現出した。

以上からわかるように、現在のこの地域の過密状況は戦後の人口増加にともなう家屋の増改築によって生じたと考えられる。その基底構造として、家来筋の子孫が居住する権利を保持するという慣習が存在する。この慣習は、第I部で簡単に触れたマガルサリである。

マガルサリはバガルサリから出ているといわれる（注37）。バガルサリとは、貴族や富裕な商人の住居の周囲に住むことを許されている家来、使用人を指す言葉で、字義ではフェンスを意味する「バガール」と、美を意味する「サリ」からなり、「貴族の美を守る」というほどの意味である。

それは、クラトンの周辺にその家臣のダレムが存在するのと同様の構図であり、同一の原理がそれぞれのダレムにも及んでいるわけである。ここには入れ子構造がみてとれる。

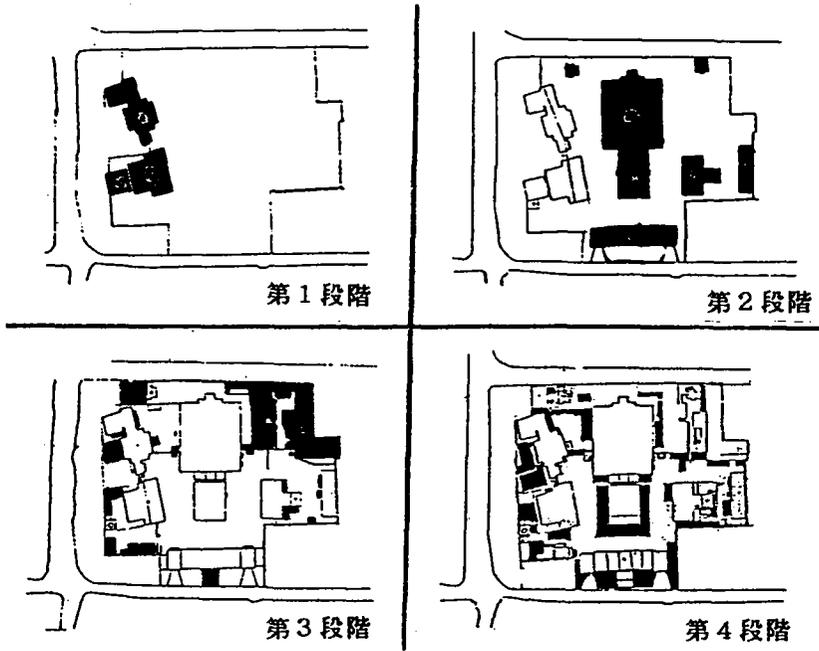


図3-2-4 カディパテン・キドゥルの形成

出典：IKAPUTRA:KONSOLIDASI

公共的ロウジ

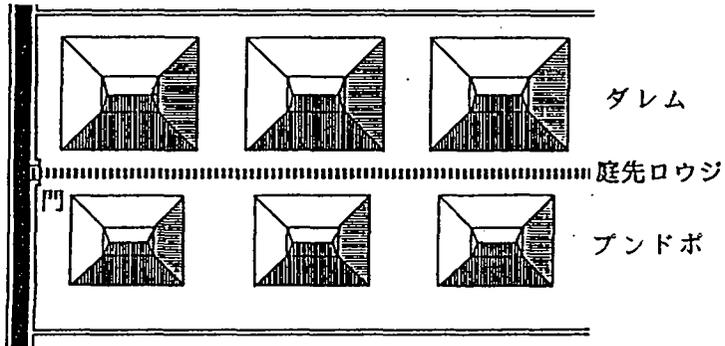


図3-2-5 様式住居のクラスター

－ 3 コタグデの空間構成

ここでは、コタグデを対象としてその空間構成を考察する。まず、コタグデの形成過程を概観しておこう。

(1) コタグデの社会的特質

1) コタグデの歴史的形成過程

コタグデはジョクジャカルタ市の中心から南東におよそ6 Km離れた市の境に位置する。以前は独立した市街地を形成していたが、現在は市中心部からの市街化の進展のため連坦化が進み、かつて水田であったところに新しいカンブンおよび住宅地が形成されつつある。そのため、この一帯はジョクジャカルタ市の郊外的な性格が強くなってきた。

地形的には、まちの西側を北から南へ向かって流れるガジャウォン川に沿った部分を除いてなだらかな傾斜面に立地する。

行政上2つのクチャマタンからなり、それぞれが異なったミュニシパリティ、ジョクジャカルタ市とカブパタン・バントウルに属している。空間的にも人びとの意識の上でも一体性をもつ「まち」であるにもかかわらず、こうした変則的な行政区分が存在することがコタグデの歴史を物語っている。

2つのクチャマタンはそれぞれ5つと2つのクルラハンに分割されており、合計7つのクルラハンがコタグデを構成していることになる。

コタグデは、16世紀の中頃に建設されたといわれる。伝承によると、現在のコタグデのあるところは森であり、マタラム王朝の領土に属していたが、スルタンに仕えていたキ・プマナハンに封土として与えられた。キ・プマナハンは、まちの建設にあたり、チャトルガトゥラとして知られる都市形態を採用した。その空間構成パターンは祈りの宮殿、広場、市場、ダレムの4つの要素からなるものであった。

キ・プマナハンの死後、その息子スノパティは、バジャンの攻略に成功し、コタグデを首都とするイスラムマタラム王国を確立した。スノパティは宮殿を建設し、コタグデの空間構成の枠組みが完結した。

その後、コタグデは、およそ1世代の間しか首都として存続しなかった。スノパティの治世は長くは続かず、彼の死後、その子、マス・ジョランが継いだが、その治世も長くはなかった。その後を継いだのがイスラムマタラムの帝国化に力のあったスルタン・アグンである。

スルタン・アグンは首都をコタグデからその南にあるブラドに遷した。以来、コタグデは首都ではなくなったが、依然としてマタラムにとって特別な意味を持ち続けて

いる。キ・ブマナハンとパネンバハン・スノパティという王朝の始祖が眠る聖なる地であったからである。同じ理由から、1775年のマタラム分割時に、聖地コタグデは二分されることになった。これが現在、このまちがジョクジャカルタとカブパテン・バントゥルに分れている理由である。

1910年に、植民地政府の指導下にタナ・パトゥといわれた封地制が廃止され、封建支配は終わりを告げた。貴族階級は封地を失い、給与生活者の身分になった。以来、その勢力は大幅に縮小し、コミュニティ内部における影響力が削がれた。その代わりに商人階級の勢力が勃興してきた。

独立以後、コタグデは銀をはじめとする貴金属細工によって知られる、ありふれたまちとなってしまったかのようである。しかし、ジョクジャカルタとスラカルタのロイヤルファミリーだけではなく、ジャワ人にとっては今もって聖地としてのステータスを失っていない。

2) コミュニティの構成

ファン・ムウクは、今世紀初頭のコタグデについてかなり詳細な記録を残している(注38)。それによると、当時のコタグデのコミュニティは4つの社会階層からなっていたといわれる。

① アブディダラム(王の家来)

② 商人

③ 職人および零細小売り

④ 農民および日雇い

②の商人階級に属していたのは、貴金属貴石類、布類、手工芸品などを扱っていた富裕な商人で、ジャワ一円を活動範囲とし、広く海外まで取り引きのネットワークをもっていたといわれる。彼らは、③のクラスの雇用者でもあった。彼らは、王候および貴族階級を顧客とし、既成権力から比較的自由であった。コミュニティにおいて特別の地位を享受していた。

③の階層は数の上ではマジョリティを形成していたが、そのコミュニティ内部では大した影響力をもたなかった。中には、豊かで有名な職人がいないではなかったが、ほとんどは雇用者である商人階級に依存していた。

④コタグデには水田は限られており農民はコミュニティの中ではマイノリティであった。

かつて、コタグデのコミュニティライフにおいて最も支配的な立場にあったのは、アブディダラムと商人であった。かれらの力の源泉はクラトンとの関係であった。ク

ラトンを頂点とする規範の体系の中に自らを位置づけることによってコミュニティの中で支配的な立場に立っていたといつてよい。

封地の廃止以来、世俗生活における彼らの力は次第に減じたが、精神生活においては依然としてかなりの影響力を保持している。とはいえ、経済的には商人階級の力が卓越しており、第1のクラスから第2のクラスへのシフトは明白な傾向といわれる（注39）。

（2）住居クラスター

1）住居クラスターの構成

市街地は、後述するように、貴族的伝統をひく様式住居によって構成されている。この点、たとえば、カウマンなどと共通するが、コタグデの市街地の空間構成の特異性は他にある。それは、市街地が、いくつかの住居が結合されたクラスターから構成されていることである。

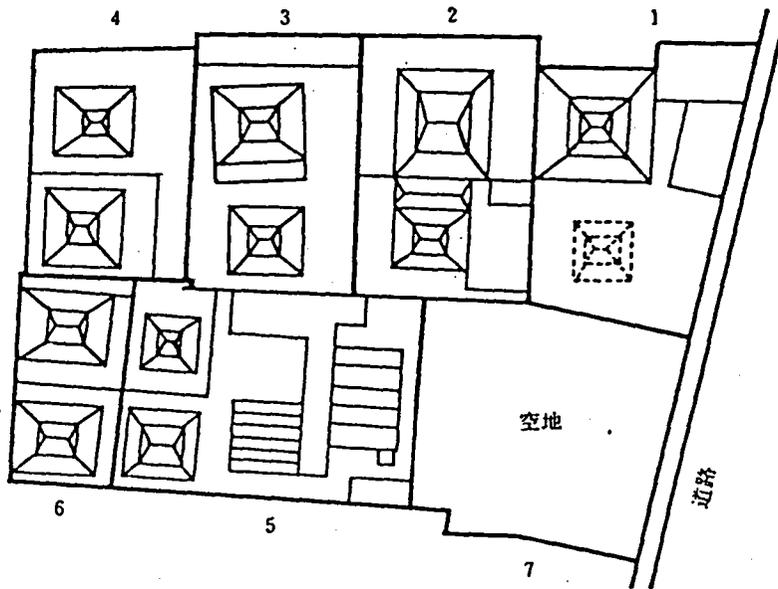
住居が横に連なって、2、3軒、ないし、5、6軒の住居からなる住戸群のまとまりが形成される。いくつかのバリエーションはあるが、コタグデの場合、基本型は図3-2-5に示す型である。ダレムとブンドボの間を路地が通り抜けており、隣家の庭先を通らなければ、自分の住居にアクセスできないユニークな空間構成が成立している。

2）住居クラスターの形成過程

図3-2-6はコタグデで行なったクラスター形成過程の調査結果を示している。それは、大きな宅地が血縁関係のあるものに分割されたもの、また最初から親しい友人が寄り集まることによって形成されたものであることを暗示している。そして、時間の経過とともに、直接的な関係のない者の居住を次第に受け入れながら、現在のよように直接血縁などの関係をもたない人々の居住する形になったと考えられる。

特に前者の場合、現在でも血縁関係の強い居住が維持されていることから、クラスター形成の1つのパターンが、拡大家族の居住プロセスに起因する可能性を示唆している。スリヤントラも同様の見解をもっている（注40）。クラスター形態がバラエティに富むことも、クラスターが形態を束縛するリジッドな空間原理にもとづくものでないことを示している。それもまた、この推察の妥当性を支持すると考えられる。

東南アジアでは、拡大家族が屋敷地に共住するケースがよく観察される（注41）。コタグデの住居もこうした原理を基底構造としていると思われる。これはコタグデ以外の都市、たとえば、クドゥス・カウマンでも同様であり、かなり一般的なものと考えられる。ジャワ都市では、一部の大都市を除けば、子供が大きくなると親と同じ敷



- ①1.は6代以上経過している。1.2.3.4.は同一人による所有であった。
- ②1.の当主の5代前の先祖が子供のために2.3.4.を分割して与えた。
- ③5.は4.の当主の母が当時の3.の当主の妹が結婚したとき貰い与えた。
- ④3.4.の当主は兄弟どうして、5.の当主は彼らからみると姪にあたる。
- ⑤5.6.は以前一人の所有者だったが息子のために分割した。その片方を当主が買った。
- ⑥7.は1.の当主の5代前には血のつながりのある人に所有されていた。現在は5.に所有されており、以前には家があったという。
- ⑦1.の北側の家の当主の母は1.と同じ先祖をもつ。

図3-2-6 近隣居住者の関係(コタゲテ)

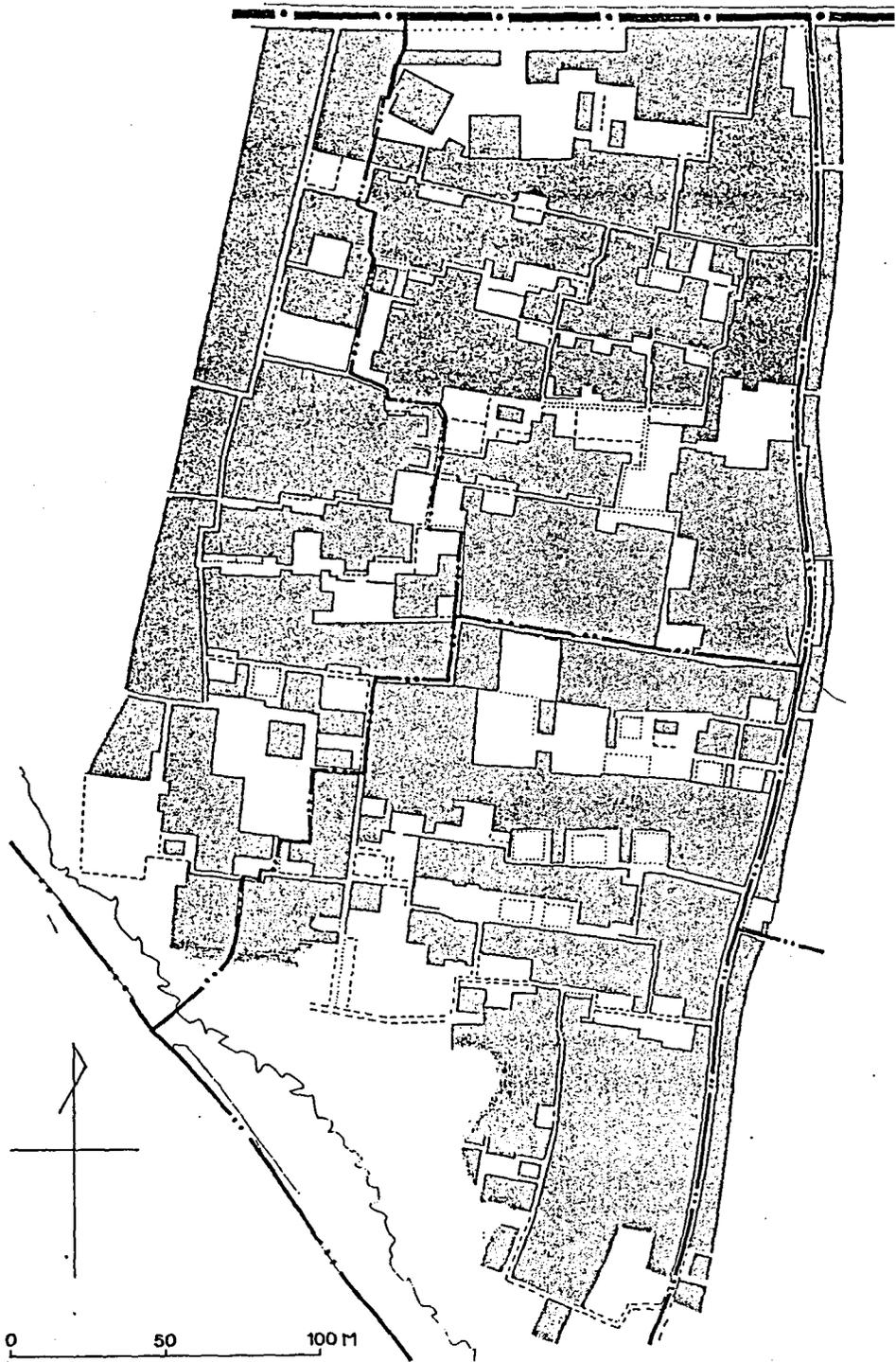


図 3 - 2 - 7 コタグデの街路

地内に別棟を建てて居住するのが普通である。こうした事実もこの推察に一定の根拠を与えている。

こうしてユニークな庭先型の路地が形成されたのだが、こうした公私の領域が交錯する空間構成が現在まで継承されるための社会的条件をコタグデのコミュニティが維持してきたこともまた大きな要因の1つとして上げる必要がある。

(3) 市街地形成の過程

しかし、市街地は、こうした住居クラスターの集合だけからなっているわけではない。明白な構造をもたない住居の無秩序な集合からなる部分の方がむしろ多い。その結果、 GANG と呼ばれる狭い路地が不規則に走り、住居相互を連結する迷路状の街路パターンが形成されている(図3-2-7)。

幅は1mそこそこの場合が多く、両側は住宅の壁であったり敷地境界の塀であったりするが、高さは3m近くあり、非常に閉鎖的である。ところどころ住居群ユニットの入口にあたる戸口があり、GANG と庭先路地の結節点となり、全体として路地のネットワークを形成している。庭先路地側の入口を閉ざし、GANG 側を入口にしている場合もあるが、GANG と庭先路地からなる路地のネットワークは良好に維持されている。

こうした市街地構成がどのような過程を経てつくられてきたのかはわかっていないが、スリヤントらはコタグデの市街地形成について、いくつかのパターンを示唆している(注42)。

その1つは、まちの中心部から貴族の住居へと続く道路沿いに、市街化が進展していった場合である。もう1つは、同じ職種の職人が集住することによって地区が形成された場合である。クラトン建設に際し職人が集められたのであろう。したがって、コタグデがかつてマタラム王朝の所在地であった名残りとも考えられる。カンブンの名前には、銅細工、鉄細工、クリス製造、皮細工に因んだ名前をもつものがある。

以上の記述から、コタグデの市街地構成は、ジュロン・ベテンを小型化したものであることがわかる。それは、1つのクラトンのように、中心性を与える存在の周囲にダラムが配されたレイアウトに加え、職人などの機能集団の居住地からなる。マジヤパイトとも共通するものであり、コタグデがかつてクラトン都市であったことを示す名残りといってよいだろう。

3-3 伝統的住居

1 伝統的住居の構成

前述したように、バリはかつてのジャワの姿を今に伝えるといわれている。したがって、かつてのジャワの住宅は、バリ島の住宅と同様、外部に対して閉ざし、内部は開放的な空間に家内寺院などの家屋の集合体からなるコートハウス状をしており、ヒンドゥのハンドブックであるアーサストラなどの影響を受けたものと考えられている（注43）。現在の中部ジャワの伝統的住居の構成は基本的にはそれを引き継ぐものだが、現在のバリと比べればかなりの違いが認められる。

中部ジャワの伝統的住居は5つの部分から構成されている（図3-2-8）。それぞれの部分は独自の名称と用途をもち、それぞれが独自の屋根を架けたかたちとなっていることから判断すると、かつてのコートハウスの構成の名残りとも考えられる。

それぞれの部分の構成は次の通りである。

1) プンドボ

家の前面にあり、レセプション機能をもつ。

2) プリングタン

プンドボと母屋であるダレムの間に位置し、儀礼などの際にワヤンを上演する場所になる。ワヤンはジャワ語でリングットといい、プリングタンの名はこれに因むものである。

3) ダレム

グリョアグンともいい、母屋を意味する。家族が居住する一画である。通常前後に2つの部分に分かれており、前方の大きなスペースが居間として使われ、後方の部分は3分割されている。

4) パウォン

台所であり、ダレムの後方に位置する。

5) ガンドク

ダレムの横に位置する区画であり、ファミリールームとして使われる。

- 2 社会階層と住居の関係

(1) 社会階層と住居形式

以上のような住居の空間構成は中部ジャワ一般に観察されるものである（注44）。しかし、そのバリエーションは多く（図3-2-9）、かつては階層に応じて住居様式が決められていたことがうかがわれる（注45）。

最も完璧な形式のものは、当時の社会階層の頂点をなす王のクラトンに見ることができる。一般の伝統的住居と比べるとその構成ははるかに複雑である。

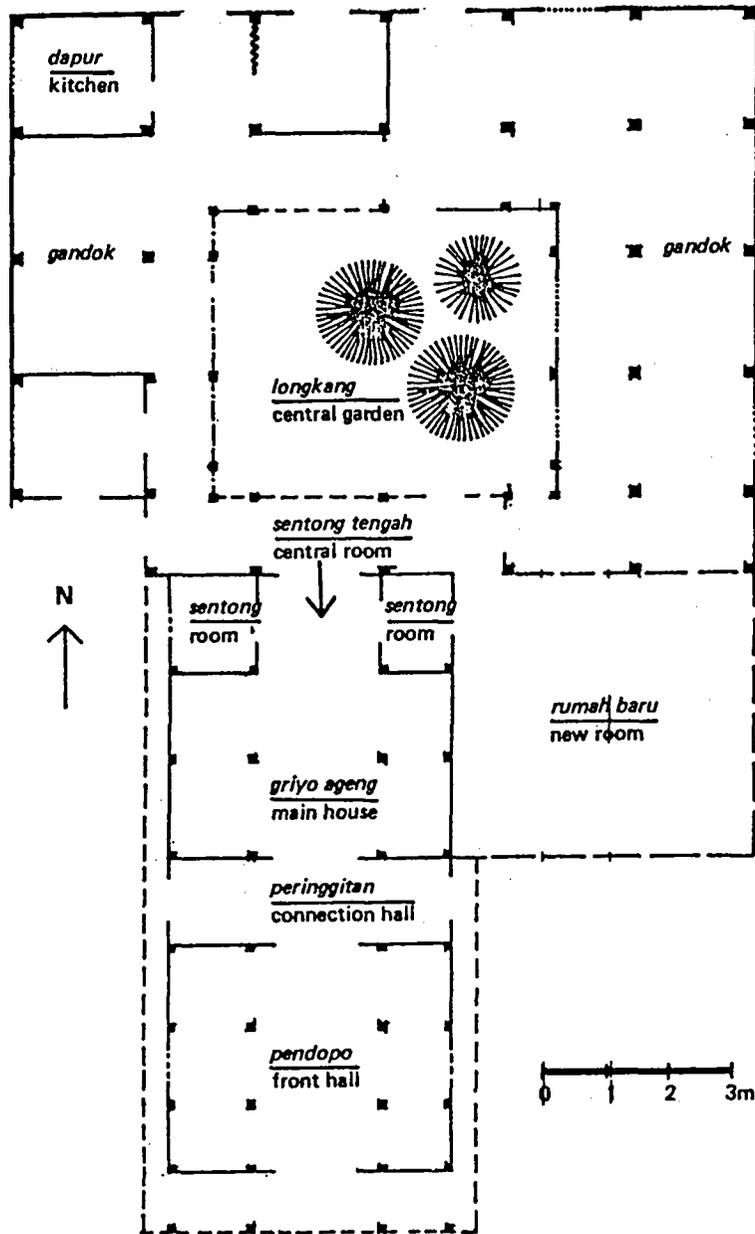


図 3 - 2 - 8 中部ジャワの伝統的住居

出典 : DJAUHARI SUMINTARDJA: Central Java (Part 2); Traditional in Indonesia, in "MASALAH BANGUNAN, Vol. 19 No. 3, 1974"

貴族の住居は、基本的にはクラトンの規模を縮小し簡略化した構成となっており、様式には身分に応じて細かな差異が設けられていた。

1) クラトン

①クラトンだけに許される特殊なジョグロ型ブンドボ、ジョグロ型プリンギタン、その他の家屋は特殊なリマサン型

2) 高官の住居

高官とは、パティ、ブパティ、アディパティ、パングラン、トゥムグンなど。

①ジョグロ型ブンドボ

②特殊なリマサン型プリンギタン

③ジョグロ型ダレム

3) プリヤイおよび金持ちの住居

①ジョグロ型ブンドボとジョグロ型ダレム

②カンブン型ブンドボとリマサン型ダレム

③リマサン型ブンドボとカンブン型ダレム

など種々であった。しかし、最も完全なモデルは、ブンドボ、プリンギタン、ダレムなどの要素を備え、ジョグロ型、あるいはリマサン型屋根を冠した形式であった。

4) 庶民住宅

①バンガン、カンブン、リマサン型

(2) ブパティの住宅の事例

住居の構成は図3-2-10の通りである(注46)。全体の構成は、性格の異なる4つのゾーンからなっており、これにしたがって機能を記す。

(1) パブリック・ゾーン

①トゥンバット(またはルアン)・ガムラン ガムラン演奏

②グドガン 馬匹厩舎

③バルロト 車寄せ

④パゴンガン ブンドボの前室

⑤ブンドボ 客間、居間、会議室、ワヤン劇の客席

⑥トラタグ プリンギタンとブンドボの連結

(2) セミプライベート・ゾーン

①プリンギタン ワヤン上演

(3) プライベート・ゾーン

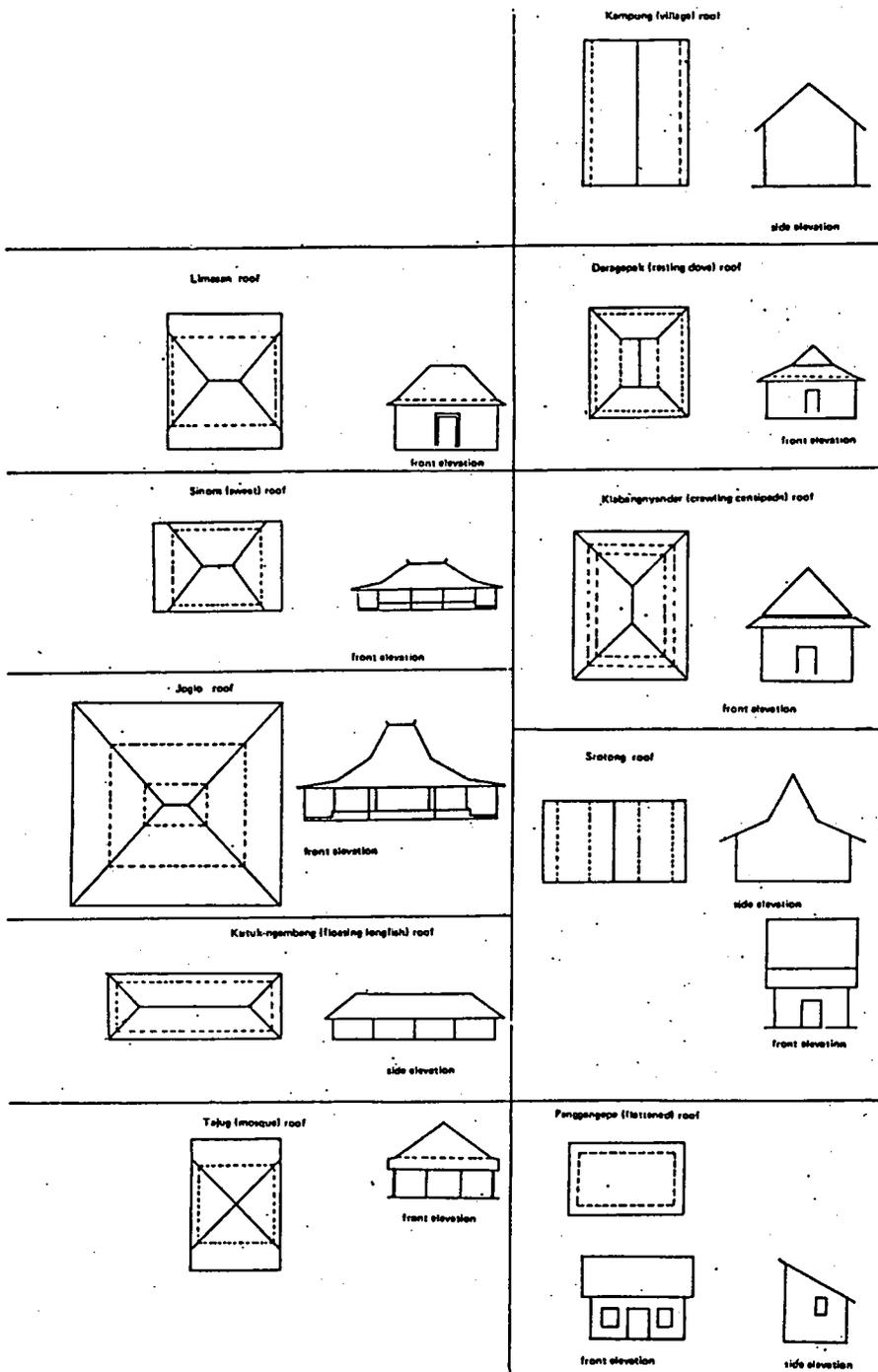
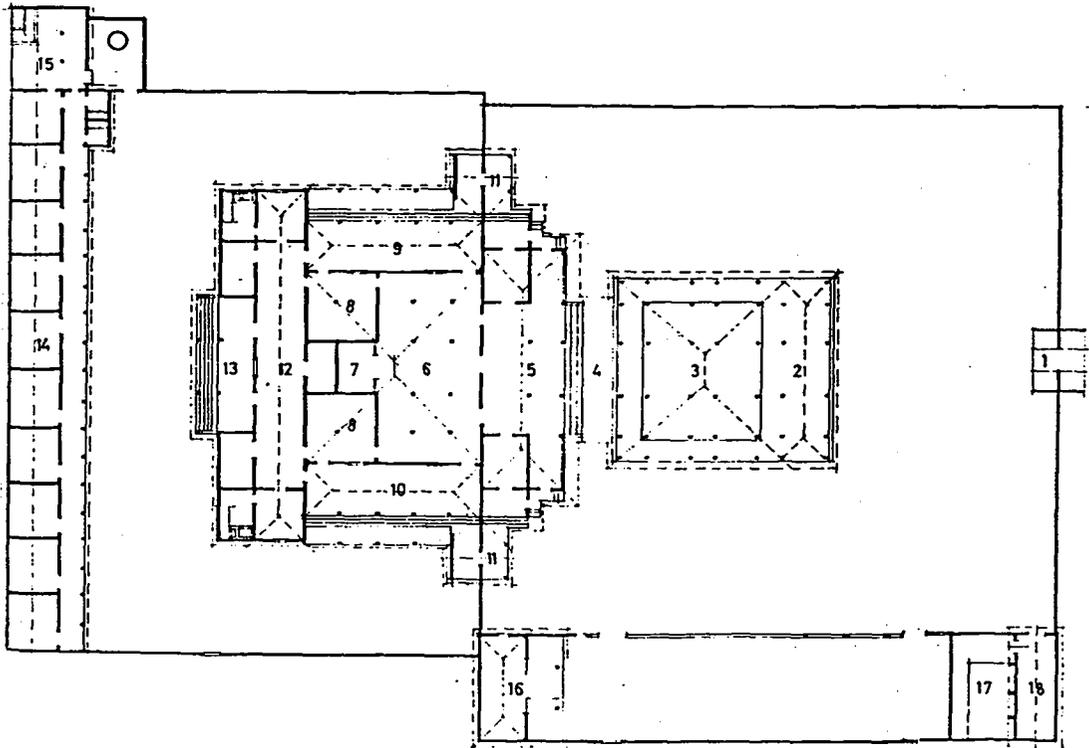


图 3 - 2 - 9 传统的住居屋根形状

出典：DJAUHARI SUMINTARDJA:Central Java(Part2);Traditional in Indonesia,in "MASALAH BANGUNAN,Vol.19 No.2,1974"



- 1 REGOL
- 2 PAGONGAN
- 3 PENDOPO
- 4 TRATAG
- 5 PRINGGITAN
- 6 DALEM
- 7 PEDARINGAN
- 8 SENTONG
- 9 GANDOK KIRI
- 10 GANDOK KANAN
- 11 REGOL SEKETENG
- 12 GADRI
- 13 EMPER
- 14 LOS BELAKANG
- 15 DAPUR
- 16 PATEHAN
- 17 GEDOGAN
- 18 KANDANG KERETA



図 3 - 2 - 10 ブパティの住居

出典 : LABORATORIUM BABIAN ARSITEKTUR FAKULTAS TEKNIK UNIV GAMA
 : DALEM BUPATHI PUROBODIRDJAN, Unpublished Report, 1971

- ①ダレムアグン 家族居間
 - ②ガンドク・トゥングン 夜更かしする場所
 - ③ガンドク・トゥングン・トンガン ①と②の連結
 - ④ガンドク・キウォ 食堂
 - ⑤ガンドク・キウォ・トングン ①と④の連結
 - ⑥スントン 財宝庫
 - ⑦ガドゥリ 厨子
 - ⑧アンプル ベランダ
 - ⑨ブキワン トイレ・バス
 - (4) サービス・ゾーン
 - ⑩パウオン 台所
 - (5) その他
- ガプロは入口の門を指す。

(2) コタグデの住居

1) 住居の構成

図3-2-11はコタグデにおける伝統的住居の平面およびその構成、および、実測調査した住居を示したものである。コタグデの住居の基本型は母屋であるダレムと、儀礼空間であるブンドボとを軸に左右対象形をなす。

この2つの建物は両面しいずれもジョグロ屋根を冠しているケースが多い。これらの住居は宮廷建築や貴人の住居をモデルとして、それらをミニチュア化したものとみなすことができる。たとえば、ブパティの住居に存在する構成要素をすべて備えたものは数少なく、図の家屋の場合も、はじめから設置されていない部屋がみられる。

したがって、コタグデの住居の構成要素は、その様式性および居住性の点で、必要最小限の本質的意味をもつものと考えることができる。それぞれの要素の概要は次の通りである。

①ブンドボ

柱間3～5間の壁がない吹き通しの構造をした建物である。天井はなく、小屋組みが露出しており、緻密な彫刻を施したものが多い。中央の4本の柱の柱頭の梁と桁からなる組みものはサカグルと呼ばれ、宗教的世界観にもとづく象徴的意味をもっている(注47)。通常、釘などを用いずに組み立てられており移築可能である。本来は冠婚葬祭などの儀礼空間としての機能をもつ。

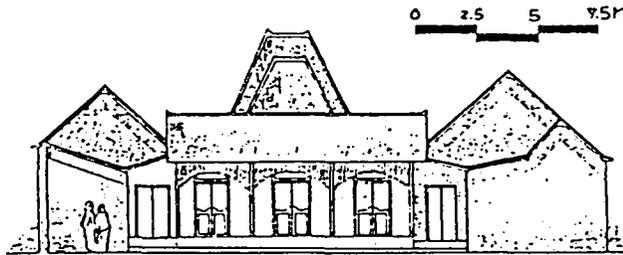
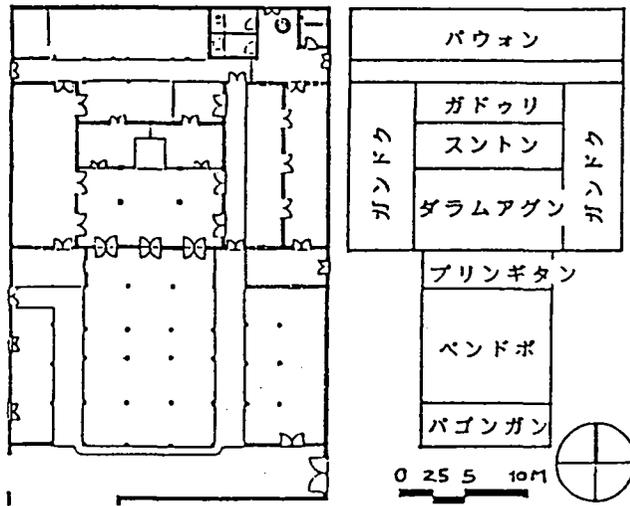


図 3 - 2 - 11 コタグデの住居

②ダレム

母屋でありダレムアグンという南側の居間空間と、その北側にあるスントンと呼ばれる3つの小室とからなる。

スントンのうち、中央の小室は、聖なる空間として意識されており、本来は家具をまったく入れず、あるいは誰も使用しないベッドがおいてあるだけの空間である。

③プリンギタン

ダレムの前面に位置し、ブンドボと同じく儀礼空間として使われ、ワヤンを上演する場ともなる。

④ガンドク

ダレムの両側または片側にあり、日常はここから住居に出入りする。接客空間、仕事場、居間などさまざまな用途に利用される。

⑤パウオン

ダレム北側の最も奥まった部分にはパウオンと呼ばれる別棟の建物がある。井戸、炊事、選択などの水まわり空間と、使用人の居室などがある。

－ 3 生活空間における住居

(1) 伝統的住居の特徴

コタグデの住居についての観察を中心に、伝統的住居の特徴をまとめると以下のようになる。

①儀礼空間の重視

ブンドボ、プリンギタン、スントンは、儀礼や宗教的意味をもつ空間であり、それが住居の最も中心的な位置を占めている。

②接客空間の重視

伝統的住居ばかりではなく接客空間が家の最もよい位置にある。これは①の儀礼空間の重視にも相通じるものである。

③装飾性の高さ

儀礼空間や接客空間の装飾には目をみはるものがある。

④機能性の軽視

儀礼や接客空間の充実に比べて、食事空間は非常に貧弱で、食堂がなかったり、家族全員が一緒に食べるだけの広さがなかったりする。食事に対する意識が低いのは、同時に行なった生活時間調査や意識調査からも確かめられた。

また、家族団樂のための居間など日常生活を行なう空間は、ダレムの横のガンドク

におし込められたかたちであり、様式性を強く示す住居全体の構成のなかにあつては脇役といった印象である。

こうした伝統的住居の特徴は、いずれも近代的生活の容器としての住居の概念とはかなり異なる印象を示すものであり、現在進行中の近代化による生活変容の衝撃をどのように受けとめることができるかが今後の変容の鍵となると思われる。次章では主にこの点について考察する。

3-4 要約

第Ⅰ部は、ジャワ島都市においては、複数の生活空間の伝統が歴史的に混交することによって、空間的にも社会的にも多面的構成が形成されたことを指摘した。いいかえれば、ジャワ島都市における生活空間の伝統を見取図化することであつたと位置づけられる。

しかしながら、第1章の要約の末尾で簡単にふれたように、各類型別市街地における生活空間の伝統は単系的なものではない。それぞれの類型自体がさらに多面的な履歴をもつとすれば、都市全体としての伝統の系譜はさらに複雑したものと考えべきであろう。そこで、第Ⅱ部では、事例として1つの系譜をとりあげ、生活空間の伝統の形成過程をより詳細に検証していくことをねらいとして設定した。第Ⅰ部を総論とすれば各論にあたるということができらう。

ここでは、植民地期以前の都市における生活空間の存在様式を伝統として継承していると考えられる市街地、つまり、類型3および5を考察の対象として選んだ。その理由は、これらの市街地における伝統は通常ジャワ固有のものとして扱われ、近代化に対置されることが多いからである。したがって、伝統を静的固定的なものではなく動的流動的なものとして描写するという本研究の意図に照らしてもっとも適当であると判断された。

第Ⅱ部では以上のような意図から、伝統的都市の系譜を遡行するとともに、現在および将来の変容について考察した。そのなかにおける本章の役割は、伝統の系譜を考察することであつた。具体的には、都市における生活空間の伝統継承を空間構成を媒介として把握することであり、歴史上に存在した都市および現存する伝統的都市について、既存研究およびフィールド調査の結果をもとに、都市、地区、建物などいくつかの異なるレベルでのレイアウト・パターンを検討した。その結果の概要は次の通りである。

ジャワにおける空間構成原理の系譜は、ジャワにおけるプレヒンドゥー期に起源をも

つ土俗的原理であるマンチャバットを核として、その後さまざまな外来の影響がかぶさったものと考えられる。その主なものはインドゥの世界観、イスラム、植民都市であるが、基本的な原理はほとんど変わっていない。この点にジャワにおける伝統継承の特性をみる視座がありうると考えられる。

伝統的都市の市街地空間の構成原理の中核となるのは中心性、軸性、入れ子性である。中心性は、たとえばボロブドゥールのプランに端的に示されているが、結果として生みだされる同心円性はかつての国家あるいは都市のあり方と密接に結びつくものとなっている。

また、軸性は、クラトンのレイアウトなどにみることができるが、すべての建物が南の海の方角を向くコタグデの住居の場合のように、方位と結びつくことによって市街地に一定の規則性を生むことになっている。

入れ子性は、クラトンを中心としてそのミニチュアであるダレムが配される仕組みにみることができように、中心性と密接な関係を持ち、国土や市街地のように一定の領域が形成される際に重要な役割を果たしている。

こうした空間構成原理は、単に空間構成だけではなく、人びとの意識や人間関係のあり方などと密接な関係をもつものと考えられる。基本的には同一原理にしたがいながら、社会階層に応じて様式が精緻化していく伝統的住居の存在様式に端的にみることができる。

かつては中部ジャワの住居、とりわけ貴族的伝統を濃くひいている様式住宅はクラトンと同じ原理によってつくられ、そのミニチュア版という性格をもつものであった。こうした存在様式は入れ子性によって解釈しうるものであり、近代的住居とは異なる存在様式をもっており、近代化による生活変容による影響が予想される。

本章では、以上にみるように、1つの類型がきわめて多面的な伝統の系譜をもつ、いいかえれば、多義的伝統をもつことを指摘した。こうした伝統形成のあり方にジャワの伝統をもとめる説もあるが、その確認には今後の近代化による変容の結末をみとどける必要が感じられる。

補注

(1) たとえば、ジョン・D・レグ『インドネシア歴史と現在』中村光男訳、サイマル出版会、1984、p.50

(2) GUNAWAN TJAHJONO: Centre as an Idea in Javanese Landscape, in "JURNAL

- IAI,1987,p.17
- (3) GUNAWAN TJAHOJONO:ibid.,pp.18-20
 - (4) 矢野暢『東南アジア世界の論理』中央公論社、1984、pp.94-97
 - (5) GUNAWAN TJAHOJONO:op.cit.,pp.20
 - (6) 野口英雄「建築と空間象徴」東南アジア研究、22巻1号(1984)、pp.15-21
 - (7) たとえば、GUNAWAN TJAHOJONO:op.cit.,p.22
 - (8) GUNAWAN TJAHOJONO:ibid.,p.20
 - (9) COBBAN,J.L.:THE CITY ON JAVA;AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY,Ann Arbor,1970,pp.27-42
 - (10) JOSEF PRIJOTOMO:IDEAS AND FORMS OF JAVANESE ARCHITECTURE,Yogyakarta, 1984,pp.92-93
 - (11) 内藤達他「マラッカのピラミディカル・モスクについて」日本建築学会学術講演梗概集、1983、pp.2841-2842
 - (12) バリには、山の方向を聖なるカジャ軸、海の方角を汚れたクロッド軸とする空間概念が存在する。詳細については、たとえば、ARDI P.PARIMIN:FUNDAMENTAL STUDY ON SPATIAL FORMATION OF ISLAND VILLAGE;ENVIRONMENTAL HIERARCHY OF SACRED-PROFANE CONCEPT IN BALI,Unpublished Paper,1986
 - (13) COBBAN,J.L.:op.cit.,pp.25-26
 - (14) たとえば、GUNAWAN TJAHOJONO:op.cit.,p.22
 - (15) COBBAN,J.L.:op.cit.
 - (16) SURYANTO et.al.: KOTAGEDE - A TRADITIONAL SETTLEMENT,Unpublished Paper, Yogyakarta,1987,p.6
 - (17) GUNAWAN TJAHOJONO:op.cit.,p.24
 - (18) GUNAWAN TJAHOJONO:ibid.,p.25
 - (19) たとえば、村井吉敬「バンドンー西ジャワ・プリアンガンの町の生成と発展」東南アジア研究、21巻1号(1983)、pp.29-46 : pp.36-37
 - (20) TILLEMA,H.F.:Lay-out of an Average Regency Seat,in "WERTHEIM,W.F.:THE INDONESIAN TOWN,Amsterdam,1958,pp.77-84"
 - (21) GILL,R.:THE MORPHOLOGY OF INDONESIA CITIES;AN INTRODUCTION TO THE MORPHOLOGY OF COLONIAL SETTLEMENTS AND TOWNS ON JAVA,Paper Presented at the Seminar "Change and Heritage in Indonesian Cities",Jakarta,1988
 - (22) GILL,R.:ibid.

- (23) たとえば、GUNAWAN TJAHHONO:op.cit.,p.27
- (24) その内容については、たとえば、勝瀬義仁他「中部ジャワ-建築儀礼・組織・材料-東南アジアの都市と住居に関する研究(その21)」日本建築学会関東支部論文報告集、1983、pp.285-288
- (25) たとえば、BONDAN HERMANTO et.al.:HIERARCHY OF THE PUBLIC SPACE IN KAMPUNG NAGA,Unpublished Paper,Yogyakarta,1987
- (26) たとえば、ジョン・D・レグ『インドネシア歴史と現在』中村光男訳、サイマル出版会、1984、p.13
- (27) JOSEF PRIJOTOMO:IDEAS AND FORMS OF JAVANESE ARCHITECTURE,Yogyakarta,1984
- (28) GUNAWAN TJAHHONO:op.cit.,p.27
- (29) GUNAWAN TJAHHONO:ibid.,p.26
- (30) GILL,R.:op.cit.,p.14
- (31) GUNAWAN TJAHHONO:ibid.,p.25
- (32) スロスマルジャン「中間都市ジョクジャカルタの構造と変動-空間的、歴史的形成の特質」古屋野正伍編著『東南アジア都市化の研究』アカデミア出版会、1987、pp.408-416
- (33) SELOSOEMARDJAN:SOCIAL CHANGES IN JOGJAKARTA,Ithaca,1962,pp.23-27
- (34) 矢野暢は、東南アジアの権力のあり方は基本的には家産制であるとして、「小型家産制国家」という概念でこれをとらえることを提案している。(矢野暢『東南アジア世界の論理』中央公論社、1984、pp.7-81)
- (35) 野口英雄、前掲書、p.20
- (36) ガジャマダ大学講師イカプトウラ氏による。(IKAPUTRA:KONSOLIDASI)
- (37) PENGAJIAN ARSITEKTUR PERSADA YOGYAKARTA:REPORT FROM "PEKATEN",Unpublished Paper,1980,p.4
- (38) van MOOK,H.J.:KUTA GEDE,in "WERTHEIM,W.F.:THE INDONESIAN TOWN;STUDIES IN URBAN SOCIOLOGY,Amsterdam,1958,pp.275-331"
- (39) MITUO NAKAMURA:THE CRESCENT ARISES OVER THE BANYAN TREE,Yogyakarta,1983,pp.50-64
- (40) SURYANTO et.al.:op.cit.,p.66
- (41) いわゆる「屋敷地共住」である。本来はタイ社会の研究からでてきた概念といわれる。たとえば、前田成文『東南アジアの組織原理』勁草書房、1989、pp.

137-142

- (42) SURYANTO et.al.:op.cit.,pp.59-63
- (43) DJAUHARI SUMINTARDJA:Central Java(Part2);Traditional in Indonesia,in
"MASALAH BANGUNAN,Vol.19 No.3,1974,pp.32-38:p.34"
- (44) DJAUHARI SUMINTARDJA:Central Java(Part2);Traditional in Indonesia,in
"MASALAH BANGUNAN,Vol.19 No.2,1974,pp.23-28:pp.23-24"
- (45) JOKO TRIWINARTO SANTOSO et.al.:DALEM TUMENGGUNG HARTOLOYO DI KARANG
DUREN,CITRAN,KOTAGEDE,Unpublished Paper,Yogyakarta,1984,p.17
- (46) JOKO TRIWINARTO SANTOSO et.al.:ibid.,p.17a-19
- (47) たとえば、勝瀬義仁他「中部ジャワ-住宅構法-東南アジアの都市と住居に関
する研究(その22)」日本建築学会関東支部報告集、1983、pp.289-292

第4章 伝統的都市における空間構成の変容

4-0 緒言

- 1 視点

第3章では、主として伝統的都市を対象として、その空間構成原理についての考察を試みた。こうした空間構成がみられる都市は、その数こそ多いとはいえないが、事例としてとりあげたコタグデのように、歴史上の存在としてではなく現実の生活空間として生き続けており、現在のジャワ都市における生活空間を構成する要素として、その伝統自体の位相と水準を示す存在とあってよいだろう。

さて、こうした都市は今後どのような変容を遂げていくのだろうか。現在および将来の都市的伝統を考える上で、この設問の投げかける意味は小さくない。その1つの鍵が、過去から継承されてきた空間が、引き続き人びとの生活の舞台、あるいは器としての役割を果たしうるかという点にあることはいうまでもない。

実際に市街地を歩いてみると、伝統的住居の変容、滅失は著しく、修復、再生産されない以上、それらが消えていくのは時間の問題と考えられる。市街地は不断の変容過程にあり、その意味では変容すること自体は自然なことである。しかし、比較的長期的な視野にたってみると、変容過程には遅速が存在し、いわば変革期と安定期が交互に訪れるかたちになっていると考えられる。外来文明との接触がその節目になったであろうことは想像に難くない。その意味でいえば、これらの都市は現在変革期にあるということができるように思う。

それは、生活空間として住居がもつべき条件が急速に変化しつつあることを示している。生活空間が人間によって受けとめられた外界の構造である以上、その変化の背後には生活行動および意識の変化がともなっていることが推察される。

ここでは、現実の都市における生活空間の分析を通じて、伝統的な空間構成とそこで行なわれている人々の生活との整合性を把握し、両者の相互作用の結果として促進される空間の変容について考察することを試みる。

それはまた、ジャワの都市的伝統の中核をなす伝統的都市の行く末を推し量ることであり、必然的に生活空間の伝統の継承へとつながっていく問題でもある。

- 2 目的と構成

本章の目的は、伝統的都市における生活空間の変容の要因とその方向性について考察することである。より具体的には、①伝統的住居の変容と、②住居クラスターの変容の2点を考察の対象とする。その理由は、第3章で論じた都市的伝統において本質

的な意味をもつと考えられること、また、市街地において観察される物的要素の変容の中ではかなり頻度の高い現象であることである。

主としてコタグデを事例とするが、補足的にクドゥス・カウマン（以後クドゥスと記す）も参照事例としてとりあげる。

本章の構成は、まず、第1節では伝統的住居の変容について考察し、続いて、第2節では住居クラスターの変容について考察する。

－ 3 方法

（1）調査設計の基本的考え方

生活空間を分析する際の基本的考え方は、人間と空間とが動的な相互関係にあるという前提である。したがって、生活空間の把握の具体的作業は、おおむね、まず人びとの生活行動および生活意識を明らかにし、それによって空間要素およびその構成の持つ意味を解釈する手続きと、逆に空間要素およびその構成から人々の生活行動および生活意識を推察する手続きを平行して行なうことになる。

したがって、こうした研究にはコミュニティ内部からの視点が不可欠であり、参与観察などの手法を採用することが望ましいが、調査遂行上の制約から非参与観察にとどまっている。

調査対象空間については、住居と近隣空間の2つの空間レベルでとらえ、主として伝統的空間構成をもつ部分に限定する。したがって、人びとの生活を、それに対応する住居をめぐる生活と近隣空間における生活の2つの局面に大別し、それぞれについて、物的空間、生活行動、生活意識の3点を中心に横断的把握を行なう。

（2）調査の内容と方法

空間については、住居と近隣の2つのレベルごとに、主として住宅および宅地の規模、形態、間取り、所有形態、設備などを調査した。その中心となるのはデザインサーベイである。

生活行動については、個人、家族、近隣の3つのレベルでとらえ、前2者は住み方調査、後者はコミュニティ活動と近所づきあいの調査を行なった。また、生活を横断的に把握するために、生活時間調査を併用した。

生活意識は、生活財の所有、定住意向、居住環境評価および改善意向、伝統的価値に対する意識調査によって把握した。特に、生活財の所有、および、ゴトンロヨンとスラムタンに対する意識調査は伝統的価値意識を問う質問として設計された。

また、コタグデの背景を理解するための各種文献資料の収集、およびフィールド調

査の一環として地図など資料収集を併せて行なっている。

以上をまとめると次のようになる。

空間についての調査は、住居および近隣空間2つのレベルでの実測および観察、ヒヤリング、ならびにアンケートからなる。

・実測および観察調査

①住宅および近隣空間の構成

・ヒヤリング調査

①住宅および近隣空間の変容

・アンケート調査

①住宅および宅地の所有形態

②住宅および宅地規模

③住宅の間取り

④住宅の設備

⑤生活財

生活および意識調査は、観察およびヒヤリング調査、ならびにアンケート調査からなる。調査内容は次の通りである。

・観察およびヒヤリング調査

①住宅住み方調査

②生活時間調査

・アンケート調査

①住宅居室要求

②定住意向

③居住環境評価

④コミュニティ活動

⑤近所づきあい

⑥伝統的価値に対する意識

社会的背景の調査は、主としてR Kレベルでの統計データの収集である。これによって、年齢、職業、宗教などの別による人口構成を把握した。

(3) 調査の概要

調査の中核となるフィールド調査は1985年7月から8月にかけて実施された。筆者の属する大阪大学とバンドン工科大学工学部建築学科およびガジャマダ大学工学部建築学科の3者による共同調査のかたちをとり、大阪大学とガジャマダ大学がコタグデ

を、大阪大学とバンドン工科大学がクドゥスを分担した。

チーム編成は、それぞれ日本側スタッフ2、3人とインドネシア側講師2人、学生数人からなり、調査チーム内の意思疎通言語は原則として英語が用いられた。したがって、調査遂行に当たっては打合せを繰り返し意思の統一を図った。

アンケート調査は留置型をとらず、インドネシア人学生アシスタントを通じ、回答者に直接インタビューする方式とした。調査対象地区は世帯主とし、標本数は表4-0-1の通りである。地区により標本数が異なるのは、主として調査遂行上の都合によるもので、中心とする地区と、補足的に扱う地区とでは調査の精度を変えてある。

また、ヒヤリングなど住民との意思の疎通については、原則としてインドネシア人スタッフが担当した。その際の使用言語はジャワ語である。

なお、調査はジョクジャカルタ市近郊の新興住宅地であるチョンドンチャトゥルでも実施した。したがって、調査結果を示す図表にもチョンドンチャトゥルの結果をブルムナスの名称とともに記載したが、本章の分析には直接の関係はない。

－ 4 調査対象地区の概要

1) 調査地区の選定

調査地の選定であるが、植民地期以前に起源をもつ伝統的市街地が存続しているコタグデ、クドゥス、チレボン、デマク、ラセム、グレシクなどを比較検討した結果、市街地および建物の存続状態が比較的良好と判断されたコタグデおよびクドゥスを選んだ。

また、調査対象地区の選定に当たっては、伝統的住宅をはじめとする伝統的環境が比較的良好に保全されていると判断された部分を調査地区とした。その範囲は、当初街区レベルを想定していたが、事前に地図が入手できなかったこと、明快な街区割を欠く地区であったことなどから、境界として一定の妥当性をもつと判断された道路など直線的な空間要素により適当に範囲を定めた。結果的に、不整形ではあるが、おおむね一辺が数百メートル程度の区域となった。行政区分は特に考慮していない。

2) 調査地区の概要

コタグデについては省略する。

クドゥスはジャワ島の北部沿岸に近い町で、16世紀ごろジャワのイスラム王国デマクの聖地として栄え、以後商業都市として発展してきたが、現在人口は9万人でやや停滞ぎみである。カウマン地区はこの町の発祥の地とされる聖なる場所に建つモスク周辺に位置する。

表 4 - 0 - 1 標本数

地 区	世 帯 数	人 数		
		男 性	女 性	計
コタグデ	54	154	142	296
ブルムナス	55	145	159	304
クドゥス	24	59	76	135
計	123	358	377	735

表 4 - 1 - 1 住居構成要素

		コタグデ			ブルムナス			クドゥス			計				
		実数	%	総数	実数	%	総数	実数	%	総数	実数	%	総数		
伝統的要素	第1群	ダレム	27	50.0	54	0	0.0	55	2	8.3	24	29	21.8	133	
		スントン	28	51.9	54	0	0.0	55	0	0.0	24	28	21.1	133	
		プリンギタン	18	33.3	54	0	0.0	55	1	4.2	24	19	14.3	133	
	第2群	パウオン	24	44.4	54	0	0.0	55	1	4.2	24	25	18.8	133	
		ブンドボ	9	16.7	54	0	0.0	55	0	0.0	24	9	6.8	133	
		ガンドク	21	38.9	54	0	0.0	55	1	4.2	24	22	16.5	133	
	第3群	ブキワン	20	37.0	54	0	0.0	55	1	4.2	24	21	15.8	133	
		スベン	6	11.1	54	0	0.0	55	0	0.0	24	6	4.5	133	
	第4群	ムショラ	12	22.2	54	1	1.8	55	4	16.7	24	17	12.8	133	
		グダン	12	22.2	54	9	16.4	55	3	12.5	24	24	18.0	133	
	近代的要素	第5群	ダアール	17	31.5	54	34	61.8	55	16	69.6	23	67	50.8	132
			客間	32	59.3	54	54	98.2	55	23	100.0	23	109	82.6	132
家族室			25	47.2	53	26	47.3	55	12	52.2	23	63	48.1	131	
食堂			26	49.1	53	47	85.5	55	17	73.9	23	90	68.7	131	
主寝室			30	56.6	53	54	98.2	55	21	91.3	23	105	80.2	131	
子供室			27	50.0	54	53	96.4	55	18	78.3	23	98	74.2	132	
塀			20	37.0	54	43	78.2	55	11	45.8	24	74	55.6	133	
庭			23	42.6	54	42	76.4	55	10	41.7	24	75	56.4	133	
マンディ場			32	59.3	54	44	80.0	55	23	95.8	24	99	74.4	133	
第6群		老人室	6	11.3	53	3	5.5	55	0	0.0	2	9	8.2	110	
第7群		ワルン	10	18.9	53	7	12.7	55	1	4.2	24	18	13.6	132	

4-1 伝統的住居の変容

コタグデとクドゥスは、ともに第3章で述べた伝統的都市の特徴を備えている。すなわち、伝統的様式にもとづく住居がかなり広範に存在するだけでなく、住居集合形態など市街地空間構成にも特有の原理が見出せる。住居形態などに異なる面もあるが、全体としては高い近親性を示している。

- 1 伝統的住居の存続状況

(1) 今世紀初頭の状況

現在のコタグデとクドゥスの市街地は、伝統的な住居だけで構成されているわけではない。ファン・ムウクの記述によれば、今世紀初頭のコタグデには、伝統的な様式にしたがう住宅が多く存在していたことがわかる（注1）が、それがどの程度の比率であったかについてははっきりしない。

様式としての完成度の高い、精緻な彫刻をもつジョグロ型の伝統的住居（様式住居と呼ぶ）は、本来貴族の住居であり、富と権力を示す象徴であったことは想像に難くない。当時の社会階層構成を考えると、比較的富裕な職人より上の層が所有しうる程度のもではなかったかと推察される。

もっとも、アブディダラムはともかく、富裕な商人および職人階層がすべてジョグロ型住宅に居住していたわけではなさそうである。コタグデには、カウマン的な装飾をもち、正式なジョグロ型とはかなり異なる意匠、空間構成をもつ豪邸が存在する。

また、カランと呼ばれたマイノリティグループに属する人びとの住宅の多くもまた様式住居とは異質なものであった。これらの人びとの住宅は、ガジャウォン川の西にコタグデの町とは川を隔てて隣接する地区に今でも残っており、往時の華美の名残りをみせている（注2）。

また、ファン・ムウクの記録には、当時のコタグデの人口はおよそ8000人であったとある（注3）。現在の1万5000人と比べると、人口で6000人程度少なかった。当時の世帯構成が現在と大差なかったと仮定すれば、少なくとも1000世帯少なかったことになる。それを単純に1000軒少なかったと読みかえてみると、人口増が市街地外延の拡大をとまなうものであったことは疑いをいれないが、市街地内部の密度は現在よりもかなり低かったことが推察される。事実、古老へのインタビューでは、以前はバナナ畑であったところが宅地化したというコメントがかなり多く聞かれ、この推測を裏づけている。

こうしたことから判断すれば、当時の市街地は、社会階層の最上層に位置したアブ

ディダラムおよび富裕な商人を主体とする層の住宅であるジョグロ型住居と、それより下の層のカンプン型住宅から構成され、現在よりずっと家屋密度が低かったと想定するのが妥当であろう。

戦後は様式住宅は建てられていないといわれ、当時は現在よりも様式住居の比率が高かったことは間違いない。以来建設された住宅がすべて非様式住居であったとすれば、全住居数を母数とした様式住居の比率は現在の2倍程度高いものであったと考えられる。

その後現在に至るまでには、先に述べた人口増加による住宅新築だけでなく、家屋の老朽化などの要因にともなう住居の新築および増改築により徐々に住居の脱様式化が進んだものであろう。

多少異なる点があったとしても、基本的にはクドゥスでも同様の事情であると考えられる。

(2) 現況

1) 構成要素にもとづく様式住居比率の推定

表4-1-1および2は、住居の単位空間である部屋を住居の構成要素とみなし、その中の主なものについて有無を調べたアンケート調査の結果である。様式住居構成要素の有無から様式住居であるかどうかの判断を行ない、コタグデにおける住居をそのスタイルによって2つに区分することを試みた。

ただし、クドゥスでは伝統的住居を構成する部屋の呼称が異なるため、質問自体の形式が不適であり考察から除外した。

様式住居を構成する11要素のうち、最も件数の多いものはストン、次にダレムである。前者が28件、後者が27件とほぼ同数のうち、両方をもつものが26件、ストンがあってダレムがないケースが2件、逆にストンがなくダレムがあるケースが1件ある。後2者はいずれも非様式住居構成要素を多くもっており、改築による変容がかなり進んでいると判断される。

この点、ストンとダレムの両方をもつ住居は、非様式住居の構成要素をもつものもあるが、他の様式住居構成要素もそなわっており、様式住居をベースに増改築を施したもののうち、変容の比較的少ないものとみなしてよいだろう。

この基準によって判断すると、コタグデでは全体のおよそ半数が伝統的様式ということになるが、同時にブンドボの有無を完全な様式を維持しているケースとみなすとわずか9件、20%以下に下がってしまう。

2) 住居構成要素の組み合わせパターン

上記の住居構成要素の有無のパターンを数量化Ⅲ類によって分析し、要素間の関連をみた。クドゥスは上記の理由のため省き、コタグデの全住居を対象としている。結果は次の通りである（図4-1-1）。

- 1群 ダレム（25）、スントン（26）、プリンギタン（28）、パウオン（30）
- 2群 ブンドボ（27）、ガンドク（29）、プキワン（32）
- 3群 スペン（31）、ムショラ（33）
- 4群 グダン（34）、ダブル（35）
- 5群 ルアン・タム（36）、ルアン・クルアルガ（37）、ルアン・マカン（38）、
ルアン・ティドゥール・アヤ・ダン・イブ（39）、
ルアン・ティドール・アナク（40）、パガール（42）、タマン（43）、
マンディ（44）
- 6群 ルアン・カケク／ネネク（41）
- 7群 ワルン（45）

ただし、（）内は変数番号である。

第1群は、様式住居の居住機能の中核をなすダレムの構成要素と設備の要であるパウオンからなる。プリンギタンを除いて件数が多く、現存比率が最も高い要素群である。

第2群は、様式住居におけるダレム以外の主要な構成要素である。第1群に比べれば件数は少ないが、ブンドボを除き20件以上である。第1群に付加されれば比較的完全な様式住居を形成する要素群である

第3群、4群は、様式住居の構成要素としては付加的なもので、最初からこの要素をもっている住居自体が比較的希少であった可能性が高い。

第5群は、非様式住居の構成要素である。正確には、非様式住居は、カンブンおよびリマサン型のような、ジョグロ型以外の伝統的住居と、近代的住居に区分される。両者の別は、たとえば、伝統的な空間構成原理である南面しているか否かなどによって判断されるが、間取りだけではどちらであるか不明である。したがって、単に非様式住居と記す。

第6群、7群は、やや特殊な要素であり、伝統、近代には関係が薄い。

したがって、第1群から第4群まではいずれも様式住居の構成要素群であり、第1

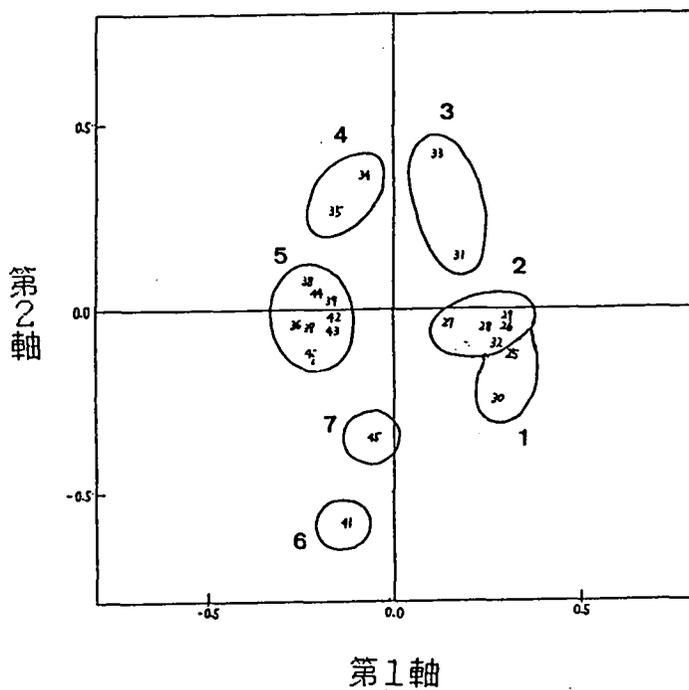
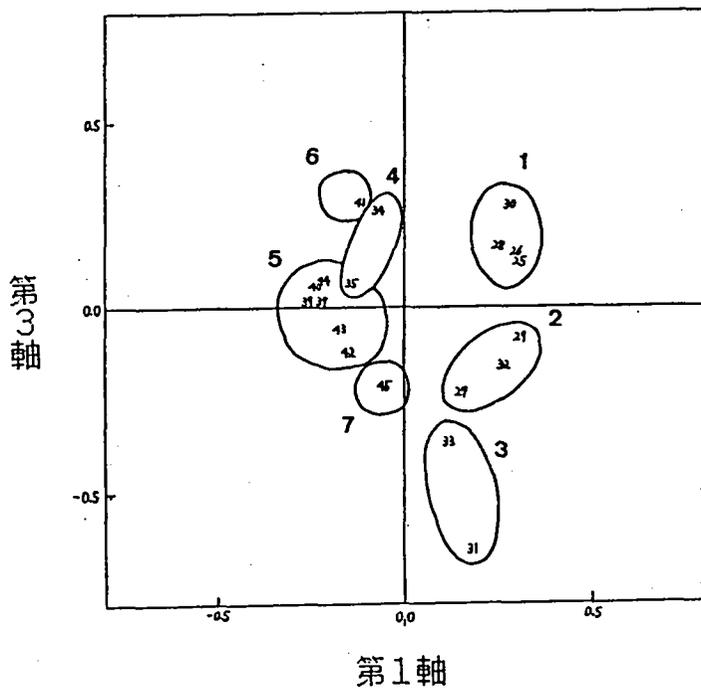


図 4 - 1 - 1 カテゴリー数量によるプロット

群は最初から第2群がないか、あるいは失ってしまった住居を示すものである。事実上、後者のケースが多いと考えられる。第2群は比較的変容の少ない住居、第3、4群は本来様式の完成度がかなり高い住居の存在を示している。

様式住居を構成する各要素が失われるパターンを示すものであり、同時に、それによって間取りによる住居の類型が推察される。

－ 2 様式住居と非様式住居の比較

ここでは、サンプルをダレムの有無により様式住居、非様式住居の2グループに分類した上で、それぞれの住居および居住者の性格の違いを検証しよう。

(1) 住居

まず、敷地面積と床面積は表4-1-3の通りである。ただし、床面積は屋根の懸っている部分として算定している。

敷地面積、床面積とも個々の住宅によってかなりの幅があるが、平均を比べた場合、様式住居の方がかなり大きい。確認のために判別分析を行なってみたところ、グループの別とかなり高い相関を示した。

したがって、非様式様式は様式住居に比べてコンパクトにできているようだが、設備については差がほとんど認められない(表4-1-4～7)。

(2) 居住者

1) 来住時期

来住時期についてみると(表4-1-8)、非様式住居は自分の代から住み始めた人の比率が高く、比較的新しいものが多いと推察される。もっとも、これは非様式住居の方が居住者の年齢が相対的に若いためと考えることもできる。

そこで、非様式住居に住む人のうち、自分の代から住み始めた人だけについて、来住理由と前住地をみみると、比較的近くではあるが外部から人縁を頼りに来住した人が主体であることがわかった。

調査地区はコタグデの中心部ではないが、とって完全な縁辺部でもない。したがって、これらの非様式住居は人口の社会増を吸収するために新築され、それが市街地の家屋密度を高めることになった可能性が高い。

インドネシアでは、一部の大都市を除けば、ライフステージに応じた住みかえは一般的でなく、それによる人口移動はそれほど頻繁ではない。特に、コタグデのような地方の小都市ではいっそうこの傾向が強く、流動人口を吸収しうる借家などは存在しないのが普通である。土地および家屋の所有についての調査結果はこれを裏づけてい

表4-1-3 敷地および床面積

地区	敷地面積	床面積	1人当り敷地面積	1人当り床面積
コタグデ	487.8	275.7	130.6	49.9
ブルムナス	114.1	69.9	39.1	15
クドゥス	296.9	151.1	198.9	44.2

※単位は㎡

表4-1-4 住宅設備（住居様式別）

		非様式住居	様式住居	計
台所	なし	2	3	5
		7.4	11.1	9.3
	あり	25	24	49
		92.6	88.9	90.7
計	27	27	54	
		50.0	50.0	100.0
屋内浴場	なし	9	9	18
		33.3	33.3	33.3
	あり	18	18	36
		66.7	66.7	66.7
計	27	27	54	
		50.0	50.0	100.0
屋外浴場	なし	17	14	31
		63.0	51.9	57.4
	あり	10	13	23
		37.0	48.1	42.6
計	27	27	54	
		50.0	50.0	100.0
屋内便所	なし	13	16	29
		48.1	59.3	53.7
	あり	14	11	25
		51.9	40.7	46.3
計	27	27	54	
		50.0	50.0	100.0
屋外便所	なし	16	16	32
		59.3	59.3	59.3
	あり	11	11	22
		40.7	40.7	40.7
計	27	27	54	
		50.0	50.0	100.0
井戸	なし	2	0	2
		7.4	0.0	3.7
	あり	25	27	52
		92.6	100.0	96.3
計	27	27	54	
		50.0	50.0	100.0
水道	なし	27	27	54
		100.0	100.0	100.0
	計	27	27	54
		50.0	50.0	100.0

※上段は実数、下段は%

表 4 - 1 - 5 住宅設備（住居別）

コタグデ

標本 番号	台 所	屋 外 浴 場	屋 内 浴 場	屋 外 便 所	屋 内 便 所	井 戸	水 道
1	2	2	1	0	1	4	0
2	2	1	0	1	0	1	0
3	2	4	0	4	0	2	0
4	1	1	4	0	0	3	0
5	1	1	1	0	2	2	0
6	1	0	1	0	1	1	0
7	1	0	1	0	1	1	0
8	1	0	1	0	1	1	0
9	1	0	1	0	1	1	0
10	1	0	1	0	1	1	0
11	1	0	1	0	1	2	0
12	1	1	1	1	1	1	0
13	1	0	1	0	1	1	0
14	1	0	1	0	1	1	0
15	1	0	1	0	1	1	0
16	1	0	1	0	1	1	0
17	1	1	1	0	1	1	0
18	1	0	1	0	1	1	0
19	1	0	1	0	1	1	0
20	1	0	1	0	1	1	0
21	1	0	1	0	0	1	0
22	1	0	1	0	0	0	0
23	1	1	1	1	0	2	0
24	1	1	0	0	1	1	0
25	1	1	0	0	1	1	0
26	1	1	0	1	0	1	0
27	1	1	0	0	0	1	0
28	1	1	0	1	0	1	0
29	1	1	0	1	0	1	0
30	1	1	0	1	0	1	0
31	1	1	0	1	0	1	0
32	1	1	0	1	0	1	0
33	1	1	0	1	0	1	0
34	1	1	0	0	0	1	0
35	1	1	0	0	0	1	0
36	1	2	0	1	0	1	0
37	1	1	0	1	0	1	0
38	1	1	0	1	0	1	0
39	1	1	0	1	0	2	0
40	1	0	0	0	0	1	0
41	1	1	0	1	0	1	0
42	1	1	0	1	0	1	0
43	1	1	0	1	0	2	0
44	1	1	0	1	0	0	0
45	1	3	0	2	0	2	0
46	1	1	0	1	0	1	0
47	1	1	0	0	0	2	0
48	1	1	0	0	0	1	0
49	1	1	0	1	0	1	0
50	0	0	2	0	1	2	0
51	0	0	1	0	1	1	0
52	0	2	0	1	1	1	0
53	0	1	0	1	0	1	0
54	0	1	0	1	0	1	0
計	52	44	27	29	23	66	0

*表中の数字は実数

クドゥス

標本 番号	台 所	屋 外 浴 場	屋 内 浴 場	屋 外 便 所	屋 内 便 所	井 戸	水 道
1	1	0	2	0	3	0	0
2	1	0	2	0	1	1	0
3	1	0	1	0	1	1	0
4	1	0	1	0	1	0	1
5	1	1	1	0	1	1	0
6	1	0	1	0	1	-	0
7	1	0	1	0	1	1	0
8	1	1	1	1	1	1	0
9	1	0	1	0	1	1	0
10	1	1	1	1	1	1	0
11	1	0	1	0	1	1	0
12	1	1	1	1	1	1	0
13	1	0	1	0	1	1	0
14	1	0	1	0	1	1	0
15	1	0	1	0	1	1	0
16	1	1	1	1	1	1	0
17	1	0	1	1	0	1	0
18	1	1	0	0	1	1	0
19	1	1	0	1	0	1	0
20	1	1	0	1	0	1	0
21	1	1	0	1	0	1	0
22	1	1	0	1	0	1	0
23	1	1	0	1	0	1	0
24	1	1	0	1	0	1	0
計	24	12	19	11	19	21	1

*表中の数字は実数

表 4 - 1 - 6 住宅設備（地区別）

	コタグデ			ブルムナス			クドゥス			計		
	なし	あり	計	なし	あり	計	なし	あり	計	なし	あり	計
台所	5	49	54	3	52	55	0	24	24	8	125	133
	9.3	90.7	100.0	5.5	94.5	100.0	0.0	100.0	100.0	6.0	94.0	100.0
屋内浴場	18	36	54	1	54	55	12	12	24	31	102	133
	33.3	66.7	100.0	1.8	98.2	100.0	50.0	50.0	100.0	23.3	76.7	100.0
屋外浴場	31	23	54	53	2	55	7	17	24	91	42	133
	57.4	42.6	100.0	96.4	3.6	100.0	29.2	70.8	100.0	68.4	31.6	100.0
屋内便所	29	25	54	1	54	55	13	11	24	43	90	133
	53.7	46.3	100.0	1.8	98.2	100.0	54.2	45.8	100.0	32.3	67.7	100.0
屋外便所	32	22	54	53	2	55	7	17	24	92	41	133
	59.3	40.7	100.0	96.4	3.6	100.0	29.2	70.8	100.0	69.2	30.8	100.0
井戸	2	52	54	40	15	55	2	21	23	44	88	132
	3.7	96.3	100.0	72.7	27.3	100.0	8.7	91.3	100.0	33.3	66.7	100.0
水道	54	0	54	8	45	53	23	1	24	85	46	131
	100.0	0.0	100.0	15.1	84.9	100.0	95.8	4.2	100.0	64.9	35.1	100.0

表 4 - 1 - 7 水源の場所

地区	自宅の 水道	自宅の 井戸	近所の 井戸	その他	計
コタグデ	0	53	1	0	54
	0.0	98.1	1.9	0.0	100.0
ブルムナス	32	10	5	1	48
	66.7	20.8	10.4	2.1	100.0
クドゥス	0	22	0	0	22
	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
計	32	85	6	1	124
	25.8	68.5	4.8	0.8	100.0

※上段は実数、下段は%

表 4 - 1 - 8 来住時期

	非様式住居	様式住居	計
祖父母の代以前	7	15	22
	25.9	57.7	41.5
親の代	8	5	13
	29.6	19.2	24.5
自分の代	12	6	18
	44.4	23.1	34.0
計	27	26	53
	100.0	100.0	100.0

※上段は実数、下段は%

る（表4-1-9）。

また、世帯の構成は夫婦と子供を単位とする核家族的形態が一般的であり、複数の家族が共住する拡大家族的形態はジャワでは比較的少ない。調査結果もこのことを示している。したがって、婚姻によって新しく世帯をもつ場合には、新たに住宅を見出すことが必要であり、条件が許せば親の住まいに近く居住することが多いことは第3章で指摘した通りである。家屋数共住といわれる形式である。

その場合、敷地に余裕があり、財力がそれほど逼迫していなければ、家屋を増築することが一般的と考えられる。こうしたことから、人口増が家屋密度の昂進に直結することになる。既に述べたように、コタグデでは今世紀初頭から人口がかなり増加した。非様式住居はその増分を吸収するかたちで増えたのであろう。

その大部分は、前述したように縁辺部に建てられ、市街地面積の拡大につながったと考えられる。ガジャウォン川付近の、宅地としてそれほど条件がよくない地域に建つ住宅群のほとんど全部が、比較的新しいキャンピング型住居であることはこうした事情を推察させる。

2) 社会階層

次に、住居の様式と社会階層の関係をみてみよう。

世帯主の職業をみると（表4-1-10）、非様式住居は単純労働、様式住居は技術職が特徴的である。技術職とはコタグデの特産である銀細工などの職人を主体としており、様式住居の担い手が伝統的な職人階層であることをある程度示している。

世帯主の学歴では（表4-1-11）、非様式住居は小学校と高校に2つのピークがあり、様式住居では小学校にある。全般に非様式住居に住む人の方が教育程度が高いことがうかがわれる。これは、非様式住居の世帯主の年齢が相対的に若く、教育機会がそれだけ増えたことに起因すると考えられる。

しかし、コタグデのような伝統的構造を残す社会にあっては、社会階層において職業および教育レベルのもつ意味は必ずしも明快ではない。そこで、生活財の所有傾向から経済状態を推察し、それによって社会階層との関係を推察することを試みる。

生活財所有の全般的傾向をみると（表4-1-12および13）、住居の様式には無関係にTVの普及率はかなり高く、また、TVが日常生活で果たす積極的意味を考慮すると、その有無をもって経済的逼迫状態の指標としてよさそうである。

逆に、経済状態のよさを示す共通の指標として適当なものはないが、非様式住居のステレオ、様式住居のラジカセは、所有率がほぼ同程度であり、また、生活財としての性格が似ていることからこの2つを指標とする。

表 4 - 1 - 9 土地・家屋所有

コタグデ		住宅所有				計
		自己所有	共同所有	賃貸	その他	
土地所有	自己所有	38	0	0	0	38
		100.0	0.0	0.0	0.0	70.4
		97.4	0.0	0.0	0.0	
		70.4	0.0	0.0	0.0	
	共同所有	0	9	0	0	9
		0.0	100.0	0.0	0.0	16.7
		0.0	100.0	0.0	0.0	
		0.0	16.7	0.0	0.0	
	賃貸	0	0	0	0	0
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		0.0	0.0	0.0	0.0	
	その他	1	0	1	5	7
		14.3	0.0	14.3	71.4	13.0
		2.6	0.0	100.0	100.0	
		1.9	0.0	1.9	9.3	
計	39	9	1	5	54	
	72.2	16.7	1.9	9.3	100.0	

※ 1 段目は実数、2 段目は行%、3 段目は列%、4 段目は全体%

ブルムナス		住宅所有				計
		自己所有	共同所有	賃貸	その他	
土地所有	自己所有	50	0	0	0	50
		100.0	0.0	0.0	0.0	96.2
		100.0	0.0	0.0	0.0	
		96.2	0.0	0.0	0.0	
	共同所有	0	0	0	0	0
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		0.0	0.0	0.0	0.0	
		0.0	0.0	0.0	0.0	
	賃貸	0	0	0	0	0
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		0.0	0.0	0.0	0.0	
		0.0	0.0	0.0	0.0	
	その他	0	0	0	2	2
		0.0	0.0	0.0	100.0	3.8
		0.0	0.0	0.0	100.0	
0.0		0.0	0.0	3.8		
計	50	0	0	2	52	
	96.2	0.0	0.0	3.8	100.0	

※ 1 段目は実数、2 段目は行%、3 段目は列%、4 段目は全体%

クドウス		住宅所有				計
		自己所有	共同所有	賃貸	その他	
土地所有	自己所有	11	0	0	0	11
		100.0	0.0	0.0	0.0	50.0
		84.6	0.0	0.0	0.0	
		50.0	0.0	0.0	0.0	
	共同所有	2	6	0	0	8
		25.0	75.0	0.0	0.0	36.4
		15.4	100.0	0.0	0.0	
		9.1	27.3	0.0	0.0	
	賃貸	0	0	3	0	3
		0.0	0.0	100.0	0.0	13.6
		0.0	0.0	100.0	0.0	
	その他	0	0	0	0	0
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		0.0	0.0	0.0	0.0	
		0.0	0.0	0.0	0.0	
計	13	6	3	0	22	
	59.1	27.3	13.6	0.0	100.0	

※ 1 段目は実数、2 段目は行%、3 段目は列%、4 段目は全体%

表 4 - 1 - 10 職業構成

	非様式住居	様式住居	計
公務員	2 8.0	1 4.0	3 6.0
会社員	0 0.0	1 4.0	1 2.0
教師	2 8.0	0 0.0	2 4.0
専門職	1 4.0	0 0.0	1 2.0
技術職	8 32.0	14 56.0	22 44.0
単純労働	6 24.0	0 0.0	6 12.0
商業・自営業	6 24.0	4 16.0	10 20.0
無職	0 0.0	5 20.0	5 10.0
計	25 50.0	25 50.0	50 100.0

※上段は実数、下段は%

表 4 - 1 - 11 学歴

	非様式住居	様式住居	計
無就学	0 0.0	3 11.5	3 5.7
小学校	11 40.7	13 50.0	24 45.3
中学校	3 11.1	6 23.1	9 17.0
高校	11 40.7	2 7.7	13 24.5
短大・専門学	0 0.0	1 3.8	1 1.9
大学	1 3.7	1 3.8	2 3.8
大学以上	1 3.7	0 0.0	1 1.9
計	27 50.9	26 49.1	53 100.0

※上段は実数、下段は%

まず、TV所有と住宅規模の関係をみると、住居様式の別にかかわらず非所有者の方が所有者よりかなり低い。ステレオ、ラジオ所有についても同様のことがいえる。したがって、それぞれの住居様式について、居住者の経済状態はかなり多様であることがわかる。

それは、住居様式が社会階層と単純な対応関係にあるのではないことを物語っており、経済的に裕福な層の住居の範型として様式住居と非様式住居の2つの場合が存在する可能性を示唆する。これについては後述する。

3) 価値意識

職業や教育の違いはライフスタイルや価値観の差を暗示している。そこで、伝統的生活を支える価値意識の中核を形成していると考えられるゴトンロヨンとスラムタンについての差をみると(表4-1-14)、若干の相違が感じられるものの、それほど大きな差があるわけではない。

しかし、伝統的に財産の象徴である<鳥>の所有傾向をみると(表4-1-12)、様式住居の方がかなり高い比率となっている。詳しくは第5章で述べるが、2階建て住宅の好き嫌いには明快な相違がみられる。

様式住居の居住者の方が、非様式住居の居住者に比べて、より伝統的価値に対する傾斜が強いとみてよいだろう。それは、単に年齢によるものかもしれない(表4-1-15)。その差はそれほど顕著なものではなく、現在のところ主として住居をめぐる生活の範囲に限られていると考えてよいだろう。

4) 居住環境に対する意識

住宅を除く居住環境評価の各項目に対する回答を得点化し因子分析を適用した。

調査は評価指標として表4-1-16に示すような項目について、<満足-不満>を指標とした5段階評価(1.非常に満足、2.やや満足、3.普通、4.やや不満、5.非常に不満)を行なったものである。

分析の結果、5因子が抽出された。第1因子は「公共のオープンスペース」「コミュニティ・ヘルス」「緑のゆたかさ」「住宅全体の住み心地」の4項目から構成されている。主として地区の物的環境に関連していると判断される。

第2因子は、「コミュニティ活動」「近所づきあい」からなる。社会環境を表わすものと考えてよい。

第3因子は「宗教施設への便利さ」「住宅地の雰囲気」からなる。住宅地の好ましさを意味すると考えられる。

第4因子は「セキュリティ」「親や子供の家との近さ」からなる。心理的安心感を

表 4 - 1 - 12 生活財（住居様式別）

		非様式住居	様式住居	計			非様式住居	様式住居	計
テレビ	あり	21 77.8	20 74.1	41 75.9	洗濯機	あり	4 14.8	6 22.2	10 18.5
	なし	6 22.2	7 25.9	13 24.1		なし	23 85.2	21 77.8	44 81.5
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0		計	27 50.0	27 50.0	54 100.0
ビデオ	あり	0 0.0	2 7.4	2 3.7	冷蔵庫	あり	4 14.8	1 3.7	5 9.3
	なし	27 100.0	25 92.6	52 96.3		なし	23 85.2	26 96.3	49 90.7
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0		計	27 50.0	27 50.0	54 100.0
ラジカセ	あり	18 66.7	11 40.7	29 53.7	エアコン	あり	0 0.0	1 3.7	1 1.9
	なし	9 33.3	16 59.3	25 46.3		なし	26 100.0	27 100.0	53 98.1
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0		計	27 50.0	27 50.0	54 100.0
ラジオ	あり	19 70.4	22 81.5	41 75.9	電話	あり	1 3.7	0 0.0	1 1.9
	なし	8 29.6	5 18.5	13 24.1		なし	26 96.3	27 100.0	53 98.1
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0		計	27 50.0	27 50.0	54 100.0
ステレオ	あり	10 37.0	3 11.1	13 24.1	オルガン ピアノ	あり	0 0.0	0 0.0	0 0.0
	なし	17 63.0	24 88.9	41 75.9		なし	27 100.0	27 100.0	54 100.0
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0		計	27 50.0	27 50.0	54 100.0
車	あり	1 3.7	1 3.7	2 3.7	鳥	あり	6 22.2	15 55.6	21 38.9
	なし	26 96.3	26 96.3	52 96.3		なし	21 77.8	12 44.4	33 61.1
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0		計	27 50.0	27 50.0	54 100.0
バイク	あり	18 66.7	14 51.9	32 59.3	ペット	あり	6 22.2	6 22.2	12 22.2
	なし	9 33.3	13 48.1	22 40.7		なし	21 77.8	21 77.8	42 77.8
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0		計	27 50.0	27 50.0	54 100.0
自転車	あり	21 77.8	23 85.2	44 81.5					
	なし	6 22.2	4 14.8	10 18.5					
	計	27 50.0	27 50.0	54 100.0					

*上段は実数、下段は%

表 4 - 1 - 13 生活財（地区別）

	コガゲテ (N=54)		ブルムクス (N=55)		ク'ウス (N=24)		計 (N=133)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
テレビ	41	75.9	51	92.7	19	79.2	111	83.5
ビデオ	2	3.7	3	5.5	0	0.0	5	3.8
ラジオ	29	53.7	28	50.9	15	62.5	72	54.1
ラジオ	41	75.9	35	63.6	19	79.2	95	71.4
ステレオ	13	24.1	12	21.8	1	4.2	26	19.5
乗用車	2	3.7	6	10.9	2	8.3	10	7.5
バイク	32	59.3	38	69.1	9	37.5	79	59.4
自転車	44	81.5	44	80.0	20	83.3	108	81.2
扇風機	10	18.5	19	34.5	5	20.8	34	25.6
冷蔵庫	5	9.3	9	16.4	1	4.2	15	11.3
洗濯機	1	1.9	2	3.6	0	0.0	3	2.3
エアコン	1	1.9	0	0.0	0	0.0	1	0.8
電話	1	1.9	0	0.0	1	4.2	2	1.5
カメラ	0	0.0	1	1.8	1	4.2	2	1.5
鳥	21	38.9	15	27.3	8	33.3	44	33.1
ペット	12	22.2	6	10.9	12	50.0	30	22.6

表 4 - 1 - 14 スラマタンに対する態度

	非様式住居	様式住居	計
喜んで主催し、参加する	20 76.9	19 73.1	39 75.0
主催はしないが、招かれれば参加する	3 11.5	5 19.2	8 15.4
主催も参加もしない	2 7.7	1 3.8	3 5.8
その他	1 3.8	1 3.8	2 3.8
計	26 50.0	26 50.0	52 100.0

※上段は実数、下段は%

表 4 - 1 - 15 年齢構成

	非様式住居	様式住居	計
20代	4 14.8	1 3.7	5 9.3
30代	8 29.6	4 14.8	12 22.2
40代	9 33.3	7 25.9	16 29.6
50代	3 11.1	8 29.6	11 20.4
60代	2 7.4	5 18.5	7 13.0
70歳以上	1 3.7	2 7.4	3 5.6
計	27 50.0	27 50.0	54 100.0

※上段は実数、下段は%

表4-1-16 因子負荷量および寄与率（コダクテ）

居住環境評価項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
公共オープンスペース	0.75396	0.14607	0.09290	0.33560	0.10322
コミュニティ・ヘルス	0.72026	0.12634	0.28545	0.02688	0.02391
緑のゆたかさ	0.64353	-0.00807	-0.04631	0.19330	-0.02606
住宅全体の住み心地	0.56859	0.27046	0.11909	-0.03102	0.08966
コミュニティ活動	0.09432	0.94840	0.07562	0.05654	-0.03563
近所づきあい	0.35628	0.48949	0.10880	0.09019	0.00197
宗教施設への近さ	0.11015	0.16240	0.90892	0.04936	0.10857
住宅地の雰囲気	0.37471	-0.02451	0.50324	0.39379	-0.13036
セキュリティ	0.18972	-0.08452	0.00694	0.82493	-0.13430
親や子供の家との近さ	0.07830	0.19026	0.07600	0.52906	0.10037
職場への近さ	0.00024	-0.07052	-0.08516	0.05182	0.67165
各種施設への近さ	0.11588	0.09041	0.32652	-0.11356	0.53281
固有値	3.24298	1.25142	0.97271	0.82513	0.64203
寄与率（%）	46.8	18.0	14.0	11.9	9.3
累積寄与率（%）	46.8	64.8	78.8	90.7	100.0

表4-1-21 因子得点平均（住居様式別）

	非様式住居	様式住居
第1因子	0.199	-0.189
	0.911	0.863
第2因子	-0.128	0.121
	0.781	1.114
第3因子	-0.009	0.008
	0.814	1.061
第4因子	0.050	-0.047
	0.876	0.889
第5因子	-0.141	0.134
	0.759	0.776

※上段は平均、下段は分散

意味するものと考えられる。

第5因子は「職場への便利さ」「各種施設への便利さ」からなる。利便性を示すものとみてよいだろう。

非様式住居と様式住居からなる2つのグループごとに各因子別の因子得点の平均をとったものが表4-1-21である。非様式住居は第1および第4因子が高く、逆に様式住居は第2、第3、第5因子が高く明白な対照を示している。

つまり、非様式住居に住む人は、物的環境と心理的安心感に対する志向が強く、様式住居に住む人は、社会環境、住宅地の好ましさ、利便性に対する志向が強い傾向にある。少々強引ではあるが模式的に解釈すると、どちらかというとな近代的ライフスタイルをもち物的環境への志向が強いタイプと、伝統的ライフスタイルをもち社会的環境への志向が強いタイプという2つの像が浮かびあがってくる。

－3 様式住居の変容の要因

様式住居が本来貴族住宅を範型とする上流階層の住宅であったことは既に述べた通りである。現在もこの傾向に変わりがないとすれば、様式住居の変容の要因を経済状態が悪く様式住居が維持できないことに求めることは一定の説得力をもっている。

しかし、非様式住居についての分析は、非様式住居が比較的経済的に裕福な層の住宅の1つの範型となっている可能性を示唆した。先に、非様式住居はカンブン型を主体とする伝統的住居と近代的住居との2つからなると述べたが、少なくとも複数の異なったタイプが存在することは間違いないようである。

こうした範型としての非様式住居の存在が、住宅の脱様式化を促す1つの要因として作用しているとすれば、様式住居は経済状態が悪く近代的住居への建てかえができないために維持されているという見方も成り立つ。

この2つの一見正反対に思える解釈のいずれが正しいのか。また、表向きは経済的要因のように見えても、その背景には他の要因が関係している可能性もある。ここでは、様式住居の変容の要因について考察する。

(1) 経済的要因

1) 相続と老朽化

様式住居にはいくつかの変容のパターンがある。相続による様式住居変容の売却がその1つである。

様式住居を構成する要素のうち、最も残存率が低いブンドボの消失理由を調べてみると、売却されたものが相当数存在することがわかった。

この背景には、様式住居が商品価値をもつということがある。これらは、ある種のステイタスシンボルとして、金持ちの新興エリート層のコレクションになったり、レストランとなったりしているのである。保存度がよい建物が売られ、解体され他所に運ばれていく。

こうして消失したブンドボ跡地は、オープンスペース化してバナナ畑となったり、バドミントンコートとして使用されているが、なかには宅地化して別の世帯が住む住宅が建っていることもある。

しかしながら、商品価値をもつことが様式住居の変容のすべてを説明するわけではない。実際の住居転売のメカニズムを調べてみると、かなりの程度相続が関係していることがわかった。これはコタグデ、クドゥス両方に共通している。

コタグデ、クドゥスでは土地および家屋の所有形態がかなり異なっており、いずれも権利関係はかなり複雑と考えられるが、その全貌および詳細については明らかにしていない。所有と賃貸の違いだけに着目し、自己所有の比率をみると、まず土地の場合、コタグデでは約7割、クドゥスでは5割、次に住宅の場合、コタグデでは約7割、クドゥスでは約6割であった。

これらのうち自己所有のものについては世代交代にあたり相続手続きが発生することになるが、ジャワでは通常全子を対象とする均分相続が一般的である（注4）。それによって、土地および家屋の所有権の細分化が生じることになる。それは住居についても例外ではない。

元来伝統的住居は解体可能で移動できる構造であることから相続の対象となり、結果的に分割されることになる。それはしばしば窓枠程度の単位で行なわれる。特に、ブンドボや、それ以外でも彫刻のみごとな部材は商品価値が高く、このことがこうした部位の売却に拍車をかけており、様式住居の1つの変容パターンをつくりだしている。

様式住宅が商品価値をもつことが、様式住宅の変容の要因の1つであることは事実だが、相続はその契機となっていると考えられるのである。したがって、相続の問題がない場合は必ずしも売却されるとは限らない。その結果、様式住居には、物的状態がかなり悪化しているものも多い。様式住居の変容には、建物の維持が困難になり、全般に老朽化が進むにまかせるというパターンもかなり一般的と考えられる。

2) ブンドボの存在と経済状態の関係

調査中に、コタグデの人びとは金持ちであるという話を何度も聞いた。確かに、このまちが富裕な商人が住むところとして知られてきたのは事実であり、様式住居はそ

の象徴ともいえる存在であったことは繰り返し述べてきたところである。その富を現在まで維持している人も少なくないが、実際に生活状態をみると貧窮世帯もかなり多い。

戦後の混乱期における社会経済的環境の変化は地区全体の疲弊につながったが、なかでも様式住居の担い手であったアブディダラム、および、銀細工をはじめとする伝統的工芸品の製作、販売に依存していた伝統的職人、商人階層の一部を直撃したであろう。それは、何より人びとから現金収入の途を奪うことになった。

クドゥスの場合、彫刻がみごとな住宅には、国から文化財の指定によって援助金が支払われているが、維持費にも満たないという現実がある。ブンドボの売却もこの文脈の中で行なわれているものと考えられる。

様式住居の居住者の間に存在する生活財所有の差が主として居住者の経済状態に起因するものとするれば、そこには経済的疲弊と様式住居の変容との関係がみてとれるはずである。つまりブンドボをそなえている最も完成度の高い様式住居の居住者は裕福な世帯であることが予測される。

そこで、様式住居を対象に、ブンドボの有無と敷地および家屋の面積との関係に着目すると、いずれもブンドボを維持している住居の方が大きいことがわかる。

生活財との関係では、まず、ラジカセを所有している世帯の約半数がブンドボを維持しており、所有していない世帯の4分の1と比べるとかなり高く、また、ブンドボを維持している世帯の全数がテレビを所有している。現在ブンドボを維持している世帯の多くはかなり経済状態に余裕があると考えられ、様式の変容は経済的困窮を1つの要因とするという解釈の正当性を証明することになっている。

(2) 住居に対する志向

1) 居室要求とデザイン志向

しかしながら、様式住居の変容が経済的要因だけによるものとするれば、一旦消失したブンドボが再び復元されるということも起こるはずである。しかし現実にはそうした事実はない。このことは、様式住居の変容に経済的要因とは別の力が作用していることを示すものといえる。

まず、考えられるのは、様式住居を建設する技術が継承されずに消えてしまったということである。確かにこうした面がないでもないが、居室要求についてみると、スペイン、ムショラ、グダンを除き、様式住居を構成する要素に対する要求は高くない。

したがって、様式住居に対する志向に変化があるとみるべきであろう。実際に住居のデザインに対する志向を調べてみると、コロニアル住居の評価が最も高かったこと

もこの傾向を裏づけている。これについては第5章で詳述する。ここでは、様式住居の内部に働いている変容のベクトルに着目してみよう。

2) 様式住居の住み方調査

コタグデの住居を対象とした住み方調査の結果について記す。

事例1

図4-1-2は、コタグデにおいて実測調査した様式住居の1つを示したものである。家族構成は退職した老職人夫婦が使用人1人と住む。名工として聞こえた人ということもあって、暮し向きはかなり裕福であると判断された。ずっと、以前からこの家に住んでいる。

要素別にみると、まず、ブンドボはかなり良好に保たれており、本来の状態をとどめている。日中は犬が繋がれており、日常的には使用されていない。プリンギタンも同様に変化がないことから、儀礼の際の使用はじゅうぶん可能であろう。

ダレムアグンの変容も比較的小さいが、向かって左側には木製の間仕切りが釘止めであり、本来の大空間の分節化が生じている。ダレムの主な用途は居間で、この点も本来の利用形態をとどめている。新たに区画された部分は、洗濯物を始末するなどの家事スペースおよび物置として用いられている。

スントンは両側が寝室に使用されており、真中もテレビが置いてある以外は特に他の目的に使用されておらず、本来の用途から大きくは変わっていない。

ガンドクは最初から存在しないが、ダレムの向かって右側には屋根付きのテラスがあり、そこが接客および食事、喫茶などに使用されている。左側は隣家との間に屋根のないオープンスペースがあり、洗濯物干し場として利用されている。

パウォンおよびブキワンは定位置にあり、形態、用途とも大きな変化はない。

事例2

全体の構成は事例1よりも多くの要素をもち様式住居としての完成度は高い(図4-1-3)。家族構成は共働きの勤め人の夫婦および子供3人である。子供3人の内訳は大学生を筆頭にいずれも学生である。数年前に、この家の隣の親戚をたよってコタグデに来住し、この家を買って住むようになった。

要素別にみると、まず、ブンドボは別の家族が住む住宅となっている。ダレムおよびプリンギタンには簡便ではあるが木製の間仕切りが設けられ、寝室や勉強部屋として個室化している。ダレムの主たる用途は勉強である。スントンは両側が寝室として使用され、真中は折りの空間として用いられている。

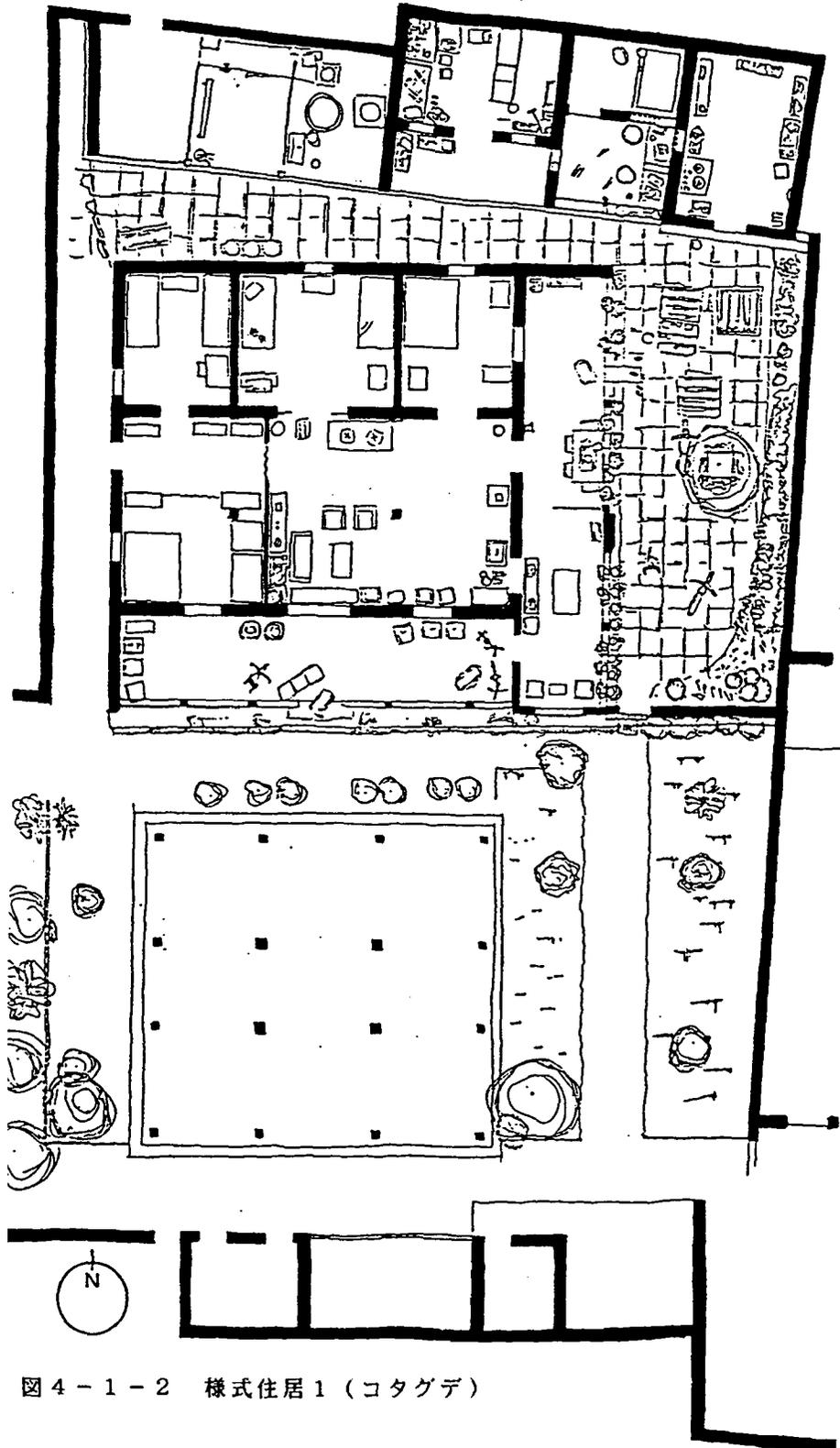
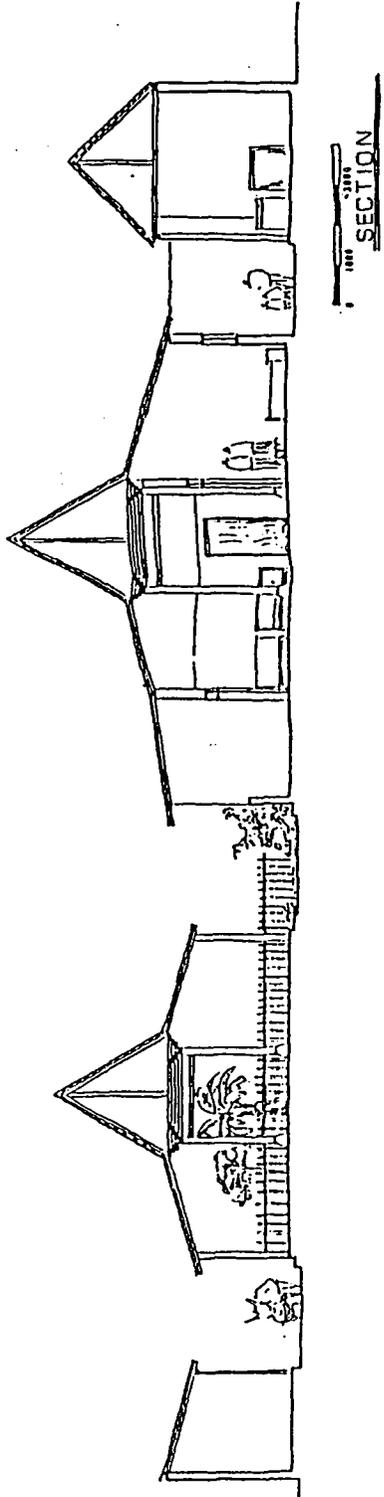


図4-1-2 様式住居1 (コタグデ)



KOTAGEGE HOUSE-B

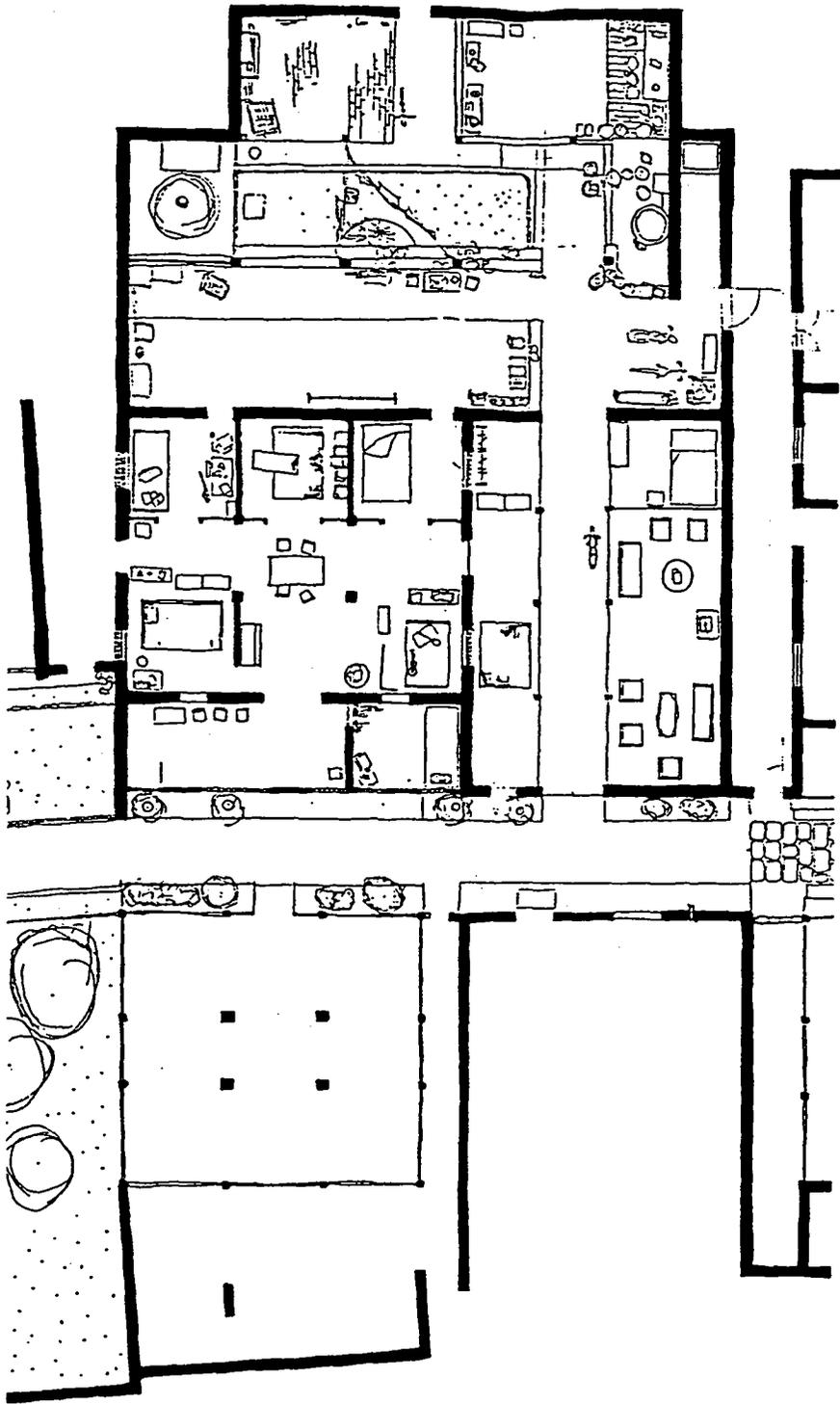
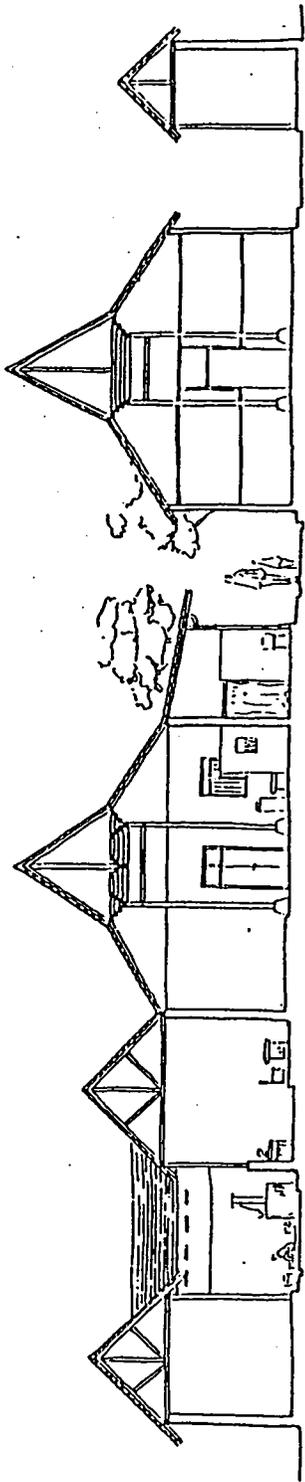
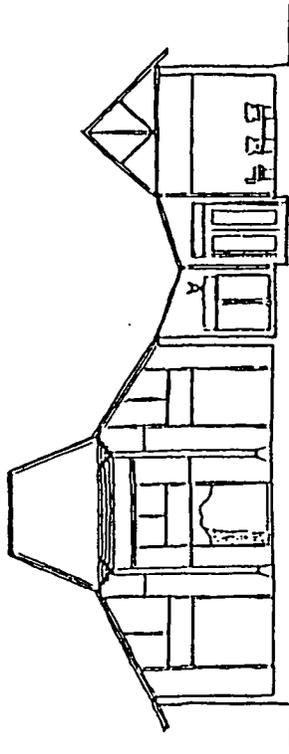


図 4 - 1 - 3 様式住居 2 (コタグデ)



SECTION (S-N)



SECTION (E-W)

KOTAGEDE HOUSE - A

右手のガンドクは通路を挟んだ両側の床が高くなっており、手前の入口に近い部分にはややフォーマルな接客スペースがしつらえてある。また、左側は家具がおいてなく、墓蔭が敷いてあるだけで、家族団欒および親しい人の接客に使用される。最も奥まった部分は、木製の間仕切りによって夫婦寝室が設けられている。パウオンおよびブキワンには大きな変化はない。

以上の事例の他に4、5軒を加えた観察にもとづき、主要な住居構成要素ごとにその利用状況をまとめると次のようになる。

①ブンドボ

本来の用途である冠婚葬祭などの儀礼空間としては、現在は使われる機会が極端に減っている。かわりに、作業場や住宅として改造されたり、また彫刻の美しいものなどは、売却、移築されて、レストランとして使用されている例もある。撤去された跡地は、荒地化するもの、バナナ畑になるもの、バドミントンコートになるものなどがある。このようなオープンスペース化が本来の市街地構成の変容をひき起こしている。

②ダレム

ダレムアグンは、一部の間仕切りにより、個室化する傾向が見受けられる。それに比べればストンは比較的変容が少ない。特に、中央の小室は、本来の聖なる空間としての性格が強く意識されており、この小室の前に最も大切な電気製品の1つであるテレビをおいたり、また個室化する場合も主人の寝室になるなど一定の格式が保たれた空間であるといえる。

③プリンギタン

多くは日常的には使用されていないが、中には個室化しているケースもみられ、ブンドボがなくなっていることとあわせて考えると、ワヤンを上演する場所と意識されているとはもはや考えにくい。

④ガンドク

日常の出入り口であり、多機能空間として、接客空間、仕事場、居間、寝室などの用途に利用されている。本来、機能的性格の強い空間と考えられ、比較的変容が少ない。しかし、ワルンとなっているものもある。

⑤パウオン

井戸、炊事、選択などの水まわり空間と、使用人の居室などがある。ダレムやブンドボの質に比べて極めて貧弱であり、利用の仕方は現在も変わりが無い。

以上から判断すると、本来の用途とは異なる使用、また、個室化による空間の分節化などは明白な傾向であり、既に変容を遂げた住居だけでなく、現在のところ伝統的様式を維持している住居においても、住居の大幅な要素消失につながる変容のベクトルを内在しているものと考えてよいだろう。

3) 住宅に対する評価

人びとは様式住居に対してどういう意識をもっているのだろうか。居住環境に対する評価質問のうち、住環境についての項目から住居変容ベクトルがどのような方向を向いているか読みとることを試みた。

調査は評価指標として表4-1-17に示す項目について、〈満足-不満〉を指標とした5段階評価(1.非常に満足、2.やや満足、3.普通、4.やや不満、5.非常に不満)を行なったものである。本来、順序尺度であるが間隔尺度として得点化してその平均と分散を求めた。

いずれの地区についても住宅に関する評価は全体に低く、住環境を構成する要素の中で住宅がかなりの不満の対象であることを示している。これは、反面、住宅に対する関心の強さを表わすとも考えられ、事実、住環境評価と同一の項目について行なった改善要求についての質問では、住宅に関する項目に集中する傾向を示している(表4-1-19および20)。

そこで、住宅についての項目だけをとりだし、様式住居に住んでいる人と、近代的住居に住んでいる人の、住宅に関する評価の差をみたものが図4-1-18である。

様式住居に住んでいる人は、非様式住居に住んでいる人と比べて、設備、通風・湿気について不満がやや高く、それ以外の項目についてはやや低くなっている。様式住居の最も評価されている点は規模であり、逆に最も評価の低い点は設備であることがわかる。

4-2 近隣空間の変容

近年、コタグデおよびクドゥス・カウマンの市街地空間のユニークな特徴であった住居クラスターの形態が図4-2-1のAからBへと移行する傾向をみせている。これは、行政指導によるといわれるが、隣家との間に塀を建てるなど、戸建化の傾向は今のところみられない。しかし、各戸がプライバシーを重視するなど、隣人関係の変化が根底にあると思われる。この点、クドゥスも同様の事情である。ここでは、この問題を中心にして近隣空間の変容について考察する。

表 4 - 1 - 17 居住環境評価（地区別）

	コタグデ			ブルムナス			クドウス		
	平均	STD	実数	平均	STD	実数	平均	STD	実数
住宅の規模	2.130	1.082	54	2.982	1.147	55	2.125	0.992	24
住宅の設備	2.840	1.131	50	3.519	1.023	54	1.667	0.816	24
通風・湿気	2.519	1.005	54	3.527	0.716	55	2.208	1.062	24
プライバシー	2.500	1.055	50	3.113	0.824	53	1.864	0.774	22
住宅全体の住み心地	2.596	1.089	52	3.094	0.861	53	2.222	0.548	18
各種施設への便利さ	2.547	1.102	53	2.582	0.896	55	1.783	0.850	23
職場への便利さ	2.222	1.277	45	2.740	1.006	50	1.636	0.902	22
宗教施設への便利さ	1.569	0.878	51	1.698	0.822	53	1.000	0.000	21
コミュニティ・ヘルス	2.547	1.030	53	2.691	0.858	55	3.091	0.921	22
セキュリティ	1.315	0.577	54	1.782	1.066	55	1.208	0.658	24
公共オープンスペース	2.774	1.086	53	3.236	1.036	55	2.500	0.913	22
緑のゆたかさ	3.264	0.964	53	3.364	0.868	55	2.708	1.334	24
住宅地の雰囲気	2.377	0.925	53	2.582	0.658	55	1.583	0.654	24
親や子供の家との近さ	1.872	1.076	47	2.811	1.144	53	2.062	1.181	16
近所づきあい	1.660	0.831	53	2.345	0.775	55	1.826	0.937	23
コミュニティ活動	1.830	0.849	53	2.358	0.653	53	2.273	1.279	22
住宅地全体の住み心地	2.302	1.011	53	2.712	0.776	52	1.667	0.761	24

表 4 - 1 - 18 住宅環境（住居様式別）

	非様式住居	様式住居	計
住宅の規模	2.259	2.000	2.129
	1.353	1.000	1.172
	27	27	54
住宅の設備	2.923	2.750	2.840
	1.093	1.189	1.131
	26	24	50
通風・湿気	2.519	2.519	2.519
	1.051	0.976	1.005
	27	27	54
プライバシー	2.577	2.417	2.500
	1.027	1.100	1.055
	26	24	50
住宅全体の住み心地	2.640	2.556	2.596
	1.114	1.086	1.089
	25	27	52

※上段は平均、中段は分散、下段は実数

表 4 - 1 - 19 居住環境改善意向

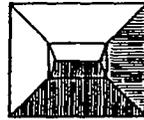
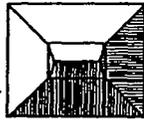
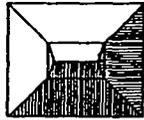
	コタグデ		ブルムナス		クドウス	
	(N=54)		(N=55)		(N=24)	
	実数	%	実数	%	実数	%
住宅の規模	9	16.7	19	34.5	7	29.2
住宅の設備	16	29.6	28	50.9	2	8.3
通風・湿気	10	18.5	19	34.5	2	8.3
プライバシー	5	9.3	8	14.5	0	0.0
住宅全体の住み心地	8	14.8	10	18.2	2	8.3
各種施設への便利さ	4	7.4	1	1.8	0	0.0
職場への便利さ	5	9.3	1	1.8	0	0.0
宗教施設への便利さ	0	0.0	0	0.0	0	0.0
コミュニティ・ヘルス	10	18.5	5	9.1	2	8.3
セキュリティ	0	0.0	3	5.5	0	0.0
公共オープンスペース	11	20.4	16	29.1	2	8.3
緑のゆたかさ	22	40.7	28	50.9	1	4.2
住宅地の雰囲気	6	11.1	2	3.6	0	0.0
親や子供の家との近さ	4	7.4	0	0.0	0	0.0
近所づきあい	1	1.9	2	3.6	0	0.0
コミュニティ活動	0	0.0	0	0.0	4	16.7
住宅地全体の住み心地	5	9.3	4	7.3	0	0

表 4 - 1 - 20 居住環境において最も改善したい点（多重回答）

	コタグデ		ブルムナス		クドウス	
	実数	%	実数	%	実数	%
住宅の規模	2	5.9	8	21.1	3	60.0
住宅の設備	9	26.5	16	42.1	0	0.0
通風・湿気	3	8.8	3	7.9	0	0.0
プライバシー	3	8.8	2	5.3	0	0.0
住宅全体の住み心地	4	11.8	3	7.9	0	0.0
各種施設への便利さ	2	5.9	0	0.0	0	0.0
職場への便利さ	1	2.9	1	2.6	0	0.0
宗教施設への便利さ	0	0.0	0	0.0	0	0.0
コミュニティ・ヘルス	4	11.8	3	7.9	1	20.0
セキュリティ	0	0.0	0	0.0	0	0.0
公共オープンスペース	2	5.9	1	2.6	0	0.0
緑のゆたかさ	4	11.8	1	2.6	0	0.0
住宅地の雰囲気	1	2.9	1	2.6	0	0.0
親や子供の家との近さ	0	0.0	0	0.0	0	0.0
近所づきあい	0	0.0	0	0.0	0	0.0
コミュニティ活動	0	0.0	0	0.0	1	20.0
住宅地全体の住み心地	1	2.9	0	0.0	0	0.0
計	34	44.2	38	49.4	5	6.5

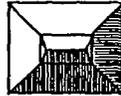
公共的ロウジ

Aタイプ



ダラム

門

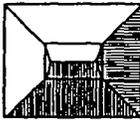
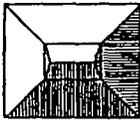


庭先ロウジ

ベンドボ

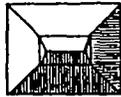
公共的ロウジ

Bタイプ



ダラム

門



ベンドボ

庭先ロウジ

図 4 - 2 - 1 様式住居のクラスター

－ 1 社会状況

住居クラスターはその発生時点では、拡大家族や友人などの血縁あるいは知縁にもとづくものであることは第3章でみた通りである。その後本来の血縁あるいは知縁の枠組みが解消しても、それにかわるものとして、地縁、あるいは、ジャワ人特有の隣人との和を尊ぶ気風によって、当初の形態が存続してきたと考えられる。

したがって、住居クラスターの変化は、コミュニティ成員のライフスタイルや価値意識の近代化をともなっている可能性が高い。まず、この点について検証しよう。しかし、かつての状況を推察することが不可能であることから、分析にあたっては、ジョクジャカルタ市近郊にブルムナスによって建設された新興住宅団地チョンドンチャトゥル（ブルムナスと呼ぶ）を近代的ライフスタイルをもつコミュニティと仮定し、比較の対象事例として考察を行なう。

なお、ブルムナスの概要は第5章を参照されたい。

（1）社会構成

1）職業構成

アンケート結果から職業構成をみると（図4-2-2）、コタグデおよびクドゥス・カウマンでは手工芸、自営業、単純労働など非サラリーマン型の職種が多く、ブルムナスでは公務員、教員などサラリーマン型の職種が多いのと対照的である。

コタグデの場合、これがかつての職業構成とどのように異なるかについては明確ではないが、少なくともジョクジャカルタ市への通勤者は増大していることが予想される。

成人女子および老人の就業人口構成についてみると（図4-2-3および4）、コタグデおよびクドゥス・カウマンでは就業率が高く、ブルムナスでは低い。

以上からコタグデおよびクドゥス・カウマンでは、成人男子については非サラリーマン型生活が一般的であり、成人女子および老人については就業型がかなり多いこと、また、ブルムナスでは成人男子についてはサラリーマン型が多く、成人女子および老人については非就業型が多いことが推察される。

ブルムナスは公務員入居を優先することから、人口構成に占める公務員比率が大きく、そのためにコタグデおよびクドゥス・カウマンとの相違が際立ったかたちとなっている。それは、安易なアナロジーに問題がないわけではないが、わが国の郊外住宅地と下町を思わせる対照を示しており、コタグデとクドゥス・カウマンは、ブルムナスに比べれば職住近接を基盤としたより地域完結性の高い生活空間を形成しているよ

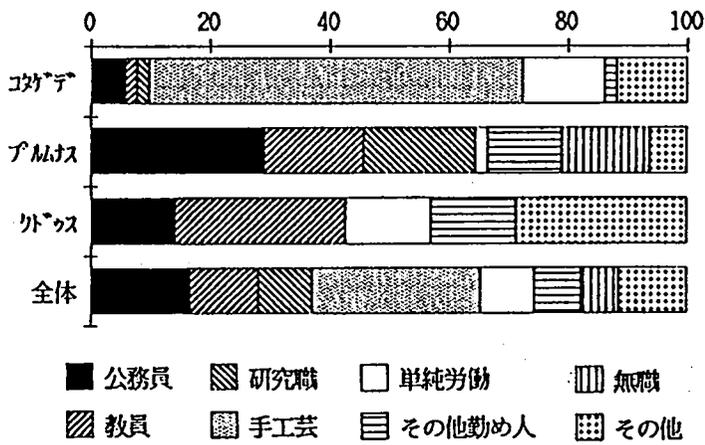


図 4 - 2 - 2 職業構成

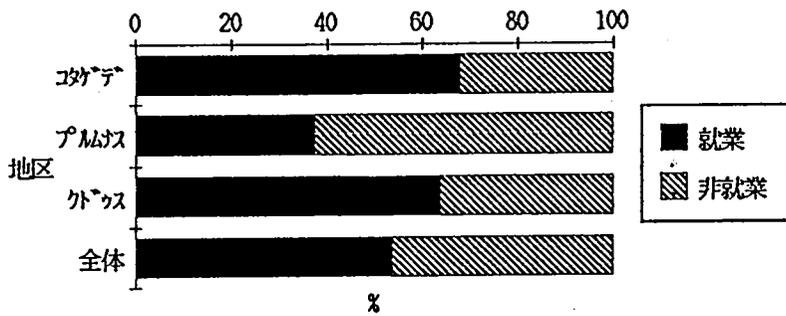


図 4 - 2 - 3 就業人口構成 (成人女子)

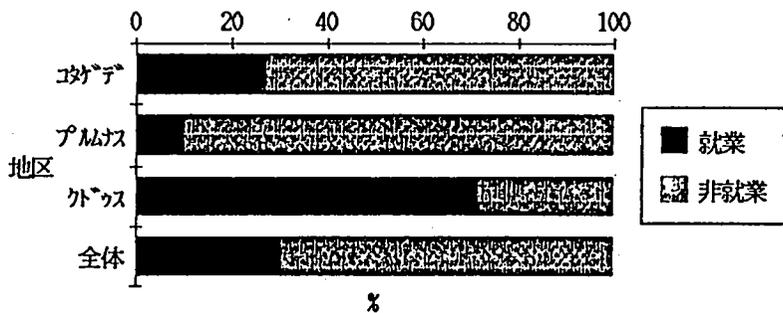


図 4 - 2 - 4 就業人口構成 (老人)

うにみえる。

しかし、生活時間調査の結果によると、通勤者の多いブルムナスにおいても自宅で過ごす時間はかなり長く、通勤者の地域コミュニティとのつながりが希薄になりがちなのが国とは異なっている。それは、後述するコミュニティ活動においてブルムナスがコタグデとクドゥス・カウマンを凌いでいることにもみることができる。したがって、職業構成の差が地域コミュニティの形成にどのような影響を及ぼすかについては必ずしも明確ではない。

2) 宗教構成

宗教人口全体の構成については、いずれもイスラム教徒の比率が高いが、若干の地域差がみられる(表4-2-1)。最もイスラム教徒人口比率が高いのはクドゥス・カウマンであり予想通りといえる。コタグデでも1割近いキリスト教徒が存在することは、ジョクジャカルタ周辺がキリスト教徒が多いという説を追認したかたちとなった。

クドゥス・カウマンについてはいうまでもないが、コタグデも歴史的に著名なイスラム運動であるムハマディヤ・ムーブメントの発祥の地として知られ、住民には特に熱心なイスラム教徒が多い。したがって、両方とも宗教を基盤としたコミュニティの紐は強いと考えられる。

とはいえ、コタグデのイスラムコミュニティについての研究によれば、ムハマディヤのメンバーとアバンガンとは、同じイスラム教徒であってもそのライフスタイルは大きく異なる(注5)。

これを検証するために、祈りの回数からイスラム教に対する態度を推し量ることを試みた(表4-2-2)。クドゥス・カウマンにおいてほとんどすべての回答者が5回以上というのは予想された結果といえる。コタグデとブルムナスにおいてはそれに比べると低いはその比率はかなり高く、後述するコミュニティ活動において宗教活動が活発であることを考えあわせると、かなり熱心なイスラムコミュニティが形成されていることが推察される。

3) コミュニティの成熟度

ジャワに限らず東南アジア全般に、地縁的結合を基盤とする社会結合原理をもつといわれている。調査地区における住民の居住歴をみると(表4-2-3)、コタグデとクドゥス・カウマンでは3代続けて居住している人が約半数を占め、自分の代からと回答している人は3割程度に過ぎない。

また自分の代からと回答した人の出身地をみると(図4-2-5)、コタグデでは

表4-2-1 世帯主の宗教

地 区	イスラム教	キリスト教
コタグデ	90.6	9.4
ブルムナス	70.9	29.1
クドゥス	100.0	0.0
計	84.1	15.9

※単位は%

表4-2-2 世帯主の祈りの回数（イスラム教信者のみ）

地 区	5回未満	5回	7回以上	祈りたいとき
コタグデ	4.6	95.5	0.0	0.0
ブルムナス	5.4	89.2	2.7	1.0
クドゥス	0.0	91.3	8.7	0.0
計	3.9	92.3	2.9	1.0

※単位は%

表4-2-3 居住歴（%（ ）内は実数）

	祖父の代以前から	父の代から	自分の代から
コタグデ	41.5(22)	24.5(13)	34.0(18)
クドゥス	54.2(13)	16.7(4)	29.2(7)
計	45.4(35)	22.1(17)	32.5(25)

半数以上が市内から、そのうちの過半数が近所からとなっており、その来住理由や住宅入手経路も婚姻を含めた血縁関係や知人など個人的な人間関係を媒介にしているものが大半を占めている（図4-2-6および7）。

また、クドゥス・カウマンでは他市町村からが多く、この点コタグデとは異なるものの、来住理由や住宅入手経路についてはコタグデとかなり似た面を示している。したがって、両者ともかなり安定したコミュニティを形成していると考えられる。

一方、ブルムナスではコミュニティ形成自体の歴史が浅く、コタグデおよびクドゥス・カウマンと比較して成熟度が低いのは当然であろう。後述するように、近所づきあいやコミュニティ活動の状態が、コタグデとクドゥス・カウマンと比べて特に低調とは思われないにもかかわらず、居住環境評価調査における評価が相対的に低いことは、この居住地としての成熟性の低さに起因するとも考えられる。

（2）コミュニティライフ

1）近所づきあい

日常生活において困ったことが起きた場合に、誰に相談もしくは助力を頼むかについての質問の結果が表4-2-4および図4-2-8である。

地区によってパターンがかなり異なっているが、これを単純に地区の傾向の差と解釈することができるかどうかは疑問が残る。たとえば、コタグデでは<親戚>の比率が高いが、これは近くに親戚が住んでいるケースが多いことが考えられる。<同僚>についても同様のことがあてはまる可能性がある。地区間の条件差の存在を疑う必要があるだろう。

そこで、<誰にも相談・助力を求めない>を基準として判断すると、ブルムナスが最も外部に対する依存が少ない傾向をもつが、これが形成されて間もない居住地でありコミュニティの成熟度が低いことに起因するのか、それとも近代的ライフスタイルによるものなのかについて結論を出すことはできない。

しかし、コミュニティとしての成熟度が充分な状態にあると判断されるコタグデとクドゥス・カウマンのパターンがかなり異なることから考えると、もともと地域差が存在するものとみるべきだろう。

コタグデは、以前の状態との比較を行なうことはできないが、少なくとも3地区の中では、外部に対する依存の程度が高い。その中心は<近所の人><親戚>にある。<同僚>もかなり多く、以上の3つを加算すると過半数を越えている。特に、伝統的な<儀礼・祭宴を催す>際には80%を越える。<近所の人>の比率は必ずしも高くはないが、先に述べたように隣人が同時に<親戚>あるいは<同僚>である可能性が高

図 4 - 2 - 5 自分の代から住みはじめた人の出身地

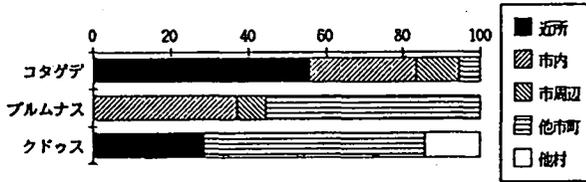


図 4 - 2 - 6 自分の代から住みはじめた人の来住理由

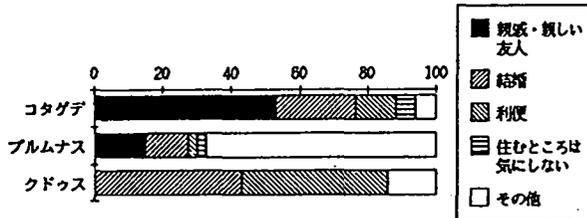


図 4 - 2 - 7 自分の代から住みはじめた人の住宅入手経路

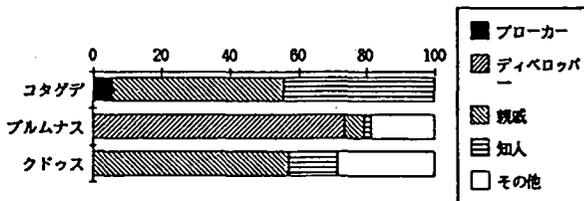


表 4 - 2 - 4 相談相手

		コタグデ	ブルムナス	クドゥス	全体
		実数 : %	実数 : %	実数 : %	実数 : %
日用品を借りる	隣人	10 : 23.8	19 : 37.3	15 : 68.2	44 : 38.3
	仕事の同僚	5 : 11.9	3 : 5.9	0 : 0.0	8 : 7.0
	親戚	13 : 31.0	5 : 9.8	1 : 4.5	19 : 16.5
	同郷の人	2 : 4.8	1 : 2.0	0 : 0.0	3 : 2.6
	役所	2 : 4.8	0 : 0.0	0 : 0.0	2 : 1.7
	誰にも頼まない	5 : 11.9	15 : 29.4	5 : 22.7	25 : 21.7
	その他	5 : 11.9	8 : 15.7	1 : 4.5	14 : 12.2
	計	42 100.0	51 100.0	22 100.0	115 100.0
ちおよ金と借りたる	隣人	4 : 9.1	9 : 17.6	7 : 31.8	20 : 17.1
	仕事の同僚	8 : 18.2	8 : 15.7	0 : 0.0	16 : 13.7
	親戚	15 : 34.1	7 : 13.7	4 : 18.2	26 : 22.2
	同郷の人	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0
	役所	3 : 6.8	8 : 15.7	0 : 0.0	11 : 9.4
	誰にも頼まない	4 : 9.1	2 : 3.9	7 : 31.8	13 : 11.1
	その他	10 : 22.7	17 : 33.3	4 : 18.2	31 : 26.5
	計	44 100.0	51 100.0	22 100.0	117 100.0
家族が病氣	隣人	24 : 52.2	36 : 67.9	15 : 65.2	75 : 61.5
	仕事の同僚	4 : 8.7	0 : 0.0	2 : 8.7	6 : 4.9
	親戚	14 : 30.4	7 : 13.2	1 : 4.3	22 : 18.0
	同郷の人	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0
	役所	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0
	誰にも頼まない	1 : 2.2	9 : 17.0	4 : 17.4	14 : 11.5
	その他	3 : 6.5	1 : 1.9	1 : 4.3	5 : 4.1
	計	46 100.0	53 100.0	23 100.0	122 100.0
引越し	隣人	16 : 40.0	19 : 52.8	4 : 22.2	39 : 41.5
	仕事の同僚	1 : 2.5	3 : 8.3	1 : 5.6	5 : 5.3
	親戚	9 : 22.5	4 : 11.1	4 : 22.2	17 : 18.1
	同郷の人	1 : 2.5	0 : 0.0	0 : 0.0	1 : 1.1
	役所	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0
	誰にも頼まない	5 : 12.5	1 : 2.8	4 : 22.2	10 : 10.6
	その他	8 : 20.0	9 : 25.0	5 : 27.8	22 : 23.4
	計	40 100.0	36 100.0	18 100.0	94 100.0
冠婚葬祭	隣人	22 : 59.5	25 : 67.6	7 : 35.0	54 : 57.4
	仕事の同僚	2 : 5.4	0 : 0.0	0 : 0.0	2 : 2.1
	親戚	8 : 21.6	2 : 5.4	4 : 20.0	14 : 14.9
	同郷の人	0 : 0.0	1 : 2.7	0 : 0.0	1 : 1.1
	役所	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0
	誰にも頼まない	4 : 10.8	8 : 21.6	7 : 35.0	19 : 20.2
	その他	1 : 2.7	1 : 2.7	2 : 10.0	4 : 4.3
	計	37 100.0	37 100.0	20 100.0	94 100.0
家の修理	隣人	8 : 17.0	11 : 20.4	0 : 0.0	19 : 15.2
	仕事の同僚	2 : 4.3	1 : 1.9	0 : 0.0	3 : 2.4
	親戚	1 : 2.1	3 : 5.6	2 : 8.3	6 : 4.8
	同郷の人	2 : 4.3	0 : 0.0	0 : 0.0	2 : 1.6
	役所	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0	0 : 0.0
	誰にも頼まない	16 : 34.0	22 : 40.7	5 : 20.8	43 : 34.4
	その他	18 : 38.3	17 : 31.5	17 : 70.8	52 : 41.6
	計	47 100.0	54 100.0	24 100.0	125 100.0

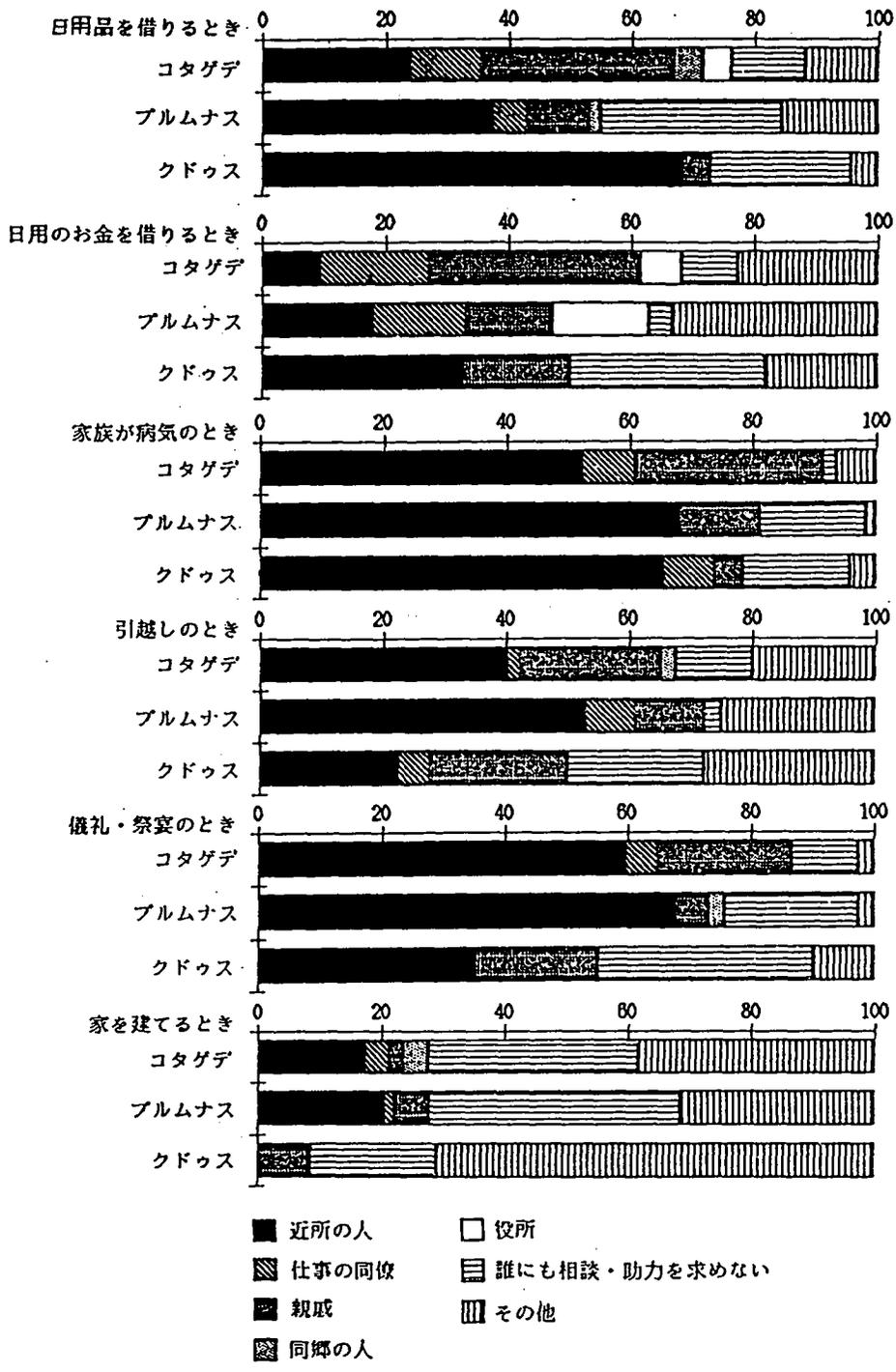


図 4 - 2 - 8 相談相手

い。近所づきあいのレベルは高いと判断してよいだろう。

2) コミュニティ活動

図4-2-9はコミュニティ活動の状況を示している。ここでいうコミュニティ活動とは、地区で行なわれる種々の活動全般を意味し、その範囲は多岐にわたっている。調査では便宜的に5つのカテゴリーに分けて質問したが、宗教に関するものが最も高く、ついで家族の誰かが参加しているサークル的なもの、公的な集會、文化・娯楽的活動、その他という順になっている。特に宗教的活動は90%以上と高い。地区毎の特徴をみていると、公的な集會でクドゥスカウマンが特に低いのを除けば、比較的似通った傾向を示している。

表4-2-5は、1人平均いくつの活動に参加しているか、つまり活動の数、および、いくつの種類の活動に参加しているか、つまり参加している活動の種類を示したものである。全体として、1人あたり4つの活動に参加し、その種類も3つのカテゴリーにまたがっていることがわかる。

この数字をどのように解釈すべきか明確な判断基準はないが、3地区ともそれほど大きな差はないことから、特に少ないとは考えにくい。3地区の中でのコタグデの位置づけは、種別によっても異なるが、ほぼ中位というところであり、ほとんどの種別で同様の背景をもつクドゥス・カウマンを上回っている。先に述べたように、コタグデはムハマディヤ・ムーブメントの発祥の地として知られるが、その運動は今日に至るまで継続しているといわれる(注6)。コミュニティの維持している活力は高いと考えられるのである。こうしたことから判断すると、コミュニティ活動の水準は平均を下回るものではあるまい。

(3) 価値意識

コタグデの人びとの生活は、ジャワ人一般の特徴である、調和とお互いの尊重にもとづいている。それは、クルクハン(kerukuhan)とゴトンロヨン(gotong royong)という2つの言葉によって表わされる(注7)。クルクハンとは平和共存、ゴトンロヨンとは互惠、あるいは相互扶助などと訳される。共同体をめぐる慣習法的規範として、コミュニティライフの中核をなす原理となっている。

また、生活サイクルの中でスラマタンという共食儀礼のもつ意味は大きい。祖霊をはじめとする諸霊に食物を捧げ、人びとが共食することによって、無病息災を祈願する。通常、主催者である世帯の隣近所に住む人びとのすべてが招待される。会食自体は簡単なものであるが、人びとが1ヵ所に集い共通の価値意識に根ざした儀礼に参加することが、共同体の維持に果たす役割は大きい。

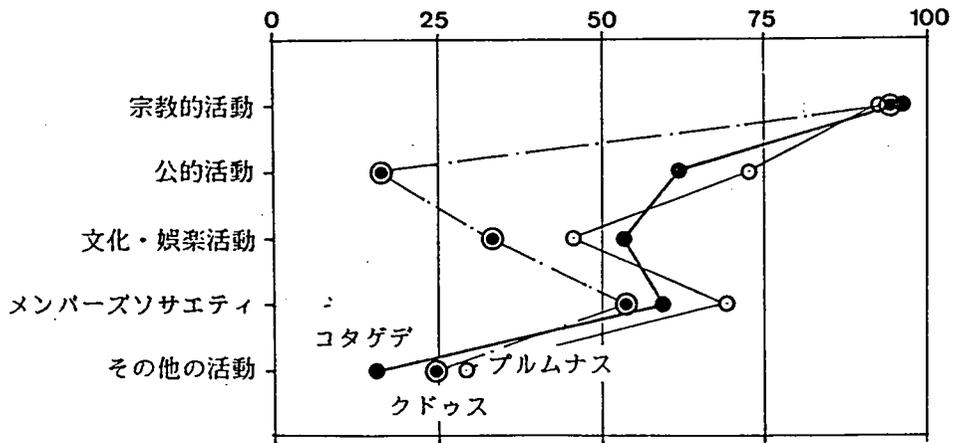


図 4 - 2 - 9 コミュニティ活動

表 4 - 2 - 5

世帯当たり参加コミュニティ活動の件数および種類（平均）

	参加コミュニティ活動件数	参加コミュニティ活動種類
コタゲデ	3.67	2.88
クドゥス	3.48	2.43
計	3.61	2.74

表 4 - 2 - 6 ゴトンロヨン

ゴトンロヨンに 出れなかったとき	コタゲデ		ブルムナス		クドゥス		全体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
気にならない	2	4.3	6	13.0	9	39.1	17	14.7
申し訳なく思う	5	10.6	2	4.3	1	4.3	8	6.9
謝罪する	19	40.4	25	54.3	5	21.7	49	42.2
代わりに誰かに出て貰う	16	34.0	9	19.6	8	34.8	33	28.4
代わりにお金を払う	2	4.3	2	4.3	0	0.0	4	3.4
その他	3	6.4	2	4.3	0	0.0	5	4.3
計	47	100.0	46	100.0	23	100.0	116	100.0

表 4 - 2 - 7 スラマタン

スラマタン	コタゲデ		ブルムナス		クドゥス		全体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
喜んで主催し、参加する	39	75.0	27	50.0	23	100.0	89	69.0
主催はしないが、招かれれば参加する	8	15.4	17	31.5	0	0.0	25	19.4
主催も参加もしない	3	5.8	0	0.0	0	0.0	3	2.3
その他	2	3.8	10	18.5	0	0.0	12	9.3
計	52	40.3	54	41.9	23	17.8	129	100.0

ここでは、ゴトンロヨンとスラムタンについての意識を分析する。

1) ゴトンロヨン (表4-2-6)

設問は「あなたのコミュニティで行なわれるゴトンロヨンに参加することができないときにはどうしますか。」という内容であり、選択肢は次の6つであった。

- ①気にしない
- ②とてもすまないと思う
- ③謝罪する
- ④代理人をたてる
- ⑤補償金を支払う
- ⑥その他

全体として何らかの代償措置をとるのが大勢の傾向といえよう。しかし、その方法については地区によってかなりの相違がある。〈金を払う〉というのは各地区とも少ないが、クドゥス・カウマンでは〈代理人をたてる〉が〈謝罪をする〉を上回っており、コタグデ、ブルムナスでは逆になっている。特にブルムナスでは過半以上が謝罪で済むと考えていることがわかる。

この結果から判断する限り、3地区の中ではコタグデにおいて最もゴトンロヨンが拘束力をもってとらえられていることを示している。

2) スラムタン (表4-2-7)

設問は「スラムタンを主催しますか。また、招待されたら出席しますか。」という内容であり、選択肢は次の4つであった。

- ①喜んで主催もし出席もする
- ②主催したいとは思わないが、よばれたら出席する
- ③主催する気もないし、よばれても出席する気もない
- ④その他

いずれの地区も①が主体であるが、その比率には地区によって開きがある。その中でコタグデは、①および②を加算すると90%に達し、全体としてスラムタンに対する態度は肯定的である反面、否定的な意見もわずかであるが存在する。他の2地区にはこの回答が皆無であることを考えると、このパターンには特別のものが感じられる。

イスラム原理運動には、スラムタンは純粋なイスラム教徒は行なうべきではないと教えるものもある。ムハマディヤの場合どうなのかは確認しえていないが、否定的見解がイスラム原理主義者によるものであることも考えられるが、根拠があるわけではない。

近年の傾向として、①から②へ移行があるのではないかと推察される。ブルムナスの結果はそれを物語るものと考えられる。もしそうだとすると②の比率は近代化の指標となる。したがって、コタグデではクドゥス・カウマンからブルムナスへの移行の過程にあるとみなすこともできるわけだが、先に述べたイスラム原理運動などの影響も考えられ明確に結論づけることはできそうにない。

ここでは、依然としてスラムタンに対する肯定的意識が大勢を占めることだけを指摘するにとどめておく。

－ 2 居住環境に対する意識

ここでは、居住環境に対する評価パターンから地区別の特徴を把握することを試みる。分析の対象とする項目は表4-2-8に示す通りである。この分析では伝統的市街地と新興住宅市街地との環境を比較することを意図し、コタグデおよびブルムナスの全サンプルを用いた。

まず、最初に両方の地区に共通する居住環境に対する評価を構成する因子を抽出した。分析の結果5つの因子が抽出できた。

第1因子は「近所づきあい」「コミュニティ活動」「親や子供夫婦との近さ」の3項目からなる。「社会性」を意味しているとみることができよう。この因子の寄与率はおよそ60%近くと高く、総合的な因子であると考えられる。

第2因子は「住宅の広さ」「住宅の設備」「通風・湿気」「プライバシー」の4項目から構成されている。「住宅の居住性」を意味するものと考えられる。

第3因子は「コミュニティヘルス」からなるが、ほかには「プライバシー」なども効いていることから判断すると、「健全性」を意味するものとみることができよう。

第4因子は「緑のゆたかさ」「セキュリティ」「公共のオープンスペース」の3項目からなり、「近隣空間の居住性」を意味するものとみることができよう。

第5因子は「各種施設への便利さ」「宗教施設への便利さ」「住宅地の雰囲気」「職場への便利さ」の4項目から構成され、「住宅地の好ましさ」を意味するものと考えられる。

以上の結果からみる限り、居住環境の評価構造のなかで「社会性」が最も重視されること、また、「住宅の居住性」がかなり大きなウエイトを占めることなどが特徴として指摘できる。

次に、居住環境に対する評価構造の相違を調べるために、5因子についての因子得点を算出し、居住環境についての総合評価である「住宅地全体の住み心地」との相関

係数を地区ごとに求めた(表4-2-9)。その結果、コタグデとブルムナスではかなり異なった傾向を示している。

まず、「住宅自体の住み心地」との相関であるが、ともに第2因子の「住宅の居住性」が最も効いている点では共通するが、コタグデでは第3因子「健全性」が次に重要な因子となっているのに対し、ブルムナスでは第4因子の「近隣空間の居住性」の方が相関が高くなっている。

また、住宅地全体の住み心地」との相関では、コタグデでは第2因子「住宅の居住性」が最も高く、ついで第4因子「近隣空間の居住性」、第1因子「社会性」の順になっているのに対し、ブルムナスでは第5因子「住宅地の好ましさ」が最も重要な因子であり、次に第1因子「社会性」、第4因子「近隣空間の居住性」がきている。

特に住宅地全体の居住環境評価についてみると、コタグデでは住宅が比較的重要な因子と考えられていること、ブルムナスでは利便性を含めた住宅地の好ましさが重視されていることがわかる。

これはコタグデでは職住近接のケースが多く、成熟した居住地であるため、住宅が社会性を帯びた性格として理解されていることを推察させる。また、逆にブルムナスは新興住宅地であり、住宅はほぼ画一的に供給されたために住宅についての評価が均質化されていると考えられ、それよりは社会的環境や利便性などが重視されていることを反映しているものとみることができる。

以上、近隣空間の変容の要因は必ずしもあきらかではないが、それが急激な伝統的価値意識の変容をとまなうものではないことがわかった。調和と互惠を尊ぶ態度にはそれほど変化がないといってよい。

しかし、通勤する人が増え、人口の増加と共に外部から来た人が増えるなど、かつて比較的自己完結的な性格をもつと考えられたコミュニティへ各種の攪乱要因が発生しつつあるのは事実であろう。現在のところ、ブルムナスとコタグデの住民の間に顕著な価値意識の差はみられない。

しかし、両者の差は大きくはないものの、その中には近代化に起因すると思われる面があり、コタグデはやがてブルムナスでみたような生活スタイルの方向へとかわる可能性もある。

4-3 要約

本章の目的は、前章で分析の対象とした伝統を継承すると考えられる市街地がどの

表 4 - 2 - 8 因子負荷量および寄与率

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
近所づきあい	0.68255	0.28636	0.04710	0.18742	0.20661
コミュニティ活動	0.66725	0.12435	0.10610	0.05095	0.03239
親や子供との近さ	0.40895	0.24911	-0.06502	0.18051	0.13572
通風・湿気	0.18351	0.61135	0.13479	0.12917	0.09779
設備	0.13418	0.60706	-0.05210	0.14893	0.02611
住宅の広さ	0.34037	0.46348	0.08587	0.17348	0.12511
プライバシー	0.43536	0.44700	0.35487	-0.00412	-0.00748
コミュニティヘルス	0.07994	0.09807	0.84847	0.31473	0.16016
緑のゆたかさ	0.06508	0.19520	0.15762	0.58530	0.09511
セキュリティ	0.39825	0.07574	-0.02659	0.44513	0.24080
オープンスペース	0.32399	0.21348	0.27082	0.39002	-0.13836
施設への便利さ	0.08207	-0.07392	0.05942	0.07922	0.54232
宗教施設への便利さ	0.07687	0.15950	0.15043	-0.01730	0.53165
住宅地の雰囲気	0.23649	0.22121	0.21049	0.34173	0.35096
職場への便利さ	0.01610	0.05392	-0.14839	0.05875	0.24583
寄与率	59.4	14.1	11.7	7.9	6.8

表 4 - 2 - 9 因子と総合評価の相関係数

地 区	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
コタゲデ	0.4066 (0.009)	0.4527 (0.004)	0.3287 (0.031)	0.4097 (0.009)	0.3558 (0.021)
ブルムナス	0.5920 (0.000)	0.0903 (0.282)	0.0908 (0.281)	0.4942 (0.000)	0.6009 (0.000)

*表中の数字は相関係数、()内は有意水準を表わす。

ように変容しつつあるか、また、将来変容する可能性をもつかについて考察することであった。より具体的には、伝統的都市であるコタグデを対象として、伝統的住居、および、複数の伝統的住居の連続によって形成される住居クラスターの変容の要因とその方向性を検討した。前者は住居レベル、住居クラスターは近隣レベルの生活にそれぞれ対応するものとして調査が設計されている。

コタグデの住居は、様式によって伝統的住居と近代的住居に大別し、前者をさらに屋根形状によってジョグロ型とキャン型に分けると、ほぼこれらの3種類およびその折衷形からなっている。折衷形の住居は、特にジョグロ型から増改築の結果生じたものが多いと考えられ、折衷の程度からほぼ完全に様式性を維持しているものをいれて4つのグループに分けられる。

ここで、ダレムをもつものを様式住居とし、それ以外の非様式住居と比較すると、双方の居住者の間には生活様式や価値意識の差が認められた。伝統的住居の変容が近代的な生活様式や価値観の浸透と密接な関係にあることが推察された。

変容の要因と考えられるものは2点ある。1つは経済的な要因で、そのために様式住居を維持できないケースである。2つめは生活様式上の要因で、望ましい住宅として近代的住居が志向されるケースである。

前者については、潜在的な要因として様式住居が商品価値をもつこと、また、相続が実際の変容の契機となることがわかった。経済状況の悪化がその背景としてある。後者については、生活様式の近代化にともない、住居のデザイン、機能に対する要求が変化しつつあることがわかった。

続いて、住居クラスターの変容を事例として、近隣空間の要因について考察した。郊外型住宅地ブルムナスと比較すると、コタグデは職住近接型の自己完結性の高い性格をもつ。生活様式には、わずかな差ではあるが、近代化に起因すると考えられる面があり、通勤人口の増加、来住人口の増加などの諸要因により、将来、生活スタイルの方向性がかわる可能性がある。しかし、調和と互恵を尊ぶ態度にはそれほど変化がなく、行政指導など外的な要因もあると考えられるが、住居クラスターの変容の明確な要因は不明である。伝統的都市の変容は明白な事実であるが、住居レベルに比べてコミュニティレベルの生活変容はかなり遅いと判断される。

本章では、以上にみるように、伝統的市街地における伝統的な空間構成が変容しつつあること、その要因として生活変容が存在することを指摘した。それは、こうした市街地が、現在、新たな伝統形成のプロセスにあることを示すものといえるが、第II部で描写したのは多面的な伝統の1つに過ぎず、実際にはさらに大きな枠組みのなか

で変容が進行していると考えられる。その解明は今後の課題である。

補注

- (1) MOOK, H. J. van: Kuta Gede, in "WERTHEIM, W. F.: THE INDONESIAN TOWN; STUDIES IN URBAN SOCIOLOGY, Hague, 1958, pp. 279-280
- (2) カランの人びとについての詳細は、たとえば、MITSUO NAKAMURA: THE CRESCENT ARISES OVER THE BANYAN TREE, Yogyakarta, 1983
- (3) MOOK, H.: op. cit., p. 286
- (4) 均分あるいはイスラム的財産分与のいずれかが行なわれることが多いが、その際の基本的方針はその方法ではなく、関係者の意見の一致であるとされる。
(ヒルドレッド=ギアツ『ジャワの家族』戸谷修他訳、みすず書房、1980、p. 56)
- (5) MITSUO NAKAMURA: op. cit.
- (6) MITSUO NAKAMURA: ibid.
- (7) SURYANTO et. al.: KOTAGEDE - A TRADITIONAL SETTLEMENT, Unpublished Paper, Yogyakarta, 1987, p. 49-50

第Ⅲ部 ジャワ島都市における生活空間の継承に関する考察

第Ⅰ部および第Ⅱ部の主要な意図は、ジャワ島都市における生活空間の伝統の存在様式に関する実態とその系譜の記述であった。ここでは、それが今後どのように変容し、継承されていくかについての考察を試みる。

その方法は、生活空間の伝統の維持主体である人びとが現実の生活空間に対して示す態度から、その背後にある意識を読みとることである。生活空間整備にあたりビジョンとなるべき将来の生活空間像を探るうえで欠くべからざる手続きといえる。

ここでの論点はいわゆる「近代化」に関する問題である。ジャワ島都市における生活空間の伝統は、進化に比される単線的系譜として把握できるものではなく、さまざまな外来の系譜が複雑することによって成立したものであることは既に述べた。

したがって、ジャワ島都市は外来の影響を被るたびに、先在するものと新来のものとの二項対立の過程を経てきたはずである。現在、生活の多くの分野で進行中の「近代化」も基本的には同様の過程であるとみなすことができるだろう。とはいえ、現在の進行中の「近代化」過程の結末が、これまでのパターンと同様、既存の生活空間に新しい要素が付加され、生活空間の多様性を増す契機となるだけで終わるのかどうかについて、現時点では断定することはできない。

というのは、「近代化」の背後にある西欧型現代文明が、現在の世界における文明モデルとして支配的な地位にあることは否定できず、その意味で過去の過程が繰り返されるとは限らないからである。グナワンは、ジャワにおける伝統的な人文景観が、過去の外来文明の影響を皮相的にうけるだけで、基本的には継続性を失っていないことを強調しつつも、将来ともこの傾向が続くかどうかについては、はなはだ懐疑的なコメントを口にしてしている（注1）。

実際、「近代化」がそれだけの破壊力を秘めているということは、「近代化」過程において、それに対置されるべきものとしての「伝統」がほとんど不可避免的に登場してくるという事実によって逆説的に知ることができる。冒頭に述べたように、伝統とは自らのアイデンティティの危機に際して強く意識されるからである。

こうした自らの「伝統」と他者である「近代化」との二項対立図式は、「西欧化」を「近代化」としてアブリオリに受け容れざるをえなかった非西欧世界につきものの歴史といってよい。その過程での自らの伝統に対する回帰は、西欧世界のルネサンスに相当するものといえるかもしれない。だが、被植民地支配の過去をもっている国においては、「近代化」過程そのものがわが国とはかなり異なるものとならざるをえ

ないだろう。

もちろん、こうした「近代化」と「伝統」をめぐるテーゼをそのまま生活空間にあてはめることの是非は問われるべきであろう。生活空間には別の論理があるとも考えられるからである。生活空間の伝統は、基本的には、過去から受け伝えた生活空間を基盤に、社会の動向などさまざまな要因に拘束されつつ、それを生活の器として自分にあうように変更しようとする人びとの営為によって生じる。過去の何をうけ伝え、何を付加するか、その決定には意思的な部分も大きいと考えられる。生活空間の継承に際して基本的な要件となる、生活空間に対する人びとの志向および認識について考察することが第Ⅲ部のねらいである。

補注

- (1) GUNAWAN TJAHHJONO: Centre as an Idea in Javanese Landscape, in "JURNAL IAI, 1987, p. 27"

第5章 生活空間のあり方に対する志向

5-0 目的と構成

本章は、住居およびその周辺の居住環境に対する人びとの志向をあきらかにすることを目的とする。生活空間に対する人びとの態度から、生活空間形成にどのような論理が働いているかを探ることがここでのねらいである。

本章の構成は次の通りである。

まず、第1節では、主として理想の住宅デザイン選好調査の結果にもとづき、住宅デザインに対する人びとの志向を考察する。

次に、第2節では理想の居住環境像の調査にもとづき、居住環境に対する人びとの志向を考察する。

最後に、第3節では、新興住宅団地における居住環境形成についての事例研究にもとづき、生活空間形成に作用する要因としての環境に対する志向を考察する。

5-1 住宅デザイン志向

0 緒言

(1) 視点

わが国における近代の中産階級の住宅デザインは、近世武家階級の住宅を1つの規範とし、その上に欧米の郊外住宅のデザインが混交したものが1つのモデルとなり、それに強く影響を受けつつ現代庶民住宅のプロトタイプが形成されたといわれる(注1)。

人びとが住宅に対して抱く理想像は、個人的な居住体験というフィルターを通してではあるが、こうした一定の普遍性をもつ住宅の範型によって規定される面が強く、その時点の上流階層の住宅が規範となって、人びとが能力の範囲内でこれを獲得しようとする点は、かなり普遍性をもつものと考えられる。コタグデの伝統的なジョグロ型住居についても同様のプロセスが報告されている(注2)。

したがって、ジャワにおいて庶民住宅の範型となりうると考えられる住宅には、もちろん世代や地域差もあるには違いないが、伝統的な貴族住宅であるジョグロ型住居と、植民地期の支配階級であったオランダ人の住宅であったダッチ・コロニアル様式住居という2つのファクターを想定するのが自然であろう。また、戦後の主として外国の影響の強いモダンデザイン住居の流れも無視するわけにはいかない。この3つに注目し、住宅デザイン志向の位相を考察する。

(2) 調査の概要

1) 調査内容と方法

ここでは、生活空間を構成する環境単位である住居について、より具体的には住宅デザインに対する人びとの志向を把握する。

その方法は、大別して3つからなる。まず、第1には、アンケートによる住宅の階数および外壁の色彩に対する志向調査である。

第2は、ジョクジャカルタ市および近郊に実在する住宅を中心とする9葉の建物の写真を提示し、もし実際に住むことができるとすればどれが最も好ましいかをたずねる形式で行なった。

写真の選択にあたっては、ガジャマダ大学工学部建築学科の建築設計研究室の住宅研究者のアドバイスを受け、コロニアル系3葉、伝統系2葉、近代系4葉とした(図5-1-1)。華人系を含めなかったのは、調査対象地区がコタグデをはじめとするプリブミ系居住地区であり、ショップハウスに対する志向はほとんどないと考えられたからによる。

第3は、アンケートによる現在の住居に対する環境評価調査である。

2) 調査の概要

調査は、第1および第2の方法については、第4章の考察に用いたフィールド調査の一環として行なわれたもので、その詳細については第4章を、また、第3の方法については、第2章の考察に用いたフィールド調査の一部であり、その詳細については第2章を参照されたい。

3) 調査対象地区

調査地区は、第1および第2の調査については、コタグデ、ジョクジャカルタのチョンドンチャトゥル(ブルムナスと呼ぶ)、クドゥス・カウマン(クドゥスと呼ぶ)の3地区、また、第3の調査については、ジョクジャカルタ市のコタバル、クタンダン、カディパテン・キドゥル、カウマン、コタグデの5地区である。その概要は、それぞれ、第4章、第2章を参照されたい。

ー 1 ジャワ島都市における住宅の概況

ここでは、以後の考察の背景として、ジャワ島都市における住宅の概況を簡単に整理しておこう。

既に第I部においてふれたように、各地区にはその伝統にもとづく住居が建てられている。プチナンを例外として、ジャワ島都市では通常戸建て住宅が一般的で、その大部分は1階建てである。かつては、木造であったと考えられるが、現在は煉瓦造が

コロニアル住宅



写真① DUTCH TRADITIONAL



写真② NEW DUTCH TRADITIONAL

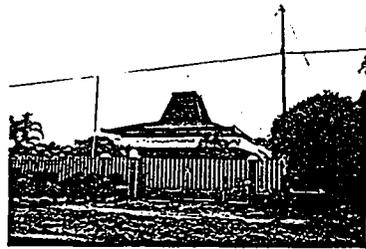


写真③ DUTCH INFLUENCED

伝統的住宅



写真④ TRADITIONAL JAWA STYLE



写真⑤ NEW JAWA STYLE

図5-1-1 対象住宅

近代的住宅



写真⑥ IMPROVEDE PERUMNAS



写真⑦ MODERN INTERNATIONAL1



写真⑧ MODERN INTERNATIONAL2



写真⑨ MODERN DECORATIVE

支配的になりつつある（注3）。ジャカルタをはじめとする大都市では、近年ブルムナスなどによって、二戸一やテラスハウス型の住宅、あるいは、中層の集合住宅が建てられるようになってきたが、市街地面積の過半を占めるカンブンにおいては、こうした戸建てを中心とする伝統的な市街地景観が支配的である。

しかし、大都市を中心に市街地の一層の高密化が進行する中で、長屋住宅からフラットに至る集合化や2階建て住宅の増加といった容積率アップが進行しているのは疑いない事実である。リアル・エステイトなどで、元来の戸建て住宅の改造過程で界壁まで建物化が進行し、結果として壁を共有するようになるケースが多くみられるが、接地型でさえあれば、特に壁の共有を嫌う様子もみられないことから、将来この傾向はますます強まっていくことが予想される。

したがって、現在の趨勢として、煉瓦造の普及による不燃化、2階建て化を指摘しておこう。

－ 2 調査結果の概要

（1）階数

表5-1-1は2階建て住宅への志向と現況をたずねた結果である。調査地区がいずれも地方小都市であることもあって、現住宅はほとんどすべて平屋建てである。

また志向でも2階建てをきらうものが全体の64%を占め、特にコタグデでは、2階建てを好む人の割合が少ない。明快な平屋志向が読みとれる。

これには、かつては、2階建てをタブーとする考え方があったことが、その1つの要因となっていると考えられる（注4）。特に、コタグデやクドゥスなど伝統的価値観が比較的強いとみなされている地区で調査を行なったことがなんらかの影響を及ぼしている可能性もある。コタグデがほかの2地区と比べて特に平屋志向が高い点についてはその公算がかなり高い。しかし、ブルムナスにおける調査結果が示すとおり、一般的には平屋志向が強いものと判断してよいだろう。

（2）外壁の色彩

表5-1-2は、外壁の色彩の現況と志向を調べたものである。現況では、緑系と黄系が半数を占め、その他に白系、茶系が10%程度ある。志向をみると、緑系への志向がさらに高まり、全体で4割近くに上る。緑への志向はブルムナスで特に高く、一方クドゥスではそれほどでもない。これは現況とも一致する。

緑への志向が強い理由は、必ずしも断言はできないが、「木陰のイメージで涼しそう」という回答が多かったことが参考になる。このことは、寒色である青を志向する

表5-1-1 階数の現況と志向（％）

	コタゲデ		クドゥス		チョンヂョットゥル		計	
	現況	志向	現況	志向	現況	志向	現況	志向
2階	0	17.3	0	33.3	16.7	32.7	6.9	26.7
1階	100	63.5	100	66.7	83.3	63.6	93.1	64.1
かまわない	—	19.2	—	0	—	3.6	—	9.2

表5-1-2 外壁の色の現況と志向（％、複数回答）

	コタゲデ		クドゥス		チョンヂョットゥル		計	
	現況	志向	現況	志向	現況	志向	現況	志向
緑	26.9	39.2	14.3	14.3	34.0	45.5	27.8	37.8
黄・クリーム	26.9	15.7	23.8	28.6	20.8	20.0	23.8	19.7
白	15.4	21.6	28.6	14.3	18.9	12.7	19.0	16.5
茶	15.4	9.8	33.3	4.8	18.9	14.5	19.8	11.0
青	11.5	11.8	0	23.8	1.9	5.5	5.6	11.0
グレー	1.9	0	0	9.5	7.5	1.8	4.0	2.4
自然木	5.8	2.0	0	4.8	0	0	2.4	1.6
煉瓦	3.8	2.0	0	0	0	0	1.6	0.8
竹	1.9	0	0	0	0	0	0.8	0
明るい色	—	9.8	—	9.5	—	10.9	—	10.2
その他	3.8	5.9	0	4.8	5.7	1.8	4.0	3.9

割合が増えることとも共通する。

これは、イスラムと関係の深い色であるということ、また、インドネシアにおいて「冷たさ」が特殊な観念を形成していること、また、樹木が特別の意味をもつことと関連するものであろう（注5）。特に前者については、地域に点在するモスクの外壁に緑や青系が多用されることから推察される。

また、ブルムナスでは、第3節で述べるように、住宅のサイズが狭小でありプライバシーを保つことがやや困難と考えられるなど全体に過密性が高く、居住性を確保する意味から緑が緩衝的役割を求められている可能性もある。

一方、自然木や煉瓦など、素材の色彩を好むという回答は低い。茶系を素材の色と読みかえても、その値は低く、しかも志向はさらに低くなる。これは、後述するように、自然のままの木材を主材料としている伝統的住居に対する志向がそれほど高くないことと符合している。

（3）ファサード・デザイン

次に9種類の住宅写真に対する志向は表5-1-3に示すとおりである。各地区とも、ジャワの伝統的デザインよりも、コロニアルスタイルを強く好む傾向にある。特にブルムナスではその傾向が強い。また近代的デザインへの志向も強く、なかでもクドゥスでは過半数を占めた。

一方伝統的住居に関しては、居住環境評価や定住志向調査では伝統的住宅に住む人の満足度が高いにもかかわらず、これを理想のデザインとするものは、もっとも高率を示すコタグデでさえも全体の4分の1に過ぎない。

なお、コロニアル系の中でも写真①の評価が低いのは、2階建てのためと考えられる。同様に、近代的デザインのもので、写真⑦に比べて写真⑧⑨の評価は低く、特に写真⑧が低いのは、極点な近代的デザインに対しては忌避的傾向があると判断される。

選好理由は自由回答としたため多様だが、「広さ」や「庭」を評価するものは各地区とも1、2割存在する。特に、いずれの地区においても「庭」の比率は高く、住宅の評価が庭の広さに依存していることをうかがわせる。同時に「広さ」の重要性も高い。中層集合住宅は人気がないといわれるが、その理由がこうした「広さ」に対する志向によるものであることをうかがわせる。熱帯地域の気候的条件を克服する機能への要求が「広さ」にこめられていると解釈しうる。

ブルムナスでは、「快適性」「清潔さ」「植栽」「単純さ」など具体的理由を上げた回答が多かったのに対して、コタグデでは抽象的な表現にとどまるものが多かった。

表 5 - 1 - 3 望ましい住宅デザイン

	コタグデ	ブルムナス	クドゥス	計
DUTCH TRADITIONAL	1 1.9	1 1.9	1 5.0	3 2.4
NEW DUTCH TRADITIONAL	20 37.0	14 26.4	4 20.0	38 29.9
DUTCH INFLUENCED	5 9.3	18 34.0	2 10.0	25 19.7
TRADITIONAL JAWA STYLE	9 16.7	8 15.1	3 15.0	20 15.7
NEW JAWA STYLE	5 9.3	2 3.8	0 0.0	7 5.5
IMPROVED PERUMNAS	6 11.1	3 5.7	2 10.0	11 8.7
MODERN INTERNATIONAL 1	5 9.3	4 7.5	6 30.0	15 11.8
MODERN INTERNATIONAL 2	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
MODERN DECORATIVE	3 5.6	3 5.7	2 10.0	8 6.3
計	54 42.5	53 41.7	20 15.7	127 100.0

上段は実数、下段は%

表 5 - 1 - 4 選好理由 (写真別)

		コタケデ		ブルムナス		クドゥス		計	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
写真①	清潔	0	0.0	1	50.0	0	0.0	1	20.0
	明るい	0	0.0	1	50.0	0	0.0	1	20.0
	広い	1	50.0	0	0.0	0	0.0	1	20.0
	涼しい	0	0.0	0	0.0	1	100.0	1	20.0
	力強い	1	50.0	0	0.0	0	0.0	1	20.0
	計	2	100.0	2	100.0	1	100.0	5	100.0
写真②	庭	3	13.6	8	32.0	2	33.3	13	24.5
	広い	3	13.6	4	16.0	0	0.0	7	13.2
	涼しい	3	13.6	1	4.0	1	16.7	5	9.4
	緑	1	4.5	4	16.0	0	0.0	5	9.4
	自然の採光・換気	2	9.1	2	8.0	0	0.0	4	7.5
	静か	2	9.1	0	0.0	2	33.3	4	7.5
	景観	3	13.6	0	0.0	0	0.0	3	5.7
	屋根が高い	0	0.0	2	8.0	0	0.0	2	3.8
	快適	0	0.0	2	8.0	0	0.0	2	3.8
	伝統的	1	4.5	1	4.0	0	0.0	2	3.8
	近代のかつ伝統的	1	4.5	0	0.0	0	0.0	1	1.9
	1階建て	0	0.0	1	4.0	0	0.0	1	1.9
	車で便利	0	0.0	0	0.0	1	16.7	1	1.9
	美しい	1	4.5	0	0.0	0	0.0	1	1.9
	半分モダン	1	4.5	0	0.0	0	0.0	1	1.9
	健康的	1	4.5	0	0.0	0	0.0	1	1.9
計	22	100.0	25	100.0	6	100.0	53	100.0	
写真③	庭	2	20.6	6	21.4	0	0.0	8	21.6
	清潔	1	14.3	5	17.9	0	0.0	6	16.2
	快適	1	14.3	3	10.7	0	0.0	4	10.8
	簡素	0	0.0	3	10.7	1	50.0	4	10.8
	緑	0	0.0	2	7.1	0	0.0	2	5.4
	モダン	1	14.3	1	3.6	0	0.0	2	5.4
	屋根が高い	0	0.0	2	7.1	0	0.0	2	5.4
	ガレージがある	0	0.0	1	3.6	0	0.0	1	2.7
	現実の家庭	0	0.0	0	2.0	1	50.0	1	2.7
	広い	0	0.0	1	3.6	0	0.0	1	2.7
	格好よい	1	14.3	0	0.0	0	0.0	1	2.7
	景観	0	0.0	1	3.6	0	0.0	1	2.7
	健康的	0	0.0	1	3.6	0	0.0	1	2.7
	ちょうどよい	0	0.0	1	3.6	0	0.0	1	2.7
	普通	1	14.3	0	0.0	0	0.0	1	2.7
	美しい	0	0.0	1	3.6	0	0.0	1	2.7
計	7	100.0	29	100.0	2	100.0	37	100.0	
写真④	快適	0	0.0	3	33.3	0	0.0	3	15.8
	伝統的	2	33.3	0	0.0	1	25.0	3	15.8
	庭	0	0.0	1	11.1	2	50.0	3	15.8
	涼しい	1	16.7	1	11.1	0	0.0	2	10.5
	景観	2	33.3	0	0.0	0	0.0	2	10.5
	親しみやすい	1	16.7	0	0.0	0	0.0	1	5.3
	親戚と一緒に住める	0	0.0	1	11.1	0	0.0	1	5.3
	健康的	0	0.0	1	11.1	0	0.0	1	5.3
	ちょうどよい	0	0.0	0	0.0	1	25.0	1	5.3
	木造がある	0	0.0	1	11.1	0	0.0	1	5.3
	静か	0	0.0	1	11.1	0	0.0	1	5.3
計	6	100.0	9	100.0	4	100.0	19	100.0	

表5-1-4 選好理由(写真別)(続き)

		コタケテ		ブルムナス		ウドゥス		計	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
写真⑤	美しい	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	16.7
	伝統的	0	0.0	1	50.0	0	0.0	1	16.7
	庭	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	16.7
	伝統的過ぎない	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	16.7
	緑	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	16.7
	新しい伝統	0	0.0	1	50.0	0	0.0	1	16.7
	計	4	100.0	2	100.0	0	0.0	6	100.0
写真⑥	植栽	2	28.6	1	50.0	1	33.3	4	33.3
	ちょうどよい	1	14.3	0	0.0	1	33.3	2	16.7
	屋外との関係がよい	2	28.6	0	0.0	0	0.0	2	16.7
	自然の採光・換気	0	0.0	1	50.0	0	0.0	1	8.3
	材料が少ない	1	14.3	0	0.0	0	0.0	1	8.3
	清潔	1	14.3	0	0.0	0	0.0	1	8.3
	孤立していない	0	0.0	0	0.0	1	33.3	1	8.3
	計	8	114.3	4	200.0	0	0.0	12	100.0
写真⑦	広い	0	0.0	1	20.0	2	50.0	3	23.1
	モダン	0	0.0	0	0.0	1	25.0	1	7.7
	伝統的	0	0.0	1	20.0	0	0.0	1	7.7
	近代的かつ伝統的	0	0.0	1	20.0	0	0.0	1	7.7
	清潔	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	7.7
	1階建て	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	7.7
	快適	0	0.0	0	0.0	1	25.0	1	7.7
	植栽	0	0.0	1	20.0	0	0.0	1	7.7
	静か	0	0.0	1	20.0	0	0.0	1	7.7
	普通	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	7.7
	オランダの影響	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	7.7
	計	4	100.0	5	100.0	4	100.0	13	100.0
写真⑧	2階建て	0	0.0	1	33.3	0	0.0	1	20.0
	モダン	1	50.0	0	0.0	0	0.0	1	20.0
	蒸気	0	0.0	1	33.3	0	0.0	1	20.0
	ちょうどよい	1	50.0	0	0.0	0	0.0	1	20.0
	優れている	0	0.0	1	33.3	0	0.0	1	20.0
	計	2	100.0	3	100.0	0	0.0	5	100.0

表5-1-5 住宅デザイン選好理由(全体)

	コタグデ		ブルムナス		クドゥス		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
庭	6	15.4	15	29.4	4	25.0	25	23.6
広い	4	10.3	6	11.8	2	12.5	12	11.3
快適	1	2.6	8	15.7	1	6.2	10	9.4
簡素	2	5.1	5	9.8	2	12.5	9	8.5
清潔	3	7.7	6	11.8	0	0.0	9	8.5
緑	2	5.1	6	11.8	0	0.0	8	7.5
涼しい	4	10.3	2	3.9	2	12.5	8	7.5
素敵	5	12.8	2	3.9	0	0.0	7	6.6
伝統的	3	7.7	3	5.9	1	6.2	7	6.6
静か	2	5.1	2	3.9	2	12.5	6	5.7
ちょうどよい	2	5.1	1	2.0	2	12.5	5	4.7
自然の採光・換気	2	5.1	3	5.9	0	0.0	5	4.7
屋根が高い	0	0.0	4	7.8	0	0.0	4	3.8
モダン	2	5.1	1	2.0	1	6.2	4	3.8
美しい	2	5.1	1	2.0	0	0.0	3	2.8
健康的	1	2.6	2	3.9	0	0.0	3	2.8
1階建て	1	2.6	1	2.0	0	0.0	2	1.9
屋外との関係がよい	2	5.1	0	0.0	0	0.0	2	1.9
普通	2	5.1	0	0.0	0	0.0	2	1.9
近代的かつ伝統的	1	2.6	1	2.0	0	0.0	2	1.9
材料が少ない	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	0.9
伝統的過ぎない	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	0.9
現実の家庭	0	0.0	0	0.0	1	6.2	1	0.9
明るい	0	0.0	1	2.0	0	0.0	1	0.9
格好よい	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	0.9
力強い	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	0.9
2階建て	0	0.0	1	2.0	0	0.0	1	0.9
ガレージ	0	0.0	1	2.0	0	0.0	1	0.9
オランダの影響	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	0.9
親戚と一緒に住める	0	0.0	1	2.0	0	0.0	1	0.9
孤立していない	0	0.0	0	0.0	1	6.2	1	0.9
新しい伝統	0	0.0	1	2.0	0	0.0	1	0.9
親しみやすい	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	0.9
車で便利	0	0.0	0	0.0	1	6.2	1	0.9
半分モダン	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	0.9
優れている	0	0.0	1	2.0	0	0.0	1	0.9
木陰がある	0	0.0	1	2.0	0	0.0	1	0.9
計	39	36.8	51	48.1	16	15.1	106	100.0

表 5 - 1 - 6 住宅デザイン選好理由（地区別）

	コタグデ	ブルムナス	クドゥス	全体
1	庭	庭	庭	庭
2	素敵	快適	広い	広い
3	広い	清潔	ちょうどよい	快適
4	涼しい	広い	静か	清潔
5	伝統的	緑	涼しい	簡素
6	清潔	簡素	簡素	涼しい
7	普通	屋根が高い	孤立していない	緑
8	屋外との関係がよい	自然の採光・換気	現実的家庭	伝統的
9	緑	伝統的	モダン	素敵
10	簡素	健康的	車で便利	静か
11	モダン	素敵	伝統的	ちょうどよい
12	ちょうどよい	涼しい	快適	自然の採光・換気
13	静か	静か	1階建て	屋根が高い
14	自然の採光・換気	明るい	材料が少ない	モダン
15	美しい	近代的かつ伝統的	明るい	美しい
16	オランダの影響	美しい	普通	健康的
17	伝統的過ぎない	ガレージ	美しい	近代的かつ伝統的
18	半分モダン	2階建て	半分モダン	普通
19	健康的	1階建て	2階建て	屋外との関係がよい
20	親しみやすい	ちょうどよい	力強い	1階建て
21	近代的かつ伝統的	モダン	健康的	2階建て
22	格好よい	優れている	屋根が高い	親しみやすい
23	1階建て	親感と一緒に住める	優れている	力強い
24	材料が少ない	新しい伝統	緑	親感と一緒に住める
25	快適	木陰がある	新しい伝統	半分モダン
26	力強い	材料が少ない	伝統的過ぎない	格好よい
27	現実的家庭	普通	近代的かつ伝統的	伝統的過ぎない
28	明るい	半分モダン	清潔	ガレージ
29	ガレージ	力強い	素敵	材料が少ない
30	車で便利	孤立していない	親しみやすい	木陰がある
31	親感と一緒に住める	車で便利	親感と一緒に住める	優れている
32	屋根が高い	伝統的過ぎない	格好よい	現実的家庭
33	新しい伝統	現実的家庭	ガレージ	明るい
34	孤立していない	親しみやすい	木陰がある	新しい伝統
35	2階建て	格好よい	自然の採光・換気	車で便利
36	優れている	オランダの影響	オランダの影響	オランダの影響
37	木陰がある	屋外との関係がよい	屋外との関係がよい	孤立していない

また各地区とも、デザイン（「屋根」「ジャワ的」「コロニアル的」「近代的」）を理由とする回答も約1割ある。

住宅に対する志向は、あらかじめ用意した写真に拘束された面もあるが、総じて伝統など形式などにこだわるものは少数であり、機能の充実など現実的な傾向が強い。

－3 スタイルに対する志向

（1）住宅デザインの系譜別選好理由

表5-1-4は、各写真ごとの選好理由である。それを、1）コロニアル・スタイル、2）伝統様式、3）モダン・デザインの3つごとに整理した（表5-1-5および6）。

1）コロニアル・スタイル

「庭」「広い」「清潔」などが上位にあげられている。前2者はコロニアル住宅の一般的特徴であるが、そのイメージに「清潔」が上がっているのは注目される。

2）伝統様式

写真③については「快適」「伝統」「庭」が上位3つの理由としてあげられており、ある程度「伝統」が意識された結果であることがわかるが、写真④では特に「伝統」が意識されていないと考えられる。

3）モダン・デザイン

写真⑥の改造型ブルムナスについては、「簡素」「ちょうどよい」「屋外との関係」など、コンパクトな構成であることがかえって選好理由となっている。

写真⑦では「広い」ことが最も多いが全体に占める比率は4分の1にも満たず、選好理由はさまざまである。その中で、「伝統」に関する回答は4票あるが、その内訳は「モダン」を理由とするものはわずか1票にとどまり、「伝統的」とするものが2票、また、1票ではあるが「オランダの影響」を感じている回答があったことは注目される。

写真⑧でも「モダン」という回答は1票に過ぎず、モダン・デザインの選好理由として様式が意識されているわけではなさそうである。

（2）住居様式に対する志向の理由

表5-1-7および図5-1-2は、第2章でとりあげた5地区における居住環境に対する満足度調査の結果を、住宅の種類別にみたものである。この結果から各住宅タイプをそのまま比較することはできないが、それぞれの特性をみると次のようになる。

表 5 - 1 - 7 住宅環境（住居様式別）

居住環境評価項目 (住宅環境)	コタバル		クタンダン		カディパテン		カウマン		コタグデ	
	コロニアル	その他	チャイニーズ	その他	貴族	カブツ	貴族	カブツ	貴族	カブツ
住宅の規模	4.24	4.00	3.67	3.40	2.89	3.29	3.60	3.48	4.13	3.67
	33	6	52	5	9	38	15	27	8	45
	0.867	0.632	0.857	0.548	0.928	1.137	1.183	1.014	0.641	0.929
住宅の間取り	3.49	3.33	3.35	3.00	2.78	2.68	3.13	2.85	3.63	3.02
	33	6	52	5	9	38	15	27	8	45
	1.034	1.506	0.926	0.707	0.833	0.989	1.246	1.027	0.916	1.055
涼しさ	3.85	3.50	3.21	2.80	2.89	2.66	3.64	3.35	3.00	3.21
	33	6	52	5	9	38	14	26	8	44
	0.712	1.049	0.825	0.447	1.054	1.169	1.151	0.977	1.309	0.734
騒音	3.56	2.33	2.73	2.60	3.13	3.05	3.14	3.19	3.63	3.27
	32	6	51	5	8	38	14	27	8	44
	0.84	1.033	0.827	0.894	0.991	0.985	1.292	1.001	0.744	0.758
プライバシー	3.55	3.00	3.50	3.40	3.78	3.51	3.79	3.59	3.75	3.71
	33	6	52	5	9	39	14	27	8	45
	0.794	0.894	0.804	0.548	0.667	1.023	0.699	0.844	0.707	0.626
住宅の古さ・新しさ	3.91	3.00	3.65	2.80	2.89	2.92	3.71	3.20	3.50	3.30
	33	6	52	5	9	37	14	25	8	43
	0.522	1.265	0.683	0.837	0.928	0.862	0.914	0.764	0.756	0.86
住宅のスタイル	3.70	3.33	3.50	3.20	3.63	2.90	3.80	2.85	3.75	3.59
	33	6	52	5	8	39	15	27	8	44
	0.847	0.816	0.828	0.447	0.916	0.94	1.014	0.989	0.707	0.757
住宅の住み心地	4.12	3.17	3.65	3.80	3.44	3.36	3.67	3.48	3.88	3.64
	33	6	52	5	9	39	15	27	8	44
	0.545	1.169	0.711	0.447	0.882	0.811	0.9	0.802	0.641	0.718

※上段は平均値、中段は実数、下段は標準偏差

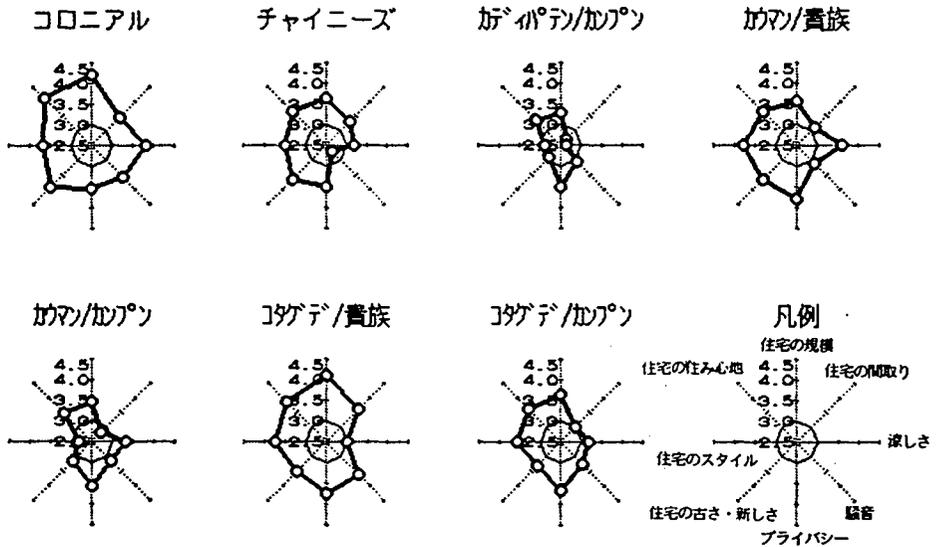


図 5 - 1 - 2 居住環境評価平均（住居様式別）

まず、コタバルのコロニアル住宅は、いずれの項目についても満足度が高いが、中でも「住宅の規模」「住宅の住み心地」はく4：やや満足>を上回る水準である。逆に、「住宅の間取り」「騒音」は相対的に評価が低い。

コタバルの住居はかなり大きく、事実、「規模」についての満足度は高い水準にあるが、そのことと「間取り」の相対的な水準の低さをどうみるべきだろうか。

ジャワの伝統的住居では、接客の空間が重要視されることは既にみた通りである。儀礼空間が重視されること、来客のステイタスに応じて接客の空間が異なる構造となっていることなどはみなそのあらわれといえる。

それに対して、コタバルの住居の間取りは、玄関を入ると直接リビングルームがあり、そこから各部屋に出入りする典型的な西欧型である。玄関を入るとまったく緩衝空間がないことからリビングルームを接客用に使用せざるをえない。また、同時に、玄関が単に壁面にもうけられた開口であり、伝統的住居が装飾などで飾りつけられているのとは対照的なたたずまいである。

要するに、双方の玄関のあり方にかかなりの落差があり、玄関が「玄関」らしい表情をしていないと感じられている可能性もある。現に、コタバルの住居では、玄関部の改装が比較的多いことはそれを裏づけるものと考えられる。また、後述するように、ブルムナスにおける住宅改造の過程でも同様の現象が観察されている。ほかにも同様の点指摘

また、一般に部屋のサイズが大きく、広さの割に部屋数が少ないことも問題と考えられる。ベッドルームとしてのスントンと比べてその広さにはかなりの差がある。

プチナンのショップハウスでは、「騒音」がかなり低水準だが、これは住宅自体の性能というより商業業務地区であるという地区の環境に起因するものと考えられる。それ以外では「住宅の間取り」「涼しさ」の評価も低い。過密の影響もみられるが、ショップハウス特有の敷地条件に対する不満もあるかもしれない。

貴族的伝統様式の住宅については、カウマンとコタグデではかなりパターンが異なっている。まず、カウマンについては、「住宅の間取り」「騒音」の評価が低く、逆に「涼しさ」の評価が高い。コタグデでは、「涼しさ」の評価が低いのが特徴的である。全体の水準ではコタグデの方がカウマンよりかなり高い傾向にある。これは、カウマン住宅がジョグロではなく、リマサンないしカンブン型であり、一般に屋根勾配が大きく、天井高も高いのに対して、コタグデのジョグロ型は一般に軒高が低くその分、天井のふところが小さい傾向をもつことに起因するものであろう。

カンブン型住宅については、他の住宅タイプと比較するとその評価がかなり低い水

準にある。中ではコタグデの水準が最も高い。共通して評価の低い項目は「住宅の間取り」である。これは、キャンピング型住宅が一般に小規模なことから、適当な間取りをとることができないことに起因するものであろう。

以上から、いずれのタイプについても、「住宅の間取り」の評価は低いことがわかる。これが、規模に付随するものなのか、それとも、別の要因によるものかは不明である。また、住宅のスタイルに関する評価は、キャンピング型を除けば同水準であるが、他の項目との相対的評価は貴族的伝統をひく様式住宅において高い。

5-2 居住環境のあり方に対する志向

0 緒言

(1) 視点

人びとが理想の居住環境像を獲得するプロセスにおいて、実生活が営まれている生活空間のあり方がもつ意味は本質的なものであると考えられる。たとえば、原体験がその人の居住環境についての志向に強く影響を与えることはよく知られている。

したがって、好ましい居住環境像には、通常、現実の環境条件に対する不満や要求が裏返しになったかたちをとる面が強いだらう。この場合、もし理想の居住環境についてたずねられれば、その回答はかなり具体的になると考えられる。それゆえ具体的な回答には、かなりの程度現実の居住環境に対する不満や要求が入っているとみてよいだろう。

一方、抽象性の高い回答では現実の問題は捨象されたかたちである。これを現実の問題がないとみることはできず、また、つまるところ回答者がどのような回答をするタイプかということに左右されることも事実だろうが、イメージが比較的純粋に発露されたケースもかなり多いと考えられる。

ここでは、理想の居住環境に対する自由回答から、①現実の居住環境上の問題点、また、②理想の居住環境イメージを考察することを試みた。

(2) 研究方法

1) 調査内容と方法

居住環境に対する人びとの志向を把握する。その方法は、理想の居住環境についての自由回答の分析である。回答の処理にあたっては、キーワードを抽出し、KJ法を用いて集計、分析を行なった。

2) 調査の概要

調査は、第2章で言及したフィールド調査の一環として行なわれた。

(3) 調査対象地区

調査地区は第2章におけるケーススタディと同様、コタバル、クタンダン、カディパテン・キドゥル、カウマン、コタグデの5地区である。

- 1 理想の居住環境イメージ (表5-2-1)

(1) 全体的傾向

集計の結果、全体が大雑把に6つにグルーピングされた。そのうち回答の頻度が最も高かったのは「近隣の物的環境に関する表現群」であり、全体の45.1%にあたる。その次は「抽象性の高い形容詞による表現群」で31.2%、さらに「社会・経済的環境に関する表現群」「住宅に関する表現群」の2つがそれぞれ10.0%でそれに続く。それ以外は極端に比率が低い。

(2) グループ別傾向

1) 近隣の物的環境

最も関心を集めているのは「衛生」であり、このグループ全体の29.3%を占める。次に、「静かさ」「安全性」「オープンスペース」「施設」の4つが10%以上でそれに続く。

「衛生」についての内容をみると、全般的な衛生状態のよさを意味すると考えられる「健康的な」が最も多いが、「汚染のない」もかなりの数にのぼり環境汚染に対する関心の深さを推察させる。また、「飲料水」という回答がみられ、現実の環境条件に対する不満の裏返しであることをよく示している。

「オープンスペース」では「緑」が過半を占め、現実の近隣環境のあり方と合致した結果となっている。

「施設」の内訳は、単に「施設」とするだけで内容を特定しない回答パターンが最も多いが、具体的にあげられた施設の種類としては「公共施設」「宗教施設」「レクリエーション施設」「スポーツ施設」がある。

「密度」では、過密を避けたいとする意見もあるが、逆に「子供が多くみられる環境」を望む声の方が強い。高密度居住を背景としたにぎやかさや活気に対する志向がうかがわれる。

「歴史性」はごくわずかだが、「歴史的モニュメント」を求める意見があがっている。

2) 形容詞表現

「平穏性」「快適性」「質感」の3つで全体の4分の3を占める。

表 5 - 2 - 1 理想の居住環境イメージ

理想の居住環境イメージ	実数	%
近隣の物的環境に関する表現群	208	45.1
抽象性の高い形容詞による表現群	144	31.2
社会・経済的環境に関する表現群	46	10.0
住宅に関する表現群	46	10.0
利便性に関する表現群	9	2.0
住宅地に関する表現群	6	1.3
その他	2	0.4
計	461	100.0

※多重回答

近隣の物的環境に関する表現群			208	45.1	
衛生	61	29.3	健康的な	37	60.7
			汚染のない	14	23.0
			清潔な	6	9.8
			霧主	2	3.3
			飲料水	2	3.3
静かさ	47	22.6	静かさ	47	100.0
安全性	31	14.9	安全性	31	100.0
オープンスペース	25	12.0	緑	22	88.0
			公園	1	4.0
			子供の遊び場	1	4.0
			噴水	1	4.0
施設	24	11.5	よい施設	9	37.5
			公共施設	4	16.7
			宗教施設	3	12.5
			レクリエーション施設	3	12.5
			施設	2	8.3
			スポーツ施設	1	4.2
			インフラと施設	1	4.2
			子供の勉強	1	4.2
密度	11	5.3	密度が高くない	3	27.3
			広々とした	1	9.1
			子供たちが多	6	54.5
			人口の多い	1	9.1
歴史性	5	2.4	歴史的モニュメント	3	60.0
			ジャワ社会システムに基づく	1	20.0
			保全された	1	20.0
道路	3	1.4	アスファルト道路	1	33.3
			ほこりっぽくない	1	33.3
			モーターバイクの通れる広さ	1	33.3
総合	1	0.5	良好な物的環境	1	100.0

表5-2-1 理想の居住環境イメージ(続き)

抽象性の高い形容詞による表現群			144	31.2	
平穏性	40	27.8	平和な	38	95.0
			騒ぎのない	2	5.0
快適性	31	21.5	快適な	15	48.4
			愉快的な	16	51.6
質感	26	18.1	自然の	3	11.5
			新鮮な	12	46.2
			簡素な	11	42.3
秩序	13	9.0	整然とした	1	7.7
			秩序ある	6	46.2
			きちんとした	6	46.2
審美性	12	8.3	美しい	11	91.7
			魅力のある	1	8.3
親しみやすさ	11	7.6	親しみのある	11	100.0
時代性	6	4.2	古い	3	50.0
			モダン	2	33.3
			進んだ	1	16.7
調和	4	2.8	調和のとれた	3	75.0
			物的環境と精神的環境の調和	1	25.0
総合	1	0.7	よい	1	100.0

社会・経済的環境に関する表現群			46	10.0	
コミュニティ	29	63.0	コミュニティ	27	93.1
			差別のない	1	3.4
			相互扶助	1	3.4
セキュリティ	5	10.9	セキュリティ	5	100.0
経済	5	10.9	繁栄した	2	40.0
			活力のある	1	20.0
			観光	1	20.0
			ツーリズムと文化の多様性	1	20.0
住民	5	10.9	宗教	2	40.0
			同じ職業の人	1	20.0
			物質的でない人	1	20.0
			宗教とコミュニティ	1	20.0
伝統	2	4.3	ジャック的社会環境	1	50.0
			親しい社会環境	1	50.0

表5-2-1 理想の居住環境イメージ（続き）

住宅に関する表現群			46	10.0	
構造	11	23.9	涼しさ	8	72.7
			通気	1	9.1
			高い天井	1	9.1
			安全な建物	1	9.1
庭	11	23.9	広い前庭	11	100.0
規模	10	21.7	大きな住宅	3	30.0
			広い敷地	7	70.0
形態	9	19.6	ジャワ建築	1	11.1
			古い住宅	1	11.1
			簡素な住宅	1	11.1
			スタイルは重要ではない	2	22.2
			古い型	1	11.1
			近代的な住宅	1	11.1
			新しい住宅	1	11.1
			整然とした建物	1	11.1
方向	2	4.3	住宅の方向	2	100.0
総合	2	4.3	住宅	1	50.0
			持家	1	50.0
その他	1	2.2	ガレージ	1	100.0

利便性に関する表現群			9	2.0	
立地	3	33.3	大通りに近い	2	66.7
			行きやすい	1	33.3
経済性	3	33.3	戦略上有効な場所	1	33.3
			自分のニーズに応じてくれる	2	66.7
施設	2	22.2	公共施設に近い	1	50.0
			重要な施設への近接性	1	50.0
総合	1	11.1	利便性	1	100.0

住宅地に関する表現群			6	1.3	
			田舎	1	16.7
			周辺	1	16.7
			森林	1	16.7
			都会と田舎のよさ	1	16.7
			町中	1	16.7
			伝統的な村	1	16.7

その他			2	0.4	
			環境の広がり	1	50.0
			改善された	1	50.0

「平穏性」の過半は「平和」であり、これ単独でもこのグループの中で最も高い比率を占める。ジャワ人の価値意識の基本であるクルクハンの関連で理解されるべきであろう。したがって、伝統的価値の継承と読みかえることができそうである。

3) 社会・経済的環境

過半が「コミュニティ」であり、全体の63.0%を占める。次いで「セキュリティ」「経済」「住民」の3つが10.9%で続く。これもまたジャワ人の伝統的価値との関連で理解すべきであろう。

「経済」と回答した人の比率自体が小さいが、「観光開発」に関心を示す意見がみられる。これは、観光都市であるジョクジャカルタに特有の現象であろう。

「住民」はコミュニティに入れるべきとも考えられるが、その内訳は「宗教」あるいは「物質的でない」の2つであり、精神面の重視がうかがわれる。物質的存在に対する精神の優越はジャワの伝統的宗教であるクジャウェンに教えるところである(注6)。

4) 住宅

「構造」「庭」「規模」「形態」の4つはほぼ同程度の比率で、全体のほぼ9割を占める。

「構造」の内訳は、「涼しさ」「通気」「高い天井」がほとんど全体を占め、涼しく快適に過ごせる住宅に対する欲求が強いことがわかる。

「形態」では、ジャワの伝統的建築にこだわる意見はほとんどない。

5) その他

「利便性」自体に対する関心はそれほど高くはない。住宅地の条件の点でわが国とこれほど異なる点も少ない。

「住宅地」についての意見では、回答数自体が小さいが、どちらかというところ農村的郊外的な環境に対する志向が強い。

- 2 理想の環境志向の傾向

全体の傾向から判断すると、物的環境に対する関心が強いことがうかがわれる。しかも、その対象は住宅よりは近隣環境に向いている。これは、第4章の居住環境評価調査結果の考察において、住宅環境に対する関心が高いと判断されたことと矛盾するようにも思える。

しかし、居住環境に対する総合評価項目である「住宅地全体の住み心地」と住宅環境を構成する項目との間には、いずれもそれほど高い相関がないことがこの事実を裏

づけている。

一方、社会環境に対する関心は高く、その過半が「コミュニティ」へと向けられている。この結果は、ジャワ社会がコミュニティ・ライフに価値をおくといわれていることとよく一致する。と同時に、コタバルにおける居住環境評価の結果、ほとんどの項目について評価が高い割に、居住環境全体に対する満足度が低かった理由が、コミュニティ活動に対する満足度が低いことに起因する、という推論の正しさを示すものといえよう。

また、伝統への関心がストレートなかたちで観察されなかったが、コミュニティに対する関心が高いこと、また、形容詞表現の中でジャワ社会の特質ともいわれる「平和」の比率が高かったことなど、伝統的な環境を志向する傾向が読みとれる。

しかしながら、生活空間を構成する物的要素の面での伝統への関心はほとんど感じられず、生活空間の伝統は物的側面ではなく、社会的側面に集中していると考えられる。

5-3 新興住宅団地の成熟過程における生活空間の形成

0 緒言

(1) 視点

住宅の増改築は、自分の住宅を理想像へ近づけるためのひとつの手段である。ここで考察の対象とする事例は、第3章でコタグデと比較の対象として取りあげた、ジョクジャカルタ近郊のチョンドンチャトゥル（ブルムナスと呼ぶ）である。

その計画は、コストを切り詰めるために、基本的にはコアハウスのコンセプトを採用したと考えられ、供給時には生活に必要な最小限の規模および設備しか備えていなかった。したがって、入居開始からそれほど経たないうちに、居住者の意思と手による住戸の増改築など生活空間の変容が進んだ。それは、生活の必要に即したやむにやまれぬ対応であったとも考えられるが、それだけに、逆にかなり極限に近い状態で生活空間に対する要求が観察しうると考えられる。

開発途上国における住宅政策の中心は、スクウォッターズラムに対する対応策におかれている。ローコストハウスの供給は、その1つの柱となるべきものだが、公的機関による直接的な住宅供給は、資金的制約から1つの限界にあることもまた事実であろう。その一方で、既成市街地におけるアップグレイディング型の環境改善手法が注目されるに至っている。

とはいえ、都市化にともなう無秩序なスプロールの市街地の拡大が継続する中で、

それをある程度コントロールする可能性、そこまでいなくても、開発それ自体あるいは開発後の周辺への波及効果を考慮すると、計画的な住宅地開発の意義は小さくないと考えられる。住宅開発事業を単に住宅の供給という側面からだけでなく、市街地の整備手法として位置づけ、新しい評価軸を用意することが必要であろう。

この点について考察を行なうことがここでの目的ではなく、これ以上の言及は避けるが、開発された住宅地が上位計画の中で一定の戦略的役割を果たしうするためには、基盤整備水準の高い、住宅主体の市街地の形成、いかえれば、市街地としての成熟が前提とされることはいうまでもない。

とすれば、現在住宅地開発の主流として行なわれている、コアハウスやサイトアンドサービスなど一連のオンサイトでの段階的な整備を前提とする住宅供給手法は、この問題、住宅地レベルでの環境形成という視点によっても評価されるべきであろう。

ここでは、ブルムナスによって開発された住宅地を事例として、住民による生活空間形成の実態を把握し、生活空間に対する要求の考察を行なうことを主目的とする。

(2) 研究方法

調査、住居形態、施設分布といった物的環境の実態の記録と、住民の属性、生活および意識などについての調査に大別される。

前者は観察調査、後者は留置式のアンケート形式は不可能であり、ジャワ在住のインドネシア人学生アシスタントを通じ、回答者に直接インタビューする方式とした。調査対象は世帯主とし、標本数は55である。

(3) 調査対象

ブルムナスは、ジャワ島の中部にあるジョクジャカルタ市の北東6 Kmに位置する新興住宅団地である。第2期5ヵ年計画によって、1977年から79年にかけて、国家住宅公団ブルムナスによって建設された。

居住者の階層は、経済的には中上位、職業は公務員が多い。主としてジョクジャカルタ市へ通勤している。住宅個数は1232戸で、うち40戸余り大学職員用住宅を含んでいる。住戸は二戸一が基本で、10ないし20で1つのブロックを構成している。住宅地はブルムナスによって管理され、28のRT、3つのRKに分かれている。

- 1 住宅の変容

(1) 初期住戸ユニット

供給された住宅は、敷地96m²、床面積36m²で、室内は2つの寝室(それぞれ3×3 m)、居間兼食堂(3×4 m)、台所(1.5×2 m)、バスルーム(1.5×2 m)から

なり、外部には前後にベランダ（1×3m）がついている。

住宅の仕上は、床は土間コンクリート仕上げ、外壁および間仕切りはアルミニウム鋼材によって補強されたパネル構造、屋根は波型アスベストルーフィングであり、工業化プレファブ工法を採用している。

設備については、上下水道は住宅地内の深井戸を利用し配管式供給がなされ、下水道は汚水、雑排水とも一箇所に集められて集中処理がなされている。電気は、220V、450Wが各戸に供給されている。

以上からみる限り、完成した住宅としては最小限の装備を施したローコスト住宅である。コアハウスの設計思想を採用しているとすれば、かなり完成度の高いものといえる。ターゲットが公務員をはじめとする中上位の経済階層ということから、このプランが選択されたと思われるが、入居してすぐ生活を営むことが可能であるということは、1つの利点には違いない。その反面、完全なサイトアンドサービスと比べれば、コスト的にはかなり不利である。結果的な増築を考えれば、適当な選択であったかについては検討の余地がある。

敷地の広さおよび形状は、増改築に際して問題がないわけではない。建てづまりによる高密化のおそれもある。部屋数を確保した割に設備関係の空間が貧弱なものも否めない。増改築を前提とした設計がなされているとしても、どの程度それを予測、計画していたのかは不明である。はじめから、特に増改築する必要がなければ、そのままで住めるようなかたちで供給されていると考えた方がよいのかもしれない。

（2）増改築の状況（図5-3-1）

現実には多くの増改築が行なわれている。増築は、裏側、街路側、側面というように、場所によって大きく分類できる。裏側への増築は、台所、食事室兼居間、個室などに使われる。これは、当初の住宅の広さが絶対的に不足していたこと、その中では台所の機能が不十分であったことが最も大きく影響していると考えられる。

表側への増築は、大きく2通りの方法がある。ひとつは道路境界まで壁を出し、部屋を増築する場合である。もうひとつは、屋根と床をはり、腰までの壁をつけて、テラス化するものである。テラスには、椅子がおかれ、半屋外の接客空間として利用される。一応の協定はあるというが、道路境界いっぱいになされ、側溝の上に乗ってテラスをはり出す例も多い。

側面への増築は、個室や物置などが多い。また共同井戸を隣家との境界上に設けた場合は、ここが水を運ぶ動線になるため、個室が設けられることは少ない。

調査した5軒のうち4軒までは住宅平面に何らかの増改築を加えていたが、間仕切

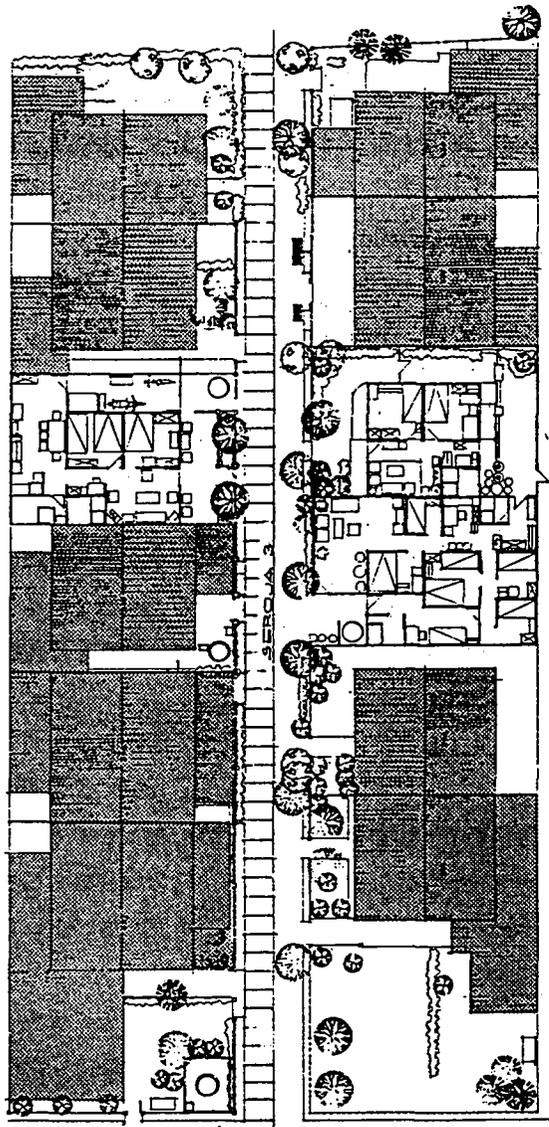


図 5 - 3 - 1 住居ユニットおよび街路空間の状況

りそのものに改変を加えているのは1軒しかなく、初期ユニットのプランに拘束されながら増加移築が進行していることを示している。

この点に関して、調査に先立つ1984年に、ガジヤマダ大学工学部建築学科の学生によってなされた調査の報告が参考になる。これによると、増改築プロセスには機能の充足の度合いによって一定の順序が見出されるとし、次の3段階に分けている。

①初期的改造 寝室、食堂など 主に裏側

②第2期的改造 客間、居間など 主に表側

③第3期的改造 書斎など

それぞれの段階の改造を行なっている住宅は、①は全体の75%、②は20%、③は5%にあたるとしている。

今回の調査で、初期的改造にあたる、裏側になんらかの増改築を行なっている住宅を、1ブロックを選んで調べてみると(表5-3-1)、118戸中92戸(78%)であり、①についてはほぼ同様の結果がえられた。②、③の具体的な比率についてはあきらかにしえなかったが、観察および5軒の改造事例のケース・スタディの限りでは、ほぼ①→②という図式で増改築が行なわれていると推察された。特に、裏側への台所の増築は初期改造の1つの典型的なパターンであって、先に指摘したように初期ユニットの台所まわりの設備の不十分さを反映しているものと考えられるが、裏側境界に設けられた煉瓦塀にトタン屋根を差しかけただけの簡単なものも多い。

また、個室の増築もかなり初期の段階で行なわれ、これも初期ユニットにおける部屋数の不足に対応しているのであろう。こうした初期増改築の後に、客間や居間として表側の増改築がなされるというのが、通常増改築のプロセスである。③の第3期的改造の例としてあげられた書斎などについては、今回の調査では確認できなかったが、既に前面道路の境界まで建物化が進んでいるものも1割程度あり、その中には庭がまったく存在しなくなったケースも少なくない。しかし、2階建てとなっているのはわずかである。

(3) 外部空間の変容(図5-3-1)

このような住宅の増改築にともなって、街路を挟んで向きあった住宅群によって構成される外部空間は大きく変容している。住宅だけではない。当初、住宅だけが建設され、隣家および道路側には塀はおろか植栽すらなかったが、現在では多くの木やフェンスがしつらえてある。住宅についても、思い思いのファサードデザインが妍を競いあっているという印象である。フェンスや植栽をいれれば、まったくの原型のまま手が加えられていない住宅は8%に過ぎない。内部の増改築の仮設的な印象と対照的

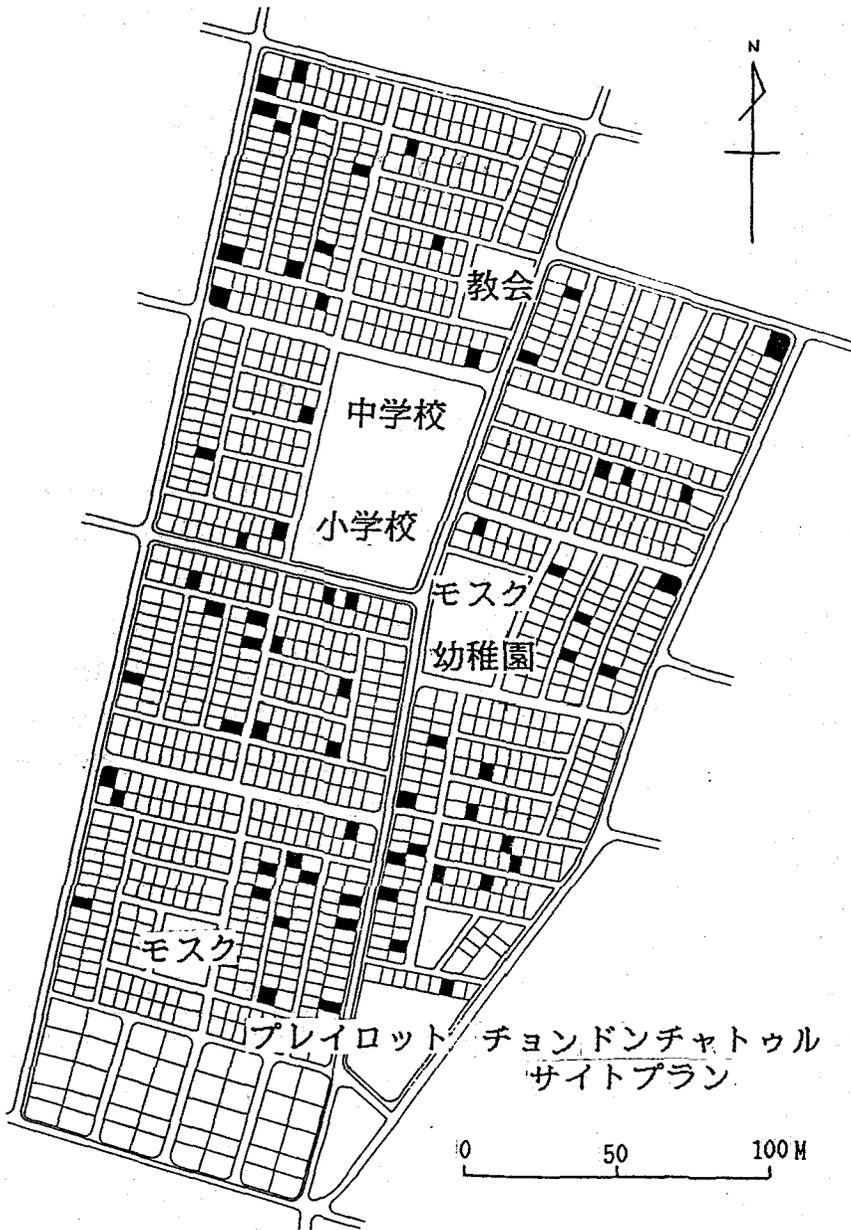


図 5 - 3 - 2 小店舗の分布

に、外部のデザインには凝ったものが多く、外部に関する関心は随分強いように思われる。

住宅前面部の改変のうち、最も一般的にみられるのはテラス化である。テラス化がさらに進み、完全に建物として取りこまれたものも1割程度ある。デザインはいずれもよく似た印象であり、同一の業者が請け負っているとも考えられる。

しかし、第1節で述べたように、この住宅地において撮影した住宅をまじえた9枚の住宅の写真をみせて、望ましい住宅デザインをたずねてみると、改造されたファサードをもつ住宅を選択したのはわずか6%に過ぎず、ほとんどの人はコロニアルスタイル系の住宅を強く好む傾向にある。

また、外壁の色彩についてもさまざまだが、緑が特に好まれる傾向がみられる。外壁の色として最も好ましい色とたずねると、その比率はさらに高くなる。お金に余裕があり、機会があれば塗りかえたいと思っている人が多いのであろう。

階数については、ほとんどが平屋のままで、2階建ては、初めから2階建てだったものを除けば数軒あるに過ぎないが、2階建ての志向はかなりみられる。デザインというより、広さに対する不満があるのであろう。2階建てを建てるためには、ブルムナスのオフィスから許可をもらうことが必要だが、今後2階建てが建っていく可能性もある。

－ 2 公共空間の変容

(1) 街路空間

各戸は、幅員約4mの街路に接している。この街路幅員は側溝を含んでいるので除くと約3.5mになる。そのうち半分は未舗装のまま残されており、住民が自由に植栽を行なっている。鉢植えのようなものだけでなく、中高木も植えられており、彼らの庭の一部として、街路が使用され、また理解されている。庭の植栽と一体化して街路幅はずっと狭く感じられ、緑の小径といった雰囲気漂わせている。主婦の立ち話や子供の遊びの空間として使われている。人々は昼下がり、仕事から帰り一寝入りした後、一斉に戸外に出、庭や街路の掃除を始める。その後、テラスなど戸外での休憩や話らいに時間を過ごすのである。このように、緑濃い濃密な近隣空間が形成された理由のひとつに、街路のスケール、また、住戸が道を挟んで向い合わせになっていることがある。

この街路がコミュニティのためのオープンスペースとしての機能を担っていることは、入口にゲート、夜警小屋、ベンチ、看板などが設けられていることから知るこ

とができる。

(2) 共用空間

各戸のクラスターの両側には空地が設けられている。その利用は、住民にまかされており、住宅が増築されている場合もあるが、その場合店舗として使われていることが多い。その他、共用の井戸が掘られていたり、ゴミ収集の場、遊戯の空間や夜警小屋があったりと、コミュニティのための利用がなされている。

(3) 設備の共同利用

共同の井戸について触れたように、水道の状態があまりよくないために、主な水源として井戸が掘られ利用されている。このような共同のもの以外に、住宅の境界に掘り、共同で使用されている場合がかなりみられる。また、個人で掘った井戸を、近所の人に開放していることもよくある。私的空間の中に半公共的な性格のものが入りこんでいるのである。

- 3 土地利用の混合化

(1) 小店舗の発生

住宅地のサイトプランをみると、中央部にショッピングセンター用にあてられた部分がある。施設自体は、財政上の関係で、段階的供給がなされることになり、後日建設されることになっているが、店舗用の建物は一部完成している。周辺は田園地帯であり、商業施設としては少し離れたところに旧来のマーケットがあるだけである。したがって、当初入居が始まった頃は、商業施設がほとんどないまま、住宅だけが埋まっていったわけだが、入居開始7年後には実に多くの小店舗が自然発生している(図5-3-2)。してみると、最初から住宅以外の用途が認められていたと推察されるのであるが、そのほとんどは、住宅の一部を改造した簡単な小売り店舗である。

このような小売り店舗はワルンと呼ばれ、常設の店構えの立派な商店トコとは区別されている。扱われている品物は、日曜雑貨および食料品であり、品数はある程度揃っている場合もあるが、極めて零細である。2軒のワルンが近接している場合でも、品物にはほとんど変化がないことが多い。

ほとんどの場合顧客は近所の人に限られ、聞けば、通りを隔てて買いに来る人はいないという答えが返ってくるほど範囲は一定している。商売のあり方は掛売りで、給料日の一括払いに応じるという形で、貸借の論理に近い。人間関係によって維持されているのである。専門に店を経営しているのではなく、主人の仕事とは別に主婦や老人が副業として経営している場合がほとんどである。店を開いた理由を聞いてみると

表 5 - 3 - 1 住宅前面の増改築

タイプ	戸数	%	
原形	91	7.9	
生垣	338	29.5	46.1
フェンス	191	16.6	
テラス(屋根なし)	170	14.8	31.0
テラス(屋根あり)	186	16.2	
建物化	120	10.5	
その他	16	1.4	
不明	36	3.1	
計	1148	100.0	

表 5 - 3 - 2 移動商の実態

時刻	種類	人数
6:30-12:00	野菜	3
	鶏肉	3
	鶏卵	5
16:00-17:00	牛乳	2
	バクソ(ラーメン)	7(午後) 2(夜間)
	チキン・サテ(焼き鳥)	3
11:00-15:00	エスチャンプール(氷菓)	3
	氷	5
14:00-17:00 (夜間)	庭木・鉢	(2日に1回) 3
	バクミ・コビャク(食料品)	2
6:30- 9:00 16:00-17:00	米がゆ	1
8:00-10:00 2:00- 4:00	ケロシン、ガソリン	1
14:00-18:00	掃除用具	2
13:00-16:00	靴修理	2
	ミシン修理	1
	傘修理	1
14:00-17:00	バナナ、パイヤ	2
6:30-13:00	ナシ、グドック(食料品)	3

やはり金がほしいというのが一番多いが、暇だからとか、あるいは、近所の人のためという回答もあった。

これ以外にラジオ修理など各種のワークショップ、食堂、歯医者といった職種もある。このように多くの、小売り店舗が生まれている反面、先に述べたショッピングセンターの店舗の経営はあまりうまくいっていないという。商業施設のあり方を考えるうえで示唆的である。

(2) 移動商

日用品を中心とするよろず屋的な店舗が多数存在するだけでなく、移動しながら商いを営む移動商の活動も活発である(表5-3-1)。その種類はバラエティに富んでおり、同一の種類でも複数が競合している。移動商の数は全体としてかなりになる。同じ人間が1日に何回も回ってくることもある。ひとつの場所を通過する時刻はほぼ決まっており、通常無休であることもあって、その働きは常設店舗と同様の性格をもっているといえる。

住宅地の形成を契機として多くの移動商が活躍するようになったのである。その結果、カンブンに関して報告されているのと同様の「高度サービス社会」が現出している(注7)。

サイトプランをみると、近代的なコンセプトにもとづき計画されたことがよくわかる。規模の点を別にすれば、わが国においてみることのできるありふれたニュータウンのプランと区別をつけ難い。しかし、きちんとゾーニングされ、制御されたわが国の場合とは異なり機能混合の度合いは高い。これは、複数の職業をもつ伝統、あるいは、小売りではなく行商が商業の伝統としてあったことなどに関係するものと考えられる。いずれにせよ、住宅地としての成熟を示すとみてよさそうである。

- 3 居住環境評価

以上、居住地としての成熟の過程をみてきたが、住民が全体としてどのような意識をもっているかについてみてみよう。

定住意向をみると65%の人が定住の意向をもつ反面、住みかえ意向をもつ人も30%いることがわかる。住み続けたくない何らかの理由があるわけだが、それを居住環境評価の結果から推察すると、住宅、とりわけ広さと設備、および公共のオープンスペース、緑のゆたかさといった物的環境に対して不満が大きいことが読みとれる。緑のゆたかさについては、十分に緑がある印象なのだが、先に述べたように、過密状態に対する裏返しとして緑への希求がみられるのであろう。

全体として満足度が高いとはいえない結果となっているが、不満があるということは、それだけ環境改善に対する意向があることになる。現実には65%の人が住み続ける意思をもっている以上、それは何らかの形で環境の改善を志向する行動となる可能性をもっている。その結果が自らの手による積極的生活空間の形成の行動として現われたということであろう。

－ 4 その他の課題

以上、インドネシアの公的機関によって開発された住宅地を事例として、主として住民による生活空間形成の実態を報告してきた。こうした形式の住宅地開発は、財政的な制約、それ以外に多くの複雑な要因が絡みあっており、困難な問題を抱えた事業である。それは、ここでとりあげた住宅地についても例外ではない。それを整理しておこう。

(1) 増改築にともなう問題

住宅の増改築が環境形成に寄与する面は大きいと考えられる。それは物的側面にとどまらず、個人およびコミュニティレベルでの、環境形成に対する意識の問題としても重要である。この点については積極的な評価がなされるべきであろう。

反面、それによって形成される環境の質という問題を考えたとき、一定の限界が感じられるのもまた事実である(注8)。たとえば、住宅そのものについて考えてみると、増改築は理想とする住宅デザインとは別の次元で行なわれているのであって、現状での必要性の充足というレベルを出るものではない。住宅内部の仕上りは仮設的な雰囲気であり、台所など設備についても貧弱である。つまり、現在みられるような増改築は、住宅の質に対する要求水準の低さを前提として成立しているのである。特殊解ではなく、どれだけ一般性をもつ住宅ストックになりうるかは疑問である。

これには、敷地規模が小さく、増改築に限界があることも原因の1つになっていると考えられる。増改築による建てづまりは環境悪化につながる可能性もある。将来の変化へに対応できないことも問題である。

さらに、増改築のコントロールという問題もある。側溝の上にまで増築が及んでいることもあった。街路を庭として扱う傾向もみられる。

(2) 商業施設立地にともなう問題

小売り店舗や移動商は少ないモノと金を網細血管のように隔ずみまで回す仕掛けであり、こうした住宅地は欧米の住宅地の概念とはまた異なった住宅地像を提出する。それはむしろわが国がかつてもっていた文脈を親近性をもっている。とすれば、わが

国が抱えてきた混合性の高い市街地と同種の問題も起こりうるだろう。たとえば、職種によっては住宅地の環境を阻害する可能性もある。

また、こうした形での商業施設の立地は周辺に対してまったくインパクトをもちえない自己充足的な性格のもので、その限りにおいて住宅地としての成熟の指標とはなりうるが、より大きな地域的広がりの中で商業施設を考える際には、別の論理が必要である。

住民による環境形成を今後の住宅地開発及び都市整備に役立てるためには、それを適当に制御・誘導することが積極的に考えられてよい。そのための施策を住宅地計画の手法として確立すべきである。

問題があるとはいえ、やはり、今後とも公的機関による住宅開発は継続されていくに違いない。とすれば、それを都市整備の中に有効に位置づけることが必要になるであろう。

5-4 要約

第Ⅰ部および第Ⅱ部では、生活空間の存在様式の物的側面について、その現状と系譜について論じてきた。第Ⅲ部では、それを受けつつ、人びとの内的構造としての伝統に光をあてると同時に、生活空間の伝統が今後どのように継承されていくかについて考察することをねらいとして設定した。具体的には、生活空間の伝統の維持継承主体である人びとが生活空間およびその伝統に対してもつ志向や意識の考察を通じて、生活空間およびその伝統にどのような論理がはたらいているかを探ることを試みた。

この一連の作業における本章の役割は、住居および居住環境に対する人びとの志向を考察することであった。まず、主として住宅写真の選好調査などの方法を用いて、住宅デザインに対する志向を、次に、理想の居住環境についてのアンケート調査によって、居住環境に対する志向を、最後に、新興住宅団地における居住者による居住環境形成についての事例研究にもとづき、住宅および住宅地に対する要求をあきらかにした。その結果の概要は次の通りである。

中部ジャワ住民にとっての住宅の規範は、オランダ系コロニアルスタイルおよび近代的デザインに求められると考えられる。ジャワ伝統的デザインへの志向は特に高くないが、逆に住宅様式に対するこだわりはこのタイプを選好する人に多い。それは、公共建築にジョグロが多用されることと関連するものと考えられる。

デザイン志向は以上の傾向を示すものの、具体的な住空間構成への志向となると、平屋志向など伝統への傾倒も強く、実際の増改築行動は、これらを折衷したかたちで

進められていると考えられる。

コロニアル系のデザインに対する志向が強い点には、植民地期から現在に至るまで類型1の市街地が高級住宅地として位置づけられてきたことによる影響をみる事ができるが、全般に様式に対するこだわりはあまり感じられず、むしろ、庭や広さなど機能的要因が支配的であった。

理想の居住環境についての結果は、全体的傾向では、①近隣の物的環境に対する関心が最も高く、次に②抽象性の高い形容詞表現による回答、続いて、③社会・経済的環境、④住宅に対する関心の順である。前二者で全体の4分の3を占めている。各項目についての内訳は次の通りである。

①近隣の物的環境

衛生、静かさ、安全性、オープンスペース、施設

②形容詞表現

平穏性、快適性、質感

③社会・経済的環境

コミュニティ、セキュリティ、経済、住民

④住宅

構造、庭、規模、形態

以上から判断すると、居住環境に対する志向は、主として近隣における物的環境に重心がおかれており、実際の生活における問題点の反映とみることができる。また、第I部で指摘したように、社会環境に対する関心にも強いものがある。

新興住宅団地における住宅の増改築は、個室、台所・食堂などの機能的空間から客間、居間などのゆとりの空間へと向かう傾向にあることがわかった。しかし、ほとんどの住宅で外部空間に対する改変が行なわれており、住宅のファサードデザインの個性化が意識されている。こうしたファサードや玄関に対する関心の強さに、1つの社会的文化的要因の存在が感じとれる。

また、過密による圧迫感を緩和するためか植栽が盛んになされているが、こうした環境の改変は公共空間にまでおよんでいる。井戸の共同利用のあり方、あるいは、敷地境界の曖昧さなど、公私の概念が必ずしも明快ではない。こうした点、また、小店舗が多く設置され土地利用の機能的混合化がみられることなどは、キャンピングなどの共通性が高い現象であり一定の文化的要因と考えてよいだろう。

本章では、以上にみるように、生活空間を構成する住居やその周辺の居住環境などに対する人びとの意識は、必ずしも伝統対近代といった単純な図式によって把握でき

るものではなく、社会的文化的に伝統的生活空間の存在様式に拘束されながら、生活を営んでいく上での利便性や快適性に基礎をおくものであることを指摘した。

補注

- (1) たとえば、平井聖『図説日本住宅の歴史』学芸出版社、1986
- (2) SURYANTO et.al.: KOTAGEDE - A TRADITIONAL SETTLEMENT, Unpublished Paper, Yogyakarta, 1987, pp. 62-63
- (3) たとえば、コバンによる16世紀バンタムについての記述をみると、王宮を含めたほとんどすべての建物が木造、椰子の葉葺きであったことがわかる。
(COBBAN, J.L.: THE CITY ON JAVA; AN ESSAY IN HISTORICAL GEOGRAPHY, Ann Arbor, 1970, P. 50)
- (4) かつてコタグデでは、マタラム創始者の墓地周辺では、墓所が見渡せる高さの建物は禁止されていた。(MITUO NAKAMURA : THE CRESCENT ARISES OVER THE BANYAN TREE, Yogyakarta, 1983, p. 33)
- (5) インドネシア語で暑い、冷たいという言葉は第一義は気温上の寒暑の表現であるが、慣習上の用語として、暑いとは異常な危うい状態のことであり、人びとにはこうした状態を避け、平常な状態、つまり冷たい状態をつねに保とうとする行動様式がみられるとされる。たとえば、倉田勇「民族と言語」綾部恒雄他編『もっと知りたいインドネシア』弘文堂、1982、pp. 73-104: p. 95
- (6) たとえば、内堀基光「宗教と世界観」綾部恒雄他編、前掲書、pp. 105-140: pp. 118-131
- (7) 布野修司他「インドネシアのカンプンの実態とその変容過程の考察－第三世界の居住環境とその整備手法に関する研究(その2)－」日本都市計画学会学術研究論文集、1985、pp. 307-311 : pp. 309-310
- (8) 森本信明は、インドネシアの居住者主導のハウジングについて、相対的住宅の質の低さを前提として成立する過渡的状況と考えるべきという見解を示している。(森本信明「インドネシアにおける居住者主導のハウジング」巽和夫編『現代ハウジング論』学芸出版社、1986、pp. 211-229)

第6章 生活空間の伝統に対する意識

6-0 目的と構成

本章は、生活空間の伝統に対する人びとの意識を考察することを目的としている。本章の重要なモチーフとなるのは歴史的環境であり、それを受けて本章の構成は次のようになる。

まず、第1節では、歴史的環境に対する人びとの意識を景観的側面からとらえることを試みる。具体的には、スライド実験の結果にもとづき、歴史的市街地の景観に対する人びとの意識を把握する。

次に、第2節では、都市のイメージに対するアンケート調査の結果にもとづき、都市に対して人びとが抱いている歴史的イメージを考察する。

最後に、第3節では歴史的環境に対する人びとの意識を考察する。具体的には、まず、インドネシアにおける歴史的環境の保全の状況を概観した後、歴史的環境に対する意見についてのアンケート調査にもとづき、人びとの意識を把握する。

次に、歴史的価値をもつと思われる物的および非物的要素に対する嗜好調査にもとづき、人びとのライフスタイルへの志向を考察する。

6-1 市街地景観に対する認識構造

0 緒言

(1) 視点

ここで、市街地景観に対する認識構造を扱うねらいはおおむね次の通りである。まず、1点目は、市街地のイメージ構造そのものに対する関心である。中でも、第I部で取りあげた市街地類型が人びとにどのように認識されているかは、第2章ではあきらかにしえなかった点であり、市街地景観に対する認識構造の分析を通じてこの問題にアプローチすることが可能と考えられた。

2点目は、生活空間の伝統についての議論を展開する上で、現実の生活空間と伝統性の関係について理解を深める必要があったことである。

3点目は、主として方法論上の興味である。インドネシアにおける建築および都市研究分野では、景観研究および空間意識研究は比較的蓄積が少なく、未開拓といつてよいと思われる。したがって、方法などの点で未知のことが多く、その意味でも、こうした研究を行なうことの意義が大きいと考えられた。

以上から、本節では、比較的歴史の古い市街地を対象に、まず景観認識構造を考察し、その上で特に上記の諸点について分析、検討を試みる。

(2) 研究方法

1) 調査の内容と方法

調査はあらかじめ用意したスライドを被験者に見せ、形容詞対からなる評定尺度を用いてその反応を計量するSD法を採用した。その理由は、比較的頻繁に使用され一定の研究成果が得られており、手法としての安定性および信頼性が高いと考えられたことによる。

形容詞対の選択に当たっては、ジョクジャカルタ出身のジャワ人であるガジャマダ大学工学部建築学科講師の協力により30対を採用した。その際、研究方法についての解説書(注1)を参考にし、また、ガジャマダ大スタッフとSD法および因子分析法など調査手法についての打合せを念入りに行ない、調査意図の正確な伝達に努めた。

最終的には、上記の手続きを通してえられた30対の形容詞に「良い-悪い」「好き-嫌い」の2つを加えた32対の評価尺度を用意し、7段階で評価させている(表6-0-1)。

2) 被験者

被験者としたのは、ガジャマダ大建築学科の学生46人であり、その大部分は3年生(平均年齢21歳程度)である。当初予備調査を含めた複数の調査を実施し、男女差および年齢差を検討する予定であったが、調査日程の都合により1回限りとなった。

3) 対象空間

対象空間として選択したのは、第2章でとりあげた5つの類型別市街地およびキャンパス、集合住宅、近代的住宅地など8種類の居住地群に、近代的街並みおよび歴史的街並みを加えたものである(図6-1-1)。

また、使用したスライドのアンクルはできるだけ共通したものを使うことを試みたが、なかには少し異質のものが混じっている。居住地群については、できるだけ道路を中央におき、比較的近い距離から撮影したものをを用いたが、集合住宅では異なっている。それ以外のスライドについては、中景から遠景のものをを用いた。

- 1 因子分析による景観イメージ

(1) 因子の抽出

評定実験によって得られたデータの尺度ごとの平均のプロフィールによる検討を経て(表6-1-1および図6-1-2)、最終的に選り出した26対の尺度についての全スライドのデータを対象とする因子分析を行ない因子軸の抽出を行なった(表6-1-2)。ここで、全スライドを対象としたのは、居住地系だけでなく景観イメージに

表 6 - 0 - 1 形容詞対

1. clean(bersih)	unclean(kotor)
2. untidy(tidak teratur/acak-acakan)	tidy(teratur)
3. being cared(terpelihara)	being left(terlancar)
4. natural(alami)	not natural(non-alami)
5. fertile(gersang-terik)	barren(rimbun/teduh)
6. wide(luas)	narrow(sempit)
7. noisy(ramai/berisik)	silent(tenang)
8. modern(modern)	traditional(tradisional)
9. exclusive(megah)	simple(sederhana)
10. unhealthy(tidak sehat)	healthy(sehat)
11. intimate(akrab)	indiffernt(tidak akrab)
12. old(lama/kuno)	new(baru)
13. being proud(membanggakan)	being ashamed(memalukan)
14. discouraging(tidak menggairahkan)	stimulating(menggairahkan)
15. unique(unik)	usual/common(biasa)
16. clear(jelas)	vague(membingungkan)
17. safe(aman)	dangerous(tidak aman)
18. poor(miskin)	rich(kaya)
19. inadequate(tidak pantas)	adequate(pantas)
20. trendy(mengikuti zaman)	old-fashioned(ketinggalan zaman)
21. fragrant(harum)	nasty-smelling(busuk)
22. bad(jelek)	good(bagus)
23. attractive(menarik)	tedius(tidak menarik)
24. strong(kokoh/kuat)	weak(ringkih/lemah)
25. irritating(menggelisahkan)	relaxing(menentramkan)
26. closed(tertutup)	open(terbuka)
27. useful(berguna)	useless(tidak berguna)
28. uncomfortable(tidak nyaman)	comfortable(nyaman)
29. democratic(merakyat)	not democratic(tidak merakyat)
30. pleasant(senang)	unpleasant(benci)
31. beautiful(indah)	not beautiful(tidak indah)
32. likable(suka)	not likable(tidak suka)

スライド種別 コタグデ



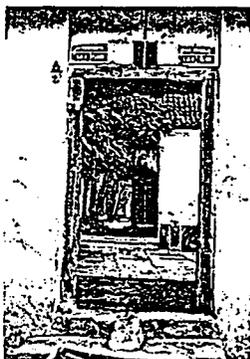
スライド1 KOTAGEDE1



スライド2 KOTAGEDE2



スライド3 KOTAGEDE3



スライド4 KOTAGEDE4



スライド5

KOTAGEDE5

図6-1-1 対象景観

スライド種別 プチナン



スライド 6 MALIOBORO



スライド 7 PECINAN1



スライド 8 PECINAN2



スライド 9 BANDUNG



スライド 10 JAKARTA

スライド種別 カウマン



スライド11 KAUMAN1



スライド12

KAUMAN2



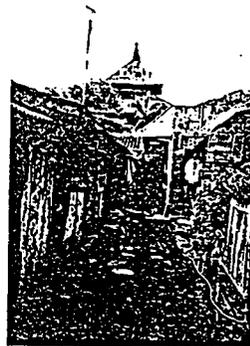
スライド13

KAUMAN3



スライド14

KAUMAN4



スライド15 KAUMAN5

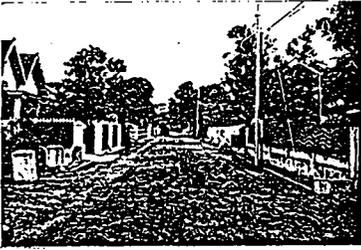
スライド種別 コタバル



スライド16 KOTABARU1



スライド17 KOTABARU2



スライド18 KOTABARU3



スライド19 KOTABARU4

スライド種別 ダレム



スライド20 DALEM

スライド種別 カンブン



スライド21

KAMPUNG1



スライド22

KAMPUNG2

スライド種別 モダン



スライド23

MODERN



スライド24

REAL ESTATE

スライド種別 フラット

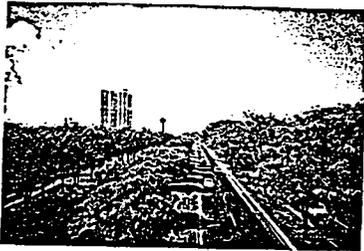


スライド25 FLAT1

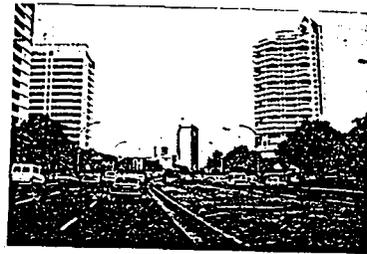


スライド26 FLAT2

スライド種別 街路景観（近代的ビル）



スライド27 JAKARTA1



スライド28 JAKARTA2

スライド種別 街路景観（歴史的建物）



スライド29 CIREBON KOTA



スライド30 JAKARTA KOTA

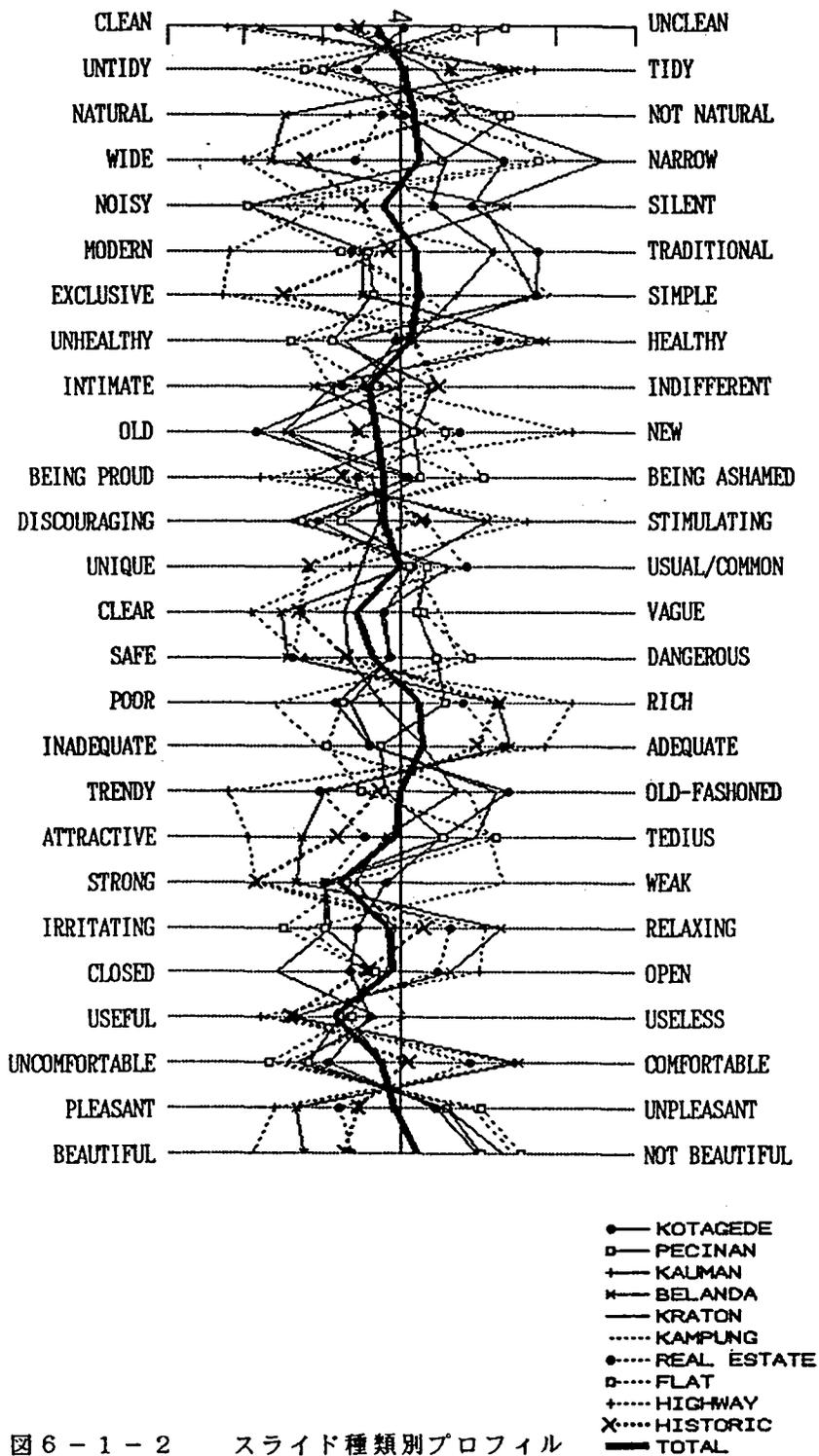


図 6 - 1 - 2 スライド種類別プロフィール

表 6 - 1 - 1 各形容詞対の平均

	KOTABEDE	PECINAH	KAUHAW	BELANDA	KRATON	KAMPUNG	REAL ESTATE	FLAT	HIGHWAY	HISTORIC	TOTAL
UNCLEAN	4.057 1.834	4.729 1.584	3.438 1.593	2.183 0.982	3.229 1.357	5.312 1.694	3.208 1.273	5.354 1.205	1.774 0.610	3.448 2.097	3.700 1.848
TIDY	3.450 1.764	3.000 1.521	4.101 1.664	5.468 1.230	4.417 1.555	2.085 1.179	5.309 1.320	2.777 1.408	5.723 1.339	4.656 1.666	4.022 1.863
BEING LEFT	4.182 1.788	4.335 1.522	3.638 1.558	2.339 1.048	3.479 1.353	4.968 1.668	2.916 1.191	4.781 1.378	1.915 0.785	2.726 1.410	3.592 1.711
NOT NATURAL	4.042 1.551	5.403 1.265	3.942 1.491	2.516 1.216	4.917 1.252	4.474 1.669	3.760 1.328	5.201 1.434	3.344 1.919	4.642 1.591	4.168 1.718
FERTILE	3.823 1.514	2.475 1.176	3.615 1.447	5.500 1.276	3.125 1.479	3.063 1.479	3.708 1.436	2.723 1.256	5.021 1.786	2.468 1.309	3.618 1.730
NARROW	5.319 1.276	4.542 1.700	4.577 1.537	2.326 0.727	6.596 0.577	6.075 0.908	3.422 1.419	5.758 1.889	1.989 0.699	2.758 1.366	4.236 1.863
SILENT	4.922 1.511	2.021 1.096	4.396 1.448	5.367 1.072	5.063 1.549	2.426 1.372	4.430 1.450	2.021 0.789	3.000 1.720	3.490 1.635	3.766 1.849
TRADITIONAL	5.754 0.916	3.577 1.369	5.210 1.090	3.505 1.290	5.417 0.895	5.104 1.205	3.365 1.144	3.229 1.128	1.009 0.723	3.033 1.581	4.175 1.626
SIMPLE	5.737 1.129	3.651 1.296	4.719 1.581	3.513 1.387	5.717 0.750	5.946 1.046	4.250 1.414	4.229 1.469	1.710 0.701	2.468 0.912	4.199 1.741
HEALTHY	3.922 1.608	3.135 1.411	4.148 1.496	5.058 0.566	3.292 1.473	2.763 1.625	5.247 1.029	2.585 1.213	5.596 1.091	4.135 1.763	4.111 1.727
INDIFFERENT	3.537 1.502	4.429 1.526	3.152 1.309	2.800 1.358	4.008 1.810	3.146 1.669	3.260 1.292	3.699 1.630	3.771 1.720	4.484 1.436	3.595 1.595
NEW	2.149 0.731	4.167 1.525	2.390 0.955	4.292 1.432	2.544 0.657	3.432 1.366	4.768 1.229	4.583 1.427	6.194 0.680	3.430 1.764	3.672 1.679
ASHAMED	4.090 1.332	4.259 1.293	3.622 1.203	2.847 0.944	4.188 1.214	4.063 1.575	3.458 0.905	5.043 1.177	2.194 1.076	3.234 1.195	3.761 1.435
STIMULATING	2.932 1.297	3.226 1.464	3.732 1.379	5.111 1.232	2.563 1.030	2.947 1.678	4.333 1.262	2.716 1.294	5.635 1.249	4.266 1.438	3.770 1.638
COMMON	4.156 1.730	4.350 1.541	3.498 1.707	4.009 1.581	4.646 1.604	4.179 1.085	4.063 1.270	4.125 1.517	3.354 1.869	2.021 1.444	3.987 1.784
VAGUE	3.796 1.650	4.217 1.707	3.279 1.443	2.465 0.888	3.750 1.564	4.516 1.798	2.716 1.108	4.313 1.682	2.075 0.964	2.685 1.257	3.417 1.642
DANGEROUS	3.053 1.576	4.464 1.525	3.599 1.434	2.553 0.957	3.054 1.624	4.746 1.837	2.621 0.991	4.096 1.349	2.701 1.401	3.277 1.363	3.627 1.619
RICH	3.174 1.176	4.592 1.117	3.757 1.209	5.245 0.860	3.362 0.942	2.358 1.202	4.821 1.021	3.250 1.273	6.190 0.803	5.255 1.102	4.223 1.503
ADEQUATE	3.609 1.479	3.754 1.542	4.300 1.435	5.423 0.979	3.630 1.169	2.948 1.663	5.316 0.902	3.053 1.403	5.635 1.126	4.266 1.351	3.770 1.631
OLD -FASHIONED	5.400 0.969	3.791 1.417	4.711 1.305	3.016 1.166	5.229 0.831	4.075 1.537	2.958 1.056	3.500 1.197	1.783 0.708	3.692 1.474	3.972 1.590
NASTY -SMELLING	4.297 0.992	4.450 1.009	3.920 1.030	2.974 0.992	4.292 0.824	5.170 1.309	3.421 0.952	4.771 0.989	2.760 1.131	4.043 1.406	3.985 1.268
GOOD	3.476 1.303	3.517 1.307	4.084 1.412	5.337 0.967	3.167 1.117	2.745 1.436	4.833 1.121	2.938 1.200	5.062 1.064	4.062 1.411	4.094 1.587
TEDIOUS	4.524 1.667	4.563 1.584	3.706 1.612	2.737 1.219	4.979 1.400	5.137 1.673	3.531 1.222	5.240 1.242	2.043 1.026	3.168 1.463	3.934 1.749
WEAK	3.022 1.744	3.030 1.274	3.416 1.612	2.667 0.899	3.021 1.200	5.330 1.363	3.053 0.955	3.302 1.362	2.117 1.066	2.138 0.863	3.211 1.528
RELAXING	3.447 1.331	3.025 1.263	3.937 1.417	5.295 1.130	3.104 1.259	2.779 1.423	4.663 1.154	2.495 1.009	5.004 1.326	4.305 1.297	3.845 1.564
OPEN	3.359 1.569	3.675 1.632	3.629 1.523	4.644 1.651	2.413 1.292	3.594 1.696	4.390 1.346	3.583 1.587	5.021 1.699	3.560 1.724	3.000 1.688
USELESS	3.607 1.102	3.209 1.233	3.301 1.220	2.624 1.107	3.689 1.240	4.105 1.771	2.617 0.869	3.303 1.409	2.194 1.076	2.575 0.923	3.139 1.314
COMFORTABLE	3.079 1.560	2.819 1.392	3.790 1.499	5.540 0.923	2.601 1.270	2.479 1.429	4.895 1.276	2.319 1.147	5.463 1.343	4.094 1.543	3.746 1.759
NOT DEMOCRATIC	3.266 1.574	4.225 1.579	3.000 1.425	3.372 1.374	3.625 1.606	2.563 1.360	3.125 1.363	2.906 1.452	4.563 1.703	4.000 1.419	3.533 1.618
UNPLEASANT	4.458 1.345	4.600 1.400	3.086 1.399	2.651 0.976	4.604 1.410	4.927 1.474	3.209 1.005	5.053 1.291	2.360 1.111	3.448 1.254	3.916 1.550
NOT BEAUTIFUL	5.005 1.401	5.040 1.476	4.177 1.519	2.763 1.075	5.333 1.326	5.453 1.335	3.385 1.182	5.564 1.300	2.106 0.944	3.253 1.473	4.211 1.728
NOT LIKABLE	4.916 1.452	4.954 1.568	4.160 1.504	2.707 1.132	5.229 1.372	5.330 1.303	3.458 1.264	5.409 1.364	2.190 1.043	3.573 1.435	4.185 1.728

※上段は平均、下段は標準偏差

関与する幅広い因子を抽出することをねらいとしたことによる。

その結果4つの因子が抽出された。寄与率の合計は59.6%であり、今回の形容詞対では把握しえなかった因子の存在を示していると考えられるが、各スライドのイメージの過半は説明しうる。

第1因子は、18の尺度からなり寄与率も43.5%と大きいことから、景観に対する総合的な因子であると考えられる。そのうち因子負荷量の大きい方から2項目は<不健康な-健康な><清潔な-不潔な>であり、「健全性のなさ」をあらわすものと考えられる。「健全性因子」と命名する。ただし、軸は負となっている。

この2つという形容詞対は、前章第2節の理想とする居住環境の条件としてもあがっており、生活空間に対する評価の基調をなすものと考えられる。

第2因子は、<近代的-伝統的><古い-新しい><今風な-古風な><複雑な-簡素な><貧しい-豊かな>の5つの尺度からなる。主として「伝統性」をあらわす因子と判断される。「伝統性因子」と命名する。軸は正の向きである。

各形容詞対の正負の向きをみると、「伝統的」「古い」「古風な」と「貧しい」が同じ方向にあり、「近代的」「新しい」「今風な」ものを「豊かな」とする価値観の存在をうかがわせる。

第3因子は、<親しみのある-よそよそしい><閉鎖的な-開放的な>の2つの尺度からなる。「疎外性」を意味する因子であると考えられる。軸を負の向きにとり、「親密性因子」と命名する。

第4因子は<めずらしい-ありふれた>からなる。「平凡さ」をあらわすものと考えられる。「平凡性因子」と命名する。軸は正の向きである。

(2) 因子得点によるスライドの類型化

次に、各スライドの因子得点によって、スライドの類型化を行なった(図6-1-3)。各クラスターごとの因子得点のパターン(表6-1-3および図6-1-4)から、その意味を推察する。

まず、第1クラスターは、第1因子、第3因子が低く、第2因子が高い。健全で親密性を感じさせると同時に伝統的である。該当するスライドから、ジャワの貴族的伝統をひく景観といえそうである。

第2クラスターは、第2、第3因子が高いパターンである。伝統性は高いが、やや親密性に欠ける。該当するスライドから、コタグデやクラトン・コンプレックスによく見られる路地や門の景観と判断しうる。

第3クラスターは、第3因子がやや高目で、第4因子がかなり低い。特殊でやや親

表6-1-2 因子負荷量および寄与率

形容詞対	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
UNHEALTHY-HEALTHY	-0.78894	-0.13403	-0.19781	-0.04908	0.60412
CLEAN-UNCLEAN	0.74894	0.10412	0.14469	0.10697	0.58589
UNTIDY-TIDY	-0.73708	-0.15866	-0.11051	-0.07221	0.36346
IRRITATING-RELAXING	-0.73210	-0.15237	-0.32312	-0.19709	0.53333
INADEQUATE-ADEQUATE	-0.70632	-0.30460	-0.21280	-0.25564	0.53504
UNCOMFORTABLE-COMFORTABLE	-0.69882	-0.22531	-0.42221	-0.17737	0.75694
PROUD-ASHAMED	0.69593	0.20979	0.22104	0.36133	0.69755
SAFE-DANGEROUS	0.68664	0.04986	0.19271	0.18596	0.68194
BEAUTIFUL-NOT BEAUTIFUL	0.67113	0.25831	0.34059	0.36133	0.34781
ATTRACTIVE-TEDIOUS	0.61777	0.23070	0.32107	0.45818	0.69821
PLEASANT-UNPLEASANT	0.61294	0.21712	0.44669	0.30061	0.70774
NOISY-SILENT	-0.58524	0.40197	-0.12757	0.12118	0.64040
DISCOURAGING-STIMULATING	-0.58001	-0.28738	-0.36916	-0.29176	0.29002
CLEAR-VAGUE	0.57241	0.18834	0.18285	0.21557	0.44303
WIDE-NARROW	0.56982	0.36135	0.24047	0.14224	0.54567
STRONG-WEAK	0.49630	0.39273	-0.18877	0.31676	0.72676
USEFUL-USELESS	0.45453	0.35381	0.11812	0.17455	0.70231
NATURAL-NOT NATURAL	0.43949	-0.13045	0.39117	-0.01671	0.70469
MODERN-TRADITIONAL	0.05504	0.86655	0.02083	-0.05061	0.74788
OLD-NEW	-0.02434	-0.81529	-0.10819	0.14562	0.53652
TRENDY-OLD FASHIONED	0.27078	0.77732	0.16044	0.03738	0.70244
EXCLUSIVE-SIMPLE	0.28052	0.67580	-0.15236	0.37274	0.35019
POOR-RICH	-0.55395	-0.60749	0.05921	-0.21760	0.37620
INTIMATE-INDIFFERENT	0.20831	-0.12651	0.53315	0.06448	0.74884
CLOSED-OPEN	-0.22616	-0.24081	-0.49057	-0.02005	0.71274
UNIQUE-COMMON	0.15385	-0.07254	0.05958	0.50748	0.76370
固有値	11.31414	2.79403	0.83452	0.56072	
寄与率(%)	43.5	10.7	3.2	2.2	
累積寄与率(%)	43.5	54.3	57.5	59.6	

表6-1-3 クラスター別因子得点

クラスター ナンバー	実数	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1	5	-0.434	0.627	0.743	0.563	-0.265	0.707	-0.086	0.722
2	3	-0.126	0.653	0.940	0.391	0.669	0.756	0.187	0.782
3	4	-0.200	0.649	0.045	0.718	0.531	0.729	-0.906	0.754
4	4	-0.764	0.504	-0.218	0.583	-0.553	0.676	0.340	0.599
5	3	-0.975	0.318	-0.947	0.605	-0.489	0.676	0.249	0.691
6	1	-0.470	0.326	-1.781	0.291	-0.015	0.717	-0.603	0.510
7	4	1.127	0.532	-0.544	0.637	0.367	0.656	0.250	0.627
8	2	0.489	0.503	-1.116	0.631	0.328	0.712	-0.193	0.649
9	3	0.749	0.608	0.690	0.595	-0.290	0.553	0.464	0.642
10	1	1.929	0.479	0.790	0.549	-0.696	0.870	0.097	0.724

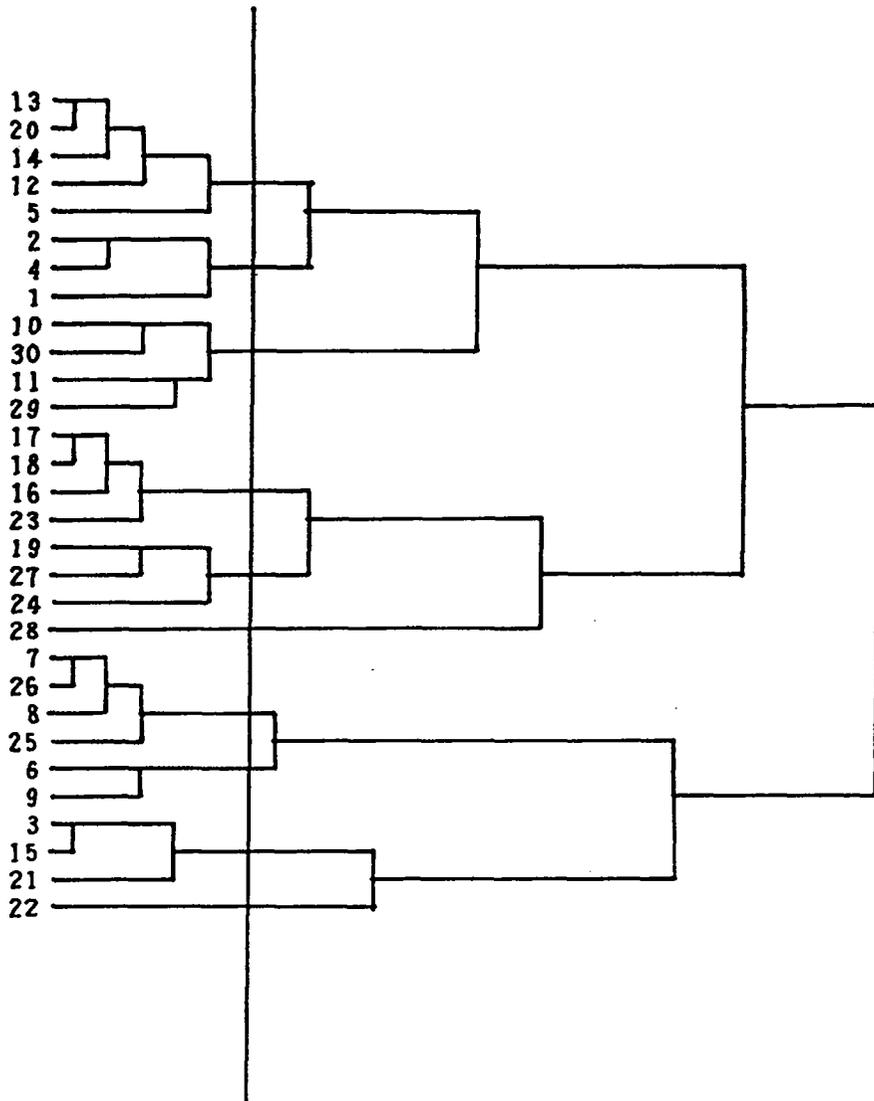


図 6 - 1 - 3 因子得点によるクラスター分析

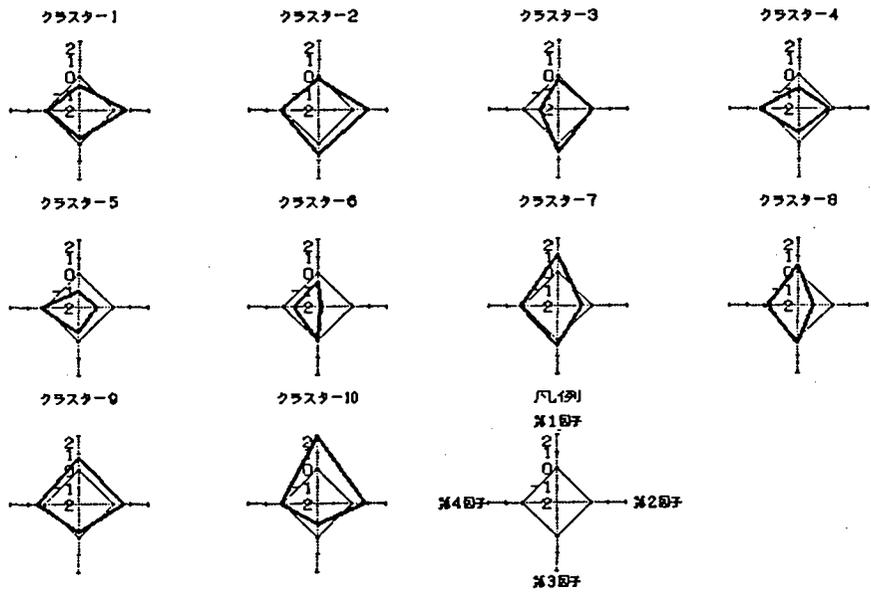


図 6 - 1 - 4 因子得点 (クラスター別)

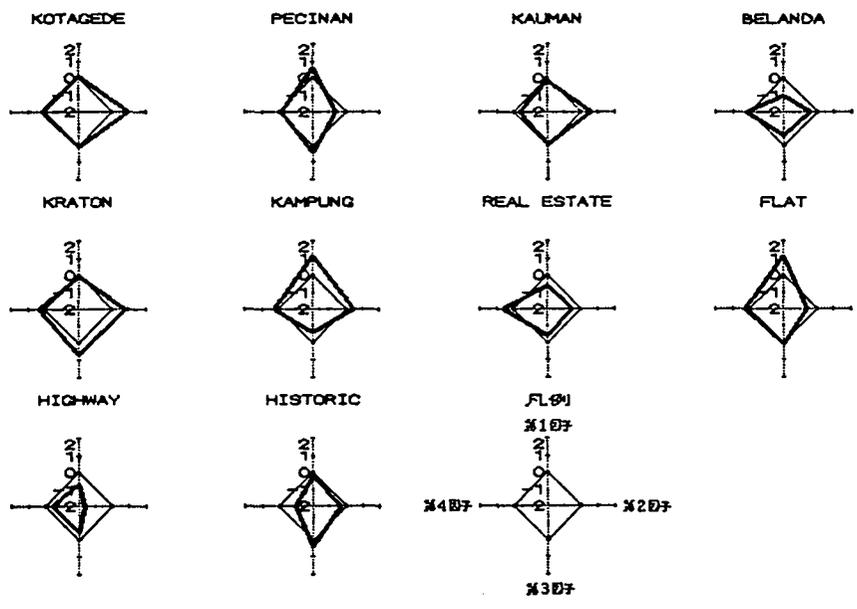


図 6 - 1 - 5 因子得点 (スライド種類別)

密性に欠ける。該当するスライドから、異質な外来の伝統を強く感じさせる景観であると考えられる。

第4クラスターは、第1、第3因子が低いパターンを示す。健全で親密なイメージをもち、該当するスライドから、旧オランダ人居住地区や近代的住宅地系の住宅地景観といえそうである。

第5クラスターは、第4クラスターとほぼ同タイプだが、第2因子が低いのが特徴である。近代的イメージがさらに強まり、スライドから近代的景観と判断できる。

第6クラスターは、第1、第4因子がやや低く、第2因子は極端に低い。スライドから判断すると、第5クラスターよりさらに近代的イメージが強い現代的景観であると考えられる。

第7クラスターは、第1因子が高く、第2因子が低い。近代的かつ健全性に欠けるものである。該当するスライドから、プチナンや低所得者向けフラットのもつ雑然とした景観であると判断される。

第8クラスターは、第2因子が低いのが特徴である。スライドから判断すると、商業地景観を示すものと考えられる。

第9クラスターは、第1、第2、第4因子がやや高い。健全性にはやや欠けるが親密性があり伝統的でもある。スライドから判断すると、カンブんに一般的に見ることのできる景観である。

第10クラスターは、第1、第2因子が高く、第3因子が低い。特に第1因子の水準は特に高い。健全性には欠けるが、親密性を感じさせる伝統的景観であることが読みとれる。第9クラスターと同じカンブンの景観であるが、単独でクラスターを構成することになったのは、このスライドだけが屋根景観で全体の中ではやや異質であったことに起因するものであろう。

以上から、第I部でふれた類型別市街地のもつイメージ構造が推察される。

旧オランダ人居住地区のイメージは良好である。これは、テラスハウス系の近代的住宅地も同様であり、この2つが同じイメージでとらえられていることを示している。こうした住宅地のイメージが旧オランダ人居住地区の延長線上にあることを意味するものと考えられる。

また、プチナンはやや疎外性をもってとらえられている。集合住宅も同様であり、この種の住宅に人気がない理由を裏づける結果となっている。

ジュロン・ベテンおよびコタグデの評価はかなり難しい。正の評価と負の評価の空

間がいり混じっているからである。その多様な顔のほんの1つの断面でしかない数枚のスライドに対するイメージから全体のイメージを論じることに無理はあるが、ジャワの伝統的経験である白壁に囲繞された街路のイメージは良好である。反面、カンブンの景観に対してはカンブンと同様であり、親しみはもたれているが、健全性にやや欠けるイメージである。

こうした点をもう少し明確にするため、スライド種類別に分析を試みる。

－2 スライド種別にみたイメージ構造

前述したようにスライドは、対象空間の種別によって全体で10グループに分類される。もちろん、用意したスライドが地区のイメージを代表するわけではなく、ここで分析はスライドに拘束されざるをえないが、1つの参考にはなる。因子分析の結果を用いて各グループのイメージについての考察を試みた。

(1) 因子得点のパターン

グループ別に上記の4因子に対応する因子得点の平均を求め、それによって各グループの景観上の特徴把握を試みた(表6-4-1および図6-1-5)。いずれのスライドも各グループの特徴的事例であり、各グループの景観の1つの側面を表わすものと考えることができる。

1) 居住地系

まず、第I部で取りあげた5類型とカンブン、近代的住宅地、フラットからなる居住地系グループ別に見ていく。

コタグデは、第2因子が平均より高く、その伝統的性格を示す結果となっている。

ブチナンは、第1因子、第3因子がやや高く、第2因子が低いパターンを示している。健全さ、親密さにおいてややマイナスのイメージがあり、また、どちらかというのと近代的イメージをもつものと考えてよいだろう。

カウマンは、コタグデとやや似ているが、第2因子が高く、第4因子が低い。伝統性と特殊性をやや示している。

旧オランダ人居住地区は、第1因子がかなり低い水準であり、健全なイメージをもっていることがわかる。その反面、第3因子の得点水準がやや低く、親密さに欠ける。伝統性を示す第2因子もやや低めであり、近代的イメージであることを示している。

ダレムは、第1因子を除きすべてが高いパターンを示す。伝統、よそよそしさ、特殊なイメージをもつと考えられる。

カンブンは、第1因子が高く、第3因子が低いパターンを示している。健全性に欠

表 6 - 1 - 4 スライド種類別因子得点

スライド種別	実数	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
KOTAGEDE	4	0.097	0.770	1.022	0.417	0.102	0.879	0.236	0.755
PECINAN	5	0.654	0.632	-0.588	0.816	0.476	0.694	-0.132	0.748
KAUMAN	5	-0.167	0.789	0.643	0.518	-0.056	0.732	-0.267	0.877
BELANDA	4	-0.988	0.345	-0.353	0.651	-0.561	0.675	0.229	0.594
KRATON	2	-0.078	0.552	0.865	0.379	0.779	0.704	0.399	0.740
KAMPUNG	2	1.134	0.864	0.476	0.613	-0.551	0.695	0.287	0.654
REAL	2	-0.537	0.534	-0.462	0.605	-0.385	0.652	0.614	0.622
FLAT	2	1.139	0.567	-0.575	0.652	0.170	0.706	0.288	0.599
HIGHWAY	2	-0.690	0.378	-1.592	0.410	-0.355	0.787	-0.389	0.557
HISTORIC	2	-0.230	0.667	-0.335	0.708	0.503	0.642	-0.932	0.686
TOTAL	30	0.033	0.930	-0.021	0.953	0.004	0.831	0.008	0.807

表 6 - 1 - 5 好き・嫌いとの相関

スライド種別	実数	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		相関 係数	有意 水準	相関 係数	有意 水準	相関 係数	有意 水準	相関 係数	有意 水準
KOTAGEDE	4	0.523	0.000	0.174	0.012	0.298	0.000	0.524	0.000
PECINAN	5	0.545	0.000	0.172	0.006	0.550	0.000	0.556	0.000
KAUMAN	5	0.633	0.000	0.159	0.012	0.364	0.000	0.542	0.000
BELANDA	4	0.344	0.000	0.258	0.000	0.546	0.000	0.405	0.000
KRATON	2	0.415	0.003	-0.130	0.209	0.580	0.000	0.558	0.000
KAMPUNG	2	0.705	0.000	0.382	0.000	0.429	0.000	0.169	0.069
REAL ESTATE	2	0.598	0.000	0.302	0.003	0.360	0.000	0.245	0.012
FLAT	2	0.475	0.000	0.070	0.266	0.455	0.000	0.444	0.000
HIGHWAY	2	0.433	0.000	0.100	0.210	0.569	0.000	0.430	0.000
HISTORICAL	2	0.582	0.000	0.139	0.111	0.360	0.001	0.414	0.000

表 6 - 1 - 6 良い・悪いとの相関

スライド種別	実数	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		相関 係数	有意 水準	相関 係数	有意 水準	相関 係数	有意 水準	相関 係数	有意 水準
KOTAGEDE	4	-0.644	0.000	-0.246	0.001	-0.021	0.393	-0.327	0.000
PECINAN	5	-0.605	0.000	-0.301	0.000	-0.407	0.000	-0.501	0.000
KAUMAN	5	-0.744	0.000	-0.226	0.001	-0.159	0.011	-0.561	0.000
BELANDA	4	-0.415	0.000	-0.448	0.000	-0.329	0.000	-0.250	0.001
KRATON	2	-0.610	0.000	-0.095	0.278	-0.425	0.003	-0.495	0.000
KAMPUNG	2	-0.806	0.000	-0.488	0.000	-0.260	0.010	-0.064	0.286
REAL ESTATE	2	-0.617	0.000	-0.293	0.003	-0.243	0.013	-0.256	0.009
FLAT	2	-0.600	0.000	-0.383	0.000	-0.035	0.377	-0.329	0.001
HIGHWAY	2	-0.146	0.121	-0.354	0.002	-0.475	0.000	-0.580	0.000
HISTORICAL	2	-0.700	0.000	-0.122	0.143	-0.148	0.099	-0.335	0.001

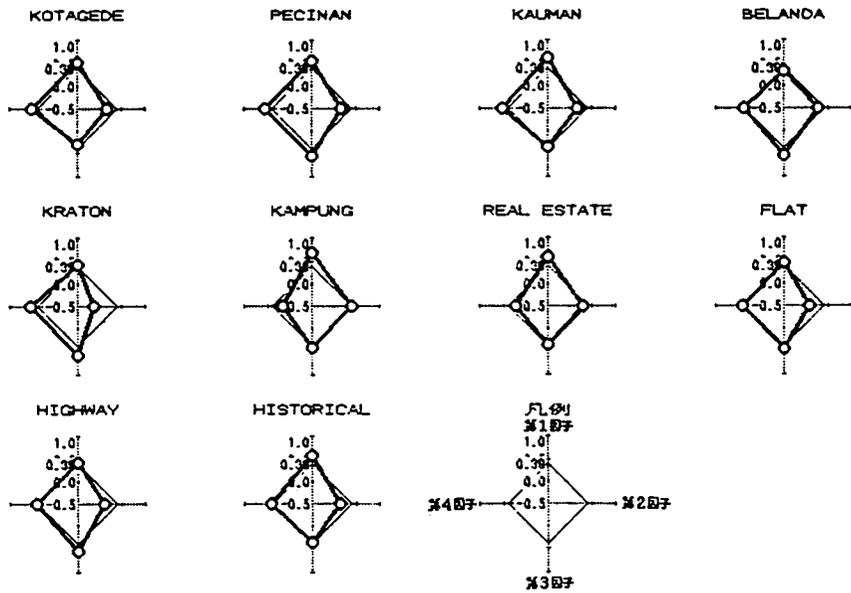


図 6 - 1 - 6 <好き-嫌い>との相関係数 (スライド種類別)

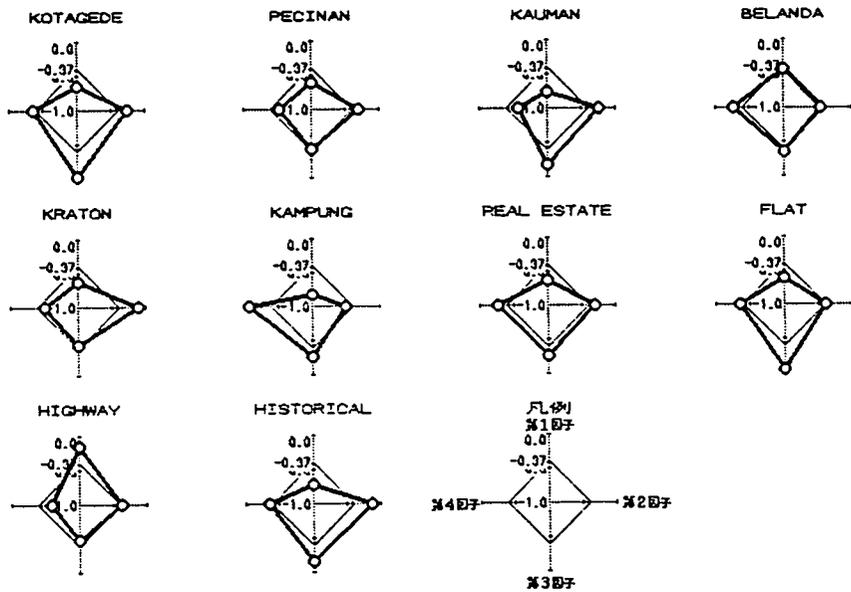


図 6 - 1 - 7 <良い-悪い>との相関係数 (スライド種類別)

けるが、親しみのあるイメージである。第2因子の水準はやや高く、伝統性を示している。

リアル・エステイトは、第4因子が高く、それ以外は低い。ややありふれてはいるが、近代かつ健全で親しみのあるイメージを示すと判断される。

フラットは、第1因子が高く、第2因子が低いパターンである。近代ではあるが、健全性に難がある。これは、ここでとりあげた2枚のスライドが、いずれも大都市の都心部に立地し、スラム的カンブンの再開発による低所得者向けのタイプであり、狭小の上にややスラム的雰囲気のものであったためと判断される。

2) 近代的街並みおよび歴史的街並み

ハイウェイ沿いの近代的街並みとコロニアル建築が並ぶ歴史的街並みを比較することを試みた。

前者は、すべての項目について得点水準が低い、中でも第2因子は極端に低い。近代的で、健全で親しみやすさもあるが、少しめずらしい景観であることを示している。

後者は、第4因子が特に低い。かなり希少性のある景観であることを示しているが、肝心の伝統性についてはむしろマイナスである。これは、ハイウェイ沿いの街並みを撮った2枚のスライドの影響が大き過ぎ全体の水準を押し下げているとも考えられるが、コロニアル建築の中にはそれほど伝統的とは感じられないケースがあることを示すものとも解釈できる。

(2) <好き-嫌い>との相関

<好き-嫌い>という評価は景観に対する総合的な評価指標であると考えられる。そこで、グループごとに各因子と<好き-嫌い>との相関を求めた(表6-1-5および図6-1-6)。ただし、相関係数は「嫌い」が正の方向となっている。

1) 居住地系

コタグデでは、第1、第3因子の相関が第3、第2因子よりも強い。健全性、平凡性との関係がやや強いことを示している。

プチナンでは、第1、第3、第4因子の相関が第2因子よりも強い。第2因子についてはビル型の近代的タイプ、古いショップハウス型の伝統的タイプを混ぜてあるため平均化されたと考えられる。どの因子との相関もほぼ同じである。

カウマンでは、第1因子の相関がやや高く、第2因子は低い。健全性との相関が強い。

旧オランダ人居住地区では、第3因子の相関が高めである。親密性との相関がかな

り高い。

ダレムでは、第3、第4因子との相関が高く、第2因子との相関が低い。伝統性との相関はほとんどないことを示している。

カンブンは第1因子との相関がきわめて高くなっている。健全性との相関が高いことを示している。

近代的住宅地では、第1因子が高い。健全性との相関が高いことを示している。

フラットでは、伝統性との相関がほとんどないことを示している。

2) 近代的街並みおよび歴史的街並み

ハイウェイ沿いの近代的街並みと、コロニアル建築が並ぶ歴史的街並みを比較してみると、前者の方が第3因子との相関が高く、疎外感が強いことを示している。

以上は、いずれも明確なパターンを欠き、各グループ別にく好み-嫌い>の評価が異なるものを含んでいたためであろう。しかし、一般にスライドの嗜好と伝統性とはあまり関係をもたないと判断される。

(3) <良い-悪い>との相関

<良い-悪い>という評価もまた景観に対する総合的な評価指標であると考えられる。インドネシア語において<良い-悪い>に相当する言葉は総合的な判断を意味することが多いからである。そこで、グループごとに各因子と<良い-悪い>との相関を求めた(表6-1-6および図6-1-7)。ただし、相関係数は「良い」が正の方向となっている。

1) 居住地系

コタグデでは、第1因子との負の相関が高く、第3因子との相関が低い。健全性との関係が深いことを示している。それに対して親密性はあまり関係がない。

プチナンでは、第1因子との負の相関が高い。この点についてはコタグデと同じパターンである。

カウマンでは、第1、4因子がやや強い負の相関をもっている。平凡性が意識されているかたちである。

旧オランダ人居住地では、いずれの因子も同程度効いている。

ダレムでは、第2因子の相関が低く、第1因子との負の相関がある。健全性との関係が強いが、伝統性との関係はあまり意識されていない。

カンブンは、第1因子との相関がきわめて強く、第4因子との相関は低い。健全性がつよく意識されていることがわかる。同時に、ありふれた存在であることを示し

ている。

近代的住宅地では、第1因子との相関が強い。健全性が意識されている。

フラットでは、第1因子との相関が高く、第3因子との相関は低い。健全性が効いていることがわかる。

2) 近代的街並みおよび歴史的街並み

ハイウェイ沿いの近代的街並みと、コロニアル建築が並ぶ歴史的街並みを比較してみると、前者と後者では第1因子との相関パターンが対照的である。歴史的街並みでは健全性との関係が深いことがわかる。

以上の結果は、健全性が住宅地の〈良い－悪い〉の評価をきめる際に、重要な要因となっていることを示しているが、〈好き－嫌い〉のところでも言及したように、用意したスライドに拘束されるため、必ずしも地区全体の傾向として断言することはできない。

－3 景観嗜好の構造

(1) 景観嗜好によるスライド類型

実験によってえられた〈好き－嫌い〉についての7段階評価を0－1反応におきかえ、数量化Ⅲ類を適用することにより、嗜好によるスライドの類型化を試みた。ただし、評価軸上の中位点は嫌いの方にいれている。

それによると(図6-1-8)、第1軸はスライド(以後、SLと記す)3およびSL7が高く、SL29およびSL30が小さいことから、やや汚れた感じのする雑然とした雰囲気の意味するものと考えられる。因子分析の結果を考慮すると「不健全性」とあらかずものと考えてよいだろう。

また、第2軸は、SL24、SL21が高く、SL10、SL26、SL9が低い。いずれも両側に建物が並んだ景観であり、前者のたたずまいは落ちついているのに対し、後者はやや人工的で落ちつかない感じである。落ちついた雰囲気を意味するものと考えられる。「親密性」の軸と判断される。

第3軸は、SL21、SL9、SL26が高く、SL2、SL22、SL29が低い。前者に関しては、にぎやかな、雑然とした感じがあるの対して、後者については、SL22はやや異質だが、SL2は静かな感じである。活気のある雰囲気を意味すると考えられる。「活気性」の軸と判断される。

以上の3軸によるカテゴリ－数量をもとにクラスター分析をおこない、各スライドを分類した(図6-1-9)。

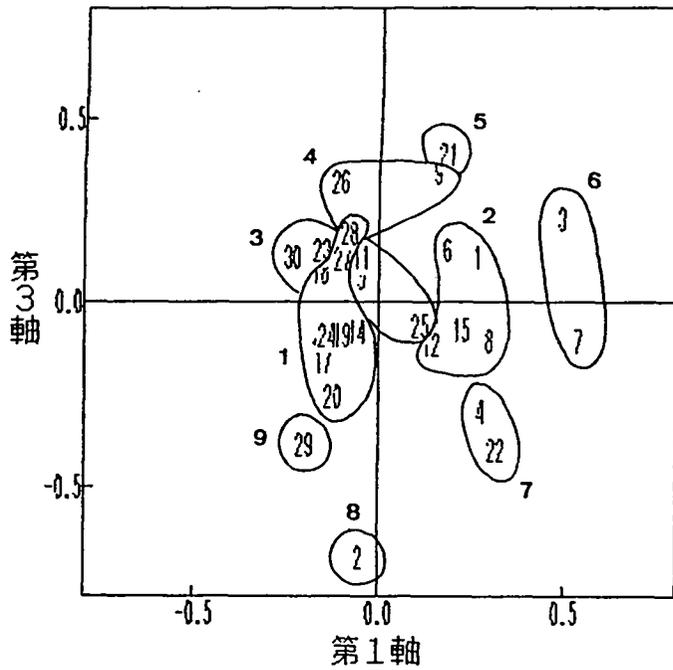
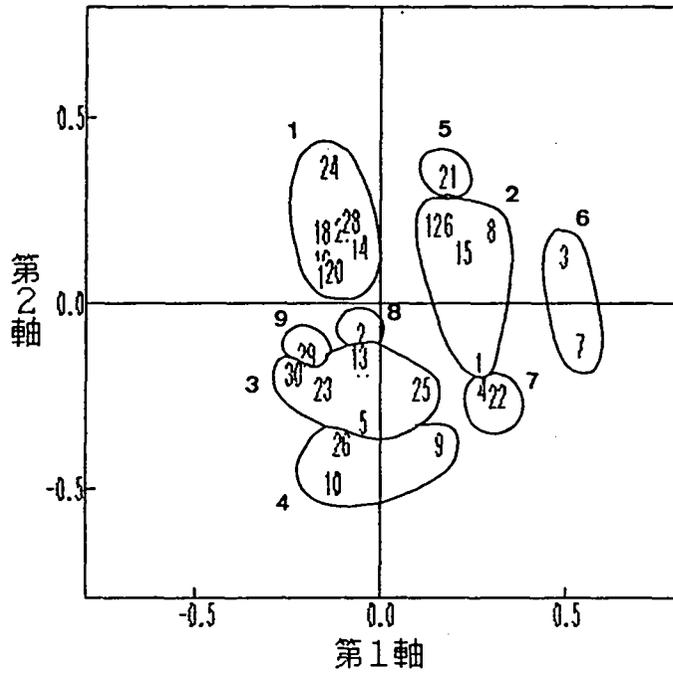


図 6 - 1 - 8 カテゴリー係数プロット (<好き-嫌い>)

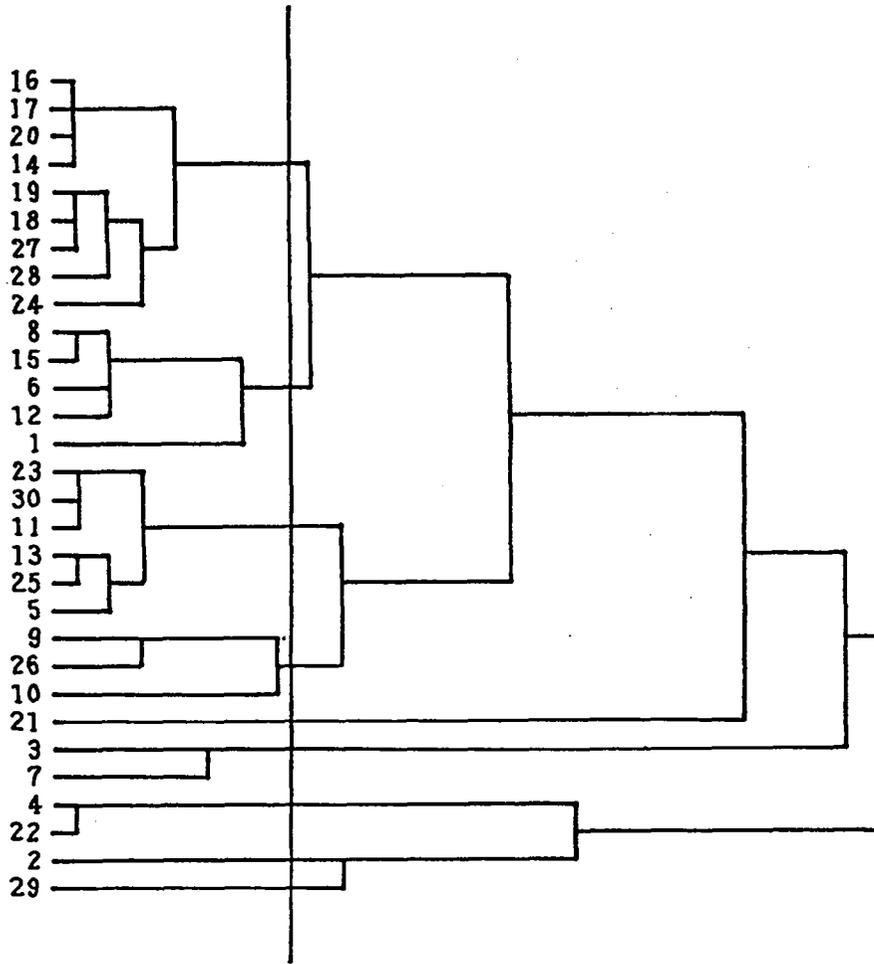


図6-1-9 カテゴリー係数によるクラスター分析 (<好き-嫌い>)

(2) 景観イメージとの関係

各クラスターごとに、先の因子分析による景観イメージの分析で抽出した因子との関係をみてみよう(表6-1-7および図6-1-10)。

まず、第1クラスターは第1、第2、第3因子ともに負である。特に、第1因子は低い。健全性が高く、親密性もある、やや近代性をもつ空間である。

このクラスターに属するスライドの内訳は、コタバル、ダレム、カウマン、近代的住宅地、ジャカルタの近代的ストリートである。

第2クラスターは、第1、第3因子が少し正の方によっている。やや健全性と親密性に欠ける景観である。その内訳は、プチナン、カウマン、コタグデのスライドからなる。

第3クラスターは、各因子ともほぼ平均的である。その内訳は、社宅地区、ジャカルタコタの商館群、カウマン、フラット、コタグデからなる。

第4クラスターは、第1、第3因子が高く、第2因子が低い。やや健全性および親密性に欠け、近代的な景観である。

内訳は、ビル系のプチナン、フラットである。

第5クラスターは、第1、第4因子がわずかに高く、第3因子が低いパターンである。健全性に欠けるところがあり、やや平凡ではあるが、親密性がある。これに該当するのはカンブンの1枚である。

第6クラスターは、第1因子が高いパターンである。健全性に著しく欠けるタイプであり、コタグデ、プチナンの1枚ずつがこれに属する。

第7クラスターは、第1、第2因子が高い。健全性がなく、伝統的な景観である。コタグデとカンブンの1枚ずつがこれに属する。

第8クラスターは、第2、第3、第4因子が高いパターンをとる。伝統性が強く、やや疎外性が強いが、ありふれてはいない空間である。コタグデの路地空間1枚だけがこれに該当する。

第9クラスターは、第1、第2、第4因子が低く、第3因子が高い。特に第4因子はかなり低くなっている。健全性があり、やや近代的で、親密性には欠けるが、ありふれた景観である。チレボンのコタの1枚だけがこれに該当する。

－ 4 景観における伝統性の知覚構造

(1) 伝統性によるスライド類型

因子分析の結果、既にスライドの伝統性がある程度判断されるが、さらに詳しく知

表 6-1-7 クラスタ別因子得点（好きかどうかによる）

クラスター ナンバー	実数	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1	9	-0.844	0.429	-0.401	0.942	-0.433	0.704	0.076	0.697
2	5	0.310	0.803	0.124	0.972	0.269	0.755	0.044	0.760
3	6	-0.080	0.737	0.152	0.820	-0.031	0.773	-0.183	0.905
4	3	0.722	0.740	-0.494	0.881	0.550	0.745	-0.145	0.791
5	1	0.516	0.518	0.232	0.549	-0.439	0.504	0.434	0.559
6	2	1.004	0.654	0.391	0.910	0.121	0.662	0.289	0.735
7	2	1.010	0.969	0.943	0.479	-0.115	0.983	0.143	0.715
8	1	-0.078	0.552	0.865	0.379	0.779	0.704	0.399	0.740
9	1	-0.634	0.395	-0.398	0.651	0.545	0.691	-1.097	0.595

表 6-1-8 クラスタ別因子得点（伝統性）

クラスター ナンバー	実数	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1	12	-0.130	0.767	0.574	0.846	0.120	0.835	-0.094	0.856
2	4	0.648	0.690	-0.590	0.712	0.392	0.633	-0.172	0.780
3	2	-0.868	0.328	-0.137	0.558	-0.698	0.654	0.319	0.609
4	4	0.296	1.119	-0.100	0.901	-0.566	0.671	0.265	0.634
5	3	-0.964	0.410	-0.524	0.666	-0.111	0.809	-0.255	0.812
6	1	-0.098	0.661	0.777	0.488	0.013	0.753	-0.228	0.785
7	1	0.857	0.507	-0.536	0.690	0.019	0.640	0.196	0.654
8	1	1.498	0.421	-0.625	0.607	0.363	0.747	0.406	0.505
9	2	-0.004	0.863	-0.999	0.635	0.238	0.791	0.264	0.813

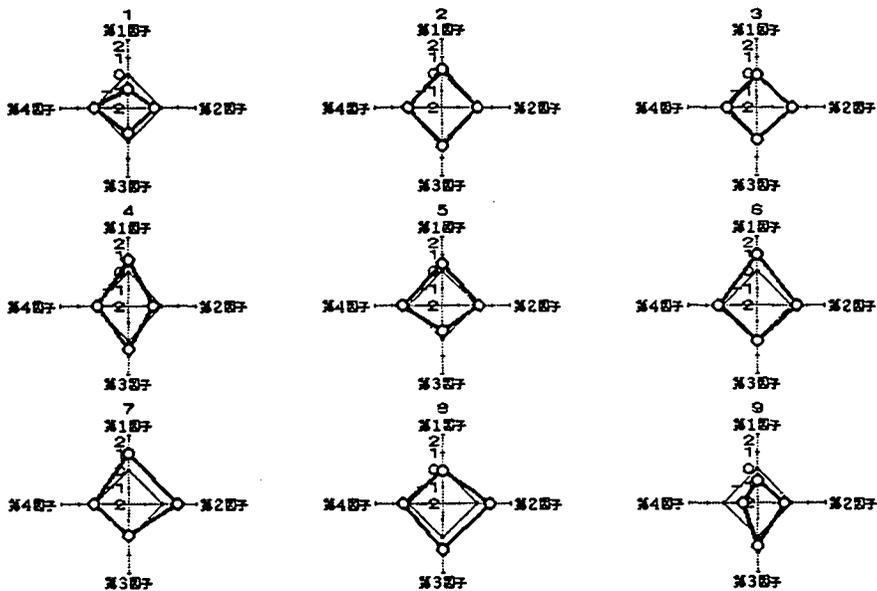


図 6-1-10 <好き-嫌い> 因子得点（クラスター別）

るために、実験によってえられた〈伝統的-近代的〉についての7段階評価を0-1反応におきかえ、数量化Ⅲ類を適用することにより、伝統性によるスライドの類型化を試みた(図6-1-11)。ただし、評価軸上の中位点は近代的にいれている。

まず、第1軸は、SL26が特に高く、逆にSL19、29、17が低い。前者は、フラットの景観であり、後者はオランダ時代に建てられた住宅地景観である。

第2軸は、SL25、23、26、27が高く、SL6、9が低い。前者は集合住宅の景観であり、後者はビル型の商業景観である。

第3軸は、SL24、9、26が高く、SL12が低い。前者は近代的デザインの住宅地の景観であり、後者は伝統的な木造家屋の景観である

各軸の解釈はかなり難しいが、いずれの軸も近代的ビルの景観が重要な位置を占めていることが推察される。

以上の3軸によるカテゴリー数量をもとにクラスター分析をおこない、各スライドを分類した(図6-1-12)。

(2) 景観イメージとの関係

各クラスターごとに、先の因子分析による景観イメージの分析で抽出した因子との関係をもてみよう(表6-1-8および図6-1-13)。

第1クラスターは、第2因子が高いパターンであり、伝統性が強いグループと考えられる。その内訳は、コタグデ、カウマンを中心として、ダレム、ジャカルタのプチナンがはいっており、これらの地区が伝統的性格を帯びたものとして感じとられていることを示している。しかし、ジャカルタの近代的なストリート景観がはいっているのは奇異な感じをうける。

第2クラスターは、第1、第3因子が高く、第2因子が低いパターンである。健全性と親密性に欠ける反面、伝統的性が高い。内訳は、プチナン、ジャカルタの運河沿いの商館街の景観である。

第3クラスターは、第1、第3因子が極端に低く、第4因子が高いタイプである。ややありふれてはいるが、健全性と親密性がきわめて高い。コタバルの緑の多い住宅地景観がこれに該当する。

第4クラスターは、第1、第4因子がやや高く、第3因子が低い。ややありふれており、健全性に欠ける面があるが、親密性のある景観である。内訳は、カンブン、社宅地区、ジャカルタの近代的な街路景観である。

第5クラスターは、第1因子が極端に低く、第2クラスターが低いタイプである。健全性がきわめて高い近代的景観である。該当するスライドは、コタバル、チレボン

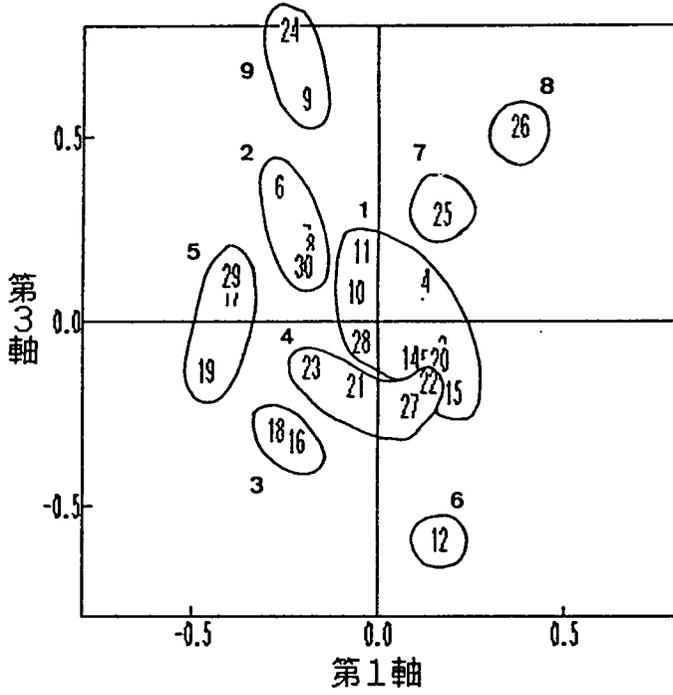
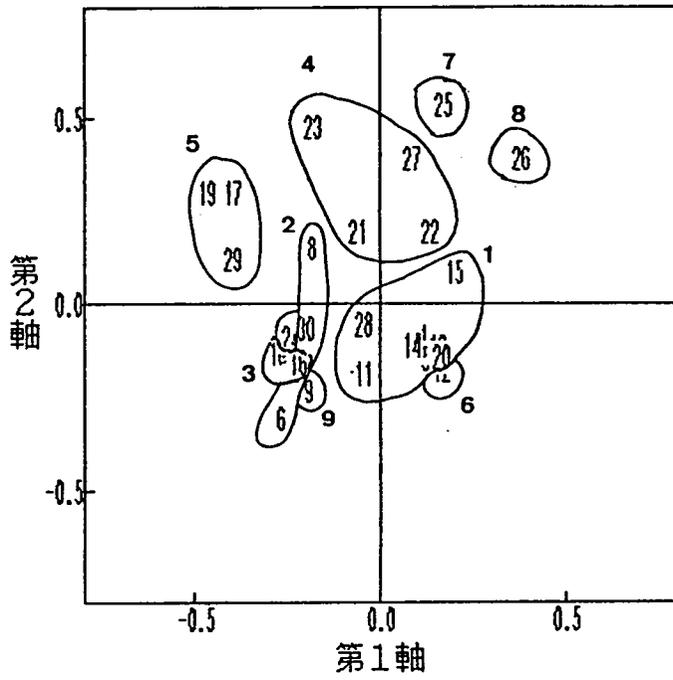


図 6 - 1 - 11 カテゴリー係数によるプロット (< 伝統 - 近代 >)

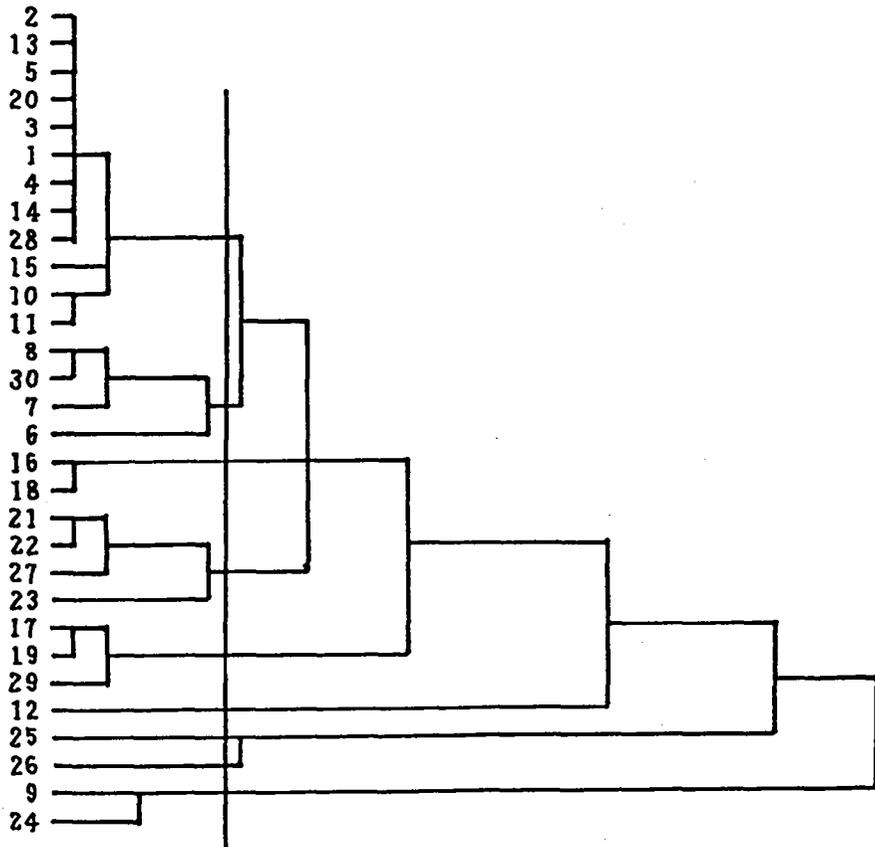


図 6 - 1 - 12. カテゴリー係数によるクラスター分析 (< 伝統 - 近代 >)

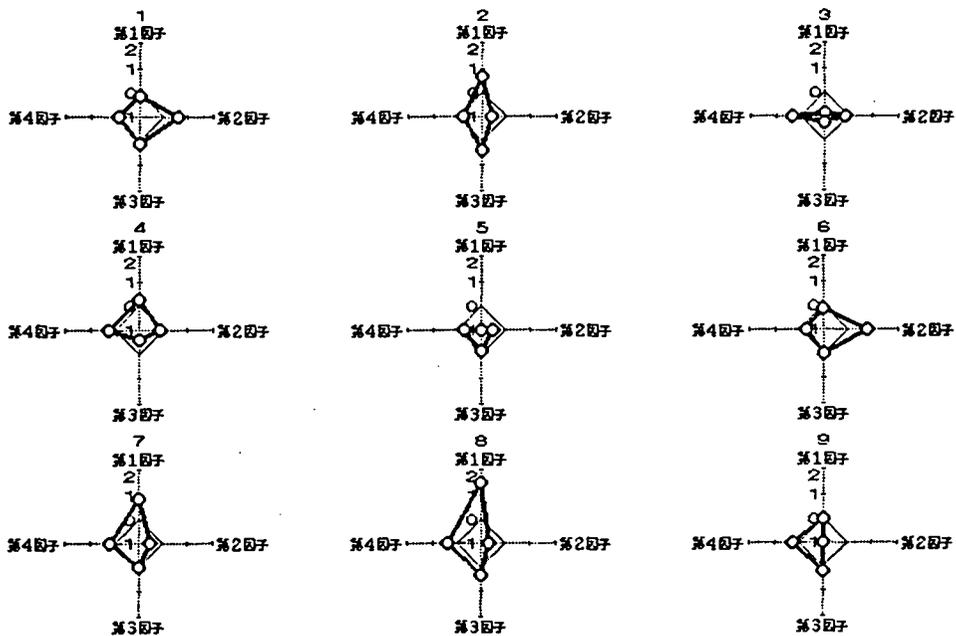


図 6 - 1 - 13 < 伝統 - 近代 > 因子得点 (クラスター別)

コタであり、ともにコロニアル系デザインの建物からなる。

第6クラスターは、第2因子が極端に高いタイプである。伝統性がきわめて高い。典型的なカウマンの景観である。

第7クラスターは、第1因子が高く、第2因子が低い。近代的で健全性に欠ける。フラットが該当する。

第8クラスターは、第1、第3、第4因子が高く、第2因子が低い。特に、第1因子の高さは極端である。著しく健全性に欠ける近代的景観である。クラスター7と同様にこれもフラットの景観であるが、階段室側とベランダ側とでは著しく評価が異なっている。

第9クラスターは、第2因子が極端に高い。近代的な景観であり、ビル系のプチナンおよびテラスハウスがこれに該当している。

6-2 都市の歴史的イメージ

0 緒言

(1) 視点

都市の歴史的イメージを喚起するものは必ずしも物的要素だけとは限らない。リンチは、都市にはさまざまな時間の痕跡が散りばめられ、重層的にたたみ込まれていること、それを都市計画の対象として扱うことの必要性について論じた(注2)。それは、そうした痕跡1つの要素として明確に意識されているとは限らないが、それらの要素が一体となって醸しだされる雰囲気的重要性を指摘しているようにもとれる。

しかし、わが国と西欧諸国との歴史的環境に対する態度や意識を比べてみると、都市の歴史的イメージのあり方に根本的な相違があるのではないかという疑念が湧いてくる。それは、都市を構成する材料の違いなど多くの要因に起因するものと考えられる。市街地が高層化せず、集合住宅の伝統をもたないなど、わが国と多くの共通点をもつジャワの場合はどうだろうか。

ここでは、ジャワの代表的歴史的都市として知られるジョクジャカルタに対して、人びとがどのような歴史的イメージをもっているかをあきらかにすることを試みる。

(2) 研究方法

ジャワ島都市に対する歴史的イメージのあり方を、できるだけ現実に近いかたちで捕捉する方法として、自由回答による形式を採用した。具体的には、「ジョクジャカルタにおいて歴史的価値をもつと思われるものを答えて下さい。」という設問への自由回答をキーワード化しその集計を行なった。

アンケート調査は、第2章で述べた5地区を対象とする一連の調査の一環として行なったものである。回答のキーワード化およびその英訳はインタビューを行なった学生が行なった。

ー1 ジョクジャカルタの歴史的イメージ（表6-2-1）

建物など物的要素をあげるものが全体の8割程度を占めている。残りは、場所、イベントなどである。

建物など物的要素の内訳はクラトンに関するものが過半である。「カスルタナン」をこの範疇に入れるとすれば、この比率はさらにあがる。イスラム・マタラムの創始者である「スノパティ」もまた同様の意味をもつと考えられる。

具体的にみると、「クラトン」そのものをあげる回答が過半を占めるが、それ以外では、「ブトゥン」と「タマンサリ」をあげるものが少しみられた。

前者は、ジュロン・ベテンのところで述べたように、クラトンをとり巻く城壁である。また、後者は、クラトン内にあったスルタンのハーレムに隣接する水の宮殿であり、観光対象としても名高い。

次には、特定の建物などをあげる回答パターンが20%でこれに続いている。その内訳は、「グドゥンヌガラ」「トゥグ」の2つがやや多く、この両者で特定の建物をあげる回答の過半に達する。

グドゥンヌガラは、現在、政府のゲストハウスとなっている旧オランダ監督官の宮殿であったコロニアル建築だが、独立と関わりが深いことから、独立との関係でみられている可能性が高い。

また、トゥグはクラトンと同様、ジャワの伝統的世界観に関連するもので、クラトンがその一部であるタウンレイアウトにおいて重要な役割を果たしている一種のモニュメントである。「クラピャク」も同様である。

それ以外では、「中央郵便局」「バンクヌガラ」「ホテルトゥグ」などジョクジャカルタ市内の主要なコロニアル建築があがっている。「スタシウントゥグ」も同様である。

また、「ソノブドヨ博物館」はジャワの伝統的な文化を展示する博物館であり、カーステンによって設計された。それ自体ジャワのジョグロ型屋根をもつ伝統的スタイルを踏襲している。

その次は、特定の建物ではなくやや抽象的な表現で物的要素を指す回答パターンが10.9%ある。そのうち最も多いのが「コロニアル建築」という回答であり、特定のコ

表 6 - 2 - 1 ジョクジャカルタの歴史的イメージ

大項目	実数	%	中項目	実数	%	小項目	実数	%	%	%			
建物など	276	79.5	クラトン	173	62.7	クラトン	123	71.1	44.6	35.4			
						クラトンの壁	29	16.8	10.5	8.4			
						タマンサリ	19	11.0	6.9	5.5			
						アルナルン	1	0.6	0.4	0.3			
						クラトンの門	1	0.6	0.4	0.3			
			特定の建物など	58	21.0	グドゥンヌガラ	19	32.8	6.9	5.5			
						トゥグ	17	29.3	6.2	4.9			
						中央郵便局	7	12.1	2.5	2.0			
						バンクヌガラ	4	6.9	1.4	1.2			
						ホテルトゥグ	4	6.9	1.4	1.2			
						ソノブドヨ博物館	3	5.2	1.1	0.9			
						スタシウントゥグ	1	1.7	0.4	0.3			
						デボボロコト	1	1.7	0.4	0.3			
						マリオボロのランプ	1	1.7	0.4	0.3			
						クラビヤク	1	1.7	0.4	0.3			
						モスク	7	2.5	モスク	6	85.7	2.2	1.7
									モスクと人びと	1	14.3	0.4	0.3
			抽象的	30	10.9	コロニアル建築	11	36.7	4.0	3.2			
						古い建物	5	16.7	1.8	1.4			
						歴史的建物	5	16.7	1.8	1.4			
チャンデイ	4	13.3				1.4	1.2						
古い住宅	2	6.7				0.7	0.6						
歴史的モニュメント	2	6.7				0.7	0.6						
革命に関連する建物	1	3.3				0.4	0.3						
建物の要素	8	2.9				ジョグロ型屋根	5	62.5	1.8	1.4			
建物の形態	2	25.0	0.7	0.6									
屋根形態	1	12.5	0.4	0.3									
場所	11	3.2	抽象的	1	9.1	歴史的地区	1	100.0	9.1	0.3			
			具体的	10	90.9	コタグデ	4	40.0	36.4	1.2			
			バタビアカボジョ	3	30.0	27.3	0.9						
			コタバル	2	20.0	18.2	0.6						
			マリオボロ	1	10.0	9.1	0.3						
イベント	19	5.5	歴史的出来事	15	78.9	侵略者に対する戦い	8	53.3	42.1	2.3			
						革命	5	33.3	26.3	1.4			
						1949年3月の事件	1	6.7	5.3	0.3			
						日本に対する戦い	1	6.7	5.3	0.3			
			イベント	4	21.1	スカテン	3	75.0	15.8	0.9			
						クンバリ・イベント	1	25.0	5.3	0.3			
総合的	41	11.8	伝統性	11	26.8	カスルタナン	9	81.8	22.0	2.6			
						歴史的意味をもつものすべて	1	9.1	2.4	0.3			
						歴史的伝統の継承	1	9.1	2.4	0.3			
			文化	14	34.1	文化	9	64.3	22.0	2.6			
						銀細工	2	14.3	4.9	0.6			
						伝統的服装	1	7.1	2.4	0.3			
						ダンスと言語	1	7.1	2.4	0.3			
			町	5	12.2	ハンディクラフト	1	7.1	2.4	0.3			
						学生の町	4	80.0	9.8	1.2			
			人	10	24.4	ジョクジャカルタの町	1	20.0	2.4	0.3			
						人びと	1	100.0	2.4	0.3			
スノバティ	7	70.0				17.1	2.0						
愛国的精神	1	10.0				2.4	0.3						
その他	10	24.4	ふるさと	1	10.0	2.4	0.3						
			グヌンアグン	1	10.0	2.4	0.3						
			計	347	100.0								

ロニアル建築をあげた回答とあわせ、コロニアル建築が歴史的イメージを喚起する要素の1つとなっていることをうかがわせる。しかし、その中には、独立時の役割によって意味が変化しているものもある。

また、建物要素に関する回答の中で、「ジョグロ屋根」をあげている回答が目につく。「屋根形態」「建物の形態」も実質的にはジョグロ屋根を意味するものと考えられる。ジョグロ型屋根が歴史的イメージを喚起する存在であることを示している。

イベントの内訳をみると、歴史的出来事についての回答がみられる。いずれも独立のための戦いに関するもので、ジョクジャカルタが独立に果たした栄光の記憶はまだまだ強いものであることをうかがわせる。それは、物的要素ともかかわりの深いものであることは既に述べた通りである。

しかし、全体的には物的要素にそくして歴史的イメージが喚起されるパターンが一般的であることがわかる。

6-3 歴史的環境に対する意識

0 緒言

(1) 視点

近年、「途上国」における歴史的市街地の消失が課題になっている。「先進諸国」の都市においては、このような地区への対策が、1960年代以降、積極的にとられるようになり、歴史的環境の保全と都市再開発の2つの機能を結びつける新しい試みがなされている。

これら一連の動向のひとつの成果を示すものが、1976年ナイロビで開かれたユネスコ第19回総会における「歴史的地区の保全および現代的役割に関する勧告」の採択であろう。歴史的市街地の保存が世界的に共通の課題であることが、広範に認識されたことを示している。

しかし、多くの都市問題に悩む途上国では、歴史的環境の保全の必要性は認識されていても、全体に資金不足という問題を抱え、有効な対策を講じえないということもあろう。政策全体の中での兼ねあいもあり、施策の順位づけとも関連する。いずれにせよ、先進諸国とは異なったパラダイムの中で、保全へのとり組みが考えられねばならないことは明白である。

ここでは、こうした途上国都市における歴史的市街地保存の課題と同時に、生活空間に対する人びとの意識の考察を目的とする。

(2) 研究方法

1) 調査の内容と方法

本節の内容は3つに大別される。まず、第1は、インドネシアにおける歴史的市街地保存の動向の概況の把握である。その方法は、主として、研究者および政府機関へのインタビュー調査による。インタビューを行なった対象は、まず、政府関係から述べると、国家レベルでは、ジャカルタにある文部省の文化財保護局、その中部ジャワにおける出先機関、自治体レベルではジャカルタ特別州、ジョクジャカルタ特別州、また、バリにおけるビルディング・インフォメーション・センター（B I Cと呼ぶ）などである。また、研究者では、ガジャマダ大学講師アルディ・P・バリミン氏とのインタビューによる。

第2は、歴史的環境の保全に対する人びとの意識の把握である。より具体的には、①歴史的地区の保全に関する意識、②住宅および居住環境の古さ・新しさについての志向の2点を把握する。その方法は、①はアンケート形式であり、自由回答と選択肢による意向の調査とを併用した。②はアンケート調査による。

第3節は、ライフスタイルに対する志向の方向性を考察することを意図している。具体的には、買物や散策などの行為、また、特定の建物など物的要素に対する人びとの嗜好を通じて、伝統的価値に対する意識を推察することを試みた。方法はアンケート調査である。

この調査では、本来SD法のような対尺度を用いて<伝統-近代>に関する意識を測定することを意図したが、完全に対称な尺度の組みあわせが不可能と考えられたため、このような形式とした。項目は表6-3-4の通りであり、選択に当たってはガジャマダ大学建築学科のスタッフの協力をえている。

2) 調査の概要

以上の調査は、いずれも第2章で述べた5地区で実施した一連のアンケート調査の一環として実施したもので、原則としてインタビュー形式で行なっている。

ー1 インドネシアにおける歴史的市街地保存の動向

これまで、インドネシアで行なわれてきた歴史的価値をもつ物的環境に対する保存の取り組みを概括すると次のようになる。

(1) 文化財保護における国の動向

周知のように、インドネシアには輝かしい建築の伝統がある。ポロブドゥールに代表される古代遺構や、バタック、ミナンカバウなど多彩な様式で知られる民俗建築はつとに名高い。これら、考古学上、また、民族学上、国際的に高い評価をもつものに

対しては、主として教育文化省が保存を担当してきた。

市街地における建築物についても、同様の取り組みがなされ、記念碑的な建築物の修復と保存が行なわれてきた。特に、ジャカルタでは、首都の整備ということもあって、かなり多くのケースがみられる。旧オランダ統治時代の総督府が博物館として利用されているのは、その好例であろう。住宅など、個人所有のものに関しては、文化財の指定を行ない、その維持のための財政的援助がなされている。制度的にはオランダ植民地時代の法律をそのまま受け継ぐが、予算不足もあり、必ずしも十分な効力を発揮していない。そのため、現在、新しい法制の整備が進められている（注3）。

国家レベルでの保存への取り組みは文化財保護的な性格をもち、また、現在までのところ、点的保存にとどまっており、面的な広がりをもつものはほとんどないのが実情である。

（2）地方自治体の動向

国レベルでの取り組みの対象外のものについては、自治体に任されているのが現状であるが、ごく一部の限られた自治体でしか保存の取り組みがなされていない。その反面、単なる文化財保護的な保存を越えた試みもある。

その1つが、ジャカルタ特別州によって行なわれた、ジャカルタ近郊のチョンデの例である。チョンデにはスダ人の集落があり、ジャワ固有の様式とオランダや中国など外来の様式が混淆した特有の住居が見受けられたが、ジャカルタの市街地拡大に伴う都市化の進行につれて失われてしまう危険性があった。

事業自体は、調査および合計46の住居の保存からなる。①緑の保全、②地域の文化遺産としての伝統的住居および生活の保全を目的としている。範囲はそれほど広くないが、面的な広がりをもつ点、生活の保全という単なる文化財保護的性格とは異なる意図をもっている点、先駆的な歴史的環境の保存例として評価される。

ジャカルタ特別州では、他にもかつての都心であるコタ地区や高級住宅地として知られるメンテン地区などの保全が行なわれている。

また、バリでは、その特有の環境に対するさまざまな保存の試みがなされている。バリ島のデンパサールでは、ガジャマダ通りの建築はバリの的な装飾を施すことが必要とされ、建物の高さについても椰子の木より低く押えることが決められている。

地震被害の復旧プロジェクトであったロビ・スラルトラの住宅建設、シルビオ・サントサによるウブドの環境保全、ヌサドゥア開発などに地域の特有の環境に対する覚醒と配慮をみることができるが、現在BICによって試みられている保全の制度化は新しい動向である。

しかし、他の自治体では同様の事例は知られていない。したがって、ジャカルタを除けば、自治体レベルでは本格的な保存は行なわれていないと考えられるが、市長などの個人的な指導によって、建築制限など保存的政策がとられているケースはある。

中部ジャワのジョクジャカルタ特別州などでは、公共建築は伝統的なジョグロと称する中折れ状の寄棟屋根を採用されるケースが多い。これは明文化されているわけではないという（注4）が、伝統的な建築に対する市長などの恣意的政策からきていると考えられる。したがって、これをそのまま歴史的市街地の保存と結びつけるには問題があるが、バリやジョクジャカルタは観光地として有名などころであり、今後観光開発などと絡んで保存の問題が新たな展開をみせる可能性もある。

以上述べてきたように、現在のインドネシアでは、急激な近代化の進展という状況下で、歴史的市街地をどのように保存するかについての方向性が確定していないと見受けられる。

－ 2 歴史的環境に対する意向

（1）歴史的地区に対する意向

「歴史的地区をどう思いますか。」という設問に対する自由回答からキーワードを抽出し整理した（表6-3-1）。

「歴史的地区」という言葉から「保全」を連想した人の比率はかなり高く、44.2%であった。しかし、これは、前問に保全に関する意向をたずねた設問があったことから多少割り引く必要があるかも知れない。その点、アンケートに不備がなかったとはいえない。

また、歴史的地区の価値に対する肯定的意見も多く、全体の26.9%であった。保全に関する回答の多くが肯定的意見と考えると、全体の7割程度は肯定的態度を示していることになる。

それに対して否定的意見は、歴史的地区に対してネガティブな意見を表明するもの（4.6%）と、開発対象とするもの（9.9%）の2つがある。

それ以外に、歴史的地区のイメージや状態を描写するにとどまる回答もあったが、その割合はそれほど大きくない。

それぞれの回答の内訳は、まず、保全については、何らかの保全の必要を訴えるものが大半であったが、目的を明記したもの、条件をつけるものもあった。保全方法については、単なる保全という言葉以外に、「修復」「近代化」「研究」などがあがっている。

表 6 - 3 - 1 歴史的地区に対する意見

大項目	実数	%	中項目	実数	%	小項目	実数	%	%	%			
保全	125	44.2	保全	118	94.4	保全	95	80.5	76.0	33.6			
						修復	12	10.2	9.6	4.2			
						保全および近代化	7	5.9	5.6	2.5			
						保全と研究	3	2.5	2.4	1.1			
						観光開発の影響を排して保全	1	0.8	0.8	0.4			
						保全および目的	4	3.2	古い公共建築は美しいので	1	25.0	0.8	0.4
									建物のオリジナリティを	1	25.0	0.8	0.4
									文化的シンボルとして	1	25.0	0.8	0.4
									園地のために	1	25.0	0.8	0.4
						条件付保全	3	2.4	保全は必要だが全てではない	1	33.3	0.8	0.4
新旧の混合がよい	1	33.3	0.8	0.4									
			歴史的価値があれば	1	33.3	0.8	0.4						
肯定的	76	26.9	肯定的意見	62	81.6	本来の姿	11	17.7	14.5	3.9			
						よい	10	16.1	13.2	3.5			
						おもしろい	9	14.5	11.8	3.2			
						文化的アイデンティティ	4	6.5	5.3	1.4			
						国家的遺産	3	4.8	3.9	1.1			
						地区の性格のシンボル	2	3.2	2.6	0.7			
						未来のため	2	3.2	2.6	0.7			
						静か	2	3.2	2.6	0.7			
						古建築の技術を示す	2	3.2	2.6	0.7			
						好き	2	3.2	2.6	0.7			
						歴史的価値	2	3.2	2.6	0.7			
						正の価値をもつ特別な地区	1	1.6	1.3	0.4			
						人間関係がよい	1	1.6	1.3	0.4			
						親しみやすい	1	1.6	1.3	0.4			
						古い建物は強い	1	1.6	1.3	0.4			
						記憶を呼びさます	1	1.6	1.3	0.4			
						平和	1	1.6	1.3	0.4			
						魅力的	1	1.6	1.3	0.4			
						歴史的	1	1.6	1.3	0.4			
						以前の生活がわかる	1	1.6	1.3	0.4			
						インドネシア人の精神	1	1.6	1.3	0.4			
						居住地として利用	1	1.6	1.3	0.4			
						安全なので好き	1	1.6	1.3	0.4			
						有用	1	1.6	1.3	0.4			
						条件付肯定	14	18.4	状態がよければ快適な環境	12	85.7	15.8	4.2
									家屋密度が低ければ健康的	1	7.1	1.3	0.4
									観光開発でなく住民尊重	1	7.1	1.3	0.4

表 6 - 3 - 1 歴史的地区に対する意見(続き)

否定的	13	4.6	否定的意見	13	100.0	伝統より良好な環境が必要	2	15.4	15.4	0.7	
						汚い	2	15.4	15.4	0.7	
						新しく変わるべき	1	7.7	7.7	0.4	
						封建的	1	7.7	7.7	0.4	
						満足していない	1	7.7	7.7	0.4	
						機能の変化	1	7.7	7.7	0.4	
						健康的でない	1	7.7	7.7	0.4	
						近代化とは調和しにくい	1	7.7	7.7	0.4	
						余りに狭小	1	7.7	7.7	0.4	
						時代遅れ	1	7.7	7.7	0.4	
						おもしろくない	1	7.7	7.7	0.4	
開発	28	9.9	開発	15	53.6	観光開発	10	66.7	35.7	3.5	
						開発	2	13.3	7.1	0.7	
						都心では取り壊した方がよい	1	6.7	3.6	0.4	
						歴史的価値のないもの建替	1	6.7	3.6	0.4	
			保全方針	6	21.4	開発と適合	1	6.7	3.6	0.4	
						きれいにされるべき	3	50.0	10.7	1.1	
						より良くする	1	16.7	3.6	0.4	
						機能を改善	1	16.7	3.6	0.4	
			開発規制	7	25.0	変化と修復	1	16.7	3.6	0.4	
						古いものとの調和が必要	3	42.9	10.7	1.1	
						現況にあった規則をつくる	2	28.6	7.1	0.7	
						外観に配慮して整備	1	14.3	3.6	0.4	
						大規模産業建造物は建てない	1	14.3	3.6	0.4	
その他	41	14.5	イメージ	14	34.1	古い建物	5	35.7	12.2	1.8	
						伝統的に暮らす人びと	4	28.6	9.8	1.4	
						文化の場所	2	14.3	4.9	0.7	
						クラトン	2	14.3	4.9	0.7	
						伝統的コミュニティ	1	7.1	2.4	0.4	
			状況	2	4.9	人口密度が高い	1	50.0	2.4	0.4	
						手入れが悪い	1	50.0	2.4	0.4	
			その他	25	61.0	残ってきた	12	48.0	29.3	4.2	
						存在している	2	8.0	4.9	0.7	
						広大な場所	1	4.0	2.4	0.4	
						バックドアがない	1	4.0	2.4	0.4	
						施設	1	4.0	2.4	0.4	
						忘れることが困難	1	4.0	2.4	0.4	
						前庭	1	4.0	2.4	0.4	
						逸礼のため	1	4.0	2.4	0.4	
						人びとがいなくなった	1	4.0	2.4	0.4	
						驚かされる	1	4.0	2.4	0.4	
						持主次第	1	4.0	2.4	0.4	
						より強く時間に耐えるべき	1	4.0	2.4	0.4	
						ファッショナブルであるべき	1	4.0	2.4	0.4	
計									283		100.0

また、これ以外で最も多い「本来の姿」は、肯定的意見と考えてよいだろう。「よい」や「おもしろい」というやや情緒的な意見もかなりの比率を占めている。

否定的意見の内容は、特に多い項目はないが、非近代的、時代遅れであるとする論調である。

開発に関する意見としては、「観光開発」を進めるという意見が最も多いが、開発の際留意すべき点について述べたものもあった。

(2) 歴史的環境の保全(表6-3-2)

1) 歴史的環境の保全意向

歴史的環境に対する基本的立場は、最も多いのが「現状を維持し保全する」であり全体の過半数に達する。「修復して利用する」がそれにつき、さらに「ファサードを保全する」の順であり、全体に保全を志向する意見が多数を占める。「スクラップアンドビルド」はわずかである。

2) 歴史的環境の保全目的

保全の目的では、「文化遺産」が最も多く、次は「経済効果」である。続いて、前2者と比べると比率はかなり低いが、「住民のことを第1に考えるべきである」「国家威信」の順となっている。

3) 歴史的環境の保全意向と目的のクロス

1)および2)をクロス集計してみると、「文化遺産」として「現状維持」というパターンが最も多く、「文化遺産」として「修復利用」するがそれに続く。

さらに、「経済効果」をねらって「現状維持」、また、「経済効果」をねらって「修復利用」が多い。

次は、かなり少数意見となるが、「住民第1」で「現状維持」、「文化遺産」を守るために「ファサード保全」、「国家威信」のために「現状維持」、「住民第1」で「修復利用」、また、「経済効果」を期待しながら「ファサード保全」というパターンが続いている。さらに、「国家威信」のために「修復利用」にも10以上の回答があった。その他はごく少数派である。

(3) 住宅および居住環境の古さ・新しさの志向(表6-3-3)

図6-3-3は、住宅および居住環境の古さ・新しさに対する志向をたずねたものである。その結果は、「どちらでもよい」と回答し、こうしたことにこだわらない人も同数程度はいるが、「新しさ」よりも「古さ」を志向する人の方が圧倒的に多い。しかし、居住環境に比べて、住宅については「新しさ」への志向は強い。

表 6 - 3 - 2 歴史的環境の保全意向とその目的

	経済効果	住民第一	文化遺産	国家威信	その他	興味なし	計
スクラップ アンド ビルド	5	5	6	1	0	1	14
	35.7	35.7	42.9	7.1	0.0	7.1	5.4
	5.7	12.2	4.4	3.1	0.0	7.7	
	1.9	1.9	2.3	0.4	0.0	0.4	
現状維持 保全	45	24	77	17	3	3	133
	33.8	18.0	57.9	12.8	2.3	2.3	51.8
	51.1	58.5	56.6	53.1	60.0	23.1	
	17.5	9.3	30.0	6.6	1.2	1.2	
修復 利用	41	17	68	13	2	5	111
	36.9	15.3	61.3	11.7	1.8	4.5	43.2
	46.6	41.5	50.0	40.6	40.0	38.5	
	16.0	6.6	26.5	5.1	0.8	1.9	
ファサード 保全	16	6	18	8	1	1	40
	40.0	15.0	45.0	20.0	2.5	2.5	15.6
	18.2	14.6	13.2	25.0	20.0	7.7	
	6.2	2.3	7.0	3.1	0.4	0.4	
その他	5	2	8	2	0	0	13
	38.5	15.4	61.5	15.4	0.0	0.0	5.1
	5.7	4.9	5.9	6.3	0.0	0.0	
	1.9	0.8	3.1	0.8	0.0	0.0	
興味なし	1	0	0	1	0	3	5
	20.0	0.0	0.0	20.0	0.0	60.0	1.9
	1.1	0.0	0.0	3.1	0.0	23.1	
	0.4	0.0	0.0	0.4	0.0	1.2	
計	88	41	136	32	5	13	257
	34.2	16.0	52.9	12.5	1.9	5.1	100.0

※1 段目は実数、2 段目は行%、3 段目は列%、4 段目は全体%

表 6 - 3 - 3 住宅および環境の古さ・新しさの志向

	古い 環境	新しい 環境	どちら でもよい	計
古い住宅	74	4	13	91
	81.3	4.4	14.3	33.7
	57.8	9.5	13.0	
	27.4	1.5	4.8	
新しい住宅	27	24	15	66
	40.9	36.4	22.7	24.4
	21.1	57.1	15.0	
	10.0	8.9	5.6	
どちらでもよい	27	14	72	113
	23.9	12.4	63.7	41.9
	21.1	33.3	72.0	
	10.0	5.2	26.7	
計	128	42	100	270
	47.4	15.6	37.0	100.0

※1 段目は実数、2 段目は行%、3 段目は列%、4 段目は全体%

－ 3 ライフスタイルと歴史的環境に対する意向の関係

(1) 項目別嗜好の概要

表6-3-4の項目を用いて<伝統-近代>に関する意識を測定した。

まず、項目別に概要を述べると(図6-1-4)、<とても好き>および<好き>を加算した比率が最も高いのは「アスファルト舗装道路」である。これは近代的要素の1つとして項目に加えたが、必ずしも近代的あるいは伝統的の尺度に馴染まなかったかもしれない。

その次の「中央郵便局」「伝統的住宅」はともに75%以上であり、広範な層に支持されていることを示す。この2つを比べると、伝統的住宅の方が<好きではない>の比率が高い。

それから少し比率が下がるが、「アルナルンでのジャワイスラム儀式」「バティック着用」「マリオボロ散策」「古いオランダ人の住宅」の4項目がほぼ同程度で1つのグループを形成している。

以上は、いずれも伝統的価値をもつと考えられるものばかりである。近代的価値をもつと考えられるものはその次にはじめて登場する。それは、「スチールフェンス」であり、それより少し下回って残りの項目が続く。

ただ、「ベチャからヘリチャへの推移」だけはかなり水準が低い。

全体として伝統的価値の方が高い支持をえている。これはもちろん項目の問題に起因する面もあることはいうまでもないが、伝統的要素の嗜好比率は一般に高く、中にはきわめて高い支持を集めているものもあることから、伝統的要素が依然として高い価値をもつことを表わしていると考えられる。

(2) 主成分分析による<伝統-近代>指標の抽出

各項目に対する嗜好と<伝統-近代>の関係を明確にするために、主成分分析を行ない、データのもつ情報を分析した(表6-3-5)。

第1主成分は、「マリオボロ散策」「ジャランソロ散策」「映画観賞」「スーパーマーケットでの買物」の4項目で特に負荷量が高く、いずれも流行性の人気の高い娯楽という共通点がある。「流行性」の指標とかんがえることができる。

第2主成分は、「スチールフェンス」「スペイン風住宅」「ベチャからヘリチャへの移り変り」の3項目が特に高い。いずれも新しい物的要素であり、「新しい物的要素」の指標と考えることができる。

第3主成分は、「中央郵便局」「古いオランダ時代の住宅」の2項目が特に高く、その次に「伝統的住宅」がきている。いずれも、古い物的要素であり、「古い物的要

表6-3-4 伝統的近代の要素に対する嗜好

物的要素	伝統的価値		近代的価値	
	パサール・ブリングハルジョで買物すること		スーパーマーケットショッピングセンターで買物すること	
とても好き	32	11.6	22	8.0
好き	97	35.1	100	36.5
どちらでもない	96	34.8	92	33.6
好きではない	44	15.9	54	19.7
全く好きではない	7	2.5	6	2.2
	276	100.0	274	100.0
	マリオボロを歩くこと		ソロ通りのショッピングストリートを歩くこと	
とても好き	46	16.6	14	5.1
好き	133	48.0	105	38.2
どちらでもない	56	20.2	70	25.5
好きではない	37	13.4	82	29.8
全く好きではない	5	1.8	4	1.5
	277	100.0	275	100.0
	オランダ風住宅		スペイン風住宅	
とても好き	47	17.0	22	8.1
好き	126	45.7	92	33.7
どちらでもない	50	18.1	65	23.8
好きではない	45	16.3	78	28.6
全く好きではない	8	2.9	16	5.9
	276	100.0	273	100.0
	伝統的住宅		アルムナス	
とても好き	71	25.7	22	8.1
好き	146	52.9	85	31.4
どちらでもない	39	14.1	76	28.0
好きではない	18	6.5	80	29.5
全く好きではない	2	0.7	8	3.0
	276	100.0	271	100.0
	中央郵便局		ナコ (新しいタイプの窓)	
とても好き	68	25.0	10	3.6
好き	149	54.8	122	44.4
どちらでもない	49	18.0	59	21.5
好きではない	6	2.2	73	26.5
全く好きではない	0	0.0	11	4.0
	272	100.0	275	100.0
			スチールフェンス	
とても好き			19	6.9
好き			127	46.2
どちらでもない			62	22.5
好きではない			61	22.2
全く好きではない			6	2.2
			275	100.0
			アスファルト 舗装道路	
とても好き			102	36.8
好き			150	54.2
どちらでもない			13	4.7
好きではない			11	4.0
全く好きではない			1	0.4
			277	100.0

※左側は実数、右側は%

表 6 - 3 - 4 伝統的・近代的要素に対する嗜好(続き)

非物的要素	伝統的価値		近代的価値	
	ワヤンを見ること		映画をみること	
とても好き	49	17.9	36	13.0
好き	85	31.0	94	34.1
どちらでもない	64	23.4	82	29.7
好きではない	65	23.7	51	18.5
全く好きではない	11	4.0	13	4.7
	274	100.0	276	100.0
	パティックを着ること		ベチャがヘリチャに変わる	
とても好き	50	18.1	12	4.4
好き	120	46.2	65	23.8
どちらでもない	67	24.2	58	21.2
好きではない	31	11.2	113	41.4
全く好きではない	1	0.4	25	9.2
	277	100.0	273	100.0
	月曜と水曜に断食すること			
とても好き	38	14.0		
好き	95	34.9		
どちらでもない	54	19.9		
好きではない	65	23.9		
全く好きではない	20	7.4		
	272	100.0		
	アルナルンでの伝統的ジャワイスラム儀式			
とても好き	42	15.2		
好き	137	49.6		
どちらでもない	71	25.7		
好きではない	19	6.9		
全く好きではない	7	2.5		
	276	100.0		

※左側は実数、右側は%

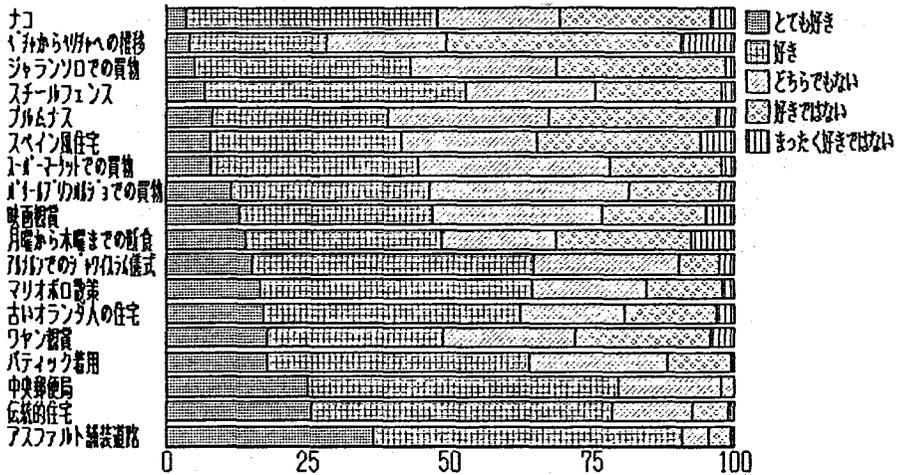


図 6 - 1 - 14 伝統 - 近代に対する嗜好

素」の指標と考えることができる。

第4主成分は、「ワヤン観賞」が特に高く、次に、「パティック着用」「伝統的住宅」がきている。また、低い方で「ナコ」の水準が目立っている。伝統的価値をもつものであることから、「伝統的価値」の指標と考えられる。

第4主成分までの累積寄与率は41.5%とあまり高くないが、各主成分とも意味は比較的鮮明で<伝統-近代>と関連する指標と判断される。

(3) 歴史的環境の保全意識の<伝統-近代>軸による分析

<伝統-近代>に関する主成分分析の結果を用いて、人びとの保全意識をより明確にすることを試みる。

1) 住宅の古さ・新しさとの関係

まず、住宅の古さ・新しさに対する志向別に、主成分得点の平均を算出してみると(表6-3-6および図6-1-15)、「古い方がよい」と回答した人は、第1、第2主成分が高く、第3、第4主成分が低い。新しい流行のものが嫌いで、古いもの伝統的なものが好きという性格をよく表わしている。

「新しい方がよい」と回答した人は、第1、第2主成分が低く、第3、第4主成分が高い。ちょうど「古い方」と答えた人の逆の結果である。特に、第3因子が高く、古いものに対するマイナスの嗜好を表わしている。

「どちらでもない」と答えた人は、第3主成分がやや低く、第4主成分が心持ち高い。古いものはよいが伝統的価値をもつものはやや好きではないことを示している。古いものでもコロニアル系を好むタイプと考えられる。

2) 環境の古さ・新しさとの関係

次に環境の古さ・新しさに対する志向別に主成分得点の平均を算出した(表6-3-7および図6-1-16)。

まず、「古い方がよい」と答えた人は、第1主成分がかなり高く、第2主成分もやや高い。第3、第4主成分はやや低めである。流行性のものがまったく好きではないタイプと考えられる。

次に「新しい方がよい」と答えた人は、第1、第2主成分が低いパターンである。流行のもの、新しいものが好きだが、古いもの、伝統的なものに対しては特に嫌いということもないタイプと考えることができる。

「どちらでもない」と答えた人は、第1主成分が低く、第3、第4主成分がやや高い。流行のものが好きで、古いもの、伝統的なものがやや嫌いなタイプである。

3) 住宅および環境の古さ・新しさとの関係

表6-3-5 主成分負荷量（伝統的・近代的要素に対する嗜好）

項目	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分	第5主成分	第6主成分	第7主成分
マリオボロ散策	0.75046	-0.01262	0.06767	0.08973	0.20522	0.00614	-0.03086
ジャランソロ散策	0.61503	0.31472	0.01515	-0.11535	0.12347	-0.06121	0.12825
映画観賞	0.60892	-0.05396	-0.17932	0.10589	-0.42711	-0.00289	-0.08566
スーパーマーケットでの買物	0.58211	0.03313	0.15076	-0.28311	0.01836	0.18790	-0.14678
スチールフェンス	0.20190	0.73749	0.06979	0.00432	0.04844	-0.04330	-0.09497
ブルムナス	0.18336	0.35876	-0.18756	0.20964	0.46303	0.29370	0.16320
スペイン風住宅	0.16409	0.64371	0.10613	-0.15582	-0.20306	0.04421	0.10660
古いオランダ時代の住宅	0.11544	0.01643	0.77857	0.10490	-0.16883	0.01893	-0.07344
アキオンでのジャマイカの儀式	0.08955	-0.12802	0.23519	0.16796	0.50930	0.33743	0.02756
伝統的住宅	0.08182	-0.10490	0.46507	0.41094	0.15885	0.18904	0.01385
アスファルト舗装道路	0.07243	0.02955	0.03867	-0.12108	0.03858	0.79863	-0.09394
バール・リカルジョでの買物	0.06760	-0.06599	-0.05989	-0.03689	0.76485	-0.10571	-0.03773
ナゴ	0.01732	0.19531	-0.06011	-0.46306	0.13635	0.26332	0.58368
中央郵便局	-0.05249	0.09150	0.77912	-0.01505	0.10868	0.00617	0.06763
月曜から木曜までの断食	-0.06943	-0.14385	0.03343	0.19412	-0.03375	-0.10676	0.82938
ワヤン観賞	-0.07005	-0.02750	0.09512	0.80956	0.06555	-0.04020	0.03754
パティック着用	-0.09862	-0.04999	0.07172	0.46279	-0.05278	0.52948	0.21908
ベチからベチへの移り変わり	-0.34893	0.62573	-0.09900	-0.00858	0.01716	-0.00129	-0.10235
固有値	2.29448	2.14676	1.58996	1.44493	1.12275	1.09479	1.01334
寄与率 (%)	12.7	11.9	8.8	8	6.2	6.1	5.6
累積寄与率 (%)	12.7	24.7	33.5	41.5	47.8	53.9	59.5

表6-3-6 主成分得点（住宅の古さに対する意向との関係）

項目	標本数	第1主成分		第2主成分		第3主成分		第4主成分	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
古い方がよい	84	0.13072	1.09641	0.21156	1.07596	-0.07318	1.00708	-0.13342	1.08340
新しい方がよい	59	-0.11886	1.06123	-0.27684	1.02483	0.26763	1.04376	0.13748	1.05703
どちらでもよい	100	-0.01906	0.87442	0.00320	0.88573	-0.10385	0.95822	0.04948	0.87668

表6-3-7 主成分得点（環境の古さに対する意向との関係）

項目	標本数	第1主成分		第2主成分		第3主成分		第4主成分	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
古い方がよい	116	0.25965	1.04475	0.07199	1.05279	-0.10619	1.00073	-0.07868	1.05885
新しい方がよい	38	-0.30514	0.93687	-0.19604	1.11947	-0.01819	1.06378	0.03786	1.03961
どちらでもよい	87	-0.22390	0.85529	0.00338	0.87980	0.09851	0.93754	0.09863	0.89833

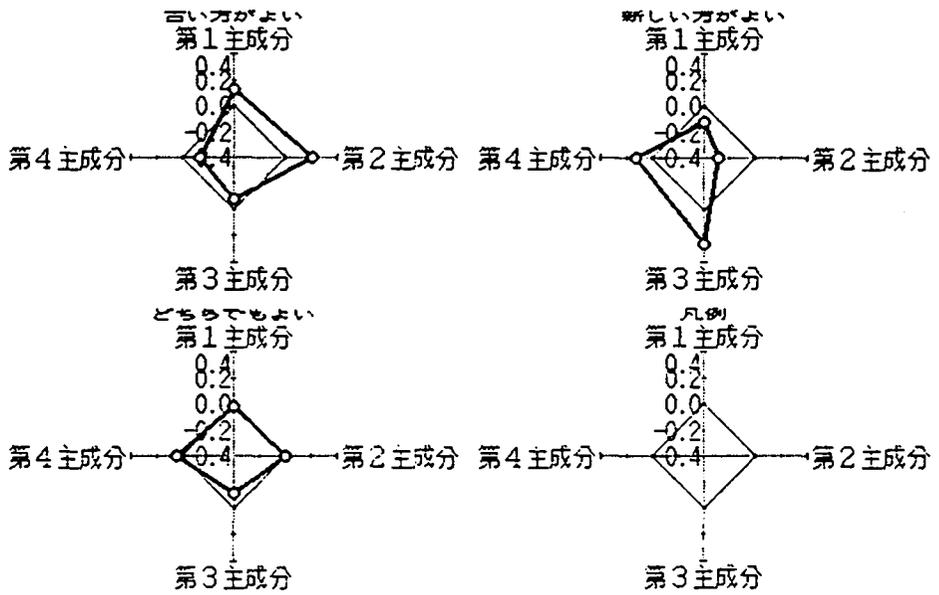


図 6 - 1 - 15 主成分得点 (住宅の古さ・新しさ)

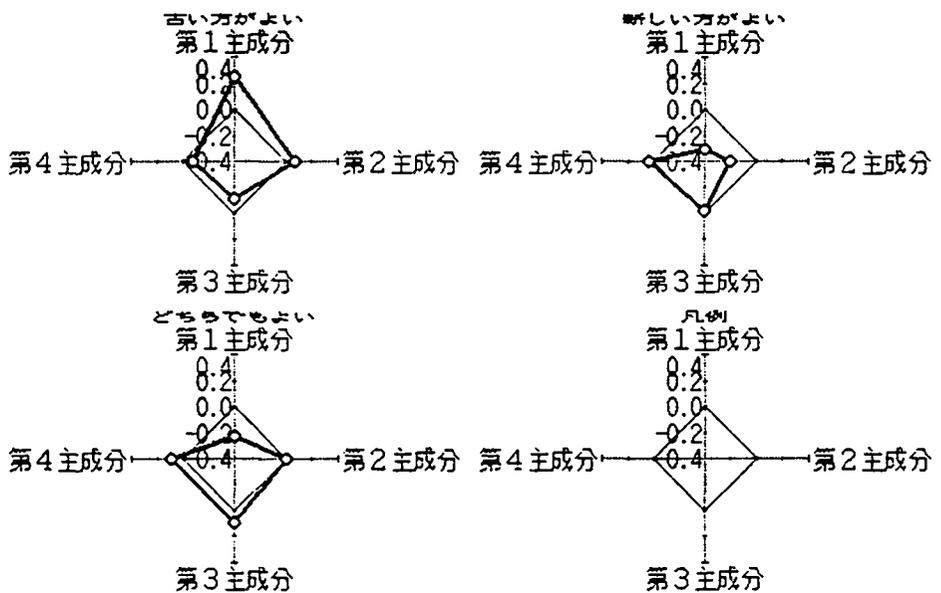


図 6 - 1 - 16 主成分得点 (環境の古さ・新しさ)

1) および2) のクロス別に同様の分析を行なう(表6-3-8および図6-1-17)。

「住宅環境ともに古い」と答えた人は、流行性のものが好きではなく、伝統的なものに対して指向性をもつタイプと考えられる。

「住宅・環境ともにどちらでもよい」と答えた人は、流行のものがやや好きで、その反面伝統的なものにやや興味がないタイプと考えられる。

「住宅は新しく環境は古い方がよい」と答えた人は、新しいものに興味をもつタイプである。

「住宅はどちらでもよいが環境は古い方がよい」と答えた人は、流行のものに興味がなく、古いものに興味があるタイプである。

「住宅・環境とも新しい方がよい」と答えた人は、新しいもの、流行のものに興味を示し、古いものに興味がないタイプである。

「住宅はどちらでもよいが、環境は新しい方がよい」と答えた人は、古いもの、伝統的なものに興味があるが、同時に流行のものにも少し興味を示すタイプである。

「住宅は古いほうがよいが、環境はどちらでもよい」と答えた人は、流行のものに対して強い興味をもつタイプと考えられる。

4) 歴史的地区に対する考え方

歴史的地区に対する考え方別に同様の分析を行なった(表6-3-9および図6-1-18)。

「スクラップアンドビルド」を選択した人は、古いものに対する興味をまったく欠いていることをよく示す結果となっている。

「現状維持保全」「修復利用」「ファサード保存」は得点パターンに大差はない。

「その他」を選択した人は、流行のものに対する興味が弱く、古いものに対する興味が強い。

「興味がない」と答えた人は、流行にも、伝統にも興味がないが、古いものが比較的好きなタイプである。

5) 歴史的地区の保全目的

歴史的地区の保全目的別に同様の分析を行なった(表6-3-10)。

「経済効果」を選択した人は、古いもの、伝統的なものに対する忌避が強く、新しいものに対する関心が強いことがわかる。

「住民第一」を選択した人は、伝統にやや関心があることが読みとれる。

「文化遺産」を選択した人は、「住民第一」の場合とほぼ同じである。

表 6 - 3 - 8 主成分得点（住宅の古さおよび環境に対する意向との関係）

項目	標本数	第1主成分		第2主成分		第3主成分		第4主成分	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
住宅：環境									
古い：古い	68	0.35608	1.01168	0.17828	1.08539	-0.08752	1.03227	-0.19360	1.11835
不問：不問	63	-0.10098	0.78489	-0.02088	0.88657	0.03167	0.94724	0.10343	0.88490
新しい：古い	23	-0.01789	1.15190	-0.28572	1.17734	-0.00978	1.07089	0.08371	1.12077
不問：古い	25	0.24725	1.02720	0.11189	0.77154	-0.24565	0.86168	0.08452	0.79928
新しい：新しい	21	-0.28949	1.11155	-0.48619	1.06212	0.36795	0.85538	0.15211	1.12342
新しい：不問	12	-0.21773	0.79091	-0.00700	0.67737	0.41943	1.09432	0.14587	0.99250
不問：新しい	12	-0.14377	0.94367	-0.09707	1.13600	-0.51993	1.11647	-0.30674	0.97566
古い：不問	12	-0.87536	1.03524	0.14107	1.06695	0.12850	0.69160	0.02620	0.94996

表 6 - 3 - 9 主成分得点（歴史的環境に対する考え方との関係）

項目	標本数	第1主成分		第2主成分		第3主成分		第4主成分	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
経済効果	42	-0.01245	0.95327	-0.22793	1.03368	0.27089	0.98801	0.23040	0.89818
住民第一	32	-0.09105	1.02732	-0.06711	0.92122	-0.04434	1.23472	-0.13181	1.18989
文化遺産	116	0.07339	1.01904	0.07545	1.02593	-0.01760	0.96759	-0.15988	0.94219
国家威信	31	-0.02799	0.99843	0.22835	0.89142	-0.15770	0.81534	0.09960	0.81119
その他	5	-0.33677	1.28789	-0.04960	0.51036	-0.47992	1.10546	0.90053	1.09424
興味なし	9	0.23977	0.98604	-0.00047	1.07087	0.01594	1.37016	1.03170	0.83358

表 6 - 3 - 10 主成分得点（歴史的環境の保全理由に対する考え方との関係）

項目	標本数	第1主成分		第2主成分		第3主成分		第4主成分	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
スラップ・アンド・ドット	6	-0.08472	1.51305	-0.13817	0.83465	0.83351	1.65549	-0.11797	1.42750
現状維持保全	87	-0.00956	0.98541	0.11635	1.00549	-0.10974	0.95207	-0.01747	0.95395
修復利用	99	-0.02707	0.98710	-0.09791	1.00135	0.10811	1.01142	-0.01133	1.05470
フェードアウト保全	35	-0.03151	1.07139	0.10816	1.06712	-0.10837	0.93985	0.01435	0.93566
その他	11	0.50992	0.80926	0.07542	0.66584	-0.27685	0.98113	0.10786	0.94190
興味なし	2	0.33475	0.64489	-0.15500	2.49127	-0.31114	0.62663	0.47934	1.11154

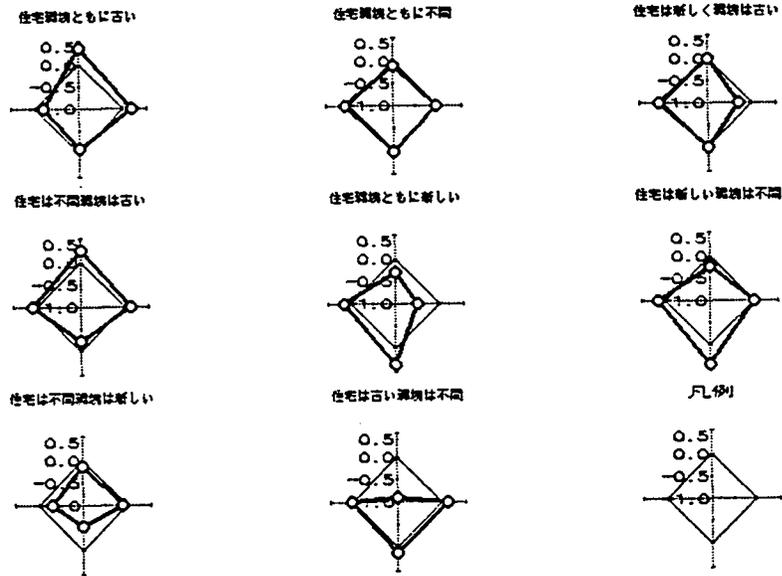


図 6 - 1 - 17 主成分得点（住宅および環境の古さ・新しさ）

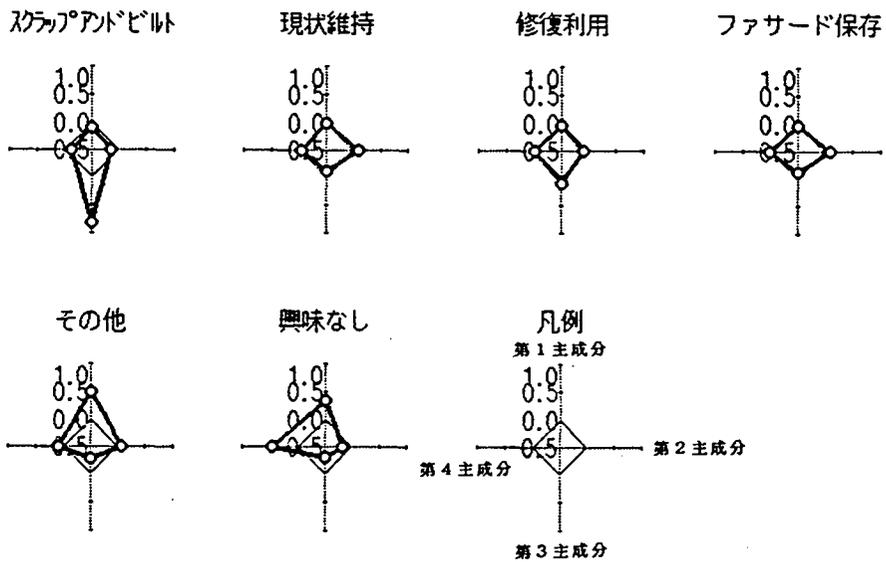


図 6 - 1 - 18 主成分得点（保全意向）

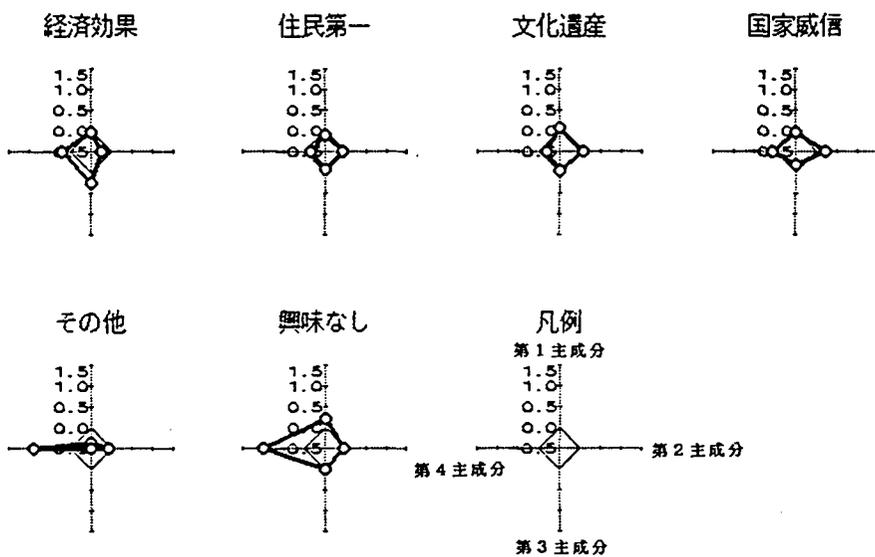


図 6 - 1 - 19 主成分得点（保全目的）

「国家威信」を選択した人は、新しいものに対する忌避がやや強いことがわかる。「興味がない」と答えた人には、伝統に対する強い忌避があらわれている。

6-4 要約

本章では、生活空間の伝統に対する人びとの意識を考察した。具体的には、主として歴史的環境に対するスライド選好実験による歴史的環境に対する景観評価構造の考察、ジョクジャカルタの歴史性についてのアンケート調査による都市の歴史的イメージの考察、主としてアンケート調査による歴史的環境に対する意向および志向に関する考察を行なった。その結果の概要は次の通りである。

まず、因子分析の結果、ジャワ島都市における市街地および街路景観イメージの因子として、健全性、伝統性、親密性、平凡性の4つが抽出された。その結果をもとにした景観類型化の結果、ジャワの貴族的伝統をひく景観、コタグデやジュロン・ベテンの路地景観、プチナンなど異質性をもつ外来の伝統をひく景観、旧オランダ人居住地区など計画的開発住宅地の景観、現代的景観、プチナンや低所得者向けフラットなどの雑然とした景観、商業地景観、カンブンの景観に分類された。

各スライド種類別の概要は次の通りである。

- ①コタグデは、伝統性が高く意識されている。
- ②プチナンは、健全性、親密性についてマイナスイメージがある。
- ③カウマンは、伝統性と特殊性が意識されている。
- ④旧オランダ人居住地区は、健全性においてプラス、親密性においてマイナスのイメージがある。また、近代性が意識されている。
- ⑤近代的住宅地は、ややありふれてはいるが、健全性、親密性が正のイメージでとらえられている。また、近代性が意識されている。
- ⑥フラットは、近代的だが健全性の点でマイナスイメージが強い。
- ⑦カンブンは、健全性はマイナスだが、親密性はプラスイメージである。また、伝統性が意識されている。

しかしながら、各地区のイメージは一様ではない。たとえば、コタグデを例にとると、一步地区内にはいりこむと特徴的な路地景観が支配的である。そして、路地を構成する高い塀の内側には、ジャワの貴族的伝統をひく景観が展開する。しかしそれはしばしばカンブンのようなイメージの景観と混交している。コタグデに限らず、1つの地区のなかに複数の、ときによっては、対照的なイメージをもつ景観が混在しており、全体に地区のイメージは多義的であるといつてよいだろう。

一方、景観嗜好は、健全性、親密性、活気性によってとらえられ、伝統的景観に対しては特に強い志向は感じられないが、伝統性の認識には、近代的ビル、コロニアル住宅、カウマンという3つの要素が重要な働きをしていることがわかった。

ジョクジャカルタの歴史的イメージは、建物など物的要素にそくしたものが全体の8割を占めている。そのうち、特に、伝統的都市としての存在様式と不可分であるクラトンに關係する要素が中心を占めている。また、コロニアル建築や、ジョグロ型屋根などのシンボリックな空間構成要素も1つのパターンとしてある。第3章で指摘した中心性との関連において理解しうる。同時に、人びとが、ジャワにおける伝統をクラトンの体現するジャワのヒンドゥ的伝統の系譜を正統とする認識をもつことが推察される。

歴史的環境に対する意向および志向については、まず、インドネシアにおける歴史的環境の保全に対する取り組みの概況をあきらかにした。国家レベルでの保存は、文化財保護的な取り組みに限られている。次に、自治体レベルでは、一部に新しい試みもみられるが、全体としての明確な動きはない。現在のインドネシアでは、急激な近代化の進展という状況下で、歴史的市街地をどのように保存するかについての方向性が確定していないことが1つの問題として指摘しうる。

歴史的地区に対する意向は全体の7割程度が保全に対して肯定的であった。また、歴史的環境の保全に対しても過半が保全に賛意を表していた。その理由では文化遺産が最も重視されており、次の経済効果との差はかなり大きい。同時に、住宅および居住環境の古さ・新しさの志向でも新しさより古さを志向する傾向が強いなど、全般に歴史的なもの、あるいは、古いものに対する明白な志向がみうけられた。

それは、ライフスタイルと一定の關係にあることが推察され、その限りでは今後の生活の近代化による価値意識の変容によって歴史的環境に志向が変化する可能性もあるが、現在のところ、ライフスタイルには伝統的あるいは近代的価値への極端な志向は感じられない。

本章では、以上にもみるように、地区景観やその伝統性のイメージが多義的であること、都市の歴史性がクラトンのように中心性象徴性が高く、ヒンドゥの系譜をひく存在によって認識されること、基本的には生活空間の伝統的存在様式が肯定的にうけとられていること、同時にそれはライフスタイルの近代化と一定の關係をもつことを指摘した。

補注

- (1) 船越徹「意識をとらえる【SD法】」日本建築学会編『建築・都市計画のための調査・分析方法』井上書院、1987、pp.65-70、久隆浩「居住地に対するイメージ調査と満足度調査の比較」日本都市計画学会学術研究論文集、1984、pp.187-192、などを参考にした。
- (2) ケヴィン・リンチ『時間の中の都市－内部の時間と外部の時間』東大大谷研究室訳、鹿島出版会、1976
- (3) 1988年8月に実施した文化教育省考古学研究所に対するインタビューにもとづく。
- (4) ガジャマダ大学建築学科講師インダルトロ氏による。

総括および結言

1 総括

(1) 本研究の位置づけ

本論文を終えるにあたり、本研究の位置づけを明確にすると同時に論点を整理するために、一部緒論と重複することにはなるが、研究をはじめるといった経緯を述べておきたい。

本研究の出発点には開発途上国における都市問題の存在がある。当初、研究上の関心は大都市における居住問題におかれていたが、実際にインドネシア都市をフィールドとして調査を行なう過程で、途上国といわれる地域の都市が「途上国都市」というカテゴリーによってひとまとめにくくするにはあまりに異なった歴史や文化をもつ个性的存在であることに気づかされた。

考えてみれば、途上国都市につきもののように考えられているスラムも、それをスラムとみなす価値観を前提にしていることは疑いない事実である。スラムなど存在しないということではもちろんないが、海外都市の研究においては文化的背景の理解が必須の要件であることを示している。途上国都市に対する質量両面にわたる情報不足は、これらの都市に関する正当な理解を醸成するうえで大きな障害となっている。

途上国ということばには遅れた地域というイメージが抜きがたく随伴している。それは、たとえば、一般には「未開地域」を研究対象とする学問と信じられている人類学のフィールドであったことなど、多くの歴史的事実が積み重なった帰結だが、前述のスラムなど、問題ばかりをあつかってきた途上国都市研究のあり方に起因する面がないわけではない。

とはいえ、このフレームはこれまでのところきわめて重要である。現実の世界が経済的富の偏在によって分断されている厳然たる事実をいたずらに糊塗することにはあるべきではない。むしろ問題は、途上国都市のもつ歴史や文化に対する理解がともなわないことであつたと考えられる。

実のところ、これは単なる「理解」にとどまる問題ではない。近年多くの分野で、途上国における各種問題に対する取り組みがうまくいかない理由の1つとして文化的要因が指摘され、その理解の必要性が説かれている。都市問題についても例外ではあるまい。

これまで、途上国都市における経験を通じて、近代都市計画に対してさまざまな批判がなされてきた。それは必ずしも近代都市計画の全面的否定を企図するものではなく、また、じゅうぶんに体系化しうる性質のものでもなかったわけだが、都市計画の

パラダイムシフトといわれる現在の潮流を生む主因となってきた。

その理由は、従来の近代主義的な計画論なり手法が現実の生活空間の実情にかならずしも合致しない点があったためと考えるのが妥当であろう。たしかに、近代都市計画が19世紀の英米の都市およびその社会を背景として成立したことは事実であり、そのことがその提示するモデルを拘束することになっていると考えられる。

そういう意味では、現在必要とされているのは、近代都市計画の相対化という視点にたつ2つの営為、一方では、近代都市計画の技術としての普遍性の検討、また、一方では、生活空間の現実に立脚した都市計画の構想であるといつてよいだろう。

途上国都市に限らず、海外都市研究の究極の意義は、まさに、この点、つまり、自国の都市計画を相対化し、世界のなかに定位することにあると考えられる。特に、途上国都市を対象とした後者の研究、つまり、生活空間の存在様式を認識し、それを計画へと結びつける方法論の模索は、その都市問題への取り組みに対してもなんらかの貢献をしようものと期待しよう。

本研究では、以上のような問題意識にもとづき、ジャワ島都市を対象として、その歴史的に形成されてきた生活空間の存在様式をあきらかにすることを目的として設定し、フィールド調査の結果えられた知見をもとに、本論において提示した考察を試みた。それは、生活空間の存在様式に基盤をおく生活空間整備手法を模索するための基礎的作業であったと位置づけられる。

一般にジャワ島都市は、市街地のかなりの部分がカンブンとよばれる高密度居住の形態で占められており一見ただけではわからない面もあるが、華人系が住む都心商業地区、現在は高級住宅地となっているかつてのオランダ人居住地区、敬虔なイスラム教徒が居住するカウマンなど性格の異なるいくつかの地区によって構成されていることがわかる。

それは、ジャワ島都市が、多様性という表現によって語られることの多い多民族社会であることと対応するものと考えられ、空間的特徴からそれぞれ異なった社会集団に属することの判断が容易である。いずれも本来異なった文化あるいは文明に属する要素であるが、ジャワを舞台とした諸民族の活躍の歴史的過程で形成され、生活空間の伝統として現代まで維持されてきたものと考えられる。

したがって、都市の歴史性なり伝統性といったものを明確に定義することが困難であり、こうした性格をもつ都市を理解するキーワードとしての民族性に気づかされることになった。本論文において主要なモチーフとしてとりあげた生活空間の伝統は、その主たる維持継承主体として民族を想定しており、その観点から都市における生活

空間構造を描写することになった。

より具体的には、1つの都市が民族的伝統という観点からは多面的存在であり、同時に、1つの伝統もまた多くの系譜が混交することによって成立した多義的存在であり、それを構造化することにより都市が成立していることを描写することを試みた。したがって、本研究においては、おおむね今世紀中期の植民地支配の終焉までに形成された市街地を主たる考察対象とした。

(2) 本論文の要約

本論の構成は3部6章からなっている。各部各章ごとにえられた知見を要約する。

第1部は、ジャワ島都市における生活空間の構造を考察するための第一歩として、市街地構成の実態を解明することをねらいとするものであった。

ジャワ島都市はモザイク状の市街地構成をもつといわれてきたが、実際の都市がどのような空間構成をもち、それが社会的文脈においてどのように構造化されているかについては必ずしもあきらかではなかった。

そこで、モザイク状市街地構成が社会集団の伝統を維持、継承する上でなんらかの役割を果たしており、それによって社会のあり方と密接な関係をもっているという仮説を検証するために、主として観察を中心とするフィールドワークおよび研究者へのインタビューにもとづき、市街地構成の実態の解明を試みた。

第1章では、市街地構成を理解するモデルを構築することをねらいとして、都市の歴史的形成の過程で自然に生じた、物的現象および人びとの意識両面での市街地の分節化に着目し、それを<自然の市街地類型>という類型概念を用いて把握した。

その結果、ジャワ島都市は複数の類型別市街地によって構成されており、それぞれの類型は、そこを生活空間としている宗教や民族に準拠する社会集団の存在に関係すると考えられる空間構成あるいはその要素を空間的特徴としてもっていることをあきらかにした。類型別市街地によるジャワ島都市の類型化が可能だが、後述するように市街地には今回の調査の対象からはずした部分も存在しており今後の課題である。

次に、主として文献資料にもとづき各類型の歴史的背景を考察した。ジャワ島都市の市街地構成は、ヒンドゥー、イスラムなどの宗教、および、中国、アラブ、オランダなどの民族、また、それらの背後にあるさまざまな文化、文明にもとづく生活空間の伝統が混交することによって形成されたと考えられる。

以上、ジャワ島都市が複数の異なった伝統の系譜に属する類型別市街地によって構成されており、そのために、その空間構成においても、生活空間の伝統という点でも多面性をもつことを指摘した。

しかし、第I部のねらいとして提示した、都市がどのような空間構成をもち、それが社会的文脈においてどのように構造化されているかという設問にこたえを出すためには、それぞれの類型別市街地を1つの都市空間および社会のなかに位置づけることが必要になる。

そこで、第2章では、前章であきらかにした市街地類型をもちいて空間構成および社会的位置づけを明快にするために、植民地期以前から土着権力のみやこであったジョクジャカルタを対象として、インタビューおよび文献資料調査によって類型別市街地の立地とその形成過程を把握し、その上で5つの類型に対応する5地区を選び、フィールド調査によって居住者属性と空間構成および居住環境の特性を把握した。

ジャワ島都市には一定の市街地構成をもつケースが観察される。それは、土着権力のクラトンを核に発展してきた都市に典型的にみることができるもので、空間的にはモザイクということばのもつ語感とは異なり一定の構造をもつものといつてよい。

その社会的位置づけについては、前章で述べたように、類型別市街地が特定の社会集団の存在と結びつき、それぞれ特徴的な空間構成および居住環境を維持していることを確認した。しかしながら、居住者の社会的位置づけについては、上述した特定の社会集団との関連の事実を指摘するにとどまっており、それがどの程度の深度をもつか、あるいは、経済階層など別の尺度の上ではどのように位置づけられるかなどについては必ずしもあきらかにしえなかった。その説明は今後の課題である。

空間構成および居住環境については、それぞれの社会集団が生活空間に対してもつ志向がかなり解明できたと考えられる。類型ごとに異なった点も多く、それが、社会集団およびその生活空間である類型を差別化し、その伝統を形成することにもなっていると考えられるが、一方、共通点もいくつかある。

居住環境を構成する要素のうちで社会環境がもっとも重要な意味をもつことはその1つである。今回の調査対象地区のなかで物的環境がもっとも良好と考えられるコタバルにおいて居住環境全体に対する総合評価が低く、逆にカウマンやカディパテン・キドゥルでは、物的環境については相対的に低い評価にもかかわらず総合評価はそれほど低い値を示さなかった。過密など物的環境への不満を社会環境のよさが補うことになっていると考えられる。

これは、イスラム・コミュニティとして知られるカウマンおよびコタグデで社会環境の評価がきわめて高いことが示すように、宗教などの社会的ファクターの重要性を意味するものと考えられるべきと思われるが、それにとどまらず、家屋密度の高さなど空間的ファクターとの関連において生活空間のジャワ的あり方を考える上で示唆的であ

る。しかし、その詳細の解明は今後の課題である。

以上、ジャワ島都市には空間構成に一定の構造をもつケースが存在し、それが1つの都市社会における社会集団の住みわけによって形成維持されており、その意味では社会的にも構造化されたものであることを指摘した。

第I部では、ジャワ島都市において複数の生活空間の伝統が歴史的に混交することによって、空間的にも社会的にも多面性が形成されたことを指摘した。それは、いいかえれば、ジャワ島都市における生活空間の伝統を見取図化することであったと位置づけられる。

しかしながら、各類型別市街地における生活空間の伝統は、過去と現在で社会集団が異なっている旧オランダ人居住地区が示すように単系的なものではない。それぞれの類型自体がさらに多面的な履歴をもつとすれば、都市全体としての伝統の系譜はさらに複雑したものと考えらるべきであろう。そこで、第II部では、事例として1つの系譜をとりあげ、生活空間の伝統の形成過程をより詳細に検証していくことをねらいとして設定した。第I部を総論とすれば各論にあたるということができらるだろう。

ここでは、植民地期以前の都市における生活空間の存在様式を伝統として継承していると考えられる市街地、つまり、類型3および5を考察の対象として選んだ。その理由は、これらの市街地における伝統は通常ジャワ固有のものとして扱われ、近代化に対置されることが多いからである。したがって、伝統を静的固定的なものではなく動的流動的なものとして描写するという本研究の意図に照らしてもっとも適当であると判断された。

第II部では以上のような意図から、伝統的都市の系譜を遡行するとともに、現在および将来の変容について考察した。そのなかでの第3章の役割は、伝統の系譜を考察することであった。具体的には、都市における生活空間の伝統継承を空間構成を媒介として把握することであり、歴史上に存在した都市および現存する伝統的都市について、既存研究およびフィールド調査の結果をもとに、都市、地区、建物などいくつかの異なるレベルでのレイアウト・パターンを検討した。

ジャワにおける空間構成原理の系譜は、ジャワにおけるプレヒンドゥー期に起源をもつ土俗的原理であるマンチャパットを核として、その後さまざまの外来の影響がかぶさったものと解釈するのが一般的である。その主なものはヒンドゥー、イスラム、植民都市であるが、こうした外力によって基本的な原理が大きく変容するに至らなかった点にジャワにおける伝統継承の特性をみる見解がある。

伝統的都市の市街地空間の構成原理の中核となるのは中心性、軸性、入れ子性であ

る。中心性は、たとえばボロブドゥールのプランにみることができる。その作用の結果として生みだされる同心円性はかつての国家あるいは都市のあり方と密接に関係している。

また、軸性は、クラトンのレイアウトなどにみることができる。すべての建物が南の海の方角を向くコタグデの住居の場合のように、方位と結びつくことによって市街地に一定の規則性を生むことになっている。

入れ子性は、クラトンを中心としてそのミニチュアであるダレムが配される仕組みにみることができる。中心性と密接な関係を持ち、国土や市街地のように一定の領域が形成される際に重要な役割を果たしている。

こうした空間構成原理は、単に空間構成だけではなく、人びとの意識や人間関係のあり方などと密接な関係をもつものと考えられ、同一原理にしたがいながら、社会階層に応じて様式が精緻化していく伝統的住居の存在様式にそれを端的にみることができる。

かつては中部ジャワの住居、とりわけ貴族的伝統を濃くひいている様式住宅はクラトンと同じ原理によってつくられ、そのミニチュア版という性格をもつものであった。こうした存在様式は入れ子性によって解釈しうるものであり、近代的住居とは異なるものであったが、近代化による生活変容による影響が予想される。

以上、1つの類型がきわめて多面的な伝統の系譜をもつ、いいかえれば、多義的な伝統をもつことを指摘した。

第4章では、前章で分析の対象とした伝統の系譜に属すると考えられる市街地がどのように変容しつつあるか、また、将来変容する可能性をもつかについて考察した。より具体的には、伝統的都市であるコタグデを対象として、伝統的住居、および、複数の伝統的住居の連続によって形成される住居クラスターの変容の要因とその方向性を検討した。前者は住居レベル、住居クラスターは近隣レベルの生活にそれぞれ対応するものとして調査が設計されている。

コタグデの住居のうちダレムをもつ様式住居を、それ以外の非様式住居と比較すると、双方の居住者の間には生活様式や価値意識の差が認められた。伝統的住居の変容が近代的な生活様式や価値観の浸透と密接な関係にあることが推察された。

変容の要因と考えられるものは、1つは経済的な要因で、そのために様式住居を維持できないケースであり、もう1つは生活様式上の要因で、望ましい住宅として近代的住居が志向されるケースである。

前者については、潜在的な要因として様式住居が商品価値をもつこと、また、相続が

実際の変容の契機となることがわかった。経済状況の悪化がその背景としてある。後者については、生活様式の近代化にともない、住居のデザイン、機能に対する要求が変化しつつあることがわかった。

続いて、住居クラスターの変容を事例として、近隣空間の要因について考察した。調和と互惠を尊ぶ態度にはそれほど変化がなく、行政指導など外的な要因もあると考えられるが、住居クラスターの変容の明確な要因は不明である。伝統的都市の変容は明白な事実であるが、住居レベルに比べてコミュニティレベルの生活変容はかなり遅いと判断される。

以上、伝統的市街地における伝統的な空間構成が変容しつつあること、その要因として生活変容が存在することを指摘した。それは、こうした市街地が、現在、新たな伝統形成のプロセスにあることを示すものといえるが、第Ⅱ部で描写したのは多面的な伝統の1つに過ぎず、実際にはさらに大きな枠組みのなかで変容が進行していると考えられる。その説明は今後の課題である。

第Ⅰ部および第Ⅱ部では、生活空間の存在様式の物的側面について、その現状と系譜について論じてきた。第Ⅲ部では、それを受けつつ、人びとの内的構造としての伝統に光をあて、生活空間の伝統が今後どのように継承されていくかについて考察することをねらいとした。具体的には、生活空間の伝統の維持継承主体である人びとが生活空間およびその伝統に対してもつ志向や意識の考察を通じて、生活空間およびその伝統にどのような論理がはたらいているかを探ることを試みた。

第5章では、住居および居住環境に対する人びとの志向を考察した。まず、主として住宅写真の選好調査などの方法を用いて、住宅デザインに対する志向を、次に、理想の居住環境についてのアンケート調査によって、居住環境に対する志向を、最後に、新興住宅団地における居住者による居住環境形成についての事例研究にもとづき、住宅および住宅地に対する要求をあきらかにした。

中部ジャワ住民にとっての住宅の規範は、オランダ系コロニアルスタイルおよび近代的デザインに求められると考えられる。ジャワ伝統的デザインへの志向は特に高くないが、逆に住宅様式に対するこだわりはこのタイプを選好する人に多い。それは、公共建築にジョグロが多用されることと関連するものと考えられる。

デザイン志向は以上の傾向を示すものの、具体的な住空間構成への志向となると、平屋志向など伝統への傾倒も強く、実際の増改築行動は、これらを折衷したかたちで進められていると考えられる。

コロニアル系のデザインに対する志向が強い点には、植民地期から現在に至るまで

類型1の市街地が高級住宅地として位置づけられてきたことによる影響をみる事ができるが、全般に様式に対するこだわりはあまり感じられず、むしろ、庭や広さなど機能的要因が支配的であった。

理想の居住環境についての結果は、全体的傾向では、近隣の物的環境に対する関心が最も高く、次に抽象性の高い形容詞表現による回答で全体の4分の3を占めた。居住環境に対する志向は、主として近隣における物的環境に重心がおかれており、実際の生活における問題点の反映とみることができる。また、第I部で指摘したように、社会環境に対する関心にも強いものがある。

新興住宅団地における住宅の増改築は、個室、台所・食堂などの機能的空間から客間、居間などのゆとりの空間へと向かう傾向にあることがわかった。しかし、ほとんどの住宅で外部空間に対する改変が行なわれており、住宅のファサードデザインの個性化が意識されている。こうしたファサードや玄関に対する関心の強さに、1つの社会的文化的要因の存在が感じとれる。

また、過密による圧迫感を緩和するためか植栽が盛んになされているが、こうした環境の改変は公共空間にまでおよんでいる。井戸の共同利用のあり方、あるいは、敷地境界の曖昧さなど、公私の概念が必ずしも明快ではない。こうした点、また、小店舗が多く設置され土地利用の機能的混合化がみられることなどは、カンブンなどとの共通性が高い現象であり一定の文化的要因と考えるとよいだろう。

以上、生活空間を構成する住居やその周辺の居住環境などに対する人びとの意識は、必ずしも伝統対近代といった単純な図式によって把握できるものではなく、社会的文化的に伝統的生活空間の存在様式に拘束されながら、生活を営んでいく上での利便性や快適性に基礎をおくものであることを指摘した。

第6章では、生活空間の伝統に対する人びとの意識を考察した。具体的には、主として歴史的環境に対するスライド選好実験による歴史的環境に対する景観評価構造の考察、ジョクジャカルタの歴史性についてのアンケート調査による都市の歴史的イメージの考察、主としてアンケート調査による歴史的環境に対する意向および志向に関する考察を行なった。

まず、因子分析の結果、ジャワ島都市における市街地および街路景観イメージの因子として、健全性、伝統性、親密性、平凡性の4つが抽出された。その結果をもとにした景観類型化の結果、ジャワの貴族的伝統をひく景観、コタグデやジュロン・ベテンの路地景観、プチナンなど異質性をもつ外来の伝統をひく景観、旧オランダ人居住地区など計画的開発住宅地の景観、現代的景観、プチナンや低所得者向けフラットな

どの雑然とした景観、商業地景観、カンブンの景観に分類された。

しかしながら、各地区のイメージは一様ではない。たとえば、コタグデを例にとると、一步地区内にはいりこむと特徴的な路地景観が支配的である。そして、路地を構成する高い塀の内側には、ジャワの貴族的伝統をひく景観が展開する。しかしそれはしばしばカンブンのイメージの景観と混交している。コタグデに限らず、1つの地区のなかに複数の、ときによっては、対照的なイメージをもつ景観が混在しており、全体に地区のイメージは多義的であるといっていよう。

一方、景観嗜好は、健全性、親密性、活気性によってとらえられ、伝統的景観に対しては特に強い志向は感じられないが、伝統性の認識には、近代的ビル、コロニアル住宅、カウマンという3つの要素が重要な働きをしていることがわかった。

ジョクジャカルタの歴史的イメージは、建物など物的要素にそくしたものが全体の8割を占めている。そのうち、特に、伝統的都市としての存在様式と不可分であるクラトンに関係する要素が中心を占めている。また、コロニアル建築や、ジョグロ型屋根などのシンボリックな空間構成要素も1つのパターンとしてある。第3章で指摘した中心性との関連において理解しうる。同時に、人びとが、ジャワにおける伝統をクラトンの体現するジャワのヒンドゥ的伝統の系譜を正統とする認識をもつことが推察される。

歴史的環境に対する意向および志向については、まず、インドネシアにおける歴史的環境の保全に対する取り組みの概況をあきらかにした。国家レベルでの保存は、文化財保護的な取り組みに限られている。次に、自治体レベルでは、一部に新しい試みもみられるが、全体としての明確な動きはない。現在のインドネシアでは、急激な近代化の進展という状況下で、歴史的市街地をどのように保存するかについての方向性が確定していないことが1つの問題として指摘しうる。

歴史的地区に対する意向は全体の7割程度が保全に対して肯定的であった。また、歴史的環境の保全に対しても過半が保全に賛意を表していた。その理由では文化遺産が最も重視されており、次の経済効果との差はかなり大きい。同時に、住宅および居住環境の古さ・新しさの志向でも新しさより古さを志向する傾向が強いなど、全般に歴史的なもの、あるいは、古いものに対する明白な志向がみうけられた。

それは、ライフスタイルと一定の関係にあることが推察され、その限りでは今後の生活の近代化による価値意識の変容によって歴史的環境に志向が変化する可能性もあるが、現在のところ、ライフスタイルには伝統的あるいは近代的価値への極端な志向は感じられない。

以上、地区景観やその伝統性のイメージが多義的であること、都市の歴史性がクラトンのように中心性象徴性が高く、ヒンドゥの系譜をひく存在によって認識されること、基本的には生活空間の伝統的存在様式が肯定的にうけとられていること、同時にそれはライフスタイルの近代化と一定の関係をもつことを指摘した。

(3) 生活空間の重層性

ジャワ島都市は複数の類型別市街地によって構成されている。本論文では、それを9つの類型として描写した。それぞれの類型は、特定のサブカルチャーをもつ民族や宗教に準拠する社会集団のエンクレーブであり、その社会集団の生活空間の伝統にもとづく空間構成および居住環境を特徴としてもっている。それは、生活空間の伝統からみた都市の多面性を示すものでもあるが、逆に、そこを生活空間とする社会集団の伝統を維持、継承するための装置として、結果として都市に多面性を賦与することになっていると考えられる。

それは、「分節社会」というジャワ社会の特質に対応している。分節社会とは、社会が多様な要素によってつくられ、それぞれが自律的なものとして存在し、その集合として形成される社会の存在様式のことであり、インドネシアをはじめとする東南アジア一般にみられる特徴とされる(注1)。それぞれが相互的影響下にありながら、同時に自律的な部分の集合によって全体系が形成される。それが、ジャワ島都市のイメージである。

しかし、それが単なるモザイクにたとえられる無秩序なものではなく、一定の構造をもつものであることは指摘した通りである。それは、先在する生活空間に外来の伝統を付加することによって生まれてきたものであり、ジャワにおいては、異なった要素を構造化するなにかが存在するというようにも考えることができる。ジャワ島都市の存在様式を「外力を受けとめるかたち」とみる視座もありうるだろう。

ジャワでは、外来の伝統を比較的すぐにとり入れるが、基層となる部分は不変であるという見解をもつ人は少なくない(注2)。それは、ジャワ的伝統においてはひとつの定説となってきた。たとえば、野口は、ジャワには相反する空間象徴の原理が存在しているとしたうえで、次のように述べている(注3)。

「それは相克的関係よりは、影絵のごとくに二重写しであり、その像の上に全体の合成がなされている。しかも、外部からどんな構造が移入されようと、一旦はその映像に重複して写し出され、この過程で外来の構造は内部化され、さらに内部合成という形成作用が生起している。このように理解すべきではなからうか。」

外来の文明の影響を空間構成原理の一部としてとりこみ、それによって自らを再編するプロセス、その道筋を伝統の系譜として解釈することはそれほど難しくない。伝統形成に関するこうした特性は、ジャワ島都市のシンクレティズムなどとして、これまで議論されてきた通りである（注4）。アガマ・クジャウエン（ジャワ教）はその代表格とみなされており、ヒンドゥー的伝統を正当な伝統とする観念は根強い。

それは、たとえば、植民地支配末期の独立を志向する民族主義運動の過程で、人びとがたびたびヒンドゥーの遺跡を訪れたことによっても知られる。現在でもヒンドゥー的な伝統が近代化に対峙する1つの極として意識されているのは事実だろう。都市の歴史的イメージとしてクラトンがあげられたこと、また、建築のデザインモチーフとしてジョグロ屋根が多用される傾向はこれをよく示すものと考えられる。

いわゆる近代化の進展とともに、生活空間を構成する要素として、こうした伝統が今後とも生活空間の構成原理として継承されていくとは考えにくくなっているのも事実だが、これまでのところ、土俗的なものを核として、その外側に外来の影響が重層的にかぶさるかたちで生活空間の伝統が形成されてきたという見解が支配的である。

一方、中村は、コタグデのイスラム原理運動であるムハマディア運動の観察から、それを純粹なイスラム化を志向するものとみて、こうした定説に異を唱えている（注5）。これは、植民地支配がなければ、ジャワ島都市がイスラム化による内発的發展を遂げていたとする見解とも合致する点がある（注6）が、いずれにせよ、ジャワにおける正統と考えられている伝統が、生活空間の伝統の系譜という観点からみれば、ハイブリッドということばがぴったりするほど異種混交の末に生みだされてきたことは事実であり、このこと自体、生活空間の伝統の多義性を示すものである。

実際の都市は、こうしたジャワ的伝統だけではなく、各種の伝統の多面体である。おそらく、その多くがそれぞれ多義的な伝統をもつものと考えられ、都市全体でみた場合の生活空間の多面性はさらに複雑なものになるだろう。それが、一定の構造をもつことは指摘した通りであり、単なる多面性あるいは多義性ではなく重層性ということばによって形容するのがふさわしいと考えられる。

それは、第II部でとりあげた伝統的市街地の空間構成原理として言及した中心性および入れ子性、とりわけ、王国モデルとの関係、また、前述したグナワンやプリヨトモのモデルなどと共通した問題意識をもつものであるが、その存在様式を正確に描写することは容易ではない。ひとつの比喩を用いて表現してみる。

ジャワ島都市における生活空間の構造は一本の糸にたとえられる。それは何本かのより細かい糸がよりあわさることによってできている。その一本一本は市街地を構成

する類型別市街地の生活空間の伝統である。しかし、その細い糸もまたいくつかの繊維がよりあわさることによってできている。それは、類型別市街地における生活空間の伝統を形成するに至ったいくつかの文化文明要素の系譜である。

たとえば、旧オランダ人居住地区において、オランダ人からインドネシア人エリートに伝統の維持主体が変わったこと、それは、細い糸が途中で変質したことを意味している。1つの都市の生活空間構造は2重によりあわされた糸として表現しうる。問題は、その求心原理はなにかということである。

上のモデルを伝統的市街地の空間構成に適用してみると、類型相互の構造の中心的な位置にジュロン・ベテンがある。それは、みずから世界の中心として、重層性をもつ国家像を体現するものであり、人びとの意識の面からもそのことは確認しえたが、なんらかの中心性をもつのはジュロン・ベテンだけではない。

たとえば、カウマンが同様の性格をもつと考えられる。それは、イスラム信仰が不均等であることを逆説的にシンボライズするものであり、その意味では明白な中心性をもつものだからである。その意味では、ジャワ島の至るところに点在するモスクはカウマンのミニアチュアということができるかもしれない。また、結果として入れ子性を呈すことになっていることも興味深い。

こうした事実から判断すると、基本的にはクラトンの体現する伝統を中心としながらも、多核的で重層的な中心をもつ存在様式が浮かびあがってくる。そういう意味では、伝統をよりあわせる求心原理は、伝統相互を縫いあわせているさまざまな系譜の文化文明要素の存在に帰着すべきかもしれない。

(4) 今後の課題

1) 市街地構成の理解に関する課題

まず、市街地構成に関して残された課題をとりまとめる。

① 図と地としてのカンブン

最大の問題はカンブンをどのように位置づけるかということである。そもそも、カンブンには、定まった定義はなく、用いる文脈によって異なる意味をもつといわれる(注7)。また、都市における位置づけをめぐる多様な意見がある。例えば、カンブンは、農村的なものの表出といわれ、こうした見解の延長線上に過大都市化の議論もある。

カンブンについては様々な論考が行なわれている。布野修司はカンブンを立地によって、アーバン、フリッジ、ルーラルの3つに区分し、その特性を考察している(注8)。クラウセもまた同様の分類を行なっている(注9)。

カンブンを様々な社会指標、あるいは、空間的な特質によって分類することも可能だが、既に述べたように、本研究で言及している各種市街地類型と比べると、カンブンの空間的分節化は曖昧なレベルにある。個々の建物、また、道路パターンなど、1つ1つの要素をとりあげてみると無数のバリエーションをもつにもかかわらず、全体の雰囲気や性格は同質性が高く、空間的要素による類型化の作業を進めていっても、必ずしも現実の感覚と合致する類型化が可能になるとは期待できない。

都市の市街地はこのカンブンといわれる市街地で埋めつくされている。本研究で言及した各種類型を図とすれば地の存在である。このように、歴史的に形成されているが、その特性の把握が難しい市街地について、鳴海は「民族的市街地空間」という概念で把握することを提案している（注10）。このような理解が、もっとも妥当かもしれない。

いずれにせよ、カンブンをどのように位置づけるかについて、より多くのケーススタディが積み重ねられることが必要と考えられる。

②民族の居住の解明

スラカルタなどいくつかの都市にアラブ人居住地区があるが、その実態を解明することはできなかった。その他のマイノリティについても、民族の名称をもつ地区が多く存在する。

特に、プリブミ系と非プリブミ系の分類に比べて、プリブミ系内部の民族による居住地区の解明はかなり困難である。その歴史的形成過程のスタディが必要である。

次に、市街地類型に関する今後の課題について述べる。

各類型は少しずつ変化を遂げつつあることがわかった。その兆しはプチナンの業務地区化、それにとまなう中国的デザインモチーフの消失、また、ジュロン・ベテン地区のカンブン化などにうかがわれる。こうした変容は新しい経済階層の形成にとまなう社会階層の再編によるものと考えられるが、残念ながらその全貌をあきらかにしていない。それによって都市の空間構成がどのような変化を遂げるかを含めて、今後の課題である。

2) 伝統的都市における生活空間整備をめぐる課題

民家とは自然の一部であると篠原一男はいう（注11）。コタグデの住居は民家というにはあまりに洗練されたものといえるが、時間が生んだ無名の造形という点ではこうした観点からみることが許される面がある。したがって、その変容はコタグデの生態系がかわりつつあることを意味している。

生態系は多くのもののバランスによって成立している。気候など外的環境の変化に

対しては、それによって生じた歪を吸収することによって安定を保つ。生活空間の変化についても同様の理解が必要であろう。したがって、その整備を考える上で、現在進行中の現象を注意深く観察することが必要となる。コタグデを例にとり、そうした問題のいくつかを指摘する。

①様式住居の生産システム

様式住居の需要が今後なくなるとすれば、それにともないこれら住居の生産を支えていたシステム自体が消失することになる。これがインドネシア全土に共通の問題であるかについては言及しうる立場にないが、コタグデの様式住居は少なくとも独立以前に建てられたものであって、ここ40年間はまったく新築されていない。

様式住居の建築の技術、特に、緻密な木彫りの技術は特別の職人の手になるものといわれ、既に後継者にこと欠くようになっている可能性がある。地域の伝統的な建築生産システム全体の変化に留意する必要がある。

②災害・避難用の道路建設

狭い路地のネットワークで形成された市街地では、今後の環境整備において、災害に備えた避難用道路や緊急車両用道路の整備が必要になると考えられる。それが、既存の路地のネットワークをどのように変化させるか。その考慮が必要である。

③土地所有の近代化

最後は、土地所有の近代化の問題である。現在、政府は慣習法的土地所有から近代的地所有への転換を進めている。現状では、コタグデの土地所有の多くは前者であり、転換にともない区画整理的な事業が行なわれれば、この地域の環境が一変してしまう危険性がある。これもまた今後の問題点といえるだろう。

3) 生活空間に対する人びとの意向および意識調査に関する課題

今回は近代化に対置すべき伝統として、ヒンドゥー的伝統の系譜をあてたが、市街地を構成する伝統の系譜に応じて地区ごと、および、地区相互の生活空間に対する意識を細かく検証していくことが必要である。

そのためには、調査方法について少なからぬ問題がある。共同研究というスタンスをとってはいるが、意思疎通の問題ひとつとっても課題は少なくない。本研究では、試験的域をでていない面もある。しかし、生活空間に対する人びとの意向および意識調査の研究は大きく遅れており、方法論の開発を含めて今後多様な試みが行なわれる必要がある。

2 結言

(1) 生活空間の伝統にもとづく整備手法の方向性

1) 部分から全体へと向かう計画手順の必要性

近代都市計画への批判の立場からこれまでなされてきた提案のなかで、新しいパラダイムの可能性をもっとも強く印象づけたのはアレグザンダーによるパターンランゲージであった。その主張には多くの傾聴すべき点があるものの、現時点において無条件にどこにでも適用できるものとは考えにくい。

しかし、基本的に現実の生活空間の認識に基礎をおく計画論である点は、ときを同じくして、途上国都市のみならず先進国における大都市の都心再開発の経験を通じて注目されるに至ったオンサイト型整備および保全修復型整備など、現在の計画論の潮流と一致しており示唆的である。基本的には同一の文脈において理解されるべきものであり、それを一歩前進させ計画論へと発展させた点を評価することができる。

これが注目を集めているのは、個人的記憶など生活の舞台としてこまやかなひだが織りこまれた現実の生活空間を新規につくりだすものによって代替することは困難であり、また、経済的な面でも不利であることなどいくつかの理由があるが、結局、環境の改変をそこに住む人びとの心理的影響を考慮しつつ行なうことの意義が次第に実感されるようになってきたことによるものであろう。

その計画単位は、たとえば、コミュニティなど、いずれも小さく設定されている。それは、現実の生活空間が小さな単位からできていること、また、上述したように、計画にあたってはそこに住む人の実感しうる範囲をとるべきことを考慮した結果と考えられるが、ジャワ島都市の現実はその必然性を強く感じさせる。

ジャワ島都市は生活空間の伝統が重層的に堆積した事象空間としての存在様式をもつものと考えられる。それは、地区の特性に応じた多様な生活空間整備の必要性を示す。と同時に、単に物的計画にとどまるのではなく、社会構成単位とその伝統に配慮した社会的計画の性格をもつべきことを示唆している。

その基本的方針は、市街地の単位性とその自律性を前提に、その現実に立脚することであろう。一律な整備基準の適用を排し、むしろ独自の論理を展開することに計画上の価値を設定すべきと考えられる。分節社会の計画と位置づけることができるかもしれない。

途上国において西欧的な近代都市計画が有効性を発揮しえなかった理由として、統計データ不足およびその信頼性の欠如がネックとなり、計画自体の立案が著しく困難になるか、事実上の効力をなくすかたちでしか実現しえなくなることがたびたび指摘されてきた。

確かに、今回の類型化から意図的にはずしたキャンピングなど、市街地の構成について不明の点はまだまだ多くある。その説明は今後の課題でもあるが、地区の整備計画がマスタープランという全体から部分へと向かうものである限り、こうしたことが問題となるのは避けがたいことである。マスタープランは全体像の的確な把握なしには構想しえないからである。

この問題に対する1つの回答がオンサイト型の小単位での保全修復型整備である。それは、部分から全体へと向かう回路を設定することによって、現行のマスタープラン主体の都市計画の弱点を補完する試みであると位置づけられる。

各地区の整備像をどのように描くかのヒントは、第1章および第2章であきらかにした各類型の特性に求められるが、人びとの意向および意識の把握を含めて、その現実的把握は今後に残されている。

2) 生活空間の伝統の評価手続きおよびその保全

途上国における生活空間整備が、保全修復型を1つの基本形とすることは了解事項であろう。この文脈に立って、生活空間の伝統的存在様式をその整備とリンクさせることが検討されるべきであろう。

保全に沿った方向では2つの局面が留意されねばならない。1つは伝統保全のあり方についての配慮である。住宅デザインについての調査の結果は、伝統的デザインが必ずしも望まれていないことを浮き彫りにした。環境のみえがかりだけを凍結保存的に残すかたちの整備が必要ではないことを示すものといえよう。したがって、生活空間の伝統は、単にその物理的形狀を凍結保全するのではなく、その背後にある人びとの考え方や意識を生きた伝統として継承していくのが妥当であろう。

その場合、伝統的都市の存在様式である中心性、軸性、入れ子性などをどうあつかうかという問題がある。伝統的都市において、その伝統性は、単体の建物の意匠というより、都市自体のレイアウトパターンによって表現されるものであった。このことは、都市の空間構造自体の保全の必要性を提起する。これから都市の空間構造の再編の糸口を見出す発想が可能であろう。たとえば、自動車交通とは別にかつての都市パターンを歩道やオープンスペースのネットワークとして残すといったことがあってもよい。

2つめは、生活空間構造の重層性と保全のかかりである。たとえば、ジュロン・ベテンのクラトン、あるいは、カウマンのモスクは明確な中心性を示す存在であり、その存在を失うことは求心性を喪失することを意味する。同様のことが、ジュロン・ベテンの壁についてもいえるだろう。したがって、保全するにせよ開発するにせよ、

こうした空間要素が心理的社会的にもつ意味がきわめて大きいことを斟酌する必要がある。

もうひとつは新たな創造の局面である。伝統的都市の空間構成原理を、比較的ミクロなレベル、たとえば、建物のデザインモチーフとして用いることはたびたび試みられているが、それだけではなく、もう少しマクロなレベル、たとえば、都市計画および設計にとりいれることも1つの方法である。また、中心性をもつ象徴的なものに対して歴史性を感じる傾向も参考になる。

こうした試みは、機能主義から計画の自由度を増すことを企図するものであり、同時に、意思的に伝統をうけ伝えることを意味する。そのためには、なにをうけ伝え、なにをすて去るかを決定する意思決定手順が明確にされなければならない。

それは基本的には住民を含むジャワの人びとの手に委ねられるべきだが、ジャワ島都市における生活空間の伝統が1つの状態の固定ではなく、新しい生活空間創造に向けての絶えざるプロセスであったことへの認識が必要であるとする。私見では、過去の歴史を凍結あるいは復元するのではなく、痕跡としてみることのできる方法がもっともすぐれていると考える。

(2) 生活空間の伝統と都市計画のあり方

現在インドネシアは国民国家としての統合過程にあり、もしこれがスムーズに推移すると仮定すると、現在のジャワ島都市がもつ重層性はやがて解消されていくべきものということになるかもしれない。現実にシンガポールはこうした道を歩んでいるようにもみえる。それも1つの選択である。

都市計画の目的は、人びとの生活の舞台として望ましい生活空間の実現に寄与することではあっても、新しいライフスタイルを選びとるための意思決定そのものではない。

しかし、西村幸夫はアジアの視点に立つ都市計画が提起する課題を論じた論文のなかで、都市計画が価値観と無縁ではおれないことをすどく指摘している(注12)。

「アジアの都市問題に現実にふれた者はおそらく例外なく誰のための都市計画かということを意識せざるを得ないだろう。都市計画が都市に住む人々の幸せにどのように寄与することができるのか——都市計画に携わるものにとってもっとも根源的なこの問いかけは、しかしながら、現在日本でおこなわれている高度に専門化・細分化した都市計画研究において、しばしば忘れ去られている問題意識だとはいえないだろうか。」

2次大戦後、多くの植民地が独立とともに国民国家への道を踏みだした。しかし、

そのモデルとする国民国家、いいかえれば、市民社会の実現は容易ではなく、近代都市計画も有効性を発揮しえなかった。

それもそのはず、近代都市計画は、本来、均質な「市民」の存在を前提としてもつものであり、その意味で国民国家の概念とわかちがたく結びつくものであったと考えられる。民族などのファクターは攪乱要因とみなされ捨象される傾向にあった。

しかし、むしろ現代は世界的な「民族への覚醒」の期にあたるようにみえる。みずからの伝統への自覚が普遍的な現象となりつつあり、現実社会が民族や宗教によって分断された構造をもつことを是認せざるをえない状況にある。

「市民」という概念は均質空間に対応するものであったとも考えられる。したがって、均質空間に対置されるものとして「場所」が、また、物理的時間に対置されるものとして「歴史」が登場することによってポストモダニズムがはじまったことは、こうした事態が遅かれ早かれやってくることを暗示するものであったと考えられる。民族とは、空間軸における場所と、時間軸における歴史を統合するものであり、市民に対応すべき存在と考えられるからである。民族や宗教といったキーワードを都市計画にとりいれる発想が必要とされていると考えられる。

補注

- (1) 矢野暢『東南アジア世界の論理』中央公論社、1984、p.13
- (2) たとえば、矢野暢『東南アジア世界の構図』日本放送出版会、1984、pp.108-109
- (3) 野口英雄「建築と空間象徴」東南アジア研究、22巻1号(1984)、pp.15-21 : p.20
- (4) 内堀基光「宗教と世界観」綾部恒雄他編『もっと知りたいインドネシア』弘文堂、1982、pp.105-140:pp.131-134
- (5) MITUO NAKAMURA:THE CRESCENT ARISES OVER THE BANYAN TREE,Yogyakarta, 1983
- (6) 間学谷栄『現代インドネシア研究』勁草書房、1986、p.109
- (7) KRAUSSE,G.:THE KAMPUNG OF JAKARTA,INDONESIA;A STUDY OF SPATIAL PATTERNS IN URBAN POVERTY,Ann Arbor,1975,p.31
- (8) 布野修司『インドネシアにおける居住環境の変容とその整備手法に関する研究』東京大学学位論文、1987、p.420

- (9) クラウセはさらに住民の新旧によって区分している。(KRAUSSE,G.:Aop.cit., pp.14-18)
- (10) 鳴海によれば、民族的市街地空間とは、「伝統的市街地であるが、そこに存在している建築物は必ずしも歴史的価値をもたない市街地」と説明される。カンブンは、わが国の都心の下町などと同様、この民族的市街地空間に該当する。
(鳴海邦碩「民族的市街地空間－先在する都市空間」SD、鹿島出版会、1989、p.89-92)
- (11) 篠原一男『住宅論』鹿島出版会、1970、p.47
- (12) 西村幸夫「都市計画におけるアジアの視点」建築年報、1989、pp.42-43:p.43

補論

1 緒言

筆者は、環境教育に関する海外比較研究プロジェクトに参加し、インドネシアを含む二国を担当した。後述するように、直接のねらいは本論文とは異なるが、内容は生活空間のあり方についての洞察であり、その結果から生活空間に対する認識の実態およびその世代による変化を推察する資料となっている。その知見は、本論文、なかでも第Ⅲ部において言わんとするところに資するものであり、補論として掲載することにした。

なお、調査はアンケート形式であり、学校を通じて配付、回収した。調査票はインドネシア語とし、研究グループによって設計された共通のものとしたが、翻訳の段階ではインドネシア人留学生の補佐をうけた。調査は1986年に実施された。

2 調査の概要

本来の研究自体の枠組みは「家庭における環境教育」であるが、ここでは、先に述べたように、生活空間に対する認識の実態およびその世代間の変化に注目する。

調査の設計意図は、環境に対する行為や態度が家庭のなかでどのように教育されているのかに着目し、対象となる空間に子供の生活との関係で3つのレベルを設定し、さらに、環境としての意味を「道具」「規範」「美」の3つによってとらえ、 $3 \times 3 = 9$ のマトリックスによって把握することを試みた(表1参照)。

調査項目は、マトリックスのそれぞれのマス目に3項目ずつ、計27の質問からなる。それを、子供、および、その親、特に親に対しては、自分の子供のときと、現在についての2つの時点の認識をたずねることによって世代変化を推察することを試みている。

なお、子供については、これらの27項目が、誰によって教えられることが多いかをあわせてたずねている。

3 インドネシアの家庭における環境教育

(1) 調査実施地域

インドネシアは、ヨーロッパ大陸に匹敵する広大な海域に広がる島嶼国家であり、一説によれば300を越える民族集団からなる多民族国家でもある。その中で最大の民族集団ジャワ人がすむジャワ島は、古くから開けた地域であり、独自の伝統文化をもっている。インドネシアにおける調査は、このジャワ島の3つの都市で初等学校6年

表1 環境教育項目分析の枠組み

要素 空間	道 具	規 範	美
I 子供部屋 個人空間	①道具のかたづけ ②部屋のかたづけ ③部屋の掃除	④道具ていねい ⑤ペットの世話 ⑥食無駄にしない	⑦机上美しく ⑧部屋を飾ること ⑨部屋のしつらえ
II 住居内 家務空間	⑩持ち込まない ⑪家の掃除 ⑫大掃除・依理	⑬えらい人の座 ⑭行儀よく ⑮大事な部屋で	⑯壁紙・障子張り ⑰床の間や玄関 ⑱生垣の手入れ
III 住居外 社会空間	⑲通行妨害しない ⑳山火事や落石 ㉑食べられる草	㉒うるさい音や煙 ㉓紙や水、電気 ㉔社寺・教会で	㉕近くを散歩する ㉖紙くずや空き缶 ㉗景色を見に遠出



図1 インドネシアにおける調査実施地域

生（わが国の小学校6年にあたる）を対象として実施された。回答数は次のとおりである。

ボゴール	2校	158名
ブリタール	2校	157名
トロンアグン	3校	153名
合計		468名

ボゴールはジャワ島西部にあり、首都ジャカルタに近接する人口25万（1980）の都市である。インドネシアで最も現代的な地域であるジャカルタ都市圏に位置しており、今回調査を行なった中では都市的な色合いが強い。調査実施校は郊外にある軍隊の駐屯地の中にあり、ほとんどの生徒の父兄は軍人である。ブリタールは東ジャワの古都として知られる、人口8万人（1980）程度の地方中心都市である。古い王朝の首都として栄えたこともあり、伝統的なジャワ文化を伝え、教育の町としても名高い。トロンアグンは地方の小さな町に過ぎなかったが、近年工場が立地し、新興産業都市という顔をもつようになった（図1）。

質問項目は完全に同じ直訳とはせず、調査の意図を逸脱しない範囲で多少の変更を加えている。ほとんどの項目では言葉の付加、削除程度にとどまっているが、25番目の項目では「町内の道や公園を掃除すること」というように内容そのものを変えている。掃除の方が散歩よりも重要で、たずねるに値すると考えたからである。

（2）子供の回答

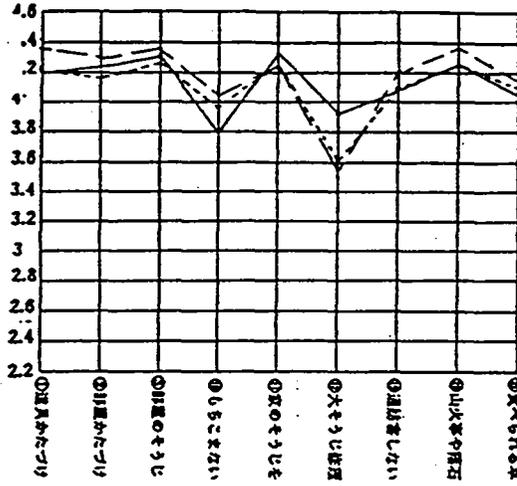
まずアンケート調査の結果（図2）から、インドネシアの子供の環境態度について概略の特徴を描き出してみよう。

最初に気づくことは重要性の評価が全体としてきわめて高いことである。4点（大事なこと）以上の項目は15、全27項目の過半数を占め、3点（どちらとも言えない）以下は2項目みられるだけである。得点が高いだけではない。標準偏差が1.0をこえる項目はわずかであり、意識の均一性を示している。環境に対する関心が高く、かつ安定していることをうかがわせる。

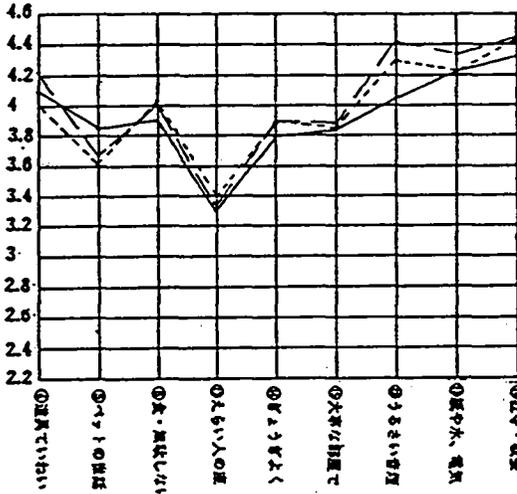
環境態度を各領域別にみてみよう。4点以上の項目は、道具的な環境では7、規範に関わる環境では4、また美的環境では3である。3点以下の2項目は、いずれも美的環境に関わる項目である。環境に対する意識は、道具の領域でもっとも高く、ついで規範および美的領域へと向けられることがわかる。

空間領域に対してはどうか。4点以上の項目は、身のまわりの環境では5、住宅内

道具



規範



美

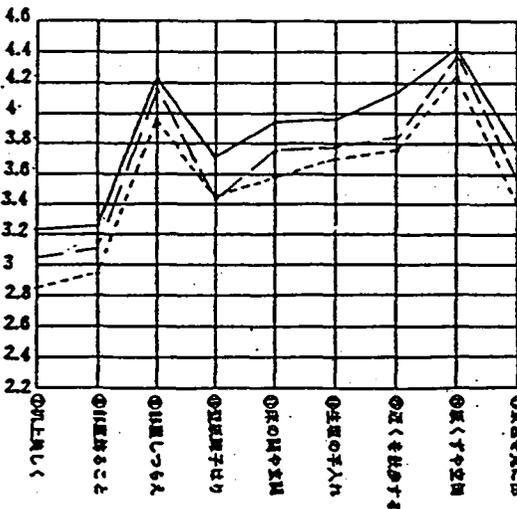


図2 インドネシアの親と子の環境態度重要性評価

の環境では1、住宅外の環境では8となる。3点以下の2項目は身のまわりの環境に関する項目である。住宅外の空間にもっとも多くに関心が払われ、ついで身のまわりの空間、最後に住宅内の空間という順序であることがわかる。

各領域の環境に対する態度とその空間領域への向けられ方の傾向を組みあわせてみよう。道具的な環境に対する関心の高さを指摘したが、それは特に身のまわりおよび住宅外の空間において顕著であり、住宅内の空間では相対的に低い。規範意識は、住宅外の空間に比較して、身のまわりと住宅内の空間では弱い。また、美意識は相対的に低く、特に身のまわりの空間で顕著である。空間の広がりに着目して整理すると、住宅外の環境に対する関心は、道具、規範、美、いずれの領域においても高い。住宅内の環境では逆に、いずれの領域においても同程度に低い。身のまわりの空間では、道具的な環境に関心が払われる傾向があり、美的環境に対する関心はかなり弱い。身のまわりの美的環境意識は、以上のような特徴をもつものといえる。要約すると、道具および住宅外の重視である。

上の特徴を頭において、ここの項目をながめて見よう。まず道具的な環境では、全体として高い評価が与えられているだけに、⑩（もちこまない）⑫（大掃除・修理）が相対的に低いのが目立っている。ともに住宅内の空間に関する項目であり、いずれの領域においても住宅内の空間に対する関心が薄いことは既に指摘したとおりだが、⑪（家の掃除）は例外である。住宅内で掃除のもつ意味は大きいのである。①（道具のかたづけ）②（部屋のかたづけ）③（部屋の掃除）④（近所の掃除）な掃除かたづけに関連する項目はすべて高得点を維持しており、掃除かたづけはすべての空間領域においても重視されていることがわかる。反面、⑫（大掃除・修理）が低いことについては、大掃除よりも修理に対して反応した結果であるとも考えられる。家の修理は子供の参加するものではないとする考えが一般的なのであろう。⑮（壁紙張り）がほぼ同程度の得点であることがそれを裏づけている。

このように空間の物的秩序の維持に対して積極的な反面、⑩の得点は相対的にはあるが、かなり低めである。⑪より⑩が低いという得点のパターンは、掃除やかたづけに関する項目の得点がいずれも高いことを考えると、一見理解し難いようにも思えるが、汚さに対する感覚の相違の問題がありそうである。インドネシアには高床式住居が多いが、ジャワ島に限れば大半が地床式である。住宅の床は多くの場合コンクリートで、人びとは素足のまま生活し、ちょっと外出するときは軽くサンダルをひっかけただけというのもよくみかける。もちろん上下足の区別はあり、家にはいるときくつを脱ぐ場所はあるのだが、暑い気候のため住宅のあり方がかなり開放的なこともあ

って、住宅内外の感覚的な連続性が強く感じられるのである。家の中と外を峻別する意識は感じられない。この点、上下足の区別に規範的な意味合いのあるわが国の場合とはかなり異なっている。下足、外は汚いという感覚は希薄なのであろう。汚いものを峻別し排除する意識は、都市化の程度と関係する面があるとも思われるが、インドネシアでは素朴なおおらかさが感じられるのである。

次に規範に関わる環境については、㉔㉕㉖が特に高く、住宅外の空間が特に重視されていることを示している。住宅内がもっとも軽視される傾向は道具の場合と同じだが、中でも㉔（えらい人の座）は特に低い。今回調査を実施したジャワ島では、古来より階層秩序がかなり明確であるといわれ、ジャワ語は精緻な敬語の体系の存在で知られている。伝統的階層秩序の解体は明白な傾向であるが、依然として上下意識は強く、目上の人に対する礼儀が重視されている。学生同志でも年長者に対する敬語の使用はごく普通のことである。このように、対人関係が地位や年齢で明確に規定されているにもかかわらず、㉔が低いというかたちをとらず、特にえらい人の座る席というものが固定していないのであろう。同様のことが㉕（だいじな部屋で）に対してもいえるのである。インドネシアは世界最大のイスラム人口を擁する国として知られる。そのイスラム信仰のあり方は中東諸国とは異なる点が指摘されているが、全体に宗教心は篤い。モスクなど宗教施設に対しては特に注意が払われていることは、㉔の得点が高いことから知ることができる。このように、ある場所がだいじな場所であるという概念がある以上、㉔が相対的に低いのは、住宅内にだいじな部屋がないことを示している。このことは住宅内に機能的分節がないということの意味しない。家庭訪問によって実際に室内をみた限りでは、個室と比べた公室とりわけ応接のための空間の重視が印象的であった。しかし、遊んではいけないほどのだいじな部屋というのはいないのであろう。きれいにしつらえられた応接のためとおぼしき空間が、居間としても使われていることがこの事実を示している。住宅内の祈りの場所においても、空間との関係は薄い。敬虔なイスラム教徒は朝夕の祈りをかかさず、モスクに行く場合を除くと、住宅内で祈ることが多いわけだが、通常特別の部屋はなく自分の寝室にマットを敷きそこで行なわれる。マットをたためば、もう普通の部屋に戻るのである。祈りという神聖な行為は、具体的な空間のかたちとは結びつくものではないのである。以上のことから、空間と規範意識の結びつきが薄いことが推察される。もう1つはベットの問題である。ジャワの人びとにとっては鳥を飼うことは特別の意味合いをもっている。町を歩くと高い竿の上に鳥籠がぶら下げられているのをよくみかける。その割に㉖はあまり高い得点を得ているとはいえない。実は鳥を飼うということは一種のス

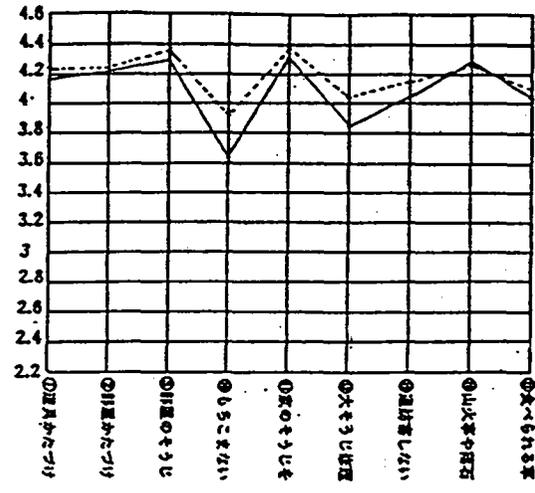
テータス・シンボルなのであって、その世話は大人の仕事、というより楽しみなのである。

美的環境では、⑦（机上美しく）⑧（部屋を飾ること）の得点の低さが目立っている。身のまわりの空間に対する関心の低さととらえることができるが、対照的に⑨（部屋しつらえ）の得点は高い。身のまわりの空間における美意識の表現は、飾りつけを行なうことではなく、部屋空間の秩序をつくりだすことにあるとみてよさそうである。したがって、掃除やかたづけに関する項目でも⑩（玄関のしつらえ）はかなり高い。先に住宅内で接客の空間が重視されていることを指摘したが、⑦⑧と⑩の得点の開きはこのことと関係がありそうである。身のまわりよりも住宅に対してより関心が払われる傾向を示している。それにしても⑪（壁紙張り）の得点が低いのは、道具のところで指摘したように、これがかなり専門的な技術を要する仕事と考えられているのであろう。⑫（紙くずやあきかん）は美の領域の中で最高点となっているが、掃除やかたづけが重視されていることと同じ文脈で理解できる。⑬（近隣の掃除）も同様である。しかし、町を実際に歩いた印象では、路上にゴミが少ないとはいえない。現状があまり良好とはいえないだけに、かえって強く意識されているのかもしれない。⑭（景色を見に遠出）は住宅外の環境の中でもっとも得点の低い項目である。自然に対する関心が道具的な側面が高いことは⑮（食べられる草）の得点によく表われている。美意識の対象としての認識はそれに比べてかなり低いのである。

インドネシアの子供の環境意識について、概略ではあるが以上のような問題点を指摘してきた。続いて、これを担う主体について検討してみよう。やはり両親が家庭における環境教育の主役であり、⑦⑧以外では6割程度を占めている。しかし、父母のいずれに重点がおかれるかは項目によって異なっている。母親の割合が高い項目は、身のまわりの環境に多い。それは特に道具や美の領域において顕著である。住宅外は概して父親の比重が大きく、住宅内は同程度といえようか。掃除かたづけに関する項目は母親の守備範囲といえるようである。しかし、修理やペンキ塗りなど多少とも専門的スキルを必要とすることについては父親の方にウエイトがうつる。美意識は内部は母親から、外部は父親とってよさそうである。その他では⑯（食べ物を無駄にしない）⑰（食べられる草）など食べ物については母親の領分になっている。

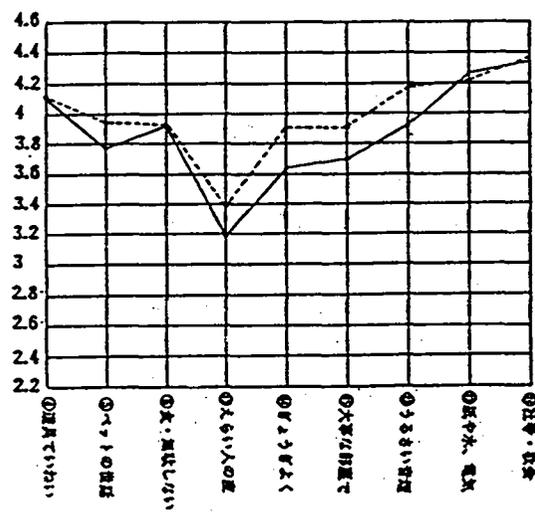
しかし、飾りつけについては父母の比率は低く、⑦（机上美しく）⑧（部屋を飾ること）では全体の半分程度に過ぎない。その分、兄や姉の比率が高くなっている。また、⑱（えらい人の座）で祖父母やオジ、オバの役割がかなり大きいことがみてとれる。自分自身という回答もかなり高く、中でも①④⑦⑧では20%をこえている。いず

道具



子供
—— 男子
----- 女子

規範



美

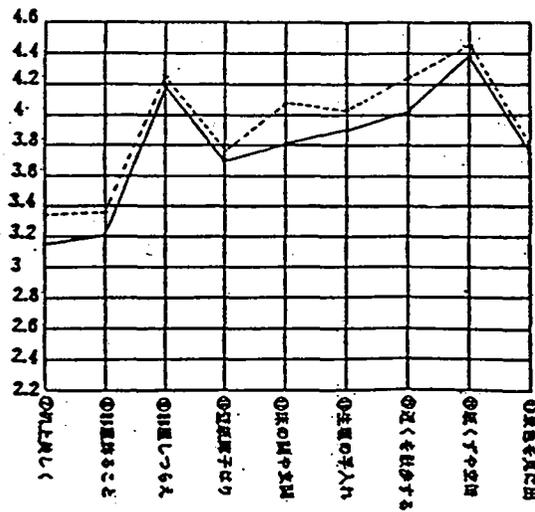


図3 インドネシアの子供（男子と女子）の環境態度重要性評価

れも身のまわりの環境に関する項目であり、身のまわりについては、ある程度自主的に注意を払っていることを示している。

(3) 男女の差

男子と女子の差はほとんどない(図3)。特に得点のパターンは完全に同じである。項目によっては若干の差はあるが、もっとも大きいものでも0.1以下であって、全体として得点差はきわめて小さい。したがって、目立つほどではないが、ほとんどの項目で女子の方が男子より意識が高いことが特徴である。男子の方が高い項目は㊸㊸の2項目だけであるが、高いというよりは一致しているという方が的確である。ともに、住宅外の環境に関する、高得点の項目である。得点差が比較的小さいのは身のまわりの環境である。逆に大きいのは住宅内の環境であり、特に規範および美の領域について目立つが、道具の領域においては比較的近差である。男子は住宅内の規範的環境に対して低い関心しか示していないのである。住宅外の環境については、道具および規範の領域では差がないが、美の領域ではいくぶん開きがみられる。女子の㊸(紙くずやあきかん)はきわめて高い得点である。

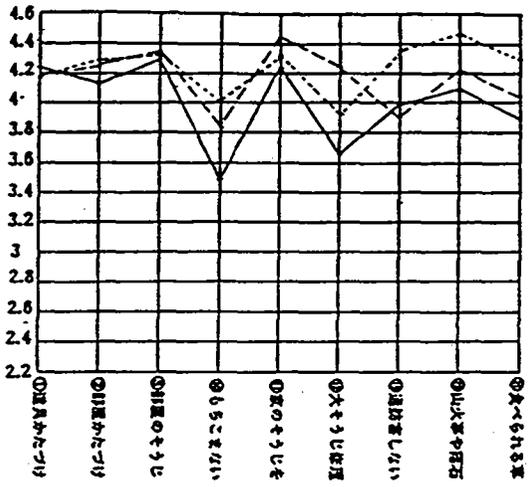
(4) 地域の差

地域別にみた得点パターンの概略の傾向として、以下の点が指摘できる。親の代ではかなり得点差がみられる。美的環境においては比較的差が小さいが、道具的な環境および規範に関わる環境ではかなり顕著である。しかし、得点差は項目によっては大きい、得点のパターンには大きな違いはない。つまり、1つの地域で相対的に高得点を占める項目はほかの地域でも高得点となり、低い項目は低くなるという傾向については変わりがないということである。項目ごとでの評価点数の変化の仕方はよく似ているが、地域によって関心の高低がみられる。しかし、子供の代になると、その差がより小さくなる傾向にある。得点パターンの近似性が高くなり、得点差も減少している。意識の画一化がうかがわれる。

それぞれの環境領域について、もう少し詳しくみていくことにしよう。まず親の世代における地域差について言及しよう。親-過去の道具的な環境においては3地域ともほぼ一致している項目は㊸だけである。㊸を除くとポゴールとトロンアグンでは得点に開きがないが、ブリタールはほとんどの項目でかなり高い得点である。中でも㊸では、得点パターン時代がかなり異なっている。ポゴールとトロンアグンでは相対的に低い得点となっているが、ブリタールではこの領域における全項目で最高の得点となっている。

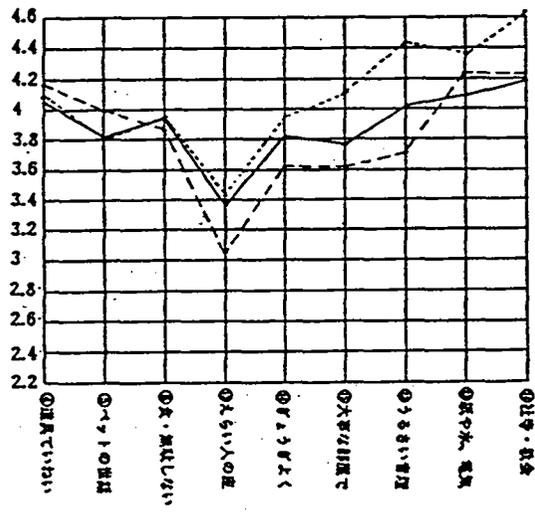
規範に関わる環境でも、道具の場合と同様の傾向がみられる。㊸を除きポゴールと

道具



子供
地域別
—— ボゴール
..... プリタール
- - - トロンアグン

規範



景

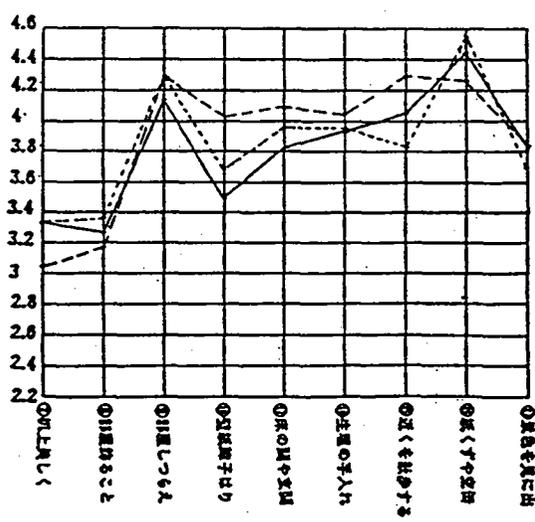


図4 インドネシアの子供の環境態度重要性評価 (3地域)

トロンアグンはほとんど得点差はない。ブリタールは⑤⑩を除き全体に高い得点である。

美的環境では、地域による差はかなり小さめである。ブリタールが、ボゴールとトロンアグンよりかなり高い項目は⑨⑭⑰であり、特に⑨⑭は美的環境の中でも高得点を示している。

以上が親の過去における地域差であるが、親の現在ではどのように変わったか。親の過去における地域ごとの得点パターンは、現在とほとんど変わっていないことがわかる。いずれの地域でも得点が上昇する傾向にあるが、ブリタールにおいても同様であり、身のまわりの道具的環境および住宅外の規範に関わる環境ではきわめて高得点となっている。いずれにせよ、親の世代の過去から現在へは、同じパターンの環境意識が受け継がれ、地域差にも変化がない。それが子供の代になると、地域差は極端に縮小する(図4)。

道具的な環境では、身のまわりの空間に対する意識がほぼ同じ高さになっている。住宅外ではブリタールだけがやや高く、親の傾向を受け継いでいる。⑩では、ブリタールの得点が減少し、全体がボゴールやトロンアグンと同じ得点のパターンとなった。反面、親の代では、⑫を除きボゴールやトロンアグンはほぼ一致していたが、子供の代ではその差がいくぶん開く傾向にある。特にそれは住宅内の空間で顕著である。トロンアグンの⑫は他地域とは異なるパターンを示している。全体として地域差が減少する傾向の中であって、住宅地の環境に対してはいくぶん差が大きいといえよう。

規範に関わる環境についても、道具の場合と同様のことがいえる。身のまわりの空間では地域差はほとんどない。全体として得点パターンはほぼ同じになった。

美的環境では、親の代よりむしろ地域差が拡大した項目もある。特に⑬は親の代ではほぼ一致していたが、子供の代で地域差が生じた項目である。概して身のまわりの空間で差が小さい。

以上地域差は世代を経るごとに解消される傾向にある。特に身のまわりの環境についてそれは顕著である。

(5) 親子の差

全体に親子間の佐野意識の違いはほとんどなく、断絶といった様相はみられないことをまず指摘しておこう(図2)。しかし、道具的な環境および規範に関わる環境では子供の関心低下の傾向も同時にある。つまり、現実の子供の意識が親の期待を下回っているのである反面、美的環境では、全項目で親を上回っている。美的なものに対する関心は逆に上がっているのである。

少し詳しくみてみよう。道具的な環境では、⑪⑫を除くと子供の得点が低下している。身のまわりおよび住宅外の空間については、4点以上を示しており、評価点数は依然として高水準にある。それと比べれば、住宅内のことについては少し変化が感じられる。掃除かたづけに関する親の注意はどちらかという、住宅内よりは身のまわりの空間に向けられているが、子供はどちらも同じ程度に考えている。大掃除や家の修理に関しても同様であり、子供の方が親より参加する必要を感じている。全般に子供の代で住宅内の環境に対する意識が上がっているのである。それは、⑯⑰⑱など美の領域でも住宅内の環境に関する項目の得点が上がったことからみとることができる。

規範に関わる環境では⑤（ペットの世話）を除くすべての項目で得点が下がっている。特に⑳（うるさい音や煙）の低下はかなり目立っている。ヒヤリング調査では、隣近所に迷惑をかけないということが親がもっとも重視することの1つとして強調されていた。対人関係が細かく規定され、その中で日常生活が営まれる社会的特質を反映しているのである。㉑㉒などほかの近隣生活に関連する項目の得点が高いことから見ても、このことはあきらかである。しかし、㉓の得点低下、㉔の上昇は親子の意識の違いが生じていることをうかがわせる。

また、食べ物についてであるが、子供の代ではじめて4点を割っていることが注目される。これも、面談の結果、重視されているという回答を得た項目である。米には精霊が宿っているといわれ、特にご飯を残すことはいけないことだとされる。「ご飯を残すと（飼っている）鳥が死ぬ」と教えられたと、ある大学生は語ってくれた。鳥は財産のシンボルであり、食べ物を残すことに対する規範的な意味合いをよく説明している。親の代でも4点のラインにやっとかかるくらいで、特に重視されているとはいえない感じであるが、伝統的に重視されていた項目だけに、わずかな減少が長期的な低落傾向を示しているのかもしれない。また、ペットの世話に関して、鳥の世話は子供の仕事と考えられていない印象もあった。子供の方が高いというのは、世話をしてみたいという希望の裏返しとみることもできそうである。

続いて美的環境に目をうつすと、いずれの項目においても得点が高くなっており、全体に美意識の水準が上がっていることをうかがわせる。中でも㉕（玄関のしつらえ）㉖（生垣の手入れ）はほぼ4点のラインに達する程度まで上昇し、住宅内の空間についての関心の上昇が顕著である。また、㉗は中でも子供の世代での上昇の程度が大きい項目である。ジャワでは家のまわりの掃除は、近隣とのつきあい上重要な意味をもつ。家の前の道路の掃除を例にとると、暗黙の了解ではあるが責任の範囲は明確に決

められている。しかし、親の得点より高いことから規範的側面が重視されているとは考えにくい。美的な意味合いで評価することができそうである。

(6) 世代間の変化

世代による変化はわずかである(図2)。環境意識の安定性を示している。もちろん、項目によって多少の変動はあるが、得点のパターンには大きく変わるどころがなく、得点差も小さい。世代を経るごとに得点が低下する傾向がみられる項目もあるが、きわめて緩慢な動きである。現在のところ環境態度が、世代から世代へと着実に継承されていることがうかがわれる。

まず、親の過去と現在でどの程度意識変化があったかについてみていくことにしよう。道具的環境では、⑫(大掃除・修理)以外のすべての項目で得点が上がっている。もともと身のまわりと住宅外の空間における道具的な環境に対する意識は高かったわけだが、さらに高まったことになる。しかし、住宅内の空間ではほとんど変化していないといってよい。⑫における若干の得点の低下は、家の修理に子供は参加するものではないという意識がさらに一般化したということであろう。子供の意識がかなり高いことと対照をなしている。

規範に関わる環境では、④②③でやや差が目立つほかは、みごとに一致している。規範意識の安定を示している。得点差が大きい3項目は、いずれも現在の方が高くなっており、近代的な生活様式が普及し、生活財が増加したことと関連するのでは内だろうか。いずれにせよ、身のまわりおよび住宅外の空間に対してより注意が向けられるようになり、住宅内ではほとんど変化がないというのは、道具的な環境の場合と同様である。

美的環境では、道具および規範に関してより変化が大きい。⑩で一致している以外はいずれも現在の方が高くなっている。

以上のように親の世代においては、わずかではあるが、全体に環境に対する関心が向上したことがみてとれる。しかも、得点のパターンにはまったく変化のない動きである。親に教えられたことを基本的にはそのままのかたちで少しレベルを上げて子供に教えているということであって、親の世代での意識の変化がまったくない事実には驚かされる。親子間の意識変化をこの上に重ねたものが、世代変化ということになるが、既に述べているので簡単に得点の変化だけを追っていこう。簡単に整理すると、道具および規範に領域では、親の過去から現在で上がり、子供の代で下がる。また、美の領域では世代を経るごとに上がるということである。親の過去より子供が下がるということは世代変化にともなう低下と解釈してよい。これに該当する項目をあげる

と、道具的環境では㊶（もちこまない）㊷（食べられる草）、規範的環境では㊸（うるさい音や煙）㊹（社寺・教会で）である。それ以上に明白な変化、すなわち3世代を通して、世代を経るごとに一定の傾向を示す項目を整理しておこう。まず道具的な環境ではそのような項目は存在しない。規範に関わる環境では㊺（ペットの世話）および㊻（えらい人の座）。ただし、㊺は上昇し㊻は低下する傾向にある。美的環境では㊼を除いたすべての項目がこれに該当する。しかし、その変化は大きなものではなく、項目相互の得点パターンにも変わりがない。世代間の変化幅は小さいのである。

付録

1. 調査票1 類型別市街地調査
2. 調査票2 コタグデ、ブルムナス、クドゥス調査
3. 調査票3 スライド実験

B. Angket untuk Surveyor

- 2-1. Area tempat tinggal:
- a. Kampung perkotaan tua
 - b. Kampung perkotaan baru
 - c. Pecinan
 - d. Perumahan Belanda zaman dulu
 - e. Kauman
 - f. Ndalem
 - g. Lain-lain _____
- 2-2. Lama tinggal _____ tahun.
- 2-3. Tempat lahir di Kota _____
- 2-4. Pemilikan rumah :
- a. milik sendiri
 - b. menyewa (Rp _____/bulan)
 - c. lain-lain _____
- 2-5. Pemilikan tanah:
- a. milik sendiri
 - b. menyewa (Rp _____/bulan)
 - c. ngindung/magersari
 - d. lain-lain _____
- 2-6. Tipe rumah: a. Tradisional b. Modern
Dipengaruhi oleh:
- a. Jawa bangsawan _____
 - b. Jawa kampung _____
 - c. Kolonial _____
 - d. Pecinan _____
 - e. Lain-lain (spanyol?) _____
- 2-7. Kondisi rumah:
- a. Permanen
 - b. Semi Permanen (kotangan)
 - d. Non permanen

angket01/thr/88

C. Pertanyaan untuk responden, pilihlah jawaban yang sesuai dengan pendapat anda (boleh lebih dari satu pilihan)

- 3-1. Dimana anda lebih suka tinggal?
- a. Rumah lama/kuno
 - b. Rumah baru
 - c. Keduanya sama
- 3-2. Di lingkungan mana anda lebih suka tinggal?
- a. Lingkungan lama/tua
 - b. Lingkungan baru
 - c. Keduanya sama
- 3-3. Menurut pendapat anda, apa yang sebaiknya dilakukan terhadap rumah-rumah atau bangunan lama/kuno?
- a. dibongkar kemudian dibangun
 - b. dipertahankan dan dilestarikan seperti bentuk semula
 - c. diperbaiki/dipugar dan kemudian digunakan
 - d. dipertahankan 'facade'-nya (tampak muka bangunan) dan dirubah fungsi bangunannya
 - e. pendapat lain : _____
 - f. tidak tertarik dan tidak berpendapat
- 3-4. Manakah yang pantas dijadikan prioritas utama diantara kebijaksanaan-kebijaksanaan untuk kawasan bersejarah atau bangunan bersejarah dibawah ini?
- a. mementingkan aspek produktif seperti misalnya pengembangan pariwisata
 - b. dipertimbangkan sebagai tempat tinggal warga-kota
 - c. digunakan untuk menunjukkan identitas budaya dan bangsa sebagai warisan nasional.
 - d. untuk mempertahankan Kebanggaan nasional.
 - e. pendapat lain : _____
 - f. tidak tertarik dan tidak berpendapat
- 3-5. Sebutkan "sesuatu" atau "hal" yang menurut pendapat anda mempunyai nilai sejarah bagi kota Yogyakarta!
- _____
- 3-6. Apa yang dibayangkan terhadap lingkungan pemukiman "idaman" anda?
- _____
- _____
- _____
- 3-7. Apa pendapat anda terhadap "Kawasan Kuno"?
- _____
- _____
- _____

angket01/thr/88

ANGKET 02

Sukakah anda akan hal-hal berikut ini?

no.	Sukakah anda....	Beri tanda pada pilihan dibawah ini yang sesuai dengan pendapat anda!				
		sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
01.	Belanja di Pasar Beringharjo	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
02.	Jalan beraspal	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
03.	Perayaan Sekaten	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
04.	Nonton Wayang/ Ketoprak	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
05.	PERUMNAS	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
06.	Belanja di Super market/shopping centre	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
07.	Rumah-rumah kuno zaman Belanda	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
08.	Rumah-rumah tradisional	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
09.	Nonton Bioskop	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
10.	Pagar rumah dengan besi	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
11.	Memakai jendela kaca nako	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
12.	Jalan-jalan di Malioboro	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
13.	Memakai batik	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
14.	Bangunan Kantor Pos Pusat di Yogyakarta	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
15.	Becak diganti Helicak	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
16.	Melakukan puasa "senin-kamis"	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
17.	Jalan-jalan di / pertokoan "Jalan Solo"	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka
18.	Rumah-rumah bergaya "Spanyol"	sangat suka	suka	biasa/ lumayan	tidak suka	sangat tidak suka

angket02/thr/1988

ANGKET 03

Apa pendapat anda tentang rumah dan lingkungan di sekitar anda?

no.		Pilihlah yang sesuai dengan pendapat anda!				
01.	"Betah" kah anda tinggal dengan ukuran rumah anda sekarang?	sangat tidak betah	tidak betah	biasa	betah	betah sekali
02.	Sudah sesuaikan denah/ atau tata ruang rumah anda?	sangat tidak sesuai	tidak sesuai	biasa	sesuai/ cocok	sangat sesuai/ cocok
03.	Bagaimanakah penghawaan rumah anda?	panas & sumpek	panas	biasa	sejuk	sangat sejuk
04.	Bagaimanakah pengaruh kebisingan terhadap rumah anda?	bising sekali	bising	biasa	tenang	sangat tenang
05.	Apakah ada gangguan dari lingkungan terhadap "privacy" anda?	terganggu sekali	terganggu	sekali-sekali terganggu	tidak terganggu	sangat tidak terganggu
06.	Menurut pendapat anda, Apakah rumah anda termasuk lama (lingkari a baru satu saja) Dan cukup puas dengan rumah lama/baru tsb?	sangat tidak puas	tidak puas	biasa-biasa saja	puas	sangat puas
07.	Senangkah anda terhadap model/ langgan rumah anda?	sangat tidak senang	tidak senang	biasa-biasa saja	senang	senang sekali
08.	Memberikan kenyamanan-kah rumah anda?	sangat tidak nyaman	tidak nyaman	biasa-biasa saja	nyaman	nyaman sekali
09.	Bagaimanakah anda pergi ke pasar?	sangat tidak mudah	tidak mudah	biasa	mudah	mudah sekali
10.	Bagaimanakah anda pergi ke tempat kerja?	sangat tidak mudah	tidak mudah	biasa	mudah	mudah sekali
11.	Bagaimanakah anda pergi ke sekolah?	sangat tidak mudah	tidak mudah	biasa	mudah	mudah sekali
12.	Bagaimanakah pelayanan angkutan kota di daerah anda?	sangat tidak memadai	tidak memadai	biasa	cukup baik dan memadai	memadai dan baik sekali
13.	Bagaimanakah keamanan di daerah anda?	sangat tidak aman	tidak aman	lumayan	cukup aman	aman sekali
14.	Bagaimanakah jaminan keselamatan terhadap bencana alam/banjir/kebakaran?	sangat tidak memadai	tidak memadai	lumayan	cukup baik dan memadai	memadai dan baik sekali
15.	Bagaimanakah jaminan keselamatan anda di jalan/ lalu lintas disekitarnya?	sangat tidak memadai	tidak memadai	lumayan	cukup baik dan memadai	memadai dan baik sekali
16.	Sudah puasah anda dengan lapangan olah raga yang ada?	sangat tidak puas	tidak puas	biasa-biasa saja	puas	puas sekali
17.	Sudah puasah anda terhadap kondisi tata hijau di sekitar anda?	sangat tidak puas	tidak puas	biasa-biasa saja	puas	puas sekali
18.	Sudah puasah anda terhadap kondisi sanitasi/ kebersihan lingkungan?	sangat tidak puas	tidak puas	biasa-biasa saja	puas	puas sekali
19.	Apakah pemandangan di sekitar anda menarik?	sangat tidak menarik	tidak menarik	lumayan	menarik	menarik sekali
20.	Senang/puas kah anda bertempat tinggal dalam "suasana" kampung anda?	sangat tidak puas	tidak puas/ senang	biasa-biasa saja	puas dan senang	puas/ senang sekali
21.	Senang/puas kah anda bertempat tinggal di lingkungan "pemukiman lama"?	sangat tidak puas	tidak puas/ senang	biasa-biasa saja	puas dan senang	puas/ senang sekali
22.	a. Seberapa jauh tempat tinggal anak-keluarga anda lainnya?	jauh sekali	jauh	sedang	dekat	dekat sekali
	b. Sesuai jawaban "22a", puas/senangkah anda dengan kondisi tsb?	sangat tidak puas	tidak puas/ senang	biasa-biasa saja	puas dan senang	puas/ senang sekali
23.	Akrab-kah anda dengan tetangga di lingkungan kampung anda?	sangat tidak akrab	tidak akrab	biasa-biasa saja	akrab	akrab sekali
24.	Puas-kah anda dengan tingkah laku masyarakat di kampung anda?	sangat tidak puas	tidak puas	biasa-biasa saja	puas	puas sekali
25.	Puas-kah anda dengan "kegiatan masyarakat" di kampung anda?	sangat tidak puas	tidak puas	biasa-biasa saja	puas	puas sekali
26.	Apakah anda "betah" tinggal di lingkungan kampung anda?	sangat tidak betah	tidak betah	lumayan	betah	betah sekali

QUESTIONNAIRE

PLACE	DATE
NAME OF INTERVIEWER	
NAME OF ANSWERER	

Please answer the question behalf of the head of your household

Q 1, When did your family begin to live the present house ?

1. my grand father or before him
2. my father _____ → go to " Q 3 "
3. I myself

Q 2, To the answerer who chose 3 at the " Q 1 " .

2-1 Where were you born ?

1. in this neighborhood
2. in this city (urban area)
3. rural area around this city
4. another town or city
5. another village

2-2 How comes it that you began to live this house ?

Mark the most suitable one.

1. My relatives or acquaintances lived here.
2. Because of marriage.
3. This place was convenient (for my job or life).
4. The environment was good.
5. I own the land here.
6. I do not care.
7. the others ()

2-3 How did you find this house ?

1. Introduced through the broker.
2. Introduced through the developer.
3. Introduced through the relatives.
4. Introduced through the acquaintance (What kind of?)
5. the others ()

Q 3, Condition of your house (again to the whole answers)

3-1 How much is the area of your house site ? about () m²

3-2 How much is the area of your house ? about () m²
(total area which are covered with roofs)

3-3 Is the land yours ? Or what is the ownership of the land ?

1. my ownership
2. joint ownership (a. with your father and mother
b. with other relatives
c. with acquaintances)
3. rent
4. the others ()

3-4. Is the present house yours ? Or what is the ownership of the house ?

1. my ownership
2. joint ownership (a. with your father and mother
b. with other relatives
c. with acquaintances)

3. rent

4. the others ()

3-5 To the answerers who chose "3" at the " Q 3-4 "

From whom do you rent this house ?

1. your acquaintance
2. your relatives
3. your employer
4. the public sector
5. the landlord ()
6. the developer
7. the others

3-6 Interviewer must fill out.

- a) number of the storeys ()
- b) color of the exterior walls ()

3-7 Do you have the following equipments ? If you have, please write the number of them for each item.

1. kitchen ()
2. inside bathroom ()
3. outside bathroom ()
4. inside toilet ()
5. outside toilet ()
6. well ()
7. municipal water supply () number of faucet

3-8 From where do you get water mainly ?

1. municipal water supply of your house .
please write the number of faucet ()
2. municipal water supply of neighborhood.
3. well of your house
4. well of neighborhood
5. the others ()

3-9 About the following rooms.

Mark in the column I when you have it in your house.

Mark in the column II when you do not have it but desire.

Traditional	I	II	Modern	I	II
dalem			kamar tamu		
sentong			kamar keluarga		
pendopo			kamar makan		
pringgitan			kamar tidur ayah dan ibu		
gandok			kamar tidur anak		
			kamar tidur kakek / nenek		

	I	II		I	II
pawon			pagar		
sepen			taman		
pekiwan			kamar mandi		
musholla			warung		
gudang					
dapur					

3-10 About the following items, mark when you have it in your house.

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. T.V. | 9. fan |
| 2. video | 10. refrigerator |
| 3. radio casset recorder | 11. washing machine |
| 4. radio | 12. air conditioner |
| 5. stereo | 13. telephone |
| 6. automobile | 14. organ or piano |
| 7. motor cycle | 15. bird |
| 8. bicycle | 16. other pet () |

Q 4, Evaluation of the House and Environment

4-1 To what extent are you content with your house and the environment surrounding your house ?

Please answer on every items.

- | |
|--------------------------|
| 1, very content |
| 2, a little content |
| 3, content or discontent |
| 4, a little discontent |
| 5, very discontent |

column
↓

1. size of the house	_____	()
2. equipment	_____	()
(toilet, shower, water supply, etc)		
3. ventilation and dampness	_____	()
4. privacy	_____	()
5. whole sufficiency of your house	_____	()
6. accessibility to	_____	()
(market, school, hospital, etc)	_____	()
7. accessibility to work place	_____	()
8. accessibility to religious facilities	_____	()
9. community health	_____	()
10. security	_____	()
11. common open space	_____	()
12. richness of green	_____	()
13. atmosphere of the residential area	_____	()

Column

	14. nearness to the parents (childrens)house—()
	15. neighbouring intercourse————()
	16. community activity————()
	17. comfort to live of the whole————()
	residential area

↑

4-2 Mark O on the column of the above items that you want to improve, as many items as you want.

4-3 Mark @ on the column of the above items that you want to improve the most.

4-4 Do you have an intention to continue to live in your present house ?

1. Yes.
2. No. I want to move, but I can not.
3. No. I am going to move.
4. Yes. I want to do so. But I can not.
5. I can not say Yes or No.

Q 5, About Community Activities

5-1 What meetings or gatherings are held in your neighbourhood ?

Please answer whatever you attend.

1. about the activities of religious society
2. about the official meeting
3. about the cultural activities and entertainments
4. about the ones that related to the specific family member such as a children's club or a ladies society
5. other social activities

1. ()
- ()
- ()
2. ()
- ()
- ()
3. ()
- ()
4. ()
- ()
- ()
- ()
5. ()
- ()
- ()

5-2 If you can not attend a gotong royong activity which is held in your community, what do you do ?

1. I do not care.
2. I am very sorry.
3. I will ask for apologize.
4. I will ask someone to attend it on my behalf
5. I will pay for the compensation.
6. the others ()

5-3 Do you hold a selamatan party ? And do you attend it if you are invited ?

1. I am glad to hold and attend it.
2. I do not want to hold it, but if invited I will attend.
3. I do not want to hold it, and I do not attend it.
4. the others ()

5-4 What do you think about tolong menolong ?

1. It is a good custom so that we should set a high value of it.
2. It can not be helped to follow it since it is a custom.
3. Better to be not.
4. I can not say good or bad.

5-5 If there happen the followings, whom will you ask for help?
Please choose a suitable answer from the bottom and write the number for each item.

- a) when you have to borrow some daily goods ()
- b) when you have to borrow some daily money ()
- c) when a member of your family is sick ()
- d) when you move your home ()
- e) when you are in ceremonial occasions ()
- f) when you have to repair your house ()

- | | |
|--|----------------------|
| 1, neighbours | 2, colleagues in the |
| 3, relatives. | company you work for |
| 4, those who come from the same place | |
| 5, governments | |
| 6, i do not want to ask anyone for help. | |
| 7, the others | |

Q 6, About Ideal House

6-1 Do you prefer 2 storeyed house?

1. Yes .
2. No.
3. I don't care.

6-2 If possible, what color do you want for the exterior walls of your house ?

()

6-3 Where do you think the best residential area is in rogyakarta and its surrounding?

()

6-4 Which do you like the best among the pictures to be shown, and why ?
()

Q 7, Finally please answer the questions about you and the number of your household.

7-1 please answer the relationship to the head of your household, sex, age, occupation on every member of your house.

	relationship	sex	age	occupation and workplace
1.	head of household			
2.				
3.				
4.				
5.				
6.				
7.				
8.				
9.				
10.				

7-2 What is the Chief's school career ? ()

7-3 What is the head of your household's religion ?

1. Islam 2. Christianity 3. Buddhism 4. Hindu 5. the others

7-4 How many times do you pray in a day? ()

調査票 3

EKSPERIMENT

Kesan apa yang anda rasakan terhadap suatu lingkungan pemukiman?

Slide/spot no. _____ di _____

Beri tanda pada skala diantara dua kata sifat yang dipertentangkan yang sesuai dengan kesan yang anda rasakan ?

No.	Kata sifat pertama	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	Kata sifat kedua
01.	Bersih	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Kotor
02.	Tidak teratur	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Teratur
03.	Terpelihara	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	terlantar
04.	Alami	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Non-alami
05.	Gersang-terik	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Rimbun/teguh
06.	Luas	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Sempit
07.	Ramai/Berisik	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tenang
08.	Modern	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tradisional
09.	Megah	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Sederhana
10.	Tidak sehat	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Sehat
11.	Akrab	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tidak Akrab
12.	Lama/kuno	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Baru
13.	Membanggakan	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Memalukan
14.	Tidak menggairahkan	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Menggairahkan
15.	Unik .	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Biasa
16.	Jelas	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Membingungkan .
17.	Aman	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tidak aman
18.	Miskin	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Kaya
19.	Tidak pantas	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Pantas
20.	Mengikuti zaman	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Ketinggalan zaman
21.	Harum	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Busuk
22.	Jelek	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Bagus
23.	Menarik	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tidak menarik
24.	Kokoh/kuat	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Ringkih/lemah
25.	Menggelisahkan	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Menentrangkan
26.	Tertutup	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Terbuka
27.	Berguna	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tidak Berguna
28.	Tidak nyaman	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Nyaman
29.	Merakyat	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tidak merakyat
30.	Senang	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Benci
31.	Indah	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tidak indah
32.	Suka	<<<	<<	<	0	>	>>	>>>	Tidak suka

eksprmi/thr/88

anda mahasiswa angkatan

(tahun)

NO.	論文名	発表誌名	発表年月	注記	関連する章
1.	インドネシア、ジャワの都市における生活空間の構成原理に関する基礎的考察	大阪大学修士論文	1986年3月		第Ⅱ部第3-4章 第Ⅲ部第5章
2.	ジャワ島都市における生活空間の伝統と変容 その1. 市街地の構成について その2. 住宅の構成について その3. 生活パターンについて	日本建築学会近畿支部研究報告集	1986年5月	連名 田原他2名	第Ⅱ部第3-4章 第Ⅲ部第5章
3.	ジャワ島の伝統的都市における住宅の変容 その1. ジャワ島における都市住宅の伝統 その2. 住宅における伝統的スペースの変化 その3. 理想的住宅デザインと伝統	日本建築学会学術講演梗概集	1986年8月	連名 田原他2名	第Ⅱ部第3-4章 第Ⅲ部第5章
4. ※	インドネシア都市における歴史的市街地の実態とその保存整備の課題	都市計画学会学術研究発表論文集21号	1986年11月	連名 田原他2名	第Ⅱ部第4章 第Ⅲ部第6章
5. ※	インドネシア、ジャワ島の公的開発住宅地における環境形成プロセスの評価に関する考察	都市計画学会学術研究発表論文集22号	1987年11月	連名 田原他2名	第Ⅲ部第5章
6.	インドネシア、ジャワ島都市における商業施設に関する一考察	日本建築学会近畿支部報告集	1989年5月		第Ⅰ部第1章
7.	インドネシア、ジャワ島都市における商店街の空間利用について	日本建築学会学術講演梗概集	1988年10月		第Ⅰ部第1章
8. ※	インドネシア、ジャワ都市における市街地の履歴とそれにもとづく空間構成と居住環境の特性	都市計画学会学術研究発表論文集24号	1989年11月		第Ⅰ部第1-2章